

MONTESSORI EDUCATION No. 42 2009  
Contents

**Foreword:** Reaching Forward – Learning from the 42<sup>nd</sup> National Convention  
.....Akira Machida (1)

**Lecture:** Children are Hopes for the Future: What We Can Learn from Montessori Pedagogy  
..... Chuji Katayama (2)

**Symposium:** .....

1. First Symposist: Through the Work at Takada Catholic Kindergarten ..... Keiko Tomoi (14)

2. Second Symposist: Through the Work at Fuji Kindergarten ..... Shoko Shirai (20)

3. Third Symposist: Supporting Parents Through Montessori Education at Tsubomi Preschool  
..... Yoko Kaido (26)

Summary by the Leader of the Symposium ..... Shinjiro Hayashi (31)

**Articles**

Development of the Children and the Assistance: Parenting Support  
..... Koichiro Maenosono (35)

“What is Dolmetsch?” Instrumental Music Education of Montessori ..... Ai Fuji (56)

The Effect of “Silence Game” for Children with Asperger Syndrome from a Doctor’s  
Perspective ..... Tadashi Aoki (64)

“Visible Practice” and “Invisible Practice” In Montessori Education ..... Sun Xiuping (73)

**Practice Reports**

DVD “A Year at Fukakusa Casa Dei Bambini”: Giving the Best to Children  
..... Keiko Akabane (89)

Psychological Development of Children through Learning to Braide  
..... Fumiko Fukuhara, Rika Hachiya, Junko Okamoto (99)

**Educational Essay**

40 Years of Montessori Education in Japan (2) ..... Klaus Luhmer (115)

**Overseas**

TV Drama “Maria Montessori - Una vida dedicada a los niños” ..... Keiko Omri (133)

**Book Reviews**

Leonardo De Sanctis, *Le Ricette di Maria Montessori-cent’anni dopo*  
..... Domenico Vitali (138)

Klaus Luhmer, *Von Koeln nach Tokyo: Lebenserinnerungen 1916–2009*  
..... Masako Ejima (142)

Atsuko Sagara, *Children Who Received Montessori Education:  
Their Experience and Brain* ..... Yuriko Nohara (149)

Bianca Mattel, *Montessori Education for elders* ..... Masako Ejima (156)

Maria Montessori, *California Lectures: Practical Theory of Montessori* ..... Hiromi Suzuki (162)

**Attending the 42<sup>nd</sup> National Convention** ..... Sachie Maegawa (169)

**English Résumés** ..... trsl. Klaus Luhmer (174)

**Reports from Training Courses** ..... (181)

**Reports from Local Chapters** ..... (188)

**Reports from the Office of JAM** ..... Ryoko Matsumoto (201)

**Afterword** ..... Shizuko Matsumoto (222)

JAPAN ASSOCIATION MONTESSORI

# モンテッソーリ教育 第42号

**巻頭言** ここまでおいで—第42回全国大会に学ぶ— ..... 町田 明 (1)

**講演**  
子どもは未来の希望—モンテッソーリの教育思想から学ぶもの—  
..... 片山忠次 (2)

**シンポジウム** .....

**モンテッソーリ教育に取り組んで学んだこと**  
第1シンポジスト 高田カトリック幼稚園での取り組みを通して  
..... 友井桂子 (14)

第2シンポジスト 藤幼稚園での取り組みを通して  
..... 白井祥子 (20)

第3シンポジスト つばみ保育園におけるモンテッソーリ教育を通しての保護者支援  
..... 海道洋子 (26)

司会者としての報告 ..... 林信二郎 (31)

**論文**  
子どもの発達と援助—子育て支援をめぐる— ..... 前之園幸一郎 (35)

モンテッソーリの器楽教育—「ドルメツチュ(Dolmetsch)」とは— ..... 藤 愛 (56)

開業医として「静粛の練習」等が効果的であったアスペルガー症候群症例に  
関する考察 ..... 青木 正 (64)

モンテッソーリ教育法における「見える実践」と「見えない実践」について  
..... 孫 秀萍 (73)

**実践報告・事例報告**  
DVD「深草こどもの家の一年」—いちばん良いものを子どもたちに— ..... 赤羽恵子 (89)

「三つ編み」の習得過程における幼児の心の育ち  
..... 福原史子・蜂谷里香・岡本純子 (99)

**教育エッセイ**  
モンテッソーリ教育40年を顧みて(2) ..... クラウス・ルーメル, S. J. (115)

**海外情報**  
テレビドラマ『マリア・モンテッソーリ—子どものための生涯—』 ..... オムリ慶子 (133)

**図書紹介**  
『100年あとの、家と学校での子供の食生活についてのマリア・モンテッソーリのレシピ』  
..... ドメニコ・ヴィタリ, S. J. (138)

クラウス・ルーメル著 *Von Koeln nach Tokyo Lebenserinnerungen  
1916–2009*. Bachem, Koeln (Germany), 2009.  
..... 江島正子 (142)

相良敦子著『モンテッソーリ教育を受けた子どもたち—幼児の経験と脳』  
..... 野原由利子 (149)

ピアンカ・マッテルン著『高齢者のためのモンテッソーリ教育』 ..... 江島正子 (156)

マリア・モンテッソーリ著 クラウス・ルーメル、江島正子共訳『カリフォルニア・レク  
チュア—モンテッソーリ教育の実践理論』  
..... 鈴木弘美 (162)

**第42回全国大会参加報告**  
全国大会を終えて ..... 前川さちえ、塩谷庸子、大西小夜 (169)

**英文摘要** ..... クラウス・ルーメル, S. J. (174)

**教員養成コース報告** ..... (181)

**支部報告** ..... (188)

**事務局報告** ..... 松本良子 (201)

**編集後記** ..... 松本静子 (222)

モン  
テッ  
ソー  
リ  
教  
育  
第  
四  
十  
二  
号  
  
二  
〇  
〇  
九  
年

日  
本  
モ  
ン  
テ  
ッ  
ソー  
リ  
協  
会

2009

日本モンテッソーリ協会

# モンテッソーリ教育 やさしい解説

藤原元一・桂子・江理子著 定価 2940 円

モンテッソーリ教育が本当によくわかる、教師と保護者のための手引書！！

モンテッソーリの生命への深い洞察力と科学者としての知識は、それまでの子どもへの認識を一変させました。この本の著者・藤原元一は、心理学者として生涯をかけて取り組んできた幼児教育への情熱を、モンテッソーリ教育法をわかりやすく解説することに注ぎ込みました。保護者とモンテッソーリ教育に関わるすべての人に送る、充実の一冊です。

## マリア・モンテッソーリと現代 子ども・平和・現代

前之園 幸一郎著 定価 2100 円

子どもから学んだ教育者、モンテッソーリの軌跡をたどる

「子どもの家」誕生から 100 周年を迎えた 2007 年。意外に知られていないモンテッソーリの生い立ちや生涯を紹介し、イタリアの文化的背景および現代社会の視点から、その思想、教育法に照明をあてる。今日の教育・子育ての問題への貴重なメッセージを伝える書。

## モンテッソーリ教育用語事典

クラウス・ルーメル監修 定価 4200 円

## ルーメル神父来日 68 年の回想

クラウス・ルーメル 赤羽孝久編 定価 2625 円

## モンテッソーリ教育の道

クラウス・ルーメル編 定価 3098 円

## モンテッソーリアンと生きる

松本静子著 定価 2039 円

## モンテッソーリ教育の精神

クラウス・ルーメル著 定価 2100 円

## モンテッソーリの宗教教育

江島正子著 定価 2520 円

## 国境のない教育者●モンテッソーリ教育

レニルデ・モンテッソーリ 著  
クラウス・ルーメル 江島正子訳 定価 1260 円

東京都千代田区富士見 2-10-28  
TEL 03-3263-3817

**学苑社**

<http://www.gakuensha.co.jp/>  
FAX 03-3263-2410

(価格はすべて税5%込みです)

## 巻 頭 言

# ここまでおいで —第42回全国大会に学ぶ—

町 田 明

(恵泉幼稚園)

“ここまでおいで、あんよはじょうず。” 這えば立て、立てば歩めの…これらは、子どもの一日も早い成長を願う一般的な親心であろう。しかしここに育児上の問題があることを、多くの識者が指摘している。

今大会でも、このことで全体に一本筋の通った意義のある大会であった。ここではその中からお三方の講演要旨を記し、重ねて認識を新たにしたい。

### 1. 基調講演 小西行郎先生

- ・胎児は自ら自発的に行動し、子宮という環境の中で触覚などの感覚を使いつつ、周囲との相互作用によって発達し、やがて随意運動へと変化していく。
- ・この過程で重要なことは、「される」ではなく「する」こと、つまり能動的な行動をどれだけ許し、適切な環境を設定できるかが重要である。

### 2. 講義 I 前之園幸一郎先生

- ・モンテッソーリは、「一見無能で未熟に見える赤ちゃんに、生まれながらにして自発的好奇心が備わっており、その好奇心を通して自ら育つ発達のプログラムを持っている」とし、今日の「子育て」に対して、自ら能動的な学習者である子ども自身による「子育て」を対置している。
- ・「子育て支援」ではなく、自ら育つ力のある子どものための「子育て」支援こそが、モンテッソーリ教育の根本姿勢である。

### 3. 講演 市民公開講座 片山忠次先生

- ・現代は時間に追われ、効率と結果の良さのみを求める生活の中で、ゆとりと生きる方向が見えなくなっている。
  - ・子どもは長い時間をかけて徐々に能力を獲得し、精神を豊かにする。
- “ここまでおいで”と予め設定した目標に子どもを向かわせる、しかも性急に…私たちの保育現場にこのようなことがあってはならないと、強く自戒したことである。

# 子どもは未来の希望 —モンテッソーリの教育思想から学ぶもの—

片 山 忠 次

(兵庫教育大学名誉教授)

## 1. なぜ、モンテッソーリ教育か

戦後64年経ちましたが、この間にわが国の幼児教育・保育は、就園児数の増加、教育・保育方法や保育内容の研究等によって大きく進展してきました。

とはいえ、いま少し立ち止まって周辺を見てみますと、この幼児教育・保育もいくつかの問題に直面していることに気づきます。

それには、次のようなことが考えられます。

まず、科学技術の進展と急激な社会変動に伴って、現在、人びとは効率のよさを優先し、時間に追われて生活していることです。この結果、人びとはゆとりを失い、感覚が鈍化して生きる方向を見失っているように思われるのです。

また、価値観の多様化が進んで、何が尊いのかを見失っているようにも思われます。たとえば、ドイツのプレツィンカは、その著『価値多様化時代の教育』（玉川大学出版部）において、現代は、何を高く評価し、何を低く評価するか、何を優先し、何を後回しにするかの基準がゆらいでいるとし、それには次のような思潮が影響している、としています。

### (1) 合理主義

これは科学主義、知性主義とも言えるもので、合理的に説明できることに価値を見いだそうとするものである。したがって、文化・宗教・情緒的諸力は影がうすくなる。

### (2) 個人主義

これは個人の人格、自由の権利を強調するもので、集団や共同体における義務とかルールの大切さが後にさがる。

### (3) 快楽主義

これは快楽に重点をおいて生活を考えるもので、安楽を求めて収入と消費の増大がめざされる。その反面で、道徳の低下傾向となる。

ブレツィンカは、このように述べて、価値観の多様化した現代の教育の深刻さを指摘しているのです。

さて、子どものことに目を移せば、少子化により子どもたちのコミュニケーション能力の低下や社会性の希薄化が指摘されて、教育・保育の方向の確定が求められている、と言えます。

教育・保育の方向を見定めるためには、何よりも〈子ども〉とはどんな存在なのかを問わなければなりません。

わが国の幼児教育・保育が大きく進展してきたと言っても、大胆に言えば、その教育・保育は、幼児をどう導くのかという指導技術の研究が中心課題であり、〈子ども〉とはどんな存在であるかを問うことは少なかったのだ、と言ってよいのです。

教育・保育は、子どもあつての教育・保育なのです。このことは、どこまでも子どもが中心である、ということなのです。この意味で、教育・保育は、まずもって、子どもの存在意義を問うことから始まるのです。

この子どもの存在を問い、徹底して子どもを中心においた教育を説いた人がマリア・モンテッソーリでした。モンテッソーリは、自らが創設した「子どもの家」で教育実践をして、この実践から子ども中心の教育の正しさを体得したのです。このことに基づいて、モンテッソーリは、教育は〈子どもから〉始まると説き続けたのでした。そこには、子ども存在の意義を問い続ける姿勢が一貫していたのです。

このようなことから、前述のわが国の幼児教育・保育が直面している問題解決に迫るために、モンテッソーリの教育思想から学びとることは意義あることだ、と思うのです。

## 2. 子どもの特性

子どもの存在意義を問い、子ども中心の教育を説いたモンテッソーリは、子どもの特性をどのように見ていたのでしょうか。このことを、まず明らかにしておかねばならないでしょう。

さて、モンテッソーリは、著作『教会で生活する子ども』において、「子どもは、大人とは全く違った意味において考え、感じ、得ようと努めるのである」<sup>(1)</sup>と述べて、子どもは大人と違った特性をもっていることを指摘しています。

---

では、子どもはどのような特性をもっているのでしょうか。

まず第一に、子どもの心（精神）は敏感に外界（環境）を吸収するということです。幼い子どもは、たとえば、周囲の事物の色、形、大きさ、雰囲気、さらには言葉を敏感に吸収するのです。しかも、子どもは単に吸収するだけではなく、吸収したものを「生命そのものと同化する」<sup>(2)</sup> のです。このことは、外界（環境）を吸収することによって、子どもの内部で一種の精神化が起きていることを意味します。モンテッソーリは、子どものこの吸収する精神の力を「吸収する心」と名づけたのです。

この吸収する心は、いわば無意識的な精神力であって、外界（環境）を全体として吸収するのです。そのことを、モンテッソーリは、人間（子ども）は身のまわりの「すべてを同時に吸収することによって、つながっている全体をとらえる」<sup>(3)</sup> と言っているのです。ここで大切なことは、「子どもが吸収したものは、彼の人格の最後の要素として残る」<sup>(4)</sup> ということなのです。それは、子どもが外界（環境）から吸収したものを自分の中で血肉化（肉体化）して定着させるからなのです。

モンテッソーリが子どもの特性として挙げる第二のものは、子どもには注意力の集中現象が見られるということです。モンテッソーリによると、人間の精神は受動的でもなく、静的なものでもなく、むしろ、何かを取り込もうとして、決して休むことなく動いている、と言うのです。とりわけ、子どもの精神は絶えず求め動いているのであって、子どもは積極的に外界（環境）を吸収して取り込もうとする探究者なのです。そのため、子どもは、じっとしておれず、自分に合った仕事（活動）を探し求めているのです。

ところで、モンテッソーリは、「子どもを深く惹きつけるものを確実に見つけると、子どもはその仕事を何度となくくり返す」<sup>(5)</sup> と言って、子どもは自分に合う仕事（活動）を見つげると、注意力を集中してその仕事（活動）に没頭することを指摘しています。しかも、その仕事（活動）は、何も報酬を求めない活動なのです。

しかしながら、この注意力の集中現象は、いつでも起こるとは限らないのです。それが起こるのは、子どもの内面的な欲求が満たされる仕事（活動）に出合ったときなのです。

ここで、注目しておきたいのは、子どもが仕事（活動）に熱中するとき、人間の諸能力、諸機能が一つに集約されて、子どもは自己本来の姿を現す

ということです。これは、子どもが一人の統一ある全体的人間として、すなわち、一人の個性的全人として現れていることを意味しているのです。

第三に、子どもには、すでに成長への芽が具わっている、とモンテッソーリは捉えています。そのことをモンテッソーリは、「子どもにはまだ知られていない力が秘められている」<sup>(6)</sup>と言っていますが、この未知の力は、まだ露わになっていないが、磨けば伸びてくる成長への芽を潜めているのです。

また、モンテッソーリは、「子どもは、今まで顧慮されず、汲みつくされなかった能力、感受性、創造的な本能などを豊かにもっている」<sup>(7)</sup>と述べていますが、子どもがもっている伸びる芽（成長への芽）は多面的なのです。トルストイが「子どもにはありとあらゆる偉大な可能性がある」<sup>(8)</sup>と言っているのも、これと同様のことを示しているのです。

そこで、この芽をどのようにして伸ばすのかが、教育方法の問題となります。このことに関して、モンテッソーリは「幼児教育には一つの方法、一つの対応策しかない」<sup>(9)</sup>と言うのです。それは、子どもの本性自然の発達に従う教育のことです。一般に、人間の本性自然の発達には一定の法則があると言われますが、モンテッソーリは、この発達の法則からはずれるような子どもの育成は、教育の道を見失うことになる、とするのです。

ところで、この本性自然の発達に従う教育は、子どもの自由な活動を通して進められます。自由な活動の中でこそ、子どもの本性自然はのびのびと人間らしく発達するからです。

第四に、子どもは長い時間をかけて徐々に発達する、とモンテッソーリは捉えています。人間は生まれてすぐには自立して活動することはできません。すなわち、人間は能力的には「無」の状態で生まれてくるのであって、その後、自立して生きるための能力を自分で獲得していかねばならないのです。換言すれば、人間は母胎内で徐々に身体を構成してきたのと同じく、出生後は徐々に精神を構成し、能力を身につけていかなければならないのです。

さらに言えば、幼児期は精神を構成する時期ですが、この精神の構成期は母胎内にいるときよりも長い時間を必要とするのです。すなわち、人間（子ども）は、出生後のこの長い期間の中で、外界（環境）を吸収しつつ、精神を豊かにし、人間として生きるためのさまざまな能力を獲得していか

---

なければならぬのです。この点で、人間は他の動物と異なるのです。

幼児期は、人生を築く初期に当たり、子どもはこの時期に時間をかけて自分の身体力、知力、言語等を獲得していくのです。それゆえに、幼児期の教育は、その獲得を助けることが主眼であって、さきを急いだり、無理強いをしてはならないのです。このことをモンテッソーリは、幼児教育で「大切なことは、幼な児が自分の本性の法則に従って、ゆっくりと落ち着いて成長できるようにとり計らうことである」<sup>(10)</sup>と言っているのです。そして、子どもがゆっくりと落ち着いて、注意力を集中した活動を通して成長できるように、子どもの興味を起こさせるように環境を整えて、幼児が自由に活動できるように援助することである、とモンテッソーリは説いているのです。

よく整えられた環境の中で子どもは育ちます。ここにいう「育つ」とは、自由な活動を通して自立的人間に育つということなのです。このことを別の面から考えてみますと、子どもは整えられた環境の中で自由な活動を通して、経験を重ねつつ「生」（生きていること・生きること）を深め、自己を広げていくことなのです。モンテッソーリは、「生きるという過程は、子どもにとっては、彼自身の拡張と拡充である」<sup>(11)</sup>と言っていますが、子どもはいつも「生」への途上にあって、その「生」に新しい拡張と拡充をもたらそうとしているのです。教育・保育は、その拡張と拡充が起こりうるように援助する営みであり、教師（保育者）がその任務を負っているのです。

### 3. 子どもの育成

すでに何度も触れてきたのですが、モンテッソーリ教育思想の特色の一つは、子どもの自由な活動を重視していることです。

翻って考えてみますと、現代は生活が便利になりましたが、より便利な生活を求め、そのための目に見える成果をあげようとして時間に追われている風潮にあります。この中で、子どもたちも学習に駆り立てられ、時間に追われているように思われます。

こうして、大人も子どもも時間に追われてしまって、生きること（生きていること）の意義やその尊さを見失ってしまっている、と言えるでしょう。モンテッソーリも、現代人は独りぼっちで森の中をさ迷い、夜の闇と

謎めく木々のざわめきにさらされている子どものように捉え、現代人は生きる目当てやその意義を見失って、さ迷っていると説いています。

このことから、いま大切なのは、子どもにとって「生きること・生きていること」を味わえる教育を実践することです。そのためには、子どもにとっての「今」(現在)を大切にすることです。子どもにとっての「今」(現在)の大切さを説いたのはルソーでしたが、モンテッソーリも「子どもはただ現在だけに生き、もっぱら現在に集中する」<sup>(12)</sup>と云って、子どもは、その本性上、「今」(現在)に生きる存在であることを指摘しているのです。すなわち、子どもは過去を振り返り、未来に目を向けて生きているのではなく、もっぱら「今」(現在)に集中して生きているのです。換言すれば、子どもにあるのは「今」(現在)だけなのです。

このことから、子どもは「今」(現在)に集中して生きることによって、「今」(現在)を充実して生きているのです。ここで注目したいのは、子どもが「今」(現在)を充実して生きるのは、自由な活動によってなのです。別言すれば、子どもは自由な活動を通して「今」(現在)を生命いっぱいにも充実して生きているのです。そして、生命いっぱいにも充実して生きることができれば、子どもは明るく幸せな表情を表すのです。

ところで、「今」(現在)を生命いっぱいにも充実して生きるというのは、自由な活動によって手・足を使い、目や耳を働かせて活動し、自分の能力を発達させていることなのです。このことは、能力を発達させることによって、自立的人間へと成長の歩みをしていることでもあります。この意味で、自由な活動は自立的人間の育成につながっている、と言えるでしょう。

さて、自立的人間というのは、生きる力を身につけた人間のことで、いま、この生きる力を身につけた人間が強く求められています。そこで、そのための教育は幼児期から始めなくてはならないのです。

モンテッソーリが子どもの自由な活動を重視したのは、子どもが「今」(現在)を充実して生きることによって、内に秘めている能力の芽を伸ばし、自立的人間に育つ基礎を培い、未来を生きぬく力を身につけていく、と考えたからなのです。この意味では、モンテッソーリは、子どもの未来に思いを馳せていたのだ、と言えるのです。

モンテッソーリにとって、子どもの自由な活動とは、「自由」という名のもとに子どもを放任することではないのです。そうではなくて、魅力的

---

な教具・教材を用意し、それに触発されて子どもが教具・教材を自由に手に取って活動できるように環境を整えることが大切だ、とされるのです。換言すれば、モンテッソーリは、環境を整えることによって、自由な活動ができるように子どもを助けることだ、と説いたのです。

#### 4. 子どもへの希望

教育・保育とは、子どもを未来へ引き渡していく営みなのです。そして、その未来は子どもにとって平和で幸せな社会であるべきものです。モンテッソーリは、大人たちの世界は競争と不安の世界である、と捉え、この世界の中で「現代人は虚しさを痛感している」<sup>(13)</sup>と語っています。

しかしながら、人間は、元来、平和と安らぎを求める存在なのです。モンテッソーリは、この平和と安らぎのある幸せな社会の実現を子どもに託したのです。

モンテッソーリが、自由な活動による教育を強調したのは、人間としての生きる目標や生き方を子ども自身が見つけ出して決めなければならない、と捉えていたからなのです。この場合、子どもは、さまざまな経験をし、魂の遍歴をして生きる方向を見つけて出すのです。

マイケル・ドリスが『森の少年』（新潮社）という作品を書いています。そこには一人の少年の魂の旅が描かれています。

少年モスは貝殻玉をつないだ帯をこわしてしまいました。この帯は、貝殻玉の組み合わせに意味があって、モスたち部族のたどった道筋を伝えてくれるものでした。モスが貝殻玉の帯をこわしたことを知ったおじいちゃんが、「モス、これからおまえは、ひとりで話を作るんだ」と言いました。そして、従兄弟のクラウドも、「〈森の時間〉が、どんなものか、モスは自分で見つけなければならないんだよ」と言いました。

こうして、モスは自分の部族が生活のよりどころとしてきた森の中へ入っていきました。森へ入っていくと、モスは「ぼくの知っていた世界はどこかへ消えてしまった」と思いました。

それは、森の中では、不平・不満を聞いてくれる人も、文句を言う相手もない。右へ曲がって行こうが、左へ行こうが自由だが、今まで行ったことのないところである。数フィート先しか見えないし、どこに向かっていいのかさえわからないし、たどり着く場所もわからない。森には目じる

しもないし、どれが目じるしなのかもわからない。また、うっすらと光がさしてくるが、夜明けなのか、満月の夜かもわからない。それに、人の通った跡もないし、話し声も聞こえない。守らなければならない決まりもないし、破ることもない。ただ聞こえるのは鳥たちのにぎやかなさえずりであり、見えるのは光ではねかえるクモの巣、ふしくれだった大木であり、落ち葉やくさった木の森の匂いがするばかりであった、からなのです。

こうして、モスには、自分の知識や体験から学んだことは、すべて遠い記憶になってしまったのでした。モスはいつしか眠ってしまった。眠りから覚めて、お腹がすいているのに気づき、父母が恋しくなって戻る決心をするのです。そのためにモスは前へ前へと歩くよりほかなかったのです。それは、新しい道を見つけ出すことができるためにです。

途中、モスはヤマアラシに出会い、「〈森の時間〉って、こんなものじゃないよ、きつと。まだ、何も勉強してないよ、一人前の大人にまだなっていないもの」と言いました。すると、ヤマアラシは答えたのです。「今のあんたは、今のあんた。だから、あんたが大人なのか、大人でないのか、あんた自身にしかわからないことなのさ。大人になったのかどうか、自分で判断しなさい。大人になる準備ができたと思ったらね。誰か、自分以外の人に決めてもらおうなんて思わないことだね」と。

無事に家に帰ったモスは、おじいちゃんといろいろ話します。すると、おじいちゃんは、「しかし、やっぱりおまえは、おまえなんだ」と言いました。また、「ぼくは、どんな大人になったらいいの？」とモスが言うと、おじいちゃんは、「その答えが、いまわかってしまったらつまらないだろう。おまえが、どんな大人になるか、みんな楽しみにしているんだよ」と答えています。

ここには、モスはかけがえのない大事な一人としてあることが示されています。ヤマアラシの「今のあんたは、今のあんた」という表現やおじいちゃんの「やっぱりおまえは、おまえなんだ」という言葉が、それを示しています。そして、「おまえが、どんな大人になるか、みんな楽しみにしているんだよ」というおじいちゃん言葉は、少年モスの成長に希望をかけたものだ、と言えるのです。

ところで、灰谷健次郎の言表に依拠して考えてみますと、モスの森の旅は、自分探しの旅だったのであり、この森は実はモスの心の奥（魂）の世界を示しているのだ、と捉えることができます。別言すれば、モスは自分

---

の心の奥底に自分を見つけるための魂の旅をしていたのだ、と言えるのではないかと思うのです。その上、この旅は、やさしそうで、実は容易ならざる旅なのです。しかし、人間はこれを避けていては、生きる方向は見えてこないのです。このことは、子どもにとっても同様なのです。

そうだとすれば、人間は幼児期から、この魂の遍歴を始めねばならないのです。幼児期においては、さまざまな経験をする魂の遍歴は、自由な活動の中で見られるのです。さらに言えば、子どもは自由な活動の中でさまざまな経験をし、魂の遍歴を経て、一人の人間となっていくのです。

子どもは能力的には「無」の状態で生まれてきますが、どの子どもも一人の人間として生まれてくるのです。すなわち、一人の存在として生まれてきた子どもは、だれとも取って代わることのできない存在として生まれてくるのです。このことは、子どもは一人一人が〈いのち〉の限り生きぬかねばならぬ尊厳をもっているということなのです。

北原白秋の詩に次のようながあります。

薔薇ノ木ニ

薔薇ノ花サク。

ナニゴトノ不思議ナケレド。

毎年のように季節が巡ってきて、今年もまた薔薇の木が花を咲かせた。これは当たり前のことで、別に不思議ではないけれども一、というのです。しかし、「ナニゴトノ不思議ナケレド」も、そこには自然の営みの神秘、生命の営みの不思議さを見るのです。しかも、薔薇の花は黙って〈いのち〉いっぱい咲いているのです。ここに薔薇の花の尊さがあるのです。エマソンが、「バラは、それが存在する一刻一瞬において完璧なものである」<sup>(14)</sup>と言っているのも、このことを指しているとみてよいでしょう。

さてまた、野口雨情が「しゃぼん玉」と題した詩を詠んでいます。

しゃぼん玉、とんだ。

屋根までとんだ。

屋根までとんで、

こわれて消えた。  
しゃぼん玉、消えた。  
飛ばずに消えた。  
うまれてすぐに  
こわれて消えた。

風、風、吹くな。  
しゃぼん玉、とぼそ。

この詩は「しゃぼん玉」を詠んでいるようですが、実は、この世に生を受けた子どもが幼くして〈いのち〉を失っていくのに触れた野口雨情が、子どもの〈いのち〉のいとおしさと尊さを詠んだものであり、子どもの〈いのち〉に限りない願いと希望を託したものだ、と解してよいのではないかと思うのです。

さて、〈いのち〉の尊厳を具えた子どもは、自由な活動を通して、手・足の技能を確かなものにし、知識を獲得して、生きていることの意味を理解し、豊かな人間に成長していくのです。換言すれば、幼児期を含めて子ども時代に多様な体験をすることによって、子どもは内面豊かな人間に育っていくのです。

モンテッソーリは、子どもが内面豊かに育つことによって、その子どもが未来社会を豊かに築いていくのだ、と捉えていたのです。そして、実際に、すでに子どもは豊かに育つ芽を具えているのだ、と確信していたのです。

この確信のもとに、心がカサカサに乾いて、砂粒のようになっている人間の世界を変えて、明るい人類の未来をつくり出してくれるのは子どもである、とモンテッソーリは考えていたのです。

モンテッソーリが、「子どもは人類の父親、よりよい人類をつくり上げることのできる父親」<sup>(15)</sup> なのだと言い、「子どもは、(中略) 人類にとっての希望であり、明るい約束でもある」<sup>(16)</sup> と言っているのは、そのことを示しています。

こうして、モンテッソーリの教育は、子どもが未来を築くのだと捉え、子どもに限りない希望を託したもののなのです。別言すれば、未来は子どものものだ、という考え方が根底をなしているのです。

---

子どもを未来に引き渡していくために、大人たちがしなくてはならない務めがあります。その務めについて、モンテッソーリは、「希望という星に導かれ、力を尽くし、贈り物を携えて子どもを迎えにいかねばならない」<sup>(17)</sup>とっています。ここにいう「贈り物」とは、子どもへの限りない愛と尊敬のことだ、と思うのです。わたしたち大人が、子どもへの限りない愛と尊敬をもって、子どもを迎え入れ接することによって、子どもは未来に向かってすすくと伸びていくのです。このことをわたしたちは忘れてはならないのです。

モンテッソーリの教育思想には、子どもへの希望が底流をなしている、と言ってよいでしょう。モンテッソーリの教育思想に見られる〈希望〉の哲学を、わたしたちはいま学びとらねばならないと思うのです。

そして、その学びから子どもの未来のために、希望に導かれ、希望に満ちて教育・保育の実践をすることが大切だ、と思うのです。

## 引用文献

- (1) Montessori, M., *Kinder, die in der Kirche leben*. (Herder, 1964) S.227.
- (2) Montessori, M., *The Absorbent Mind* (Kalakshetra Publications, 1973) p.32.
- (3) Ibid., p.86.
- (4) Ibid., p.66.
- (5) Ibid., p.179.
- (6) Montessori, M., *Kinder, die in der Kirche leben*. S.217.
- (7) オスワルト、シュルツ・ベネシュ編 平野智美訳 『モンテッソーリ教育学の根本思想』 エンデルレ書店、昭和49年、153頁。
- (8) トルストイ著 小沼文彦訳 『ことばの日めくり』 女子パウロ会、1988年、222頁。
- (9) Montessori, M., *The Absorbent Mind*, p.77.
- (10) モンテッソーリ著 鷹觜達衛訳 『幼児と家庭』 エンデルレ書店、昭和46年、76頁。
- (11) Montessori, M., *The Absorbent Mind*, p.30.
- (12) Montessori, M., *Kinder sind anders*. (Klett, 1967) S.68.

- (13) オスワルト、シュルツ・ベネシュ編 小笠原道雄・高祖敏明訳 『モンテッソーリ 平和と教育』 エンデルレ書店、昭和 50 年、103 頁。
- (14) エマソン著 市村尚久訳 『人間教育論』 明治図書、1976 年、56 頁。
- (15) オスワルト、シュルツ・ベネシュ編 小笠原道雄・高祖敏明訳 『モンテッソーリ 平和と教育』 エンデルレ書店、昭和 50 年、49 頁。
- (16) 前掲書、87 頁。
- (17) 前掲書、22 頁。

モンテッソーリ教育に取り組んで学んだこと

## 高田カトリック幼稚園での取り組みを通して

第1 シンポジスト

友 井 桂 子

(高田カトリック幼稚園園長)

### 1. モンテッソーリ教育に出会うまで

大人は教える者、子どもは教えられる者と考えていた私にとり、初めて見たモンテッソーリの幼稚園の保育は、何を見てよいのかさえ分からなかった。それは大学生のころである。モンテッソーリの保育実践を見せていただく機会を得、幼稚園に伺ったのだが、何をどのように見ればよいのか、見る力のない私には、「よく分からない。退屈だ」という印象しかなく、「教師は子どもの前に立って教える者、子どもは教えられる者」とばかり思っていたので、ここの先生はいったいどこで何をしているのかと、さっぱり理解することができずにいた。また、保育後に教具の提供の練習風景も見学させていただいたが、その時も本質が分からず、「なんて魅力的な知的教材だろう。あんな物を使って、子どもを惹きつける授業（保育）を私もしてみたいものだ」という感想を持っただけであった。

初めて公立小学校に赴任することになった新米の私は、決められたことを決められた時間ごとにこなすだけが精いっぱい、一人ひとりの学びの道筋や理解を考えることなしに、自分がいかに教えるかにばかり目を奪われていた。子どもの発言や考えとは、実は教師の私が求める答えであり、それを的確に言える子どもが私にとっての良くてできる子であった。そして、自分が求める発言を子どもがすると、今日の授業はうまくいったと喜んでいたのである。「大人は教える人、子どもは教えられる人」という見方からしか物事を考えていなかったそのころは、本当の子どもの学びや成長を見ることのできない教師でしかなかった。

公立小学校から縁あってモンテッソーリ教育を取り入れている幼稚園に勤めることになったが、その毎日は、いったいどんな保育をすればよいのかと、戸惑いの連続であった。

「教科書がない。時間割がない。チャイムが鳴らない」と嘆きながら、一日をどう過ごしてよいのかさっぱり分からず、隣のクラスの様子を伺い、

何とか一日を過ごしていた。

子どものころから、先生の求める答えを的確に答えられるようにと教育され、そのように努めてきた私は、決められた枠、管理された枠の中でしか、考えたり行動できなくなっていたのだった。子どもに指示をし、子どもを動かしていた教師にとって、それぞれの子どもとどうかかわればよいのか本当に分からなかったのである。

そんな私の先生は、初めて受け持ったクラスの年長児であった。年長児が、一人で生活できること、自分でしたい活動を選んでしていることに驚きながら、幼稚園での生活の仕方や決まりをすべてこの人たちから、学ばせてもらったのであった。このことは、私にとって「子どもから学ぶ」という経験の一番最初であったと思う。

年長児は、自分たちが年少、年中の時に学んだことを使って生活をしていたが、私は、年長の時期に必要な助けを十分にすることができないまま、この人たちを卒園させてしまった。そのことに気づいたのは、次の年であった。新しく年長になった子どもたちは、昨年の年長児のように一人で生活したり、自分でしたい活動を選んですることが下手になっていた。「子どもに何かをさせる、教える、引っ張る」というような考え方や癖が染みついている私には、子どもがどのような生活をすればよいのか分からなかったので、保育室に置いてある教具はとても魅力的ではあったが、その意味や本質が分からず、どのように使わせるのかといった目でしか見ておらず、「これは、このように使わなければダメ」と、言葉では言わなくても雰囲気の間違えることを許していなかったり、自分の都合や考えを押しつけていたり、反対に、どう扱ってよいか分からない物には、触らないでほしいと無言のサインを出していたのであった。

子どものことが見えない私は、「何のためにこんな教具が並んでいるのか。どうしたらいいのか。何をしたらいいのか」と迷うばかりで、だんだん保育について「これでいいのか。何かが違う」と自信をなくし、悶々とした日々を過ごしていた。

私が勤めた高田カトリック幼稚園は、早くからモンテッソーリ教育を保育の中に取り入れてきた園である。赤羽恵子先生がドイツから帰ってこられて東京で講習会を開かれた時、当時の園長だった神父様と一緒に先生たちが皆、その講習会に行って勉強してきたのだと聞いている。まだ教具も何ものな

---

かったころ、保護者と先生たちが力を合わせて、手作りで教具や教材を作ったり、棚なども作ったのだと聞いている。その棚は、今でも使っている。

けれど、幼稚園の保育について、先輩から学びたい、先輩が積み上げられてきたことを受け継ぎ発展させていきたいと思うのだが、職員の入れ替わりがあるたびに、振り出しに戻るという繰り返りで、せっかく積み上げてきた実践も、なかなか次へと受け継がれることが難しく、手探りの中で毎日を過ごしているということが続いてきていた。

幼稚園を任せられ、どのように保育をしたいのか確認するためにも、細切れに受け継いできたことを整理し、広く大きく見るためにも、モンテッソーリ教育について一から学ぶことが必要だと感じ、コースの門をたたいたのが5年前であった。

## 2. モンテッソーリ教育を学んで

コースで学んだことは、「自分自身が変わらなければならない」ということであった。そして、「何よりも子どもを中心に考える。子どもが大切にされる」ということ、「そのために、大人は子どもから常に学ぶ」ということであった。

長年の習慣の中でいろいろな癖のついた私の手や体は、なかなか思うように動くことができず、なんと硬くなってしまった体や筋肉なんだと思ったが、それよりも頑なだったのは、私の心であったことに気づかされた。

自分の幼稚園では、何もしなくても「園長先生、園長先生」と言って、子どもたちが寄って来てくれる。しかし、実習先の園では、「この人はいったい何だ?」と冷たい目で見られるだけであった。大人だから、先生だから、子どもは何でも「はい」と言うことを聞いてくれるものだと思いこんでいた私は、この時、一人の人間として真剣に子どもの前に立たなければならない、真摯に自分のすべてをさらけ出して、一生懸命にかかわらなければならない、そんな大人でなければ「先生」と呼ばれることはないということ学んだのである。先入観を捨てて、「本当のあなたの姿を見せてください」と、素直な思いで子どもを見つめた時にだけ、子どもは本当の姿を見せてくれるのであった。

どんなに小さな人にも一人の人として真剣に向き合い、情熱をもって保育に打ち込んでおられる先生方から、もっともっと学びたい、そして私

も、自立し一人の人格をつくっていく子どもに奉仕したい、子どもの魂に仕えたいという思いを強く持つようになったのであった。

### 3. 子どもが自分で考え決めること、子どもが自由を使えるように手伝うのは難しい

しかし、自園に戻るとなかなかコースで思い描いていたようにはいかない現実がいっぱいある。

例えば、こんなことがあった。「高田のようになつたらあかんで」。これは、学園の他の幼稚園を任された園長が、園長になる前に、高田の運動会の様子を例に言われた言葉だそうである。高田の運動会の入場行進は、オリンピックを想像していただければと思う。クラスのプラカードを持った子の後ろを、うれしそうに両親に手を振りながら歩いている子、張り切って一生懸命手を大きく振って歩いている子、ドキドキしながら少し恥ずかしそうに下を向いて歩いている子、年少児の中には、いつもの雰囲気と違うことで泣いて先生にしがみつきながら入場門をくぐる子など、様々である。4年前にはこんな姿も見られた。障がいを持ったIは、一生懸命歩いているのだが、前との間がどんどんあいてしまう。突っかかり突っかかりしながら歩く列は不細工に見えるが、Iの後ろを歩く子どもたちは、Iを抜かさずに足踏みをしながら待っており、前を歩く子も後ろを見ながらスピードを一生懸命調節して歩いている。こんなことが子どもたちにできるのかと、うれしく見ていたのだが、きちんとまっすぐに並んで歩くこと、そろっていることがきれいで良いと考える人にとっては、不ぞろいで見栄えが悪い。先生はきちっと教えていないと見えるようであった。

また、子どもが自分で考える機会を与える保育をすることには、混乱も出てくるが、今年のクリスマスにこんなことがあった。クリスマスの聖劇をするために、年長児が話し合って配役を決めた時のことである。順に役が決まっていっていったのだが、最後の場面のマリアの役が決まらず、まだ役が決まっていない男児Sが一人残っていた。「男の子でも、マリア様の役をしたらいいと思うよ」「それしか残ってないんやから、我慢してやらなあかん」など、いろいろな子どもの声が出た。なかなか決断できずにいるSの姿を見て、年中のころからやりたいと思っていた天使の役になれたAが、「天使の役とマリア様の役を替わってあげようか」と、すごい決断をして

---

発言した。その声を聞いて、ヨゼフの役に決まっていたHが、「僕、マリア様の役はできないけれど、天使の役やったらやってもいい。Aちゃんがマリア様の役をして、僕のヨゼフ様の役をS君がして、僕が天使をやるわ」と提案してくれた。Sは、「友達がいろいろと考えてくれてうれしいけれど、せっかく決まった役を替えるのは申し訳ない。でも、マリア様の役をすることはよう言わん」と下を向いたまま複雑そうな顔をしていた。その時、Aが、「いいよ。役が決まらなかったら、聖劇できないもん。S君ヨゼフ様をしい。私、マリア様をする。H君天使になるねんな」。こんな話し合いの末、やっと役が決まったのだった。このことについて、「S君にだけそんなわがまを許して」「ずっとやりたかった天使の役を替わってあげると言ったのに、それをせんと、どうして違う子まで役を交代せなあかんのですか」「そんなに混乱するのなら、最初からもっと大人が決めておけばよいのではありませんか」といった声もあった。大人が決めたたとりに子どもを力で従わせれば、混乱もないし、見た目もきれいである。しかし、こんな、発想や行為は出てこなかったであろうし、子どもたちが一生懸命考えるということもない。これでよかったのかどうか、いろいろな意見があることだろうが、自分で考え、自分で決められる子どもの心を育てていくことが大事、子どもに考える場を与えることが大事、子どもが出した答えを大事にしてあげることが必要であると、保護者や若い先生たちに伝え続けることが私の今の仕事であると思っている。

「保護者も幼稚園で一緒に楽しみたい」と、保護者が一緒に参加するイベントや行事をたくさんしてほしいという声がある。共に子どもの育ちを考え助け合うには、保護者にも幼稚園に足を運んでもらい、共に過ごすことは大切なことである。しかし、その時だけの一瞬の楽しみで終わるような行事、大人がすべて準備した中で子どもは過ごすだけといった行事でよいのだろうか。子どもがゆっくりと自分で選んで使う時間、子ども一人ひとりの歩みにじっくりと関わる時間が失われることはないのだろうか。子どもが主体となった生活をそれであることができるのだろうか。「一人ひとりの子どもが、自分の歩み方で歩めるためには、自分の意志を使って自由に選んで過ごす時間がたっぷり必要である」と保護者に伝え、幼稚園の行事の取り組み方を見直す作業を共にしていきたいとも考えている。

「うちの子にはこんなことをさせてほしい」「隣のクラスの子は、あんな

ことをさせてもらっているのに、うちの子にもさせてほしい」といった保護者の声を耳にする。保護者からのいろいろな指摘・要望を受けると、次からはどうしていったらよいのかと園全体で話し合うのだが、そのとき気をつけないと、自分たちを守ろうとして、失敗をしないようにとして、保護者の声に答えようとして、そんな声に流されてしまいそうになることである。「本当に子どものためなのか」「大人の權威に従わせるような、大人が決めたルールに従わせるような保育になってしまわないのか」と、もう一度、子どもの立場に立って考えているのか、立ち止まることの必要性を感じている。

そして、変わろうと思ってもなかなか変わらないのが大人、保育者である。今まで大人が主になって指導してきた人、指導されてきた人ほど、子どもに自分の歩み方が許されるように自由を子どもに与えるということに戸惑いや抵抗感があり、なかなかなじめない。いつの間にか子どもを管理している保育になってしまっている。新任でも、自分が小さい頃から受けてきた教育の仕方、考え方で同じように保育しようとしてしまうし、経験者は、初めて自分が経験してきた所の保育は印象も強く、なかなか抜けきらない。やはりそのやり方で保育しようとする。経験があればあるほど、頑なにやりやすい。大人が変わるということは、本当に難しいことである。幸いなことに、「子どもの姿をもっと話し合おう」という声が、職員の間からあがるようになってきた。皆がコースに行って勉強する中で、子どもを見る、子どもを語る、子どもから学ぶということを一人ひとりが感じ取り学んできた結果であろう。それでもまだまだ、子どもの生活や姿を考えず、自分たちの都合で保育しているのではないかと思うことに出会う。だからこそ、自分で考え自分で決められる子どもを育てているか、子どもをよく見て、子どもから学ぶことを忘れず、立ち止まって繰り返し自らの心に問うてみなければならない。

私自身もっと、子どもが何を必要としているのかをよく見て、どんな手伝いができるかを考える人でありたいと思う。そして、大人も自由を行使できる自立した一人の人間でなければならないと強く感じている。これからも、各地で実践されている先生方に学びながら、子どもの成長の道行きを共に歩く同行者になりたいと思っている。

---

# 藤幼稚園での取り組みを通して

第2シンポジスト

白井祥子

(学校法人藤学園 藤幼稚園)

## はじめに

藤幼稚園の概要について

藤学園はドイツに本部がある殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会を母体とし、その始まりは、1925年に北海道の女子教育のために派遣された3人のシスターにより開校された札幌藤高等女学校である。幼稚園は昭和12年に設立され、園舎は平成13年に新築移転し、大学、中学、高校、修道院が隣接し、北海道大学も徒歩圏内である文教地区的環境にある。園児数97名、縦割り3クラスに各2名の担任制をとり、教職員数11名、未就園児クラス週2回（プレイルーム）を実施している小規模の園である。送迎バスを使用せず、自家用車、地下鉄、徒歩などにより保護者が送迎しているが、通園地域は広範囲に及ぶ。今年、創立72年を迎え、モンテッソーリ教育を導入し20年目になる。なお、昭和30年短期大学に保育科が創設されて以来、保育学科の教育実習園としての役割を果たし、また2001年以降、京都モンテッソーリ教師養成コースの実習園ともなっている。

## 1 モンテッソーリ教育導入のきっかけ

モンテッソーリ教育を導入したきっかけは以下の3点にある。

- ① 1988年（昭和63年）～1989年（平成元年）の2年間、文部科学省から、幼稚園教育のあり方についての実践的調査「3年保育のあり方について」の研究委託を受け、その結果、幼児期の生活は「自分のことを自分でする」ことが大切な基盤であり、子どもが自立できるための援助をすることが、幼児教育において最も重要であることが明らかになった。
- ② 1990年（平成2年）に幼稚園教育要領が改訂になり、幼児期の教育は、「幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」と謳われた。これは「整えられた環境」を重要

な要素とするモンテッソーリ教育と一致している。

- ③キリスト教的人間観・世界観に基づく本園の建学の精神は、人格形成の基礎に力を注ぎ、人間としての器づくりを目的とし、本来持っている自由意志と知性を尊重した人間の育成にある。これは、モンテッソーリ教育の本質と合致する。

## 2 モンテッソーリ教育導入前の状況 1 (導入の素地～保育形態・保育内容)

当園は、平成2年までは年齢別保育を実施してきたが、モンテッソーリ教育を知らなかったわけではなく、前園長時代に、部分的に保育の中に取り入れてきた経緯がある。また、3歳児研究の実績、年齢別保育の保育内容においても教師の自由な考えを尊重する傾向があり、昭和35年頃から単元が重視されている時代にもかかわらず、単元にとらわれるのではなく子どもの発達、子どもの選びを尊重した保育が展開されていた。この背景には、当時教師であったドイツ人のシスターの存在が大きく、行事、製作などにも子どもの発達を重視した独創的な感性で創意工夫のある保育が実践されていた。

一方、昭和56年(1981年)頃から自由保育を導入し、月に数回、クラスの枠を外し、子どもたちが自由に好きな場所、コーナーを選び活動する取り組みを行っており、その中の一つにモンテッソーリのお部屋もあった。また、異年齢で昼食をとる機会を持ち、5歳児と3歳児の関わりに自然で微笑ましい良い体験が見られたことから、異年齢での生活を多く取り入れた経験を積み重ねていた。

以上のように、保育の形態や保育内容等にモンテッソーリ教育導入の素地があり、それがモンテッソーリ教育へ移行しやすい要因となっていた。

## 3 モンテッソーリ教育導入前の状況 2 (導入へのプロセス～保育者の自主性尊重)

昭和62年頃より、モンテッソーリ教師養成の場のない当地で、札幌においてモンテッソーリ教育をと、赤羽恵子先生が研修会を開講され、モンテッソーリ教育の啓蒙に力を注いでくださった。

平成元年、札幌において京都モンテッソーリ教師養成コースが開設されることになり、本園より4人の教師が自主的に学ぶことになった。その時

---

の教師の経験年数は5年目および3年目が各1名、2年目が2名の計4名であった。

平成2年には、理事長を兼任していた前園長の後任として園長に就任した。当時、20年ぶりに幼稚園教育要領が改訂され、「幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」と謳われたことにより、子どもに視点をおき、環境を重視する点にモンテッソーリ教育との共通性を見だし、モンテッソーリ教育導入について考えていたところであった。その年の冬休み後に、教師から縦割り保育へ移行したいとの要望が出されたが、園長就任直後のことであり、次年度実施にふみきるには早急であるため保護者への説得にも不安があったが、今が移行の好機であると判断し、2月の保護者会において説明することになった。

保護者への説明では、モンテッソーリ教育という言葉の使用は最小限にし、この教育の中身として、子どもたちの具体的な生活の仕方を説明し、子どもたちが整えられた環境の中から、自分で「何かをしたい」「何かをしよう」と意志を持った生活をする事の大事さを強調し、自分で考え、自分で選び、自分で責任をもった生活することは、人間としての生活の基本的なスタイルであること、また、当園の主體的な幼児像と同じであり、目先のことでなく、2年または3年かけて育てていきたいことを話した。

子どもにとって良い生活することは、自分自身が満足感を持ち、自分の自信につながっていくことを話した結果、思いのほか、保育の中身について反対する保護者はおらず、仲良しになった友達と別れることだけが大きな問題となっていたため、この問題については子どもたちの不利になるようなことはしないように細心の注意を払い保育をしていくことを約束し、平成3年度より縦割り保育への実施に踏み切ることになった。

#### 4 モンテッソーリ教育導入第一期（平成3年度～平成7年度）

この期間のクラス編成は、ゆり組（2クラス・保育者3名）60名、ばら組（2クラス・保育者3名）60名、すみれ組（1クラス・保育者2名）35名、総園児数155名であった。年齢別保育を実施することができるよう配慮して各クラス3名の教師を配置した。

この時の第一の目標は、子どもが「選んで取り組める環境」を整えることであった。その環境を整えるため、移行まで時間が少なかったが、春休

みを返上し、ブロック、パズル、ジョルダン社の木の遊具、紐通し、玉通し、ベグ類、フレーベルの恩物類、シール貼り、織物（園オリジナル作成・ドイツ製円形織物）さし盤、モンテッソーリ教具など全ての遊具等をホールに集め、各クラスに分配した。

環境を整える時の配慮事項は、教師が指導出来ないものは環境に置かず、それまで使用していた教材を整理して配置することであった。その内容は、自由保育で使用していた（折る、貼る、切る、縫う）といった日常生活の基本となるもの、特に折り紙などは、異年齢の子どもたちが自分一人で行い組みむことができるように、難易度を考えて準備するように心がけ、ブロック類は、小さい籠を用意し分けて並べるようにした。あけ移し、色水作りなどの教具は利用できるもので準備しようと試みたが、それらを探し集めるなどの苦労があった。また3歳児が多かったため仕切りに使用していた棚を、各クラスに分配するなど、できるだけ現在あるものを利用するように心がけ進めていった。

移行期において、3歳児、4歳児、5歳児と一緒に生活するため、教師の中に自分が経験していない年齢の子どもを理解できないことへの不安や戸惑いもあったようである。移行期当時の保育者の経験年数は、9年・7年・5年が各1名、4年が3名、2年が2名であった。このうち4名は、平成元年から基礎コースで学んだ教師たちであったため、習得したことは実践したい思いが強かったことも、移行への実施を可能にした要因である。このような状況は、平成7年まで継続し、平成5年と7年には各2名基礎コースを受講した。

## 5 モンテッソーリ教育導入第二期（平成8年度～平成13年10月）

札幌市立幼稚園が、3年保育を導入したことで、園児数が減少し、すみれ組を廃止し、3クラス編成を1クラス60名・保育者3名体制の2クラスに変更した。その際、すみれ組の子どもたちを配慮し、ゆり組・ばら組・すみれ組の名称をさくら組・ききょう組に変更しスタートした。

またこの年、他園で実施してきたモンテッソーリ教師養成札幌基礎コースを急遽、本園で始めることになり、各課程の教材教具の見直しと準備をすることになった。会場園として慣れるまで、保育者には緊張もあったが、保育の見直しをする原点にもつながった。

---

さらに北海道に限り、平成8年から10年まで3年間、専門コースに代わる第三課程が開設された。それにより、それまでは教具等の提示に固執していた教師が、モンテッソーリ教育の全体像を捉えることができるようになり、意識に変化が生まれた。その後、平成10年度に基礎コースを修了した教師を、専門コースに研修生として派遣することになった。

## 6 モンテッソーリ教育導入第三期（平成13年11月～現在）

平成13年11月に念願であった園舎を新築し創立時の場所に移転した。その園舎は、以下の点のような「子どもにとって良い生活ができるための環境」を実現可能にした。

- ・便利さではなく生活できる基本的要素が組み込まれている環境
- ・できるだけ木のぬくもりのある室内環境
- ・生活する場として、落ち着いた色調にと外壁はレンガを使用
- ・自然の触れ合い、四季折々の変化が見える園庭環境
- ・各クラスにトイレと着替えのスペースを確保
- ・3クラス同じ環境であり、畳の空間がある
- ・クラス替え、担任は特別な事情のない限り代わらない
- ・自分の部屋には、いつも同じ先生がいることの安心感が持てる環境
- ・二人担任制の継続
- ・教具遊具などを含め、子どもの生活空間が変化しない
- ・一日の生活の流れがいつも同じである

クラス編成においても、新園舎に移転し、真の意味での異年齢保育を実施する環境になった。移転時は1クラス編成が40名の3クラス、担任各2名、フリー1名の体制を確立し、現在は、1クラス32名～35名程度の人数で保育を継続している。

## 7 現在の体制

現在、モンテッソーリ教育を系統的に学び、理論と実践のバランスが必要不可欠であり、この教育を実践展開していくためには、教師の専門性と資質が一番に問われることを実感している。そのため、基礎コースだけではなく、専門コースでも学ぶことが必要である。何よりも、子どもたちが自分で考え、自分の意志で選び、自分で実行することが許される一日を保

障し、3歳、4歳、5歳の子どもたちが共に生活することを基盤に、意欲と思いやりをもち、自由が保障され安心な場所で友達との生活を生き生きと過ごすことができるようにと願っているところである。

現在ディプロマ取得者は教師7名のうち4名、取得中が1名である。教師が、子どもたちの生活を通して教育を実践しようという視点を共有し、目先のことにとらわれることなく、長期的な視点をもって、人間形成を目指し、保育の見直しをしながら歩む必要性を感じているところである。

### おわりに

モンテッソーリ教育に出会い、その実践の長い道のりの中で試行錯誤しながら歩んできたが、モンテッソーリ教育を学び確かな原点に立ち返り、振り返るチャンスを与えられたことに感謝している。モンテッソーリ教育に移行し20年、出会ってから長い年月の中で、モンテッソーリ女史の精神を一筋に新しいタイプの教師の養成を北海道の保育者にとの強い思いを赤羽恵子先生に奮い立たせていただきつつ歩んできた道りがある。

子どもを一人のかけがえのない人格を持った大切な存在として尊重し、自由意志と知性を働かせ、縦割りの社会の中で十分自由を保障された環境の中で、いつも子どもが自分を主人公として歩めるように、モンテッソーリ教育は子どもを視点におき揺らぐことがない故、その必要性に寄り添っていくことの大切さを学び、これからも学び続けていきたいと願っている。

「子どもが自分で自分を作る」……人間作りをしていく、それは、私たち大人が作るのではなく、「子どもが自分で自分を作っていく」というモンテッソーリの人間観、子ども観を学び取ることを通して、子どもの魂に奉仕していきたいとの思いでいる。子どもは、未来に向けて、心底自分に信頼と自信をもって世界の平和に向けて貢献して行ってほしいと願わずにはいられない。

モンテッソーリ女史は、「平和は教育以外にはない」と述べているが、一保育者として謙虚に、愛のまなざしをもって、自分の心の平和から世界の平和につなげることを今後も深め実践していきたいと願っている。

---

# つぼみ保育園におけるモンテッソーリ教育を 通しての保護者支援

第3シンポジスト

海道洋子

(社会福祉法人 親渉会 つぼみ保育園)

## つぼみ保育園の概要

- ・昭和41年に設立され43年目を迎える。定員は180人、職員は39人。乳児（産後明け）保育、障害児保育、延長保育（7:30まで）、学童保育（3年生まで）。
- ・福井県坂井市丸岡町坪江に位置する。周りは田んぼと山と川に囲まれ、農家の方の野良仕事の内容の変化、四季折々の変化を目の当たりに見聞することができ、自然に恵まれた環境にある。
- ・入園してくる子どもたちは、2～3世代同居が全体の2/3、核家族の子どもが1/3の割合である。
- ・モンテッソーリ教育を学び、縦割保育も取り入れて30年目を迎える。

## 発表内容

保育指針、幼稚園教育要領が改訂され、保護者支援の内容が大きく取り上げられた。以前のように子どもだけを見ているだけでは子どもは育っていかないとされている。

つぼみ保育園では、子どもを取り巻く家族みんなに保育園に来ていただいて、モンテッソーリ教育の中で育ち合っている子どもたちと一緒に過ごしていただいている。父親参加、母親参加、祖父母参加など年間50回ぐらい行っている。

保護者支援の第一歩として、2月中旬に行っている入園説明会から始まる。まず、保育の理念、保育方針、保育目標を伝える。そしてわが子がつぼみ保育園で、どんな体験をして、どんな育ちをしていくのか、映像を通して見通しをもっていただく。

0歳児保育は産後明けから行っている。家での生活と保育園がまるくつながっているように授乳、オムツ交換、睡眠は一人ひとりの違いを受け入れている。初期食の時は抱っこして、一口食べるごとに「おいしいねー」

と声をかけながら食べるようにしている。

赤ちゃんは、「いない、いない、ばあー」をととても喜ぶ。ハンカチ、エプロン、布、タオルなど、いろいろな物を使ってできる。

5カ月までの赤ちゃんは、なんでもなめるので、一人ひとりの籠を準備し名前を書いて、その子の発達にあった遊具を整えてあり、感染予防も考えている。選んで遊ぶ手作りの遊具もたくさんそろえてある。

1歳前後の赤ちゃんは、穴の中に入れるのが大好き。大小いろんな穴に入れる遊具が作られている。絵本も大好き。決まった時間に、決まった場所で「絵本、よむよー」と声をかけると、秩序が大好きな赤ちゃんは集中して見るができる。手づかみでいっぱい食べた赤ちゃんは、だんだんスプーンも上手に持てるようになってくる。少し大きくなった赤ちゃんは、先生も一緒に食べて「おいしいねー」と共感しながら食べることができる。

たっぷり遊び、たっぷり食べて、たっぷり飲んだ赤ちゃんは、ぐっすり眠る。2回寝から3回寝をする。1歳前後になると、リズムを整えていき、食後たっぷり眠るようになる。天気の良い日は、散歩車で大きい子が遊んでいる園庭を散歩すると、とても喜び、交流の場になる。また園内も広いので、雨が降ったり寒くなったりしてくると、1日に何回かその子に合わせて散歩をする。

1歳児になると生活リズムも安定してくる。朝の生活では、身支度を整えると、設定してある遊具を出して遊びだす。その中で朝のおやつを準備すると食べに来る子もいる。ままごと遊びも大好きで、言葉のやり取りをしながら、先生はたくさん話しかけることを大切にしている。モンテッソーリ教育を学び始めたころは、赤ちゃんの保育の中にどんな形で取り入れようか迷ったが、長年研究して、選んで遊ぶ遊具を手作りでたくさん作ってきた。ハサミで切る仕事も秋ごろからやり始める。朝10時ごろまでは子どもが選んで遊ぶ場所、ままごとコーナー、おやつを食べる子、オムツを交換する子と、先生が役割分担して、子どもが自由に活動できる環境を整えている。

食事の前には15分ほどの集まりをする。手あそびや指人形、いろんなシアターを楽しむ。絵本は子どもが楽しむものならば繰り返し読んでいる。言葉を吸収する時なので、よい言葉に出合えるよう工夫をしている。食事では保育士が一人ひとりの前で、「今日は煮物なの。これは人参、これはじゃ

---

がいも」などと語りかけ、「ご飯すこし？ たくさん？」と聞いて1人ずつの食べられる量を入れている。

0歳児と1歳児の交流の場も設けている。着替えコーナー、ままごとコーナーなど季節によって環境を整えている。そこでは、小さいながらも異年齢の学び合いが見られる。

異年齢保育は2歳児から5歳児が一緒に生活し、学び合っている。朝、登園してくると出席カードにシールを貼り、制服を脱ぎ、靴下を脱いで遊び始める。天気の良い日は自分の部屋か外。雨が降った日は自分の部屋か多目的空間。どこで遊ぶのかは子どもが選ぶ。部屋には100種類もの教具教材が設定されている。部屋では子どもは自分で遊びを選び、大きい小さい子が学び合う。保育士は一人ひとりにあった援助に心がけている。天気の良い日は、ほとんどの子が外に飛び出していく。保育士は安全面に気配りをしている。築山は子どもの大好きな遊び場所である。下には大人が通れる大きなトンネルがあり、車庫にもなっている。そしてここには泥団子用のきめ細かい白砂もある。子どもが発見したものである。田んぼから泥団子用の土を運んでもらい、毎日たくさんの子がピカピカの泥団子作りに夢中である。園庭の周りの草取りはしないで、草花遊び、虫探しの場になっている。

園外も自然がいっぱいなので散歩に出かける。春は観察ノートを持って草花調べを行う。大きい子から小さい子に名前が伝わっていく。秋にはそばの花を楽しんだり、稲刈りの様子を見たり、刈りあがった田んぼでコロギ探しも楽しむ。

11時15分ごろになると、当番で食事の準備を始める。5歳児はテーブルにセティングする花を水切りして生けてくれる。バイキング式で自分の食べられるだけの量をよそっていく。混雑しないで、この時間を楽しく過ごすためにたくさん話し合ってきた。食べる場所も自由席である。縦割りにした1年目は指定席だったが、それ以後は伝統的に自由席が続いている。3色ボードで、今日の献立名と材料が体にどんな働きをしているのか毎日話をしている。食べ終わったグループから「ごちそうさま」をして片づけている。2歳児は秩序を好むので、同じ物のところにきれいに片づけていく。

5歳児は午後から毎日就学前の教育をしている。他の年齢は昼寝があり

起きた子から順におやつを食べ、集まりの体制になっていく。3時40分から4時20分ごろまで異年齢での楽しい集まりがある。生活の話、歌、手遊び、集団遊び、絵本、紙芝居、パネルシアター、エプロンシアター、教具の紹介、月一回ある料理のデモンストレーションなどを行っている。

子育て支援、保護者支援の一つである学童保育は、保護者の要望で3人から始まった。今では52人の子どもが4つの学校から帰ってくる。1年生から3年生までいる。保育園時代も縦割りだったので自然に生活が身についている。友達同士で教え合ったり、小さい子のお手本になったりしている。宿題をすませると、遊ぶ場所を選び、友達を見つけ、遊びを楽しんでいる。学童にもなるとダイナミックである。園庭には実のなる木が100本以上あり、長年の体験で、食べごろがよく分かっている。園の外にも出ていき、ザリガニ、おたまじゃくし、どじょうとりを楽しんでいる。刈りあがった田んぼで虫探しをして、のんびりゆたかに生活をしている姿を見ると、学校と家庭のクッションになっているのかな？と思う。2月の入園説明会の時は、ここまでをもう少し詳しく説明する。帰る時「うちの子もあんなおにいちゃん、おねえちゃんになれるんでしょうか？楽しみです」と話される方がいる。情報を流して、説明することは大切だと考える。

昔は、子どもだけを育てていけばいい時代だった。しかし今は、保護者を支援していかなければ子どもが良い育ちをしていけない時代になってきている。当園では地域のコミュニティーセンターとしての役割の一つとして、二つの大きな祭りを実施している。この祭りを通して、役員のお父さん方が育ち合う姿がある。初めて地域の社会人として活動するのが、保護者会の役員だと考える。先輩役員さんから教えてもらいながら、作業が進んでいく。祭りには、地域の人たちや卒園したOBの小学生、1,000人くらいが参加する。もう一つの祭りは春に行われる保育まつり、手作りのおもちやうどん、おでん、五目ずしなどの即売がある。保育園にあるたぐさんの教具教材は、この日の収益金で買っていただいたものばかりである。年2回労力奉仕の会も行っている。子どものために園庭の整備や園内の整備をしていただくことで、子どもの遊び空間を知っていただいている。

子どもの日ごろの様子を知ってもらい、また、親同士の学び合いの日としていろいろな保育参加の日を年50回くらい設けている。例えば3歳児の父親参加の日。9月から10月の中で10日間日程を選び都合の良い日に

---

1日6人から7人来ていただく。その日は1週間に一回行っている年齢別保育にも参加してもらっている。自由遊び時間にも子どもの中に自然に参加している。つぼみでは誰が来園しても、いつもの生活を崩すことはしない。モンテッソーリ教育のなかでの自由を子どもに保障している。保護者の方もゆったりした時間を体で感じているようである。食事と同じものを食べる。いつもどんな雰囲気の中で食べているのかを、知っていただく良い機会になっている。「自由席っていいわ」「あっ、味付けおいしい!」「子どもが残さず食べるのが分かるわ」「食事の時間たっぷりあって、のんびりゆっくり食べられるわ」「家では、はやくはやくを言いすぎている」などなど、たくさんの感想がある。同年齢の中でのわが子の成長を見て、喜んだりこんなこともできるようになったと、びっくりしているお父さんもいる。

午後からは保護者同士の交流の時間や子どもがいつも遊んでいる遊具で遊んでもらう。手作りおもちゃなども一緒に作ったりする。スーパーバイザーや担任を交えて、年齢別の発達を知らせたり、子どものかかわり方をみんなで話し合ったり情報交換をしたりする。保育園からの具体的な保育計画の情報なども伝えるようにしている。モンテッソーリ教育についての話もしている。部屋にあっても、どんな目的で遊んでいるのかほとんど分からなかった保護者の方も、自分でやってみてモンテッソーリ教育のすばらしさを感じたようである。

いつもの生活の中に保護者の人が来園し、一緒に生活していただく。その中で保育者がどんな環境を準備して、それを一人ひとりにあった方法で教えたり、伝えたりしているかを見て、学ぶことが多いようである。

もう一つ保護者の方と情報を共有している個人観察記録がある。年に3回A4サイズの用紙で発信している。一人ひとりの子どものカンファレンスをしてそれを文章化し、保護者の方に読んでいただいている。さらに裏の方に家の様子を書いてきていただいている。このことは子ども育ち、親育ち、保育士育ちにつながっている。

豊かに子どもを育むために、これからもモンテッソーリ教育の精神を大事にして保護者と共に歩んでいきたいと思う。

## 司会者としての報告

林 信二郎

(川口短期大学)

今回のシンポジウムのテーマは、3人のシンポジストを含めて、会場の全ての参加者にとって、その内実は一人ひとり異なるものの、共通の体験であり、関心ごとであったと思われる。参加者のそれぞれが、モンテッソーリ教育との出会いとその後のかかわりの中で、多くのことを学んできたであろうし、現在も学び続けていることであろう。そして、その途上では、迷いや悩みや困難を感じ、それを克服し、あるいは、現在も抱え続けてもいるであろう。

その多様性を、最初に素描してみるならば、例えば、その取り組みのきっかけとして、それまでの自分の保育に疑問を感じたり、反省したりといったこともあろうし、モンテッソーリに関係した本や人との出会いの場合もあろうし、あるいは、就職した園がモンテッソーリ教育の実践園であったということなどもありそうである。

また、それを学んだ場や機会としても、モンテッソーリ教員養成コースでの学びもあれば、講習会や講演会での参加の場合もあろうし、この教育の実践の中で、子どもからの学び、同僚の保育者や子どもを預かる保護者からの学びもあろう。身近なところでは、今開かれている大会の中で、記念講演や講座、様々な研究発表、さらにはこの教育を志す人々との出会いの中での学びもあろう。

その学びの内容としても、子どもの発達や育ちの見方などの広い意味での発達観や、それに基づく子どもとのかかわり方、教育観、人間観や世界観など、広範囲にわたるものであろう。

私は何を学んだのか、私たちは何を学んだのか、その取り組みの中でどのような困難や課題に出会い、それらにどのように対処してきたのか、などについて改めて眼をむけ、明確化し、意識化するとともに、それらを共有することが、より豊かな学びへとつながることを期待した。

シンポジストは、その意見の表明順に次の3氏であった。

---

友井 桂子氏（高田カトリック幼稚園園長）

奈良県内の公立小学校に7年間勤務のあと、高田カトリック幼稚園に勤める。

クラス担任、主任を経て、平成8年から園長。

5年前に京都モンテッソーリコースにて学び、ディプロマを取得。

現在も京都モンテッソーリコースにて、コースの手伝いをしながら勉強中。

白井 祥子氏（藤幼稚園園長）

札幌にある藤幼稚園の園長として、20年余りとなる。

上智のコースを学んでから、30年余りとなる。

現在は、札幌会場として、京都コースの指導の手伝いをしている。

海道 洋子氏（社会福祉法人 親渉会 つぼみ保育園）

福井県丸岡町つぼみ保育園に勤めてから41年になる。

30年前に京都モンテッソーリコースで学び、ディプロマを取得。

15年前から、京都モンテッソーリコースで、指導の手伝いをしている。

以上の経歴から分かるように、お3人とも、現在モンテッソーリ教育の実践の場におられ、京都モンテッソーリコースに携わっており、赤羽先生とご一緒にその教育に取り組んでいる方々である。シンポジストの発表内容の詳細については、各氏からの報告が掲載されているので、ここでは、司会者として印象的に受け止められた事柄と、このシンポジウムの成果と思われることについて報告する。

まず、友井氏は、教育学部の学生のころ、モンテッソーリ保育を見る機会があったが、「先生は子どもの前に立って教える者、子どもは教えられる者」との思いから、この先生はどこで何をしているのか、さっぱり理解できず、「よく分からん。たいくつや」の印象しかもてなかった。卒業後、7年間小学校の教師として過ごす、その間、少しでも多くの児童から自分の求める答えが返ってくる授業を目指して取り組んできた。

縁あってモンテッソーリの実施園に勤めるようになった彼女は、当然のことながら、戸惑いの連続の中に置かれることになる。教育学部で養成され小学校教師として身についた子ども観と教育観はそんなに簡単に変わることではなかった。子どもの姿や、同僚の先輩保育者からの学びなどによって、少しずつ変わってはいたが、本格的学びは、コースでの学びであっ

た。コースでの学びが深まる中で、「子どもから学ぶ」、「何よりも子どもを中心に考える」ように変わってきた。

しかし、それを自分の園で実践するに際しても、全体がまとまっている姿が良い保育だとする一般的保育観や、そのような考えに支配されている保護者の存在という困難があった。ここには、学びがしっかりと自分の中に根付くためには、本人自身の決断と信念の持続が不可欠ではあるが、それだけでは難しく、保護者や保育界全般の評価とサポートも欠かせない要因であることをうかがわせるものである。

次いで、白井氏は、彼女自身はすでに上智モンテッソーリ教員養成コースでモンテッソーリ教育について学んでいたが、藤幼稚園がモンテッソーリ教育を導入するに至ったいきさつと、その移行の経過を、3期に分けて報告した。その移行は、全体としてみれば、教員の育ちを含めて着実、堅実なものであったが、様々な問題にも直面し、その取り組みの中で学んだことも少なくなかった。

そのきっかけとなったものは、20年ほど前のことになるが、文部科学省から、「3年保育のあり方」の委託事業を受けたことにある。保育形態、教師の援助のあり方などの研究成果として、異年齢混合の生活が子どもにとってよりよい生活ができることが明らかになった。ところが皮肉なことに、行政が求める特色ある保育に応えるものとして出てきたものが、行政の進める横割り保育「同一年齢の子どもをもって学級編成することを原則とする」の条文に反するものであった。これは、友井氏の問題とした保護者の理解を超えて、行政の壁の厚さを思わせるものである。

最後に、海道氏が、「モンテッソーリ教育を通しての保護者支援」なるテーマで発表を行った。これは、つぼみ保育園での実践を、映像をふんだんに取り入れての発表であったが、現在の少子化対策としての保護者支援を超えて、モンテッソーリ教育をいかに保護者に、さらには地域の理解へとつなげていくかといった取り組みの内容であり、そのエネルギーの大きさを感じさせるものであった。具体的内容としては、1回6人から7人の保護者が、母親参観、父親参観、祖父母参観といった形で、日常の保育の場に参加し、食事も共にし、午後は、保護者同士子育てについて話し合ったり、モンテッソーリ教育について学びあったり、子どもの様子を伝え合ったりする場としている。それが年間50回ぐらいも行われているのである。

---

このような取り組みの背景にある考え方としては、子どもは一人ひとり異なる存在であり、その個別性に応じたかかわりとその育ちを大切にしようとする事は、保護者についても同時に言えることであり、大切にすべきとの考え方である。そして、それを可能にしている背景には、丸岡町が三世帯同居家庭が多いという事情からもきているが、その実践を通して、保護者の理解、さらには、地域への理解へと広がることが期待されるのである。

以上の3氏の発言の後、この教育が特徴ある保育を行っていることと、その受け入れられ方が十分でないことなどが会場とのやりとりで取り上げられた。例えば縦割り保育が行政から認められにくいこともかかわって、母園実習を原則としている保育者養成校からの実習生の受け入れに際して、指導案の作成の指導と、それに基づく責任実習の実施の要請に応えられないことにどう対処すべきかをめぐっての議論などもあった。

最後に、司会者として、このシンポジウムの印象とその成果と思われることを要約する。

まず1点目は、今回のシンポジスト3氏は、いずれもモンテッソーリ教育の実践者であり、実践の中で悩み、学び、確認したこと、確認しつつあることを、その体験に基づいて肉声で語ってくれたことである。

2点目は、自分自身が本当に変わることの難しさ、この教育への移行の難しさ、保育者同士が共通理解をもって育ち続けることの難しさ、保護者や地域、さらには行政にこの教育の意義を理解してもらうことの難しさなどが、再認識されたことである。

3点目は、つぼみ保育園の実践が、モンテッソーリ教育の取り組みを通しての学びの輪を広げ、深める上で、一つの方向性を示唆するものではないかと思われることである。なぜなら、以上挙げた諸課題は、個別的に存在しているのではなく、例えば、保育者が自分の新しい信念に基づいた保育を安心して実践できるためには、保護者や地域の理解と評価が無関係ではないからである。

## 子どもの発達と援助 —子育て支援をめぐる—

前之園 幸一郎

(青山学院女子短期大学名誉教授)

### はじめに

少子化が進行する今日のわが国の社会的現状のもとで、「子育て」は社会全体でその支援が行われるべきだとの社会的認識が一般化している。そして、すでに地方公共団体や厚生労働省による多様な公的保育サービスが実際に実施されつつある。この趨勢は今後ますます進展する方向にあり、今日、この社会的な子育て支援の動きを否定するものは誰もいない。しかし、すでに100年以上も前にマリア・モンテッソーリは、子育て支援が「何のため」に、また「誰のため」に行われるべきかをめぐって重要な問題提起を行っている。彼女は、自然によってそれぞれに独自の知的内部発達のプログラムが与えられている子どものためには「子育て」ではなく、本来的な「子育て」支援こそが幼児教育の根本的課題だと考えた。

医師としての科学的で具体的な観察を通して、また「子どもの家」での教育実践を通して、子どもが自ら育つ力をもつ存在であるとの事実を発見したモンテッソーリは、その生涯の終わりに至るまで「子どもの真実」について語り続けた。本稿においては、1) モンテッソーリがこの世を去る1年前にローマで行った講演「子どもは奇跡である」について、2) 1949年にイタリア・サンレモ市での国際モンテッソーリ大会における講演「子どもの創造的能力」について、3) モンテッソーリ教育を根底で支えている「実習」の意義について、考察を行う。

### 1. サン・ロレンツォ街「子どもの家」の子どもたち

モンテッソーリは、1951年4月4日にすでに2日前からローマで開催されていたモンテッソーリ教員養成コースにおいて「子どもの奇跡」と題する講演を行った。彼女は、当時、困難だとされていた両眼の手術を無事に終えたばかりであった。すぐれない体調をおして演壇に立ったモンテッソーリは、ほぼ40年前の「子どもの家」(1907)の子どもたちとの出会い

---

とそこでの驚くべき経験について万感の思いをこめて語った。それは、彼女の最晩年の後世へのメッセージとなった。その一年後、つまり今から57年前の1952年5月6日に脳溢血により彼女はその生涯を終えたからである。さて、それでは生涯の終わりに近づいたモンテッソーリが後世に伝えたかったメッセージの内容とはいかなるものだったのだろうか。

### 1. 1. モンテッソーリによる「新しい子ども像」の発見

モンテッソーリは、私の仕事の根底には絶えず私を忘れがたい記憶に立ち戻らせるある出来事がありますと語り始めている。それは、ローマのサン・ロレンツォ街の子どもたちとの遭遇である。彼らは読み書きのできない親たちのもとで悲惨で貧困な生活を余儀なくされている3歳から6歳の子どもたちであった。このいわば放置されていた子どもたちの集団が、短期間に驚くべき変化を遂げた。彼らは、以前とは別人のように素直で忍耐強く、集中して身のまわりの事柄に興味を示すように変わった。日常的しつけなどはほとんど行われていなかった子どもたちが、礼儀正しく、規律を重んずるようになったからである。この人格的な変化と発達は、子どもたち自らが達成したものであった。

当時、この貧困な階層の子どもたちに対して読み書きを教えようなどと考える人は、誰もいなかった。また、実際、彼らに読み書きを教えるような人は誰も見当たらなかった。モンテッソーリ自身も、女医として多忙を極めており、時間的余裕などまったくなかった。しかし、「子どもの家」の子どもたちは驚くべき速さで読み書きを正確に学んでしまったのである。彼らは、知的発達においても奇跡的とも言える大きな変化を示した。そのときの情景をモンテッソーリは次のように述べている。

「この子どもたちは、それが人形やコマでもあるかのように（厚紙を切り抜いて作られた）アルファベットの文字を持って飛び跳ねたり踊ったりしながら、この上ない喜びとともに文字を獲得していった。彼らは、それらの文字を持って、喜びに満ちた楽しそうな行列行進を行った。私たちが彼らに与えた文字の形を覚えるやいなや、そして、それが子どもたちにとって慣れ親しんだものとなるやいなや、彼らはさらにもっと知りたいという強い好奇心に突き動かされて、アルファベットの他の文字を見せてほしいと私たちのところにやって来た。誰もまだ教えていないのに、他に文字が

さらに存在していることを彼らは知っていた」。<sup>(1)</sup>

モンテッソーリは、こんなにも幼い年齢の子どもたちにどこからこの風変わりな情熱が生まれるのかをいぶかった。彼女は「誰がこのような息吹を子どもたちに与えたのか (Chi li aspirava?)」<sup>(2)</sup>と問うている。当時、一般的には子どもが文字を学ぶことには苦痛がともなうとされていた。また、文字学習は子どもにとっては拷問だとさえ考えられていた。しかし、「子どもの家」の子どもたちは、自発的に学びたいと望み、文字を覚え、疲れも見せずにそれを一生懸命に書き始め、連日、書いて、書いて、書き続けた。彼らは、用紙がなくなれば、壁に、窓に、地面にあくことなしに文字を書いた。その様子を見た見学者たちは、どうしてこのようなことが起きたのかモンテッソーリに繰り返し同じ質問を行った。しかしモンテッソーリ自身も、その理由はよく分からなかった。

実際、モンテッソーリは、「子どもの家」においてこのような結果が生まれるような特別なことは何も行ってはいなかった。そこで自問自答している。「これは、人間がやったことではない (non è umano.)。これは普通の出来事ではない (non è un fatto normale.)。…だとすると何なのだ (allora che cosa è?)」。<sup>(3)</sup> モンテッソーリは、それが彼女の教育的働きかけによる成果ではないとの確信だけは持っていた。彼女が理解できた唯一確かなことは、子どもたちが夢中になっている世界がそこに存在していることだけであった。

「子どもの家」の実験とそこでの実践は注目を浴び、世界的に評判となった。そして次第に世界中から見学者が訪れるようになった。古代遺跡や古代建造物の存在だけでなく、「子どもの家」の存在によってもローマは世界の各地の人々を惹きつけていると言われるほどになった。

モンテッソーリは、見学者の一人として訪れたボストン大学の教育学教授との奇妙なやりとりについて本講演の中で紹介している。その教授は「子どもの家」の子どもたちを興味深く観察した。深い感銘を受けた教授は、「このすばらしい教育法について、ぜひ説明をお願いします」とモンテッソーリに言った。この質問に当惑したモンテッソーリは、ただ厚紙でできたアルファベットの文字を与える以外に、特別のことは何もしていないと率直に答えた。そして「このような奇跡を生み出す特別な“方法”など存在し得ないことをご理解いただけると思いますが」<sup>(4)</sup>と付け加えた。

---

当の教授は、モンテッソーリが重要な秘密を告げたくないために、その場限りの言い逃れの弁明を行っていると考えて怒り出した。モンテッソーリは、教授が自分の目で見たとおりの事実によってすでに説明がなされていると述べている。モンテッソーリによると、「幼児の精神には秘められた偉大な潜在諸能力が存在する」。<sup>(5)</sup>そして普段はめったに姿を現すことのない子どもの精神からあふれ出る「表れ」(manifestazioni)が、アルファベットの文字という教材によってほとぼしり出たのである。

モンテッソーリは、私は幸運にも子どものうちに秘められているかすかな明かりに点火することができて、その潜在能力を輝かせることができた。毎日の実践の場において、私は子どもの精神のこの小さな明かりに点火する努力を続けてきた。しかし、人々は、そのことを理解しなかった。今日でも事情は同じだと述べて、おとなの子どもに対する無理解な姿勢を強調している。彼女によると、人間の内部には長年にわたって知られないままの状態にある「偉大なる諸活力」(energie grandi)が存在している。そのことを人々は理解せず、それは顧みられることもなかった。そのために、幼児の中にある豊かで根源的な活力が圧殺されてしまい、頭脳の混乱した道徳的にも脆弱な画一的人間が作りだされている。それは人類にとって大きな損失であり、深刻な人間的富の喪失でもある。

さらに言えば、幼児は自らのうちに自分をより高く発展させ得る力を感じている。それにもかかわらず、われわれは、子どもの内部から湧き出るその力が発揮されるのを援助しようとしなない。しかも、モンテッソーリの目から見ると、われわれは「幼児が、自然の発達のサイクルにしたがって進展すべきであるにもかかわらず、それが実現できないとき、彼の内部において生命の均衡が破壊され、幼児は深刻な心理的不安定と逸脱に陥ってしまう」<sup>(6)</sup>という深刻な事態に対しても無関心なのである。

## 1. 2. ガルヴァーニの「有名な蛙」の真実と「子どもの家」

世間の注目を浴びた「子どもの家」の実践とその反響に対して、モンテッソーリはガルヴァーニ (Luigi Galvani, 1737-1798) のエピソードを取り上げながら、これまで誰も問題にしなかった根本的問題について述べている。ガルヴァーニは、イタリア・ボローニャ大学の解剖学の教授であり、生理学者であった。蛙の脚が金属に触れて痙攣を起こすのを見て、生体の

電気現象についての研究の端緒を開いた人物である。ガルヴァーニは、料理するために蛙の皮をはぎ、それを鉄の手摺りに吊るしておいた。するとその蛙が突然に動き始めた。その蛙の痙攣が、電気を発見する手がかりとなった。この蛙の現象は、自然に対して、また自然の隠された力に対して限りない興味を普段から強く抱くガルヴァーニを狙い撃ちするかのように彼に明示された。しかも彼はそれをはっきりと受け止めた。真実を知りたいとの熱意に燃えるガルヴァーニの真理探究への愛が、死んだ蛙を動かす新しい力・電気の発見を可能ならしめた。それは魔術でも奇跡でもないことを彼は明らかにした。ガルヴァーニは世界には目に見えないエネルギーが現実存在すること、しかもそれは自然のあらゆる環境において際限ない現れ方をすることを明らかにしたのだ。

モンテッソーリも、サン・ロレンツォ街の子どもを前にして、蛙の痙攣現象を目の当たりにしたガルヴァーニと同様の感慨を抱いたと述べている。彼女は、「そこには、未だ知られていないエネルギーが存在するに違いない。それは発見されなければならない。それは活性化されなければならない」<sup>(7)</sup>と考えた。彼女によると「子どもの家」の成果は奇跡でもなければ、モンテッソーリ教育法による功績でもなかった。それは、彼女自身が一番よく知っていた。

モンテッソーリは、どうしてこのようなことが生じたのか、この異常な諸現象はどのように再現され、繰り返され、明瞭に示され得るのか、それは科学と人類の幸福のためにどのように活用されねばならないのか、と自問自答を繰り返した。そして、ガルヴァーニに倣って、「幼児の諸能力は無限であり、それは多様な環境においてそれぞれに個性的に発展させられ得る。彼らの秘められたエネルギーに対しておとなは尊敬の念を持ち、その最善の活用のための援助を行うべきだ」との考えに到達した。その中心には、「子どもの中に潜在している諸能力」<sup>(8)</sup>への注目があつた。モンテッソーリは、人間の根底に無自覚のままに秘められている諸可能性の発現のための援助を視野に入れていた。

### 1. 3. 生命への援助

「子どもの家」のあの驚嘆すべき諸結果が生まれるために私は何を行ったか。ほとんど何もしなかったとモンテッソーリは繰り返している。だが

---

しかし、彼女は、子どもたちが思い切り自由に行動できるような環境の整備を意識的に心がけた。科学的に考え抜かれた教具を事前に準備し、それを自由に使えるように子どもたちに与えた。つまり、モンテッソーリは環境の整備をとおして間接的に子どもたちの精神的な諸能力が目覚めるように仕向けたのであった。彼女の言葉によると、「われわれは、子どもの知的生活の十分な発達のための環境の創造を行うことにより、“生きることを援助”した」<sup>(9)</sup>のであった。これは教育者が心がけなければならない基本的に重要なことだと彼女は考えている。

生命の援助という視点は、モンテッソーリ教育の根本思想である。彼女によると、教育はわれわれの個人的な愛情や願望から考え出されるものではない。また教育学者たちのあれこれの学説を寄せ集めたその総計から導き出されるものでもない。生命の援助を目的とする教育は、「人間的本性の現実に密接に依拠している。そしてその現実は一層の研究を必要としている。だが、それは未だ研究がなされていないのである」。<sup>(10)</sup>しかし、いずれにしても教育は、生命的基礎 (base della vita) に基づいていなければならない。教育が基本的目標として愛情、理解、人間の幸せをめざす以上、教育は「生命への援助」AIUTO ALLA VITA でなければならないのだとモンテッソーリは述べている。

ところで「生命への援助」は、言うまでもなく子どもたちだけの問題ではない。それはすべての人間にかかわりを持っている。なぜなら人間の生命は誕生から死に至るまで発達し続けるからである。<sup>(11)</sup>そして、すべての生物と同様に、人間についてもおとながいきなり誕生するなどということはありえない。すべての人間は赤ん坊として誕生する。その誕生直後の赤ん坊はすでに人間なのだ。この認識が重要である。

しかしながら、学校教育の発展した今日の社会においては、通常、義務教育の就学年齢は6歳と定められている。そのため義務学校就学以前の時期の教育は、従来、ほとんど真剣に考えられることがなかった。しかし、重要なのは、子どもの人間としての教育はすでに誕生時に始まっているという事実である。0歳から就学前のこの時期までの人間の生命は、学校教育の存在とはかかわりなしに、すべての可能性を呼び起こしながら、驚くべき仕方子どもの上に大きな個人的な展開を遂げている。この点に注目するならば、われわれは、人間が誕生してから成人の諸特徴を備えた存在

に到達するまでどのような発達をたどるのか、についての認識を深めることに努めなければならない。これは教育的使命であり人類に対する責任である。人間の成長においては実に興味深い多くの多様な各時期が存在している。しかしながら、われわれはそれを知らないままて来た。そのために幼児期が無為のうちに放置される状態が続いてきた。今や社会的義務として、幼児期の子どもの教育に注意が払われなければならない。少なくとも、「われわれは、〈発達の自由〉を子ども自身にゆだねながら、子どもの生命を援助しなければならない」。<sup>(12)</sup>

「子どもの家」の子どもたちがわれわれに明らかにしてくれたように、子どもは0歳から6歳までの間に身体的にも知的にもめざましい発達を遂げる。その短期間に人間が人間として形成される過程は「言葉では言い尽くせない、驚嘆すべき奇跡」<sup>(13)</sup>であるとしか表現できない。誕生直後の幼児の生命におけるこの驚異に満ちた変容を目の当りにするならば、希望と献身とをもってわれわれは子どもの生命の援助に当たらなければならない。とりわけ「人間の最も重要な時期は誕生直後から2歳までである。なぜなら、この時期において最も発達が急速であるからだ」。<sup>(14)</sup>

幼児は、自然によって定められたプログラムにしたがって (al programma fissato dalla natura) 自発的に行動しながら、<sup>(15)</sup> 自ら発達を遂げる。教師は、この神秘的な事実を驚嘆と畏敬の念をもって受け入れ、子どもの生命の援助に専心しなければならないとモンテッソーリは訴えている。

## 2. 子どもを通しての人類の未来への期待

外国での生活を余儀なくされていたモンテッソーリは、1947年の春に10数年ぶりに祖国の土を踏んだ。イタリア国会の招聘により祖国に帰国を果たしたモンテッソーリは、同年5月3日のイタリア憲法制定議会において戦後世界の平和的再建についての演説を行った。その年の12月に、「労働に基礎を置く民主的共和国」としての『イタリア共和国憲法』が成立する。彼女は、祖国イタリアの憲法誕生に平和の使者として立ち合ったのである。この帰国を機会にモンテッソーリ国際大会が計画された。それは2年後の1949年にイタリアのサンレモ市において第8回モンテッソーリ国際大会として実現する。

---

このサンレモ国際大会は1949年8月22日から29日まで開催された。そこには400人以上のイタリア人参加者に加え、世界各地から20カ国の各国代表が出席した。この大会の基本テーマには「世界再建における人間の形成」(La formazione dell'uomo nella ricostruzione mondiale)が掲げられた。モンテッソーリは、会議期間中に4つの講演を行った。それらは、正義と平和が支配する人類社会実現のための仲介者としての子どもに焦点を当てるものであった。その講演の1つが「子どもの創造的能力」である。

## 2. 1. 「忘れられた市民」としての子ども

サンレモ国際大会の開会あいさつにおいて、モンテッソーリは第二次大戦後の平和的な人類社会の実現のために子ども研究が今後一層重要性を増しつつあることを強調した。40年以上にわたって、人はどう育つのかという問題関心から西洋のみならず、アジアの子どもたちについても観察と研究を重ねてきた結論として、彼女は「子どもは、私流に言うならば、今なお多くの希望が無尽蔵に湧き出る源泉として私の前に存在する」<sup>(16)</sup>と述べた。

モンテッソーリによると、民族、人種、国家、社会的地位などの諸条件の違いを超えて子どもは人類の共通性を示している。すべての子どもは同じ時期に話し始め、また同じ時期に歩き始める。精神的発達においても同様である。子どもは、環境を通して言語、習慣、文化とともに民族的、地域的特性を吸収しつつ人格を築きあげる。子どもは、生まれつきファシストでも、ボルシェビキでも、民主主義者でもない。しかし実際には、そのように形成されてしまうのである。ここに人間発達の援助を行う教育の重要性が浮かび上がってくる。本来、当事者であり、主人公であるべき子どもはいつも視野の外におかれてきた。モンテッソーリによると、現状においても「子どもは忘れられた市民である」。<sup>(17)</sup>

戦後世界においては新たな対立が生み出され、それを乗り越えるための多様な努力が行われてきた。多くの条約が締結され、平和への模索が試みられている。ユネスコが教育・科学・文化を通じて諸国間の協力と平和をめざしていることは周知のことだ。それにもかかわらず、モンテッソーリは、この方向とは異なる新たな視点からの選択肢も考慮されるべきだと提言する。

これまでの戦後世界の努力の主眼は、人類の間に存在する相違点の除去とその格差の克服におかれてきた。しかし、人類の間の相違点ではなく人類の間に共通に存在するものにこそ着目し、その強化を図る努力が必要なのではないか。彼女は、異なる宗教を信じる多様な民族の多様な社会階層に属する子どもに接してきた豊かな自分自身の経験から、次のような確信を述べている。「私の長年の経験は、子どもが誰にも共通する成長の自然の法則によって発達していることを私に確信させる」。<sup>(18)</sup> したがって、人間に関する科学的研究が子どもの中に存在する諸能力の発達の成果に着目することになるなら、これまでとは異なる手段によって、平和ならびに社会的調和は達成されることになるだろう。

## 2. 2. 野生のバラと栽培によるバラ

幼子（おさなご）イエスの誕生を祝すために、東方の博士たちが贈り物と希望とを携えてベツレヘムへやってきた。この『マタイ福音書』の中で博士たちが表明した誕生直後の幼児に対する敬意は、現代でも考察すべき重要なテーマを含んでいる。なぜなら、「生まれてすぐの赤ん坊の中に存在する無意識的な諸能力、計り知れない能力の存在をわれわれが知っている」<sup>(19)</sup> からであるとモンテッソーリは述べている。

幼児は、その内部の神秘的で力強いエネルギーが活動を始める最初の時期から、人格、知性を持つ存在に自分自身を変える努力を行っている。幼児は、いわば、人間という偉大なる傑作を完成させる仕事に専念しているのである。それにもかかわらず、学校教育においてはこの「子どもの内部に秘められた潜在的諸能力の神秘」<sup>(20)</sup> に対して特別な注意が向けられることも、考察が行われることもなかった。その点についてモンテッソーリは次のように述べる。

「子どもは創造者であり、無から人間を創り出す。この強力な創造的能力は人類のすべての子どもに共通であり、世界のすべての国土において共通である。子どもの創造的精神は、完璧な法則性によって導かれる計り知れないエネルギーをもっている。子どもの精神のかたちは、おとなとはまったく異なっている。すなわち、子どもの精神は、環境から自分自身の内部に諸観念、外部的諸印象を取り入れ、それを受肉化する偉大にして、ほとんど奇跡的な能力をもっている。子どもは、〈覚える〉のではなく、自分の

---

周囲に見いだすものすべてを吸収し、生涯にわたってそれを保持するのである。幼児が、誕生直後は発声もままならないにもかかわらず環境から言葉を吸収するのが、その明白な一事例である」。(21)

さて、教育が子どものもつ潜在的能力の発達を援助することであると考えるなら、「教える」こと (educazione) よりも「育てる」(coltivazione) という言葉がより適切であるとモンテッソーリは考える。そして彼女は、子どもに与えられている可能性としての自然本性が科学的な配慮の下におかれることにより予想を超える驚異的な結果に結実することを、バラの花の例で示している。それによると、原野に野生のままに放置された自然のバラと人の手で丁寧な配慮によって栽培されたバラの間には大きな違いが観察される。本来、バラはそれ自身の中に成長のための隠された力を持っている。しかし、そのバラの力は人の手で栽培されることによって一層力強く伸ばされる。栽培により、花びらも色彩鮮やかで光沢のある、形も野生のものより一回り大きい、そして香りも強烈な美しいバラが開花する。合理的で適切な環境と栽培による援助が、秘められたエネルギーを目覚めさせるからである。人間も同様である。より豊かで香ばしい人間性の開花のためには、バラに対すると同様の適切な生命の援助が必要となる。科学的方法による生命の援助がそれを可能にするとモンテッソーリは考えている。

## 2. 3. よりよく変わりうる存在としての人間

モンテッソーリは、自分の歩んできた道を振り返って次のように述懐している。「人間はよりよく変化しうる存在であるとの確信が私になかったら、これまで多くの人々によって私に加えられた度重なる攻撃を乗り越えて、50年もの間、私は闘い続けることはとてもできなかったと思います。私はすでにこの年齢になり、驚嘆すべき人間のこの真実について述べ伝えながら世界中を飛び回る余力は、もう残されておられません」。(22)

そしてモンテッソーリは、子どもの内部に隠されている発達の法則性の存在について繰り返し述べている。「特別な注目が必要なのは、従うべき(発達の)法則性をもっていることについての子どもの精神的喜びである。それはまったく自然に生まれる喜びである。なぜなら、その法則性が存在しないならば、子どもは、この世において、また生命として、自らの位置を確かめることができないからである。事実、人間の子どもは他の動物た

ちのように特別の指令によって導かれているわけではない。動物の場合は、それぞれに異なる種に特有の生命の規則が本能によって課されている。したがって、教育は子どもに固有の（発達の）法則性にとまなう自然の要求を心に留めておくべきである。多くの直接的試みと具体的な経験が、私に、発達の法則性に結びついた潜在的な要求を子どもの内部に発展させ、子どもが喜んで自分自身でその法則に従うように育てることが必要であることを納得させてくれたのだ」。(23)

モンテッソーリは、子どもは生得的な発達のプログラムにしたがって自発的に行動し自ら発達する存在であることを主張しながら、観察によって子どもの発達の道筋を見通していた。そして子どもが「忘れられた市民」として置き去りにされないために子どもの「誕生からの教育の必要」(bisogna educare fin dalla nascita) が強調されている。

### 3. 観察を通しての「子どもの発見」とモンテッソーリ教育法

モンテッソーリ教育法は子どもの観察から生まれた。観察によって「目に見えない子ども」の秘密が明らかにされ、それらの事実に基づいて理論が生まれた。その理論は日々の実践によって検証され、その結果がさらに理論に組み入れられた。モンテッソーリ教育は、この観察と理論の上昇と下降の循環運動を経て発展し体系化された。したがって、観察はモンテッソーリ教育に不可欠な基本的要素である。モンテッソーリは、研ぎ澄まされた観察力による自由な観察の必要を強調している。その方法は『昆虫記』で有名なファーブルに倣うべきだとして、次のように述べている。「子どもの精神生活は、ファーブルが昆虫を観察したのと同じ方法で観察されなければならない。観察対象のじゃまをしないように身を隠して、観察対象がふつうに生活している環境で、そのまま活動させるようにして研究を行うべきだ」。(24)

「子どもには、事物が発する沈黙の声が聞こえているように見える」(25) として、モンテッソーリは、子どもにだけ聞こえておとなには聞こえない身のまわりの事物が発する様々な声についても語っている。さらに、おとなには見えない小さなものを子どもが見ていることも指摘している。「あそこに小さなものが動いている」と小さな女の子が指差すので、モンテッソーリが目を凝らすと、顕微鏡で見なければ見えないくらいに小さな虫が、大

---

変なスピードで動いていた。しかも、「女の子に感銘を与えたのは、非常に小さい生物がいて、それが動き、走ることだったのだ!」。(26) 子どもは不思議に満ちた存在である。そこで、「われわれは、幼な子の精神生活が、誕生直後からどのように発展していくのか、そして存在しはじめた最初の日から、十分顕著な成長を遂げているかどうかを示す、どんな些細なしるしも、決して見落とさないように観察することに努めなければならない」。(27)

### 3. 1. 観察と教師

モンテッソーリは、観察に臨む教師の態度について第一に沈黙と黒衣的役割を挙げている。「教師は、子どもの精神が自由に羽を広げる空間を持つことができるように、あたかも教師自身の人格を消し去るように身を引きながら、忍耐強い期待をもって沈黙を守り、受動的な態度を保持しなければならない」。(28) そして、すでに『方法』においても、「教師は、子どもそのものから自分自身の教育のための手段と方法を学ぶであろう。すなわち、子どもから教師としての自らの完成を学ぶであろう」(29) と子ども観察の教師にとっての意味が明確に述べられている。

これらの言葉は「子どもはおとなの先生」(bambino maestro dell'adulto) であると考えるモンテッソーリの根本思想から発せられたものと思われる。彼女の子どもへの注目は、当然ながら、子どもとおとなの関係においてあらかじめ留意されるべき観点を示唆しているように見える。この点に関して、イタリア・ウルビーノ大学のロレンツェッティ教授は、「観察が〈子どもの秘密〉を明らかにする」と題する論文の中で、次の3点を提示している。それによると、1) 教育における相互関係性、すなわち、子どもと教師がお互いに人格の影響を与えあう関係が生まれること、2) 行動・理解・相互関係において、教師が「子どもになりきる」(farsi bambini) こと、そして「おとなにもどる」(tornare adulti) こと。すなわち、子ども性を保持しながら、子どもの現実を子どもの目で理解するおとなになること、3) 子どもとの相互性を通じての教師自身による反省点の確認とその改善の努力、である (30)。

観察は、それぞれに異なる子どもとの出会いであり、繰り返しのきかない一回性を意味する。個々の子どもとの間にかけがえのない関係が生まれ、それは二つとありえない特有の相貌を呈するものとなる。したがって万人

向きの画一的な観察方法などはありません。このようにデリケートな観察にのぞむ教師にたいして、モンテッソーリは次のように助言している。「まず、第一に皆さんは観察することを学ばなければなりません。皆さんは、これはすることができます、あれは学ぶことができない、などと口にします。しかし、考えてみてください。ものを見るということは、足を止めることを意味します。観察するとは、興味深く思われないことにも目を注ぎ、ちょっと見て分かったと思うことでもすぐその場を離れてしまうようなことをしないことを意味するのです」。<sup>(31)</sup> モンテッソーリが強調しているのは、ほとんど重要には見えない諸現象にも深く耳を傾けることの重要性である。それは先入観で曇らされた目や習慣的な観察によっては、子どもの背後に存在する秘密や真実は明らかにはならないことをも意味している。彼女の「観察への姿勢は知性によってではなく、根気強さによって鍛えられる」<sup>(32)</sup> とする言葉は、凝視と愛情をとまなう根気強さが観察の根底を支えるものであることを述べたものである。

観察は教師に変化をもたらす。いや、「教師は観察を通して自らの深い自己変革を遂げ、教育について確かで根本的な考えを明確にすべきである」<sup>(33)</sup> 継続的で真剣な観察は、深みのある人間性、単純さ、慎ましさ、他者への尊敬の念、豊かな内面性、とらわれない態度、注意深い分析力、鋭い直観性・感受性・創造性などをそなえた教師を育て上げる。そして、このような教師のみが本来の子どもに出会えるだろう。その教師の変化についてモンテッソーリは次のように明確に述べている。

「観察とそれに基づく分析による根気強い実践を続けることによって、教師は、心理学の教科書に記述されている漠然とした子どもでもなければ、外部からコントロールされてもいない、本物の子どもに出会うことができる。学習指導要領によって、教育的・社会的な風潮によって、さらには教育現場の日常的仕事によって、教師中心の教育が生まれ、行動や考え方におけるステレオタイプの繰り返しが中心となり、批判的判断もなしに効率的な教育が可能であるとする幻想が生まれてしまう。しかし、人間性の行使を役割とする教師は、沈黙して控えめに最も高い精神的階段を目指してのぼり、そしてその頂点において観察と実践研究は、ついに愛に変わる。それは、子どもの〈探求的知性〉の援助に向けられた〈知性的愛(カリタス)〉なのである」。<sup>(34)</sup>

---

観察が究極的に目指すものは、子どもの内部に無自覚のまま潜んでいる多様な力が子どもから溢れ出るのを観察し、理解し、援助するところにある。そこで、モンテッソーリは「教師は、子どもの内部から溢れ出るあらゆる表れを観察し、理解し、援助するために、あらゆる個人的、社会的動揺・不安から自らを解き放たなければならない」<sup>(35)</sup>と助言を述べている。

### 3. 2. イタリア外務省「保育園」における観察の重視

イタリア外務省最上階には、イタリア・モンテッソーリ協会が運営する「イタリア外務省モンテッソーリ保育園」(Il nido Montessori presso il Ministero degli Affari Esteri gestito dall'ONM) が開設されている。この保育園は、外務省の申し出によりイタリア・モンテッソーリ協会によって1978年に外務省職員の子どもたちを受け入れるために設置されたものである。その人事ならびに運営についての責任は、全面的にイタリア・モンテッソーリ協会にゆだねられている。これは、0歳から3歳までの30人前後の幼児を受け入れている小規模の保育園である。

この保育園の特色は、日々のていねいな観察に基づく子どもの援助にある。その保育の実践は、モンテッソーリの『幼児と家庭』における彼女の考え方に基づいて展開されている。それによると、「幼児の様々な行動は、行為する一個の人格の表現である。われわれは、生命が自分で自らを組織化していくのを待つことしか他に方法がない。しかし、われわれおとなは、幼児が表現する力、特に個人の意思を的確に表現できる唯一の手段である言葉を話すことができない状態にありながら、発達を続けている間は、その幼児を理解できる力をわれわれの内部に養い育てなければならない。そのようなすぐれた理解力は、少しずつ獲得される。しかし、まず何か観察されるべき対象が存在するという信念、あるいは確信をあらかじめ持つ必要があることは明白である。…われわれは、幼児の精神生活が誕生直後からどのように発展していくのか、そして存在し始めた最初から、十分顕著な成長を遂げているかどうかを示す、どんな些細なるしでも、決して見落とさないように努めなければならない」<sup>(36)</sup> 要するに、子どもをよく見ることが実践の基本とされている。

さらに、この保育園では、観察の重視と同時に環境の整備に細やかな配慮と努力が払われている。それは発達をひき起こす「環境での経験」が重

視されているからである。この観点はモンテッソーリの『子どもの精神』に基づいている。「自然においては、創造とは単に何かをつくることだけを意味しているのではなく、つくった何かができることができるようにすることも意味している。ある器官が出来上がるやいなや、それはただちに環境において働かなければならない。それは現代の言葉では〈環境での経験〉と呼ばれている。この経験が起これないと、器官は正常に発達しない。器官は最初のうちは不完全であって、完全になるためには使われなければならないからである。したがって子どもは、環境での経験という手段によってのみ発達することができる。この経験をするをわれわれは〈仕事〉と呼んでいる」。<sup>(37)</sup>

モンテッソーリの教えにしたがって、この「保育園」はビル最上階の本来事務室として設計された空間において、受け入れた乳幼児のための環境整備の様々な努力を行っている。その「環境」についても「わたしたちが〈環境〉というときは、すべてのものを含む。子どもが自分で選んで自由に好きなだけ使うことのできる、つまり、子どもの性向や活動への欲求を満たすすべてのものである」<sup>(38)</sup>との『子どもの発見』における基本原理に立ち、例えば、紅茶の空き缶なども乳児の教材に採用されている。その日常的実践の記録は『あるモンテッソーリ保育園をめぐる旅』（“Viaggi intorno ad un Nido Montessori”）として出版されている。

### 3. 3. モンテッソーリの発達観と今日の発達心理学

さて、幼児の新しい能力の獲得による自立的な発達について、モンテッソーリは次のように述べている。「子どもは、言葉が現れるやいなや、おしゃべりを始める。そうなったら、子どもに沈黙を強いることは誰にもできない。最も難しいことの一つは、子どもを黙らせることである。ところが、もし子どもがしゃべらなかつたり、歩かなかつたりしたら、子どもは正常に発達することができないだろう。子どもの発達は止まってしまうだろう。そうならないように、子どもは歩き、走り、ジャンプする。そうすることによって、足を発達させるのである。自然は、まず、最初に道具 (gli strumenti) をつくる。その次に、その道具を機能させること、つまり環境での経験によって、その道具を発達させる。したがって子どもは、新しい能力を獲得することによって、自分の自立性を大きくしていく。そして、

---

子どもは自由に行動することを許されたときにだけ、正常に発達することができる。子どもは自分が獲得した自立を実際に行使することによって発達していく。…もしわれわれが、教育とは幼い生命の発達に対する援助であると考えるなら、われわれにできることは、子どもが一定の自立の段階に達したしるしを見せたときに、それを祝福して大喜びすることだけである。そのような出来事を起こさせるために、われわれは何もすることができなかったということを承知しているからなおさらのこと、子どもが最初の言葉を発したとき、喜びを表さざるを得ないのである」。(39)

ここに見られる立場は、おとなが子どもに代わって子どもの発達を推し進めたりコントロールしたりすることはできない。おとなにできる唯一のことは、子どもの内部発達を見守ることだけだとのモンテッソーリ教育の根本思想である。

ところで、今日、発達心理学の研究者として著名な柏木恵子氏の発達観を見てみよう。柏木氏は、児童心理学者シャーロット・ビューラーが60年ほど前に「子どもが自分にできるようになった力を用いることに喜びを見出し、その力によって様々なことを発見し、育つこと」を「機能の喜び」と名づけたことを紹介しながら、今日、この「機能の喜び」が奪われつつある事態を憂慮している。柏木氏は、「子どもは自ら学び、自ら育つ力をもつだけではありません。その力を発揮できたとき、子どもは最高の満足と自己有能感をもちます。そして、さらに新しい活動を展開していきます。すなわち、子どもは能動的な学習者なのです。他のことには眼もくれず何も耳に入らない。文字どおり我を忘れて何かに夢中になっている子どもの姿を、誰もが見たことがあるでしょう。けれども多くの場合、そのように熱中している子どもを、親やおとなはそっとしておきません」「子どもが自発的に熱中する活動は、子どもが育つことそのものなのです。それはおとなの計画や教育以上のものです」と述べながら、子どもの「機能の喜び」が奪われる今日の育児の現状を批判している。

さらに、柏木氏は、子どもがもつ「生まれながらに備わっている知的好奇心」を尊重することが〈人間発達〉の原則であるとの基本的立場に立ちながら、子どもに備わっている敏感な感覚を使ってやりとりする応答的な人と環境の整備の必要を強調している。そのためには、「子どもをよく見る」観察が重要であることも指摘されている。(40)

ここに見られる柏木恵子氏の子ども観は、現在の発達心理学的知見に基づいている。これを上述のモンテッソーリの発達観と比較するならば、モンテッソーリ教育の中心的概念である集中現象、吸収する精神、敏感期、子どもをよく見る観察などの原理がそのまま今日においても積極的な心理学的妥当性をもつことを示している。モンテッソーリの『幼児の秘密』における「こうしておとなは、子どもの精神の最も本質的な欲求を援助する代わりに、子どもが一人でやりたいとのぞんでいるすべての行為を子どもに代わって自分でやってしまう。その結果としておとなは、子どもの活動の道を閉ざし、子どもの生命の発達に対する強力な障害物になってしまう」<sup>(41)</sup>との指摘は、柏木恵子氏の奪われる「機能の喜び」への批判と共通するものであり、「先回り育児」への重要な警告であると考えることができる。モンテッソーリ教育は、今日の混沌たる時代においてこそ未来に希望をつなぐ教育なのである。

- (1) a cura di Augustino Scocchera, *Maria Montessori Il metodo del bambino e la formazione dell'uomo Scritti e Documenti inediti e rari*, Opera Nazionale Montessori, 2002, p.23.
- (2) *Ibid.*, p.23.
- (3) *Ibid.*, p. 23.
- (4) *Ibid.*, p.24. “Non comprende che non può essere un “metodo” a operare tali miracoli?”
- (5) *Ibid.*, p.25. “Ci sono grandi “potenzialità nascoste nella psiche” del bambino.”
- (6) *Ibid.*, p. 25. “Quando un essere non progredisce, mentre dovrebbe progredire secondo un ciclo di sviluppo naturale, si rompe in lui equilibrio vitale, si determinano gravi turbamenti e deviazioni psichiche.”
- (7) *Ibid.*, p.25. “Qui ci deve essere una energia sconosciuta, che bisogna scoprire, che bisogna far vivere.”
- (8) *Ibid.*, p.27. “le forze latenti nei bambini.”
- (9) *Ibid.*, p.27. “Abbiamo <aiutato a vivere>, creando l'ambiente

- 
- favorevole al pieno sviluppo della vita intellettuale del bambino.”
- (10) *Ibid.*, p.27. “l’educazione dipende strettamente dalla realtà della natura umana, quella realtà che bisogna studiare e che non è stata ancora studiata.”
- (11) *Ibid.*, p.28. “perché la vita dell’uomo si svolge dalla nascita fino alla morte.”
- (12) *Ibid.*, pp. 28-29. “Dobbiamo aiutare la vita, lasciandola <libera di svolgersi>.”
- (13) *Ibid.*, p. 29. “Miracolo incommensurabile, meraviglioso.”
- (14) *Ibid.*, p.29. “L’età più importante nell’uomo è dalla nascita a due anni, perché in tale periodo lo sviluppo è molto rapido.”
- (15) Maria Montessori, *Il segreto dell’infanzia*, Garzanti, 1992, p. 273.
- (16) *op. cit.*, a cura di Augusto Scocchera, p. 129. “l’infanzia mi appare ancora come una sorgente inesauribile di rivelazioni e ,lasciatemelo dire, di speranze.”
- (17) *Ibid.*, p.129. “Ma il bambino è cittadino dimenticato.”
- (18) *Ibid.*, p.130. “la mia lunga esperienza sui bambini di varie razze, di religioni differenti, di diversi stati sociali, mi ha convinto che il bambino obbedisce nel suo sviluppo a leggi naturali di crescita per tutti simili.”
- (19) *Ibid.*, p.134. “Noi conosciamo l’immenso potere, le forze inconscie esistenti nel bambino che si affaccia alla vita.”
- (20) *Ibid.*, p. 135. “il mistero delle potenzialità latenti nel bambino.”
- (21) *Ibid.*, p. 135. “Il bambino è un creatore. Dal niente crea l’uomo. Questa potente capacità creativa è comune a tutti i figli dell’uomo, in tutte le parti della terra. La mente creativa del fanciullo possiede immense energie, che sono guidate da leggi divine. Il bambino ha una forma mentale del tutto diversa dalla nostra: la sua mente possiede la magnifica e quasi miracolosa facoltà di prendere dall’ambiente e di incarnare, in sé, le idee, le impressioni esterne. Il bambino non <impara>, ma assorbe e fissa per tutta la vita quanto trova intorno a sé. Un esempio evidente è il linguaggio

che il piccolo essere umano, pur essendo muto all'inizio della vita, assorbe dall'ambiente.”

- (22) *Ibid.*, p.136. “Vi assicuro che se non avessi avuto la certezza che l'uomo può essere migliorato, non avrei avuto la forza di lottare per cinquanta anni, più volte ricominciando l'opera che da altri mi era stata distrutta. Non avrei la forza, alla mia età, di continuare a girare per il mondo, predicando questa verità.”
- (23) *Ibid.*, p. 137. “Degna di speciale nota è la sua ansia di avere delle leggi alle quali ubbidire. Ansia perfettamente naturale perché senza queste leggi, egli non potrebbe orientarsi nel mondo, nella vita. Il bambino, infatti, non è guidato da comandi speciali, come avviene agli animali, cui è imposta dall'istinto la norma di vita propria alle differenti specie.  
L'educazione deve, perciò, tener conto del bisogno naturale di leggi, proprio del bambino. Prove dirette ed esperienze pratiche mi hanno persuasa che è necessario sviluppare nel bambino il suo latente bisogno di essere legato ad una legge e coltivare in lui la gioia di obbedire.”
- (24) op. cit., *Il segreto dell'infanzia*, p. 65. “La vita psichica del bambino va osservata al modo stesso con cui Fabre osservò gli insetti, studiandoli nel loro ambiente di vita normale, per ritrarli al vivo e rimanendo nascosto, per non turbarli.”
- (25) Maria Montessori, *Il bambino in famiglia*, Garzanti, 1991, p.58. “sembrerà al bambino di udire le voci degli oggetti che, nel loro muto linguaggio, parlano.”
- (26) op. cit., *Il segreto dell'infanzia*, p.87. “Ciò che aveva colpito la bambina era che un essere tanto piccolo esisteva, si muoveva, correva!”
- (27) op. cit., *Il bambino in famiglia*, p. 43. “Noi dovremmo cercare d'osservare quelle lievi manifestazioni, che dimostrano come la vita psichica del bambino si sviluppi subito dopo fin dalla nascita, e abbia già acquistato uno svolgimento assai notevole sin dai primi

- 
- mesi d'esistenza.”
- (28) Maria Montessori, *La mente del bambino*, Garzanti, 1992, p. 261. “La maestra deve rimanere silenziosa e passiva in un’aspettativa paziente, quasi ritraendosi per annullare la propria personalità così che lo spirito del bambino possa avere campo di espandersi liberamente.”
- (29) Maria Montessori, *Il Metodo della Pedagogia Scientifica applicato all’educazione infantile nelle Case dei Bambini*, edizine critica, ONM, 2000, p.87. “Egli(insegnante) infatti imparerà dal bambino stesso i mezzi e la via per propria educazione; cioè imparerà dal fanciullo a perfezionarsi come educatore.”
- (30) Loredano Matteo Lorenzetti, *L’osservazione rivela il “segreto del bambino”*, VITA dell’INFANZIA, gennaio/febbraio 2009.
- (31) *op. cit.*, a cura di Augusto Scocchera., p.226. “Prima di tutto dovete imparare ad osservare. Direte che questo lo sapete fare o che non si può imparare. Ma pensate: guardare vuol dire fermarsi, osservare vuol dire permanere anche su ciò che non sembra interessante e non staccarsi appena si crede che guardando ci si sia fatta un’idea.”
- (32) *Ibid.*, p. 226. “l’attitudine all’osservazione non è fatta di intelligenza, ma di pazienza.”
- (33) *Ibid.*, p.230. “la maestra deve fare di se stessa una riforma profonda e deve chiarire certe idee fondamentali.”
- (34) *Ibid.*, p. 239. “La maestra, permanendo nell’esercizio paziente della osservazione e della analisi, può incontrare il bambino, non quello vago della psicologia descrittiva, né quello, per così dire, burocrattizzato dall’esterno: dai programmi, dalle mode pedagogiche e sociale, da un ménage educativo e scolastico nel quale la fanno da padrone o la ripetizione stereotipata di atti e intenzioni o la illusione di poter educare e formare in fretta e senza distinzioni critiche. La maestra, operaia di umanità, ascende silenziosamente e in umiltà verso gradini spirituali più elevate: sino al loro culmine quando l’osservazione e la ricerca diventano amore, che è “carità

- intellettusle” rivolta ad aiutare “l’intelligenza cercante” del bambino.”
- (35) *Ibid.*, p. 237. “L’educatore si libera ogni rumore, personale e sociale, per osservare e capire le manifestazioni del bambino e portarvi aiuto.”
- (36) op.cit., *Il bambino in famiglia*, pp. 42-43.
- (37) op.cit., *La mente del bambino*, pp.90-91.
- (38) op.cit., *La scoperta del bambino*, p. 69.
- (39) op.cit., *La mente del bambino*, p.91.
- (40) 柏木恵子『子どもが育つ条件』岩波新書、岩波書店、2008年、第4章参照。
- (41) op.cit., *Il segreto dell’infanzia*, p.119.

---

# モンテッソーリの器楽教育

## — 「ドルメツチュ (Dolmetsch)」 とは —

藤 愛

(小百合幼稚園)

### はじめに

モンテッソーリ自身が書いた音楽に関する記述が日本語では少ないため、彼女は音楽について重要視していなかったのかと一般的に思われている。しかし、よく見るとモンテッソーリは次のようなことを述べている。

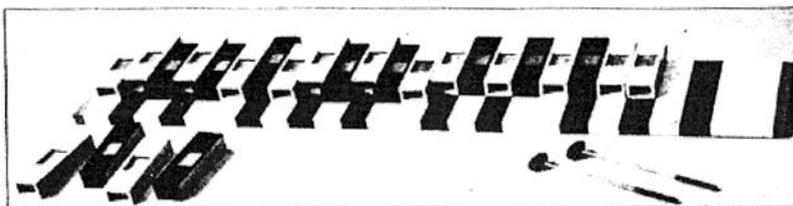
「音楽教育の論述が短いのは教育における音楽を低く評価するのに起因するのではなく、小さい子どもたちには単に音楽への入門しか与えられないため、その発達はいくぶん後に効果を挙げます」。<sup>(1)</sup>

彼女はここで音楽を重要視していないわけではないとはっきり言っている。また *The Advanced Montessori Method (The Montessori Elementary Material)* [和訳：『続モンテッソーリ・メソッド (モンテッソーリの基本的な教材)』] を見ると、<sup>(2)</sup> 彼女の音楽に対する考えを知ることができる。ここではおよそ 60 ページにもわたり音楽についての記述がなされ、「The Scale (音階)」「The Reading and Writing of Music (楽譜の読み方・書き方)」「The Major Scales (長音階)」「Exercises in Rhythm (リズムの練習)」「Musical Auditions (鑑賞)」の項目で述べられている。この本については、田幸典子・杉山節子両氏が 28 年前に刊行された『モンテッソーリ教育』第 15 号の中で紹介しているが、<sup>(3)</sup> 残念ながら譜例や詳細などは書かれていない。<sup>(4)</sup>

また *The Advanced Montessori Method (The Montessori Elementary Material)* では「器楽」についての項目はないのだが、彼女はこの本の中で全般にわたって器楽についても取り上げ、興味深いことにどのような楽器を使ったらいいかも具体的に示している。以下、このことについて述べていきたい。

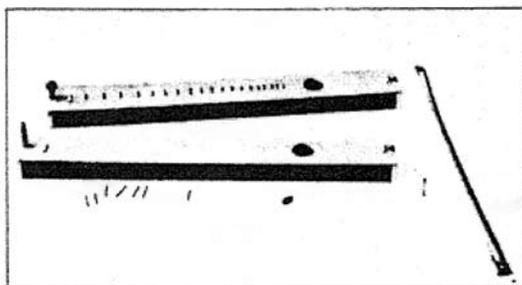
### 子どもにとって適切な楽器

モンテッソーリは、このように提案している。教師には「ピアノ」を挙げ、どのように奏したらいいかも書いている。それに対して子どものためには「シロフォンのような楽器 (music bars)」[334 頁・写真付き]、「一弦琴 (monocord)」[335 頁・写真付き] のような楽器を使ったらいいとされている。その他の文献においても「《個人の心の奥底からの生命》をあらわす楽器」として「私は絃をはった楽器 (おそらく、ある非常に単純化されたハープ) が最も重宝だと思う」と書かれているが、<sup>(5)</sup> おそらく、その「絃をはった楽器」とは、*The Advanced Montessori Method (The Montessori Elementary Material)* でも挙げられている一弦琴 (monocord) であろう。



The upper cut shows the music bars arranged for the scale of C major. The lower cut shows the transposition of the scale, preserving, however, the same intervals.

「シロフォンのような楽器 (music bars)」



The monocord. In the first instrument the notes are indicated by frets. On the monocord in the foreground the child places the frets as he discovers the notes by drawing the bow across the string.

「一弦琴 (monocord)」

---

では、他の楽器も何か提案されていないだろうか。彼女の著書『子どもの発見』を見ると、このように書かれている。

「それには音楽をよく演奏できるだれかが手元におるか、子どもに適する簡単な楽器を持っていることなどが必要でしょう。そんな楽器は今日ドルメツチュ〔Dolmetsch〕が彼の驚くべき子どものオーケストラを成り立たせるために作ったようなものです」。<sup>(6)</sup>

以下、その英文を記す。

“To have available a good musical performer, or to possess simple instruments adapted to children like those which Dolmetsch makes today for the equipment of his marvellous children’s orchestras...”<sup>(7)</sup>

幼児期が人間のその後の人生に多大なる影響を及ぼすことは、今日では周知の事実である。実際、子どもの身近にきれいな声や歌声、美しいピアノなどを聴かせてくれる存在がいたら、子どもにとっては大きな喜びとなるであろう。美しいもの、良いものを見て、聴き、蓄え、そして子どもも自分でやってみたいという気持ちがふつふつと沸いてくる。さてここでドルメツチュとの名が挙がるが、さらに『子どもの発見』を読み進めていくと、次の文章が目にとまる。

「これらの成果にはイギリスのドルメツチュが到達しました。この人は今日なかならずピアノがたいへん普及したためにもはや用いられなくなった過去の時代から救い出した楽器を再び使用しようとし、また子どもらのために簡単な楽器を作らせようという考えを持っていました。音楽の神々しい力と、同時に子どもの魂に対するドルメツチュの信仰が彼を、わたしの教育法の原理と一致する教育法に導きました。(適切な「教材」、短い手引き、子どもを教材と関係をつけるという目的を唯一のものとする。次に子どもにその楽器を奏することをさせる自由などです)」。<sup>(8)</sup>

この英文は次のようになっている。

“These results have been attained in England by Dolmetch who, wishing to bring back into use the exquisite musical instruments of the past, now fallen into disuse owing to the predominance of the pianoforte, has had the brilliant idea of constructing simple instruments for children. The faith which Dolmetch has in the divine power of music, and also in the mind of the child, has led him to formulate a method which corresponds in principle with mine. (Properly adapted material; short introductions having the sole purpose of putting the child in touch with the material; and then the child left at liberty to play on his instrument.)”<sup>(9)</sup>

ここにおいて、モンテッソーリ自らが音楽について述べる大変興味深い記述を目にすることができるが、しかしここでいくつかの疑問も湧いてくる。

上述に「ドルメッチュ」という名前が挙がったが、このドルメッチとは一体、何者なのだろうか。また「子どもに適する簡単な楽器」「そんな楽器」「子どもらのために簡単な楽器」とあるが、それは何を指しているのだろうか。モンテッソーリはなぜドルメッチとの名を書き、彼のことを記したのだろうか。以下、ドルメッチについて述べていきたい。

### 古楽器製作者ドルメッチ

ドルメッチ (1858～1940) は、ヴィオラ・ダ・ガンバ、チェンバロ、リュート、リコーダーといった古楽器に特別な関心を持ち、古楽器の収集と修復に努めた人物である。彼はフランス系の音楽家・職人の家系に生まれたイギリスの古楽器製作者であるとともに演奏家・学者で、早くからピアノの製作を父に、またオルガンの建造を母方の祖父から手ほどきを受けたという。後に工房を開き、古楽器を修復していくのだが、その礎はおそらくここにあるのであろう。また古楽器による演奏会を自宅で開催して彼の子どもたちともよく一緒に演奏をし、博物館に眠っていた楽曲を現代人に分かりやすくよみがえらせて、そのような作品を紹介したことも注目に値しよう。ドルメッチは、特にバロック時代の設計による現代のリコーダーを完成させて名声を得た。

後に工房を継いだ息子のカールはリコーダー奏者に、娘のナタリーはヴ

---

イオラ・ダ・ガンバの奏者に、また孫のジャンヌとマルグリットはリコーダーとヴァイオリンの演奏家として活躍している。

どうやらドルメッチとは、古楽をオリジナルの楽器により、当時の様式で演奏することを復活させた先駆者ともいえる。



「ドルメッチファミリー 1930年代」

### 考察 —「子どもに適する簡単な楽器」をめぐって—

以上からドルメッチが何者だったのかということは分かったのだが、しかし『子どもの発見』の中でモンテッソーリが述べた「子どもに適する簡単な楽器」「そんな楽器」「子どもらのために簡単な楽器」の謎が、まだ解決されていない。それはドルメッチに関係した楽器であることには違いないのだが、その楽器は何だったのだろうか。推測してみたい。

彼の生涯や残された写真を振り返り、そして子どもにとってリュートやハープなどの楽器を演奏することがさほど容易ではないことを考えてみる。すると一つの楽器が思い浮かぶ。「子どもに適する簡単な楽器」「そんな楽器」「子どもらのために簡単な楽器」。つまりそれは写真を見ても分かるように、ドルメッチの小さなファミリーが演奏していた楽器、リコーダーだったのではなかろうか。それはドルメッチが現代のリコーダーを作り、名声を得たということからも裏付けされるであろう。

だが実際、小さな子どもにとってリコーダーというの楽器は、困難性があるかもしれない。指使いには、バロック式・ドイツ式などがあり、そして楽器の大きさもソプラニーノ・ソプラノ・アルト・テナー・バスなどがある。ソプラニーノ・ソプラノは少し大きな子ども（小学生）の手にはなじみやすいものかもしれないが、他のものは小さな子ども（幼児）が使うには、指使いや楽器の大きさについて問題が生じてくるであろう。<sup>(10)</sup>

しかしモンテッソーリは、具体的な楽器名を述べていないため、その真実は未だもって分らない。

### まとめ

前述したように、モンテッソーリが『子どもの発見』の中で紹介している「もはや用いられなくなった過去の時代から救い出した楽器を再び使用しようとし、また子どもらのために簡単な楽器を作らせようという考えを持っていました」というドルメッチは、<sup>(11)</sup> 古楽器の収集と修復に努め、古楽をオリジナルの楽器により当時の様式で演奏することを復活させた先駆者であると同時に、自分の子どもなどと一緒によく演奏をした人物である。モンテッソーリは子どもにとって適切な楽器を使い、子どもに自由に楽器を演奏させて効果を挙げたそのような彼に対して、おそらく注目をしたのだと考えられる。現にモンテッソーリの教具を見てみても、どれも子どもにとって最良のものが考案され、今もなお使われている。そしてモンテッソーリは、ドルメッチに対して「わたしの教育法の原理と一致する」と述べている。<sup>(12)</sup> それゆえきっとモンテッソーリは自らの著書の中で彼の名を挙げ、彼との共通項に触れたのではなかろうか。

果たして、天国に召されたモンテッソーリが今生きていたら、この見解、どう感じるであろう。モンテッソーリの器楽教育に関する考えについては引き続き、研究課題としたい。

### 主要参考文献

M.Montessori, *The Advanced Montessori Method (The Montessori Elementary Material)* (R.Bentley,Inc., 1965), pp.319-379. [初版 1917 年]  
M.Montessori, *The Discovery of the Child* (Kalakshetra Publications :

---

1966), pp.350-355. [初版 1948 年]

M.Campbell 「ドルメッチ」『ニューグローヴ世界音楽大事典』荒川恒子訳、第 12 巻、講談社、1994 年、73～74 頁。

小林緑「ドルメッチ」『音楽大事典』第 4 巻、平凡社、1982 年、1671 頁。  
マリア・モンテッソーリ『子どもの発見』鼓常良訳、国土社、1971 年。マリア・モンテッソーリ『モンテッソーリ・メソッド』阿部真美子・白川蓉子訳、明治図書出版株式会社、1973 年。

田幸典子・杉山節子「モンテッソーリと音楽教育」『モンテッソーリ教育』第 15 号、1982 年、39～48 頁。

C.W(hitfield)「ドルメッチ」『ラルース世界音楽事典』上、福武書店、1989 年、1157 頁。(『ラルース世界音楽人名事典』福武書店、1989 年、771 頁と同じ。)

## 注

- (1) マリア・モンテッソーリ『子どもの発見』鼓常良訳、国土社、1971 年、323 頁。
- (2) pp.319-379(R.Bentley,Inc. : 1965).
- (3) 田幸典子・杉山節子「モンテッソーリと音楽教育」『モンテッソーリ教育』第 15 号、1982 年、39～48 頁。「はじめに」「音階について」「楽譜」「楽器」「リズムの練習」「歌唱」「音楽の聴開 (鑑賞)」「終りに」からなる。[シェッケン版 1973 年]
- (4) ワーグナーのマーチやシュトラウスのギャロップなど、またグレゴリオ聖歌でさえも掲載されている。スペイン・バルセロナのモンテッソーリスクールでは、グレゴリオ聖歌を歌っていたようだ。以下は 366 頁の譜例。



- (5) マリア・モンテッソーリ『モンテッソーリ・メソッド』阿部真美子・

- 白川蓉子訳、明治図書出版株式会社、1973年、166頁。
- (6) 前掲書 1、323頁。Dolmetsch (英文: Dolmetch) の発音にはドルメツチュ、ドルメッチがある。原則として引用以外は、ドルメッチを使うこととする。
- (7) Montessori, M., *The Discovery of the Child* (Kalakshetra Publications : 1966), p.350.
- (8) 前掲書 1、328頁。
- (9) 前掲書 7、355頁。
- (10) 最近、ドイツのムック社が子どものために作った Flauto Penta (フラウト・ペンタ) という楽器を手に入れることができる。それは全音階を使わず、まるで日本の四七抜き音階に似た d-e-g-a-b-d-e の5音のみ (ペントニック) で構成されており、この音階は小さな子ども、音楽療法のために意味があるとされている。小さな手の子どもにとって、音階も複雑ではなく、大きさもすっぽりと手に入るこのような楽器であれば、使うことができるかもしれない。
- (11) 前掲書 1、328頁。
- (12) 前掲書 1、328頁。

---

# 開業医として「静粛の練習」等が効果的であった アスペルガー症候群症例に関する考察

青 木 正

(青木医院)

## (1) 要旨

- 他の医療機関ですでにアスペルガー症候群と診断され、治療中の初診時6歳のモンテッソーリ園に在園の男児。
- 初診時、幼児期時代からの養育環境・家庭環境等、治療状況を注意深く問診した。
- その後は、毎週の外来管理とし、母親に行動観察ノートを課し、毎回アセスメントを記入させた。
- 自宅および外来では「静粛の練習」やお教室のドリル等をやらせ、外来では医師がきちんと患児の面前で採点し、解説を施した。(医師自らが、速度をもって、きちんと解説し、魅力ある、興味を引く人物となり、よき理解者として関わるのが大切。これが集中力と自己制御力・自己抑制力を培う上で重要な要素となる。)
- 毎週、自らそうしたい、という方向に導き、結果として「お約束事項の提供」を患児側に立って行い、約束の後、「静粛の練習」を行うというスタイルで、初診時から2カ月半で劇的な改善が見られた。
- 当発表は、本症例の考察を行い、また今後の課題について述べるものである。  
(なお、この内容は第42回日本モンテッソーリ協会全国大会で「研究発表6」として発表したものである。)

## (2) 症例の提示

- 主 訴 :ものが大きく聞こえ、極度の偏食。すぐ緊張する。運動が苦手。
- 既往歴 :歩行の遅れ
- 妊娠経過:特記すべきことなし
- 起始および経過

つたい歩きが満1歳、指差し・歩行が満1歳8カ月、トイレ（排尿）の自立が4歳10カ月と遅かった。

2歳10カ月の時、神奈川県某総合リハビリテーションセンターで「発達障害」を診断され、以降通院。3歳6カ月でアスペルガー症候群と診断された。同じ時期、某モンテソーリ園へ入園。（2009年3月卒園）

物音に対して非常に敏感で、とても大きく聞こえるため、すぐにストレスになる。その結果、奇声をあげる。（ディズニーランド内のパレードなども苦手。）「こんにちは」のイントネーションもおかしく、また、におい・触覚にもたいへん敏感で、その結果、極度の偏食になっていった。

水が怖く、顔を洗うこともできず、鼻もかむことができない。また、ガラガラのがいもできなかつた。

自分の気持ちがうまく伝えられず、動物も苦手。

#### ○初診時診察所見

##### ○社会的相互作用の重大な欠陥

- ・友達と相互に関わる能力の欠如・・親しい人以外は挨拶できない。
- ・その意欲の欠如・・・・・年齢相応の意欲がはっきりしない。
- ・社会的シグナルの理解の欠如
- ・社会的・感情的に適切さを欠いた行動
  - ・・・「帰る」と言って診察室を出て、待合室から診察室のドアを叩き続けてガラスを叩き割る。

##### ○没入的で狭い興味・関心

- ・他の活動を受けつけない・・初めての場所・初めて会う人に緊張。
- ・固執の繰り返し・・題が決められていた作文でも、自分の予想と違う題だと書けない等。
- ・固定的で無目的傾向

##### ○決まりや興味の押し付け

- ・自分に対して、生活上で・・・トイレは一人で行けない。排便後拭けない。変化に対応できない。
- ・他人に対して・・・・・車に乗る際は、必ずディズニーの曲を聴く。

##### ○ことばと言語表現の問題

- ・発達の遅れ

- 
- ・表面的には誤りのない表出言語
  - ・音律の奇妙さ・独特の声の調子・「こんにちは」の奇妙なイントネーション。驚くと奇声をあげる。
  - ・理解の悪さ・物事をするのに説明を十分に受けないとできない。
- 非言語コミュニケーションの問題
- ・身振りの使用頻度少ない
  - ・ボディランゲージのぎこちなさ・無神経さ
    - ・・・挨拶しようとする、ピクッと動きが入る。
  - ・表情が乏しい
  - ・表現が適切でない・・・・・自分の気持ちが伝えられない。
  - ・視線が奇妙・よそよそしい
- 運動の不器用さ・・・・・縄跳び・ドリブルができない。ブランコに乗れない。鉛筆・お箸がきちんと持てない。
- 環境・背景
- ・大切な一人っ子である。
  - ・両親は、子どもに対し非常に熱心で愛情をもった夫婦である。(初診時にも、詳細な過去の経緯書を作成して持って来るほどであった。)
  - ・親が、「この子はアスペルガー症候群だから、ゆっくり関わるのだ」という意識が相当強く、患児本人が「変わりたい」という意志が芽生えてきても、それを阻害してきた可能性がある。
  - ・親が、患児の行動をすべて先に読んで関わり、また、患児の行動をすべて是認の上、強引に理解・翻訳をしてきたと思われる。
    - ・・・初診時、初対面の人間に極度の緊張をするため、診察室内で「もう、帰ろうよ。ママ・・・」と言いだし、一人で診察室の外に出て、診察室と待合室の間の扉の上部にある「くもりガラス」を叩き割って、粉々にした。そして、その後も割り続けたが、その際、母親は、明らかにガラスがむき出しになっているにもかかわらず、「きっとガラスに見えなかったのだと思う」と平然と話していた。(一目して、ガラスがむき出しになっている状態であった。)
  - ・「慌てないで、関わる」、「気長に関わる」をモットーにしてきた

両親故、本人が「いや」と言うことを聞き入れつづけ、例えば、食事も極度の偏食状態で、食べる物がほとんど無いような状況に陥っていた。

- ・粗大運動（縄跳び・ブランコ・ドリブルなど）のみならず、お箸・鉛筆の持ち方などのいわゆる「巧緻性」も育まれておらず、お箸は「エジソン箸」を使用し、鉛筆も中指と薬指の間から出てくるような持ち方をしており、親としても、なかば諦めていた感じであった。

### (3) PDD（広汎性発達障害）、LD（学習障害）、AD／HD（注意・欠陥／多動性障害）について<sup>(1)</sup>

- 患児の外見は、「障害児」独特の顔貌等ではなく、「障害」を疑うような特徴がない。
- これらは、中枢神経系（脳）の機能異常であり、認知・運動・言語・行動の障害である。
- PDD（広汎性発達障害）、LD（学習障害）、AD／HD（注意・欠陥多動性障害）の脳の障害は、比較的軽いものが多いが、広範囲にやられていることもある。
- 医学的には、PDDとAD／HDの重複診断はしない。PDDが優先される。

#### 「PDD：広汎性発達障害（自閉症）について」

- ・「実行機能障害（注意の配分と持続、心理的セットの切り替え、衝動性のコントロール、問題解決における計画性や自己監視機能、ワーキングメモリーの調節機能が適切に働かない状態）」と「中枢神経系統合障害」が生じ、知的な機能全体の障害が起こる。
- ・知能は、重度の遅れのものから、全くないものまで幅広い。
- ・5～6歳頃と思春期にピークがある。
- ・ICD－10による分類
  - ・自閉性障害
  - ・レット障害
  - ・小児期崩壊性障害
  - ・アスペルガー症候群
  - ・特定不能の広汎性発達障害

---

○アスペルガー症候群

- ・PDD（広汎性発達障害）の診断分類の一つである。  
従って、PDDの3主徴である、「対人的相互反応の質的異常」、「言語・コミュニケーションの質的異常」、「同一性保持への執拗な要求」が見られる。
- ・生後3歳までに言語によるコミュニケーションを獲得し、知的な遅れが認められない。
- ・対人関係以外の分野では、年齢相応の自己管理能力を持っている。

(4) 治療経過・・・初診から2カ月半まで・・・

- 毎週の外来管理とし、「行動観察ノート」を作成してもらい、その上で、どのような時に奇声をあげたりするのかなどを記載してもらい、今までの「ことなかれ主義」的な「子どものしたくないことはさせず、すべての言うことを聞く」という体制から脱却してもらうように指導した。
- そして、病気の本質を理解してもらうようにも指導した。
- 外来においては、母親の行動観察ノートを確認している際、本人には別の診察室で、通っているお教室のドリル等をしてもらい、その後に、医師がその内容をすべて採点し、間違いを解説し、医師－患児の関係を構築していった。（医師自らが、患児にとって、魅力ある、興味あるような人物になる必要があり、採点する時も、一緒に計算し、考え、かつ、ある程度の速度感があるべきです。）
- アスペルガー症候群が「質的コミュニケーション」の「ズレ」が本質であることから、本人の行動で良くないなど感じていることの内容や、もうすぐ小学校に上がるのに、「顔を洗えない」、「頭を洗えない」等は どう思っているのかなどをゆっくりと、患児の考えを聞き、社会一般の公理・原則なども論ずようにした。そして、「自分もそういうことをやってみたい」ということを自ら言えるようにまで、接していった。
- そして、「行動観察ノート」からお約束事項を見だし、「お約束事項の提供」をした。
- 毎回、外来の最後には「静粛の練習」を母と共にしてもらい、家族との一体感の中で、協力の結果として得られる「静寂」の中で集中する

ことを学んでもらった。これにより、自己制御力・自己調節力を培うようにしてもらい、自宅でも必ず、一緒にその時間を作ってもらった。(最初は短い時間から始め、徐々に延ばしてもらった。)

- 外来3週目には、いわゆる「駄々をこねること」は減り、「静粛の練習」も25分できるようになった。
- 外来4週目には、顔を洗えるようになった。そして、自宅でも穏やかになった。
- 外来5週目には、「静粛の練習」は40分できるようになり、頭を洗えるようになった。
- 外来6週目には、鉛筆も、お箸もきちんと持てるようになった。また、排便後も自分で拭けるようになった。
- 外来7週目には、ドリブルも2回できるようになった。偏食に関しても少しずつ、いろいろな物を食べるようになった。
- 外来8週目には、「静粛の練習」は54分できるようになり、ブランコも自分ではこげないが乗れるようになった。
- 外来9週目には、ブランコも自分でこげるようになり、ジャングルジムも登れるようになった。
- 外来10週目には、小学校の給食も始まり、完食ではないが8割は食べられるようになり、また種類も9割は食べられるようになった。

##### (5) 外来2カ月半以降5カ月までの経過

- 外来13週目には、ドリブルが10回できるようになり、奇声も無くなった。
- 外来16週目には、ドリブルが45回できるようになり、母親が毎朝ついでに行っていた登校も、減らし始めた。
- 外来19週目には、反復横とびもできるようになった。
- 外来20週目には、久しぶりであったが、荒れた。
  - ・ ・ ・「5月の思い出」という作文の標題に対して、「運動会について」という標題を予想していたので受け入れられなかった。(1年前にもこのようなことがあったとのこと。)
- 外来21週目には、マクドナルドでお買い物をして、おつりをもらうということもできるようになった。(今まで、お買い物自体ができなかった。)

---

○外来 22 週目には、父親と東京タワーを徒歩で登りきれた。また、それまで食べられなかった「ぶどう」・「さくらんぼ」も食べられるようになった。

・・・このように自分自身が変わっていくことを患児自身が感じ、その達成感から、今までできなかった事象にも向かおうという姿勢が顕著に見られる状態になった。

#### (6) 患児の治療にあたっての一般的な課題

○患児の治療に向かう際、家族の一体性・協力が重要

他の症例で、快方に向かっていた患児が両親の離婚と、その後、引き取った祖母の患児への対応が改まらず、一気に荒れてしまい、非常に悪化した症例もある。だから、家族の一体性・協力が重要。

○家族間の意見・考え方のズレは詳細なところまで改善すべき

○父性・母性の在り方・・・特に、父親の協力が不可欠

・・・これらは、保育現場でも共通する課題。

#### (7) この症例の今後の課題

○現在、治療を開始してわずかな期間であるが、患児の状態は非常に好転している。これにより、今後、家族が安心感のもと、外来通院の間隔が長くなり、客観的なアセスメントをしないで、我流になり、再び症状が悪化することがあるため、気を抜かないような配慮・注意が必要である。

○治療に向かうに当たって、家族間のコミュニケーションを密にすることが必要であり、本症例では特に、日中の保育者である母と週末育児に参加してくれる父親との連携が重要である。

○快方に向かっていた患児に対し、安心感のあまり家族が不用意発言・不注意発言を言ってしまい、親子の適正な距離を見失うことにより、患児の症状が再発してしまうことがある。その結果、患児の症状・行動を避け、落ち着かせようとして、結局、患児の言いなりに陥る症例が見受けられる。このような状況に陥らないように、「社会への適応」を図りつつも、あせらずに社会的な公理などを論しつつ、「適正な距離」を保つことが大切である。(論理的に、患児との距離を計るように努めることが必要である。)

○日中もっとも長く生活している学校での状況を把握することは極めて

重要で、家庭・医療機関・学校の3者連携は、今後も常に緊密である必要がある。

- 学校やお教室での学習・お勉強において、分からないことを置き去りにすると、徐々に分からないことが多くなり、強いては学習自体に影響が出て、学校・お教室自体が「いやな場所」になることもあるので、小学校1年生という基礎を習う状況では、教師や親がこのことを十分に踏まえて、対応することが大切である。

## (8) 今回のアスペルガー症候群児の治療に「静粛の練習」等が有効であったことに関する考察

- ①診療・治療体制に関して、重要な要因であったと思うこと
  - 各種状況の把握のために初診時に外来時間を長時間割いたこと。
  - 再診時も毎回1時間以上の時間を割り、治療開始後数カ月は毎週管理としたこと。
  - 母親に「行動観察ノート」を記入させ、それを自らアセスメントさせ、「守りの治療」から、積極的な「攻めの治療」へ転換を促したこと。
  - 両親が熱心で、夫婦間で意見にブレがなく、非常に協力的であったこと。
  - 患児自らが、変わっていく喜びを体験し、より前向きに取り組むようになり、「できないから、やらない」という状態から、「できないけど、やってみる」という具合に意識改革をさせられたこと。
- ②「静粛の練習」等が、アスペルガー症候群の治療に有効であった状況・理由
  - 6歳の患児は、ドリル等をやることで物事に集中することを培うことができ、その直後に家族と「静粛の練習」を行うことは、家族と一体となり協力の結実として、「静」が作られ、結果として積極的に「動」と「静」を見極める状況を作り出すことになる。このことが、ワーキングメモリーを活性化させ、その結果として、自己抑制力・自己調節力を育むことになると思われる。
  - 活性化されたワーキングメモリーを利用することで、容易に本人自身の意識を改革することを受け入れさせた。また、同時に、家族の患児への関わり方に関する意識を改めさせ、この環境のもと、患児に「自らが変わっていく喜び」を実体験させ、その達成感を

---

味合わせ続け、「好循環」を確立することが非常に重要な要因と思われる。

## (9) まとめ

### ① 診察時間のあり方について

・初診時はもちろん、再診時も十分な時間をとり、少なくとも治療開始後、数週間は毎週の管理とすることが大切である。

### ② 親が作成する「行動観察ノート」とそのアセスメントの重要性

・患児の「ワーキングメモリー」の状況の把握をし、質的コミュニケーション障害がどのようなパターンなのかを医師・両親が把握することで、今後の対策が練りやすくなり、それまでに確立していた親子の関わり方からも脱却でき、改善しやすい環境が整備しやすくなる。

### ③ 患児に「達成感」を実体験できる環境づくりの重要性

・治療上の観点から、各診察ごとに患児と十分なコミュニケーションをとり、患児自らが、「自分を変えたい」「新しい自分になりたい」と感じさせつつ、その上で「達成感」を味合わせ、またさらに「したい」と思わせるという、「好循環」を生み出すことは極めて重要である。

### ④ 「静粛の練習」等で活性化されたワーキングメモリーの活用

・自己制御鍛錬にもつながり、また、患児を中心とした連帯感も生まれるため、外来診察時間中や自宅で家族と一緒に「静粛の練習」を行ってもらうことは極めて重要である。そして、その結果、活性化されたワーキングメモリーを利用して、各種の行動・作業においても改善が望めるようになる。

## 引用文献

- (1) 酒井幸子他『幼稚園・保育所の先生のための障害児保育テキスト』教育出版、2006年、170～177頁。

# モンテッソーリ教育法における 「見える実践」と「見えない実践」について

## —中国におけるモンテッソーリ教育の批判的考察—

孫 秀 萍

(首都大学東京大学院)

### 要約

本論文では、「見える実践」と「見えない実践」という新しい視点からモンテッソーリ教育法について分析・考察した。この作業を通して、改めてモンテッソーリ教育法の本質を問い直し、その有効性について確認した。

その際、中国におけるモンテッソーリ教育の実態を取り上げ、日本およびイタリアの教師養成コースとの比較分析を通して、中国におけるモンテッソーリ教育の問題と課題を解明した。

モンテッソーリ教育法が真に有効な実践として機能するには、実践という事実全体の背景にある出来事の意味と諸関係の複雑さを読み取らねばならない。「見える実践」が効果を持つためには、「見えない実践」によって支えられることが必要であり、本論文ではこうした「見えない実践」の重要性について考察した。

キーワード：見える実践、見えない実践、素質教育、形式主義、事例研究

### はじめに

中国では、20世紀の80年代から「改革・開放政策」を契機に、欧米の幼児教育理論が次々と紹介された。モンテッソーリ教育法もその中の一つである。モンテッソーリ教育法は、理論だけでなく、実践の側面においても教具の具体的な操作方法に至るまで、体系的で、明確に定められている。一般的には比較的受け入れやすいと思われる。他方、最も重要であると思われるのは、20世紀の90年代に教育理念の面で最大の衝撃を与えた「素質教育」<sup>①</sup>の推進である。この「素質教育」については、1993年に公布された「中国教育改革・発展要綱」の中で次のように明確に提起されている。

---

「小中学校では“受験準備教育”から全面的に国民の素質を高める方向へと転換し、児童・生徒全体に目を向けて、全面的に児童・生徒の道徳思想、文化科学、労働技術および身体、心理的素質を高め、児童・生徒生活の活発な発展を促し、独自の特色を見出さなければならない」。<sup>(2)</sup>

こうして「素質教育」<sup>(1)</sup>は教育界で最も注目される課題の一つとなっている。このような背景の中で、1994年、北京師範大学は真っ先に附属実験幼稚園にモンテッソーリ教育法を導入した。なぜなら、「素質教育」はあくまでも教育理念であり、このような理念を実現するために教育現場で実際に実践するのに、モンテッソーリ教育法が教育者らの注目を浴びたのである。「素質教育」が強調する個性の重視、全面的・調和的な発達を図る教育観は、モンテッソーリ教育法の中に具体化され、操作化されていたからである。こうした要因が絡んで、中国では全国的なモンテッソーリ教育ブームが引き起こされた。2006年の時点で、全国で既に1万もの幼児クラスがモンテッソーリ教育法を実践している。<sup>(3)</sup>しかし、モンテッソーリ教育法を適用する過程で、モンテッソーリ教育の本質が正しく理解されておらず、形式主義的に捉えられている傾向が指摘されている。

中国のモンテッソーリ教育受容の実態を把握するために、筆者は2008年9月に中国へ資料収集に赴き、北京、武漢、深圳、広州の4つの都市で幼稚園と小学校を实地調査した。また、北京師範大学を訪問し、モンテッソーリ教育法研究の第一人者である霍力岩教授に会い、中国幼児教育の現状と課題について聞き取り調査した。聞き取った調査内容と資料を分析した結果、いくつかの問題点と課題が見えてきた。

まず、研究者側の指摘に見られる問題には次のような点がある。

- (1) 形式主義。これは、実践におけるモンテッソーリ教育の真髄を無視する問題である。多くの幼稚園はモンテッソーリ教育法に対する、燃えるような情熱を示している。しかし、応用する場合は機械的に当てはめる傾向が強い。子どもの気持ちを重視せず、重視するのは教具の操作である。また、モンテッソーリ教育の教具全体を重視せず、重視するのは教具の一部にすぎない。さらに、教具の中の基礎原理を重視せず、重視するのは教具を提示するテクニックである。
- (2) 「導師」(本物のモンテッソーリ教師)の不足。これは、モンテッソーリ教育の真髄を身につけている教師が極めて乏しいという問題であ

る。多くの教師は子どものために「整えられた環境」を用意できず、ただ市販のものを保育室に置くだけである。モンテッソーリ教具を自分の保育の補助材料として利用するにすぎない。教師たちの資質に問題があり、モンテッソーリ教育法に対する一知半解という現象は、モンテッソーリ教育法を中国教育現場に応用する際に、否定的な影響を及ぼすと指摘している。<sup>(4)</sup>

- (3) トレーナーの不足。これは、モンテッソーリ教育の真髄を身につけているトレーナーが、極めて少ないという問題である。<sup>(5)</sup>

次に、教育現場実践者の見解に見られる教師養成のあり方に対する不満と要望である。

- (1) 中国における本物のモンテッソーリ教師トレーニングセンターがないため、勉強したい願望は強くあるけれども、勉強することができないという現実がある。
- (2) かつて、一度、いわゆるトレーナーに付いて勉強したが、ほんの少しかじっただけで、現場でうまく実践できないので、途中で中止する園もある（北京、武漢、広州ともにある）。
- (3) 本物のモンテッソーリ教師トレーニングセンターが、一日も早くできるように望んでいる。<sup>(6)</sup>

これらの指摘や要望には一つの共通点が見られる。研究者も実践者ともに、教員養成の重要性を認識しているということである。教員養成の重要性を踏まえて、研究者側の次のような提言が注目されるべきである。すなわち、①教師の資質を高めること。②教師がしっかりとトレーニングをすること。<sup>(7)</sup>

研究者らの提言によれば、現場での応用がうまくいかないのは、教師の資質が最大の原因であり、その克服のために教師がしっかりとトレーニングしなければいけないという。この指摘は間違いではないが、しかし、教師がしっかりとトレーニングをすれば、必ず順調に行くのだろうか。

日本にはいくつかのモンテッソーリ教師養成コースがあり、周知のように国内外において高く評価されている。しかし、日本の幼児教育現場の実態では、子どもを見る目が育っておらず、モンテッソーリの理論と実践の理解が不足しており、とくに、提示の形だけの理解に留まっている。また、提示の意味や意義の理解が不足しており、実践理論の無理解が目立つよう

---

に思われるという指摘がある。<sup>(8)</sup>

福原史子らの2006年調査によれば、現場の教師に対する「モンテッソーリ教育を行う上で困難に思うことは何か？」という質問に対して、「自分自身の力不足」という意見が最も多かった。<sup>(9)</sup> その回答の内容を細かく見ると、「一人ひとりと関わるができない」、「教育法の奥が深く理解できない」、「提示のタイミングが分からない」、「提示に追われてクラス全体に対応できない」などとなっている。それに対して、福原史子らは「教師自身の教育力を高めるための学び」や「実践に役立つ内容」という課題を挙げている。<sup>(10)</sup> この調査に見られるように、日本の研究者が前述した中国の研究者と同じ問題意識を持っているのはなぜなのだろうか。もちろん、その原因は複雑であろう。

本論文ではこのような現状と問題意識に着目し、新しい視点からモンテッソーリ教育法を検討する。その際、モンテッソーリ教育法における「見える実践」と「見えない実践」に焦点を絞って分析を試み、この作業を通してモンテッソーリ教育法を実践に応用する際の理論と実践の関係について明らかにすることを目的とする。

## 1. 日本及びイタリアにおけるモンテッソーリ教師養成コースの比較分析から見た中国の特徴

中国では1994年にモンテッソーリ教育が実践され始めて以来、すでに15年が経過したが、教師のトレーニング不足が深刻な問題となっている。その主な原因は、短期利益に駆り立てる経営上の問題である。多くの教師は、いわゆるトレーナーの下で、3～5日の訓練を受けてすぐにモンテッソーリクラスを開く。さらにモンテッソーリ教師のトレーナー自身も、モンテッソーリ教育法を十分に理解しているとは言えない。<sup>(11)</sup> すなわち、本物と偽物が混在した実態の下で、真正のトレーナーが不足している状況がある。

それでは具体的に、中国モンテッソーリ協会 (CMS)<sup>(2)</sup> の教師養成コースの内容を見てみよう。次の表1は、中国モンテッソーリ協会 (CMS) のホームページに掲載されているカリキュラム内容をまとめたものである。

表 1. 中国モンテッソーリ協会 (CMS) 教師養成カリキュラム

班	時間・期間	課程内容 (M はモンテッソーリの略)
初級班	60 時間 7 日間	M 教育理論、日常、感覚、数学、理論と教具の操作。
中級班	120 時間 15 日間	M 教育理論、日常、感覚、数学、言語、科学文化理論と教具の操作。
高級班	180 時間 22 日間	M 教育理論、日常、感覚、数学、言語、科学文化理論と教具の操作。幼稚園運営管理課程など。

教材としては以下のものが使用されている。

『モンテッソーリ日常生活教育及び教具操作ハンドブック』

『モンテッソーリ感覚教育及び教具操作ハンドブック』

『モンテッソーリ数学教育及び教具操作ハンドブック』

『モンテッソーリ言語教育及び教具操作ハンドブック』

『モンテッソーリ科学文化教育及び教具操作ハンドブック』<sup>(12)</sup>

表 1 のカリキュラムと使用されている教材から見れば、教具操作の面に偏っていることが分かる。教育実習の時間は、明記されていない。

次に、中国でモンテッソーリ教育法を最初に実践した北京師範大学モンテッソーリ教師トレーニングコースの内容を見てみよう。表 2 は、北京師範大学のホームページに掲載されているカリキュラム内容をまとめたものである。

表 2. 北京師範大学モンテッソーリ教師養成カリキュラム<sup>(13)</sup>

課程設置	モンテッソーリ教育理論と実践
	モンテッソーリ教育と現代幼稚園教育の融合
	モンテッソーリクラス環境の準備
	モンテッソーリ五大領域の教具操作提示
	モンテッソーリクラスの観察と記録
	モンテッソーリ園の見学
講義日程	2009 年 7 月 17 日～7 月 30 日
講師	北京師範大学教授および 10 年以上モンテッソーリ教育実践経験を持つ、第一線の教師。

表 2 からは講義日程が 14 日しかなく、短期間で極めて少ないことが分かる。また、教育実習がない。表 1 と表 2 から読み取れることは、中国のモンテッソーリ教師養成の実態は、依然として教具操作中心の短期訓練の段階に留まっているということである。

それでは、これらを日本において初めてモンテッソーリ教員養成コースとして活動している日本モンテッソーリ協会（JAM）教員養成コースの内容と比べて見よう。

表 3. 日本モンテッソーリ協会（JAM）教員養成カリキュラム<sup>(14)</sup>

講義日程	1 学期 4 月～7 月 2 学期 9 月～翌年 2 月
教育実習	2 年間で合計 20 日間
理論科目	モンテッソーリの伝記と業績 モンテッソーリの人間学 フレーベルとモンテッソーリ モンテッソーリの人間性と子どもへのまなざし モンテッソーリ教育原理 I・II モンテッソーリの発達観 モンテッソーリ教育の日本への導入 モンテッソーリ教育における心理学的基礎 モンテッソーリ教育における医学的配慮 モンテッソーリ教育における統合教育 モンテッソーリの想像力・コスミック理論・平和教育 モンテッソーリ教育の総論

表 4. 講義の曜日・および時間

	科目	曜日	時間
1 年次	実践科目（日常生活）	火	午後 6 時～8 時
	理論・実践科目（文化）	水	
	実践科目（感覚）	金	
2 年次	実践科目（言語）	月	午後 6 時～8 時
	理論・実践科目（文化）	水	
	実践科目（数）	木	

表 3 と表 4 から日本の場合は理論と実践の講義が明確に示されており、時間的にも長く、教育実習の時間も明記されている。

次に、モンテッソーリ教育法の本家であるイタリア・モンテッソーリ協会の教員養成の内容を検討することにする。理論的内容と実践的内容は次の7つの領域から構成される。すなわち、①解剖学・生理学の基礎的概念、②産科学の基礎的概念、③小児保健と乳幼児医学、④心理学・乳幼児神経精神医学、⑤教育・モンテッソーリ教育学、⑥モンテッソーリ教育法の専門技術と教育実践、⑦観察・実習・演習である。このコースの継続期間は10カ月であり、450時間の授業に出席しなければならない。<sup>15)</sup>

イタリアの特徴は、基礎理論・観察・実習・演習が重視され、450時間にも及ぶ授業に継続的に出席しなければならない規定となっている。

以上、中国、日本およびイタリアのモンテッソーリ教師養成プログラムの対比から、次の3点が指摘される。第一に、理論項目では、日本とイタリアはいずれも基礎理論の方に力を注いでいるのに対して、中国は逆に教具操作の面だけを重視している。第二に、講義の時間数を見れば、日本は2年課程で年間10カ月コースとなっている。各年次とも週に3回、計6時間、年合計240時間、2年間で480時間となっている。これに教育実習が20日間プラスされる。教育実習は1日＝6時間と計算して120時間となる。これらを全て合計すると600時間となる。イタリアは、既述のように10カ月で450時間の授業である。それに対して、中国モンテッソーリ協会のコースでは、44日、合計360時間である。このように短い期間内で毎日8時間以上講義することになるが、このことには疑問がある。北京師範大学の場合は、14日間で極めて少ない日程となっている。第三に、日本とイタリアは、理論を含めて教育実習を重視している。これに対して、中国の場合は教育実習の時間が明示されていない。ここから、中国の特徴としては、基礎理論の軽視、養成期間の短さ、教育実習の不明瞭さということが挙げられよう。したがって、「モンテッソーリ教育は、今、中国の幼児教育界の『頭痛の種』になっている」<sup>16)</sup> という指摘は、すこしも不思議ではない。

## 2. 中国と日本におけるモンテッソーリ教育の「教師中心」主義的適用

これまで、中国、日本およびイタリアのモンテッソーリ教員養成コースについて比較検討してきたが、次に、中国と日本の教育現場の実態を見てみよう。

最初に中国の現場の実態について次のような指摘が見られる。①園の名

---

声を高めるために、高額なモンテッソーリ教具を購入し、その教具をブランドのしるしのように広い専用活動室に置くだけで、見学者が来る時にだけオープンする。一方、主人公の子どもたちは、狭い保育室に入れられて活動し、たまに高級モンテッソーリ教具を見るだけである。<sup>(17)</sup> ②子どもの要求を無視し、子どもの年齢に合わない教具を提示する。教具がモンテッソーリ教育の中心になり、子どもは教師の指導の下で教具の奴隷になっている。③教師は常にモンテッソーリ教具を自分の授業の補助材料として利用する。子どもより教具の方を大事にしている。④子どもたちは、1学期あるいは2学期が過ぎた頃から教具に対して興味が無くなり、教具を違った遊びのおもちゃのように使う。<sup>(18)</sup>

次に日本の現場の実態についてであるが、藤原元一によるモンテッソーリ園の実施状況の実態分析を参考にして検討することにする。彼の指摘によれば、①コースで習ってきた提示の形だけを守って、子どもの要求を無視している。②子どもの要求を教師が的確に把握できない。③教師が自分のやりやすいように提示を変えてしまって、子どもの理解を困難にしている。④子どもがこの教具を扱いたいと言っているのに、段階も系列も無視して、理由もなく子どもに別の作業を誘いかける。⑤子どもが作業をしていると、教師は安心してしまって、作業の質は全然気にもしないで、放置する傾向がある。⑥一人の子どもに関わっているとき、教師はクラス全体の動きが気になって、その子への関わり方が中途半端になってしまうことがある。⑦教師が提示の途中、どこで子どもから離れると良いのか、子どもから離れるタイミングをつかめずにいる。⑧モンテッソーリ教育法の特徴である系統性や関連性を無視して、子どもが教具のつまみ食いをしていることがある、などである。<sup>(19)</sup>

中国と日本の現場の実態の対比から、皮肉な結果が明らかになった。モンテッソーリ教育法は「教師中心」主義との闘いの中で、「子ども中心」主義として生まれたものなのに、逆に子どもに対する「教師中心」主義が幅をきかせているという現実である。

これらのことがなぜ起っているのだろうか。日本の場合と中国の場合とでは事情は異なるであろう。しっかりトレーニングをしているにもかかわらず、日本ではなぜ中国と同じようなことが起こったのか、真剣に考えなければならないであろう。もちろん、かつてよく言われたように、理論

と実践の理解が不足しており、提示の意味や意義の理解が十分ではないからであるのかもしれない。しかし、それだけなのか、もっと深い理由があるのではないか。この疑問に答えるために、次にモンテッソーリ教育法における「見える実践」と「見えない実践」についての分析を試みたい。

### 3. 「見える実践」と「見えない実践」

まず、興味深い日本の事例を挙げたい。<sup>(20)</sup> 同じ学校で6年生を担当する12年目のベテラン教師と1年目の初任教師が主役である。教材は新美南吉の詩「熊」である。二人は一緒に教材を研究し、同じ指導案を作成した。そして、この同じ指導案にそって二人は別の教室で授業を実施した。しかし、この二つの教室に起こった出来事は驚くほど異なっていた。この二つの教室の子どもたちは、いずれも活発で明るい教室である点で似た雰囲気を用意していた。しかし、授業の結果は全く異なっていた。教師の指示も発問も板書もこの二人の授業において同じであったのに、いったい何が違っていたのだろうか。二つの授業のビデオ記録を子細に検討すると、プログラムの枠外で行われている教師と子どもとの関わりや、教師の身体と言葉に表れた子どもの意見の受容の仕方において、二人の教え方は、次のような点で違いがあることが明瞭であった。

第一に、教室の空気や子どもの身体や教師と子どもの関わりに対して、ベテラン教師は敏感に反応しており、変化する状況への不断の洞察がナীবに行われているのである。それに対して、初任教師の授業では、冒頭では積極的に参加していた子どもたちが、しだいに教師から離れてしまい絆が切れてゆくにもかかわらず、そのことを教師は感じとっていない。

第二に、子どもの発言に対する対応の違いがある。初任教師の子どもへの関わりは、いつも「○○君はどう」「△△さんはどう」「□□君はどう」というように、次々と指名して聞いていくかたちで進行している。期待している一つの「正解」が出たときに指名と発言は終了している。それに対して、ベテラン教師は、子ども一人ひとりの発言の中にその子独自の読みの世界を探ろうとしている。子どもたちのつぶやきに敏感に反応しているのである。ここには、一人ひとりの「今ここ」において生起する「出来事」を中心に取り組み、その「出来事」を省察し、そこに意味と関係を構成していく「反省的実践」が認められる。

---

第三に、子どもの発言に対する聞き方の違いを指摘することができる。初任教師の聞き方は、一つひとつの発言をそれぞれ単独のものとして聞き、教師を中心とする放射状の関係の中に発言と発言を閉ざしている。それに対して、ベテラン教師の聞き方は、一つの発言を聞くときにも、その発言がテキストのどの言葉に対応して語られているのか、その子の前の発言とどういう関係で語られているのか、さらには、それまでの発言の中のうち誰の発言と関連づけて語られているのか、という三つの関連を省察しながら行われている。この事例に対して、佐藤学は次のように指摘している。

「これまでの事例でも明瞭のように、『技術的实践』としての授業がプログラムや発問や指示の技術という『見える実践』として展開されているのに対して、『反省的实践』としての授業は、状況に対する『省察』や方略の『選択』や『判断』として、教育内容の意味と人と人の関わりを『デザイン』する『見えない実践』としていとなまれている。そして、『技術的实践』が、プログラムや授業技術という『科学的原理』に基礎をおいているのに対して、『反省的实践』は、教師の経験と認識に培われた『実践的見識』を基礎としている」。(21)

この事例は、小学校の授業のことだけれども、道理は同じである。モンテッソーリ教育法にも同様の実践が数多く見られる。プログラムや教具の提示の技術という「見える実践」に対して、「見えない実践」、すなわち、状況に対する「省察」や方略の「選択」や「判断」として、即興的に適応できる「力」を持つ教師を養成するのが、モンテッソーリ教育法における最重要課題の一つであると考えられる。

では、即興的に適応できる「力」を持つ教師は、どのような特徴を備えているのか。佐藤学らの調査研究によると、創造的な授業を実践している熟練教師は、初任教師と比べて、「即興的思考」「状況的思考」「多元的思考」「文脈化された思考」「思考の再構成」という五つの特徴で示される「実践的思考様式」を身につけている。(22)

それでは、『モンテッソーリ・メソッド』を見てみよう。その中には、豊富な事例が示されている。すなわち、モンテッソーリ自ら子どもとの関わりの中で、敏感に反応し、変化する状況への不断の洞察がナイーブに行われているのである。残念ながら、今までこの「見えない実践」の部分があまり重視されてこなかったように思われる。それに対して、「見える実践」

の部分にだけ力が注がれてきたのではないだろうか。では、モンテッソーリは、どういう「見えない実践」を展開しているのだろうか。まず教師の役割について、モンテッソーリはこう述べている。

「われわれの体系では、教師は能動的な影響よりずっと受身的な影響とならなければならない。彼女（教師）の受動性は観察しようとする諸現象に対する切実な科学的な好奇心と絶対的な尊重から構成されるであろう。教師は、自分が、観察者の立場にあることを理解し感じなければならない。活動性は諸現象にあるにちがいない」。<sup>(23)</sup>

この説明は、教師の教育における基本的な立場を示したものである。以下、『モンテッソーリ・メソッド』における第五章「規律」からの事例を検討しよう。<sup>(24)</sup>

#### 事例 1：

「一人の少女が自分の周囲に仲間を集め、その真ん中で身ぶり手ぶりで話をし始めた。教師はすぐにその子どものところへかけより、うでをとり、静かにするように言った。しかし私は、その子どもを観察して、その少女が他の子どもに対して教師や母親となって遊んでおり、朝のお祈り、聖者に対して祈願、十字架の徴しを彼らに教えているのに気づいた。彼女はすでに教師のようであった」。

事例 1 は、子どもの活動に対して、教師はどの行為を妨げ、どの行為を観察すべきかを示しており、教師の見分ける能力を問題にしている。

#### 事例 2：

「ある日、子ども達は笑いしゃべりながら浮玩具の浮かんでいる水鉢のまわりをとりまいて集まっていた。学校にわずか 2 歳半の小さな男の子が一人いた。その子どもが輪の外に一人残された。彼が強い興味でいっぱいなのは容易にわかることだ。

私は遠くから非常に興味をもってその子どもに注意した。彼は最初他の子どもの側に近づいて行って、その間にわりこもうとした。しかしそれをするには力がなかった。次に彼は立って周囲を見回していた。その小さな顔の上の思想の表出は、非常に興味深かった。その子どもをとるのに写真機が欲しいほどであった。彼の目は小さな椅子を見て輝いた。そして子どものグループの後にそれを置いて、その上に上ろうと決心したのは明らかだった。彼はその椅子に向かって歩き始めた。その顔は希望で輝いていた。

---

しかしその瞬間、教師が残酷にも（たぶん彼女は、やさしくと言うであろうが）彼を抱きあげて他の子どもの頭上に持ち上げ『いらっしゃい、かわいそうに。あなたも見たいでしょう！』と言って水鉢を見せた。

事例2についてモンテッソーリは次のように述べている。「この場合、教師はその子どもの自己教育を妨げたのであってその代償となるべき物も与えなかった。その小さな子どもは自分自身を勝利者と感じようとした。だが二本の拘束するうでの中で無力にされるのに気づいた。私に非常に興味をもたせる喜び、不安、希望の表情は、顔から消え、他人が自分のために働いてくれることを知っている子どもの愚鈍な表情が残った」。(25)

事例2は、事例1とは一見違うように見えるが、問題の性質は同じである。教師の「やさしい心」が残酷にも一瞬にして子どもの自己教育を妨げ、彼の知的努力による内的力を発達させるチャンスを奪い取ったのである。

### 事例3：

「教師は観察に疲れると、子どもにその喜ぶことは何でもさせ始める。私は、テーブルの上に足をのせた子ども、指を鼻の穴に入れた子どもを見た。それでも教師は干渉して矯正しようとはしなかった。私はある子どもが仲間を押し倒すのを見た。またこれらの子どもの顔に激しさの表情が表れているのを見た。しかし教師はいささかの注意も払わなかった。そこで、私はこれらの行為を妨げるのに必要な絶対的厳格さをもって干渉せざるをえない。こうして、しだいにわれわれのしてはならないことをすべておさえ、子どもにはっきりと善悪の区別をさせる」。

事例3に対してモンテッソーリは、次のように強調している。「活動的に寝られるために子どもが獲得しなければならない最初の観念は、善悪の区別である。教師の仕事は子どもが善と不動、悪と活動を混同しないよう気をつけることである。こうした混同は古い規律の場合しばしばあった。こうしたことからわれわれの目的は活動に対して、作業に対して善に対して寝ることであって、不動、受動、従順に対してではない。

子どもすべてが有益に、知的に、主意的に動きまわり、粗野で乱暴な行為をしない教室は、真によく寝られた教室であるように思われる」。(26)

事例3は、事例1や事例2と正反対である。干渉するべき活動を干渉しない教師をモンテッソーリは厳しく批判している。これに対して、次の事例は触覚の練習後に、干渉するべきでない活動を干渉している教師の事例

である。<sup>(27)</sup>

#### 事例 4：

「ある日、私が『子どもの家』の一つに入って行った時、五、六歳の小さな子どもたちが私のまわりに静かに集まってきた。そして私の手や衣服を軽く撫で始め、『滑らかです』『ベルベットです』『これは粗いです』と言い始めた。他の子どもたちも多数、近くに寄ってきて彼らが行ったと同じように私に触れながら、まじめな緊張した顔で同じ言葉をくり返し始めた。指導者は彼らを止めて、私を解放しようとした。けれど、私は彼女に静かにしているように合図し、小さな子ども達のこの自発的な知的活動に感嘆しながら、私自身、動かず、じっとしたままでいた」。

事例 4 は、子ども自身の自発的な興味を重視し、自発的な知的活動を促すモンテッソーリ教育の真髄を示している。事例 4 からは以下の示唆が得られるであろう。①モンテッソーリ教育法における子どもの自然な進歩をもたらす方法である。②探究精神の自発的な爆発を待ちつつ、子どもたちの新鮮な発見と喜びを経験させることである。③教師は熱心に注意して、いつどのように子どもが、この観念の一般化に到達するかを見まもることである。事例 4 は、子どもが「自ら学ぶ」ことを生き生きと示している最高の事例であろう。

#### 事例 5：

「ある日、小さな男の子が、図案の練習の一つに従事していて、一本の木のアウトラインを色鉛筆で塗るのを選んでいて、幹を塗るのに彼は赤いクレヨン握った。教師は、『あなたは木が赤い幹をもっていると思うのですか』と言ってさえぎろうとした。私は彼女を止めて、子どもが木を赤く塗るままにさせた。この図案はわれわれにとって貴重であった。それは、その子どもが、まだ彼の周囲の観察者でないことを示していた。これに対処する私の方法は、その子を励まして色彩感覚のためのゲームを使用させることであった。彼は毎日、他の子どもたちと庭に行き、いつでも木の幹を見ることができた。感覚練習によって、子どもの自発的な注意が彼のまわりのさまざまな色にうまく引きつけられるようになった時、そうしたある幸福な瞬間に、その子は別の子が遊びの間に空が青いという事実に気づいたと全く同じように、木の幹は赤くないことに気づくであろう。事実、教師はその子に、色を塗るための木のアウトラインを与え続けた。その子

---

は、ある日、幹に色をつけるのに茶色の色鉛筆を選んだ。そして枝と葉を緑色にした。後になって、彼は緑色を葉だけに用いて枝を茶色にした」。(28)

事例5に対してモンテッソーリは次のように述べている。「われわれは『観なさい』と言うことによって観察者を作り出すことはできず、そうではなくて、この観察のための能力と手段を与えることによってできるのである。そしてこれらの手段は感覚教育によって獲得される。いったん、われわれがそのような活動性を引き起こすと、自己教育が保証される」。(29)

以上のモンテッソーリに見られる5つの代表的事例は、決してプログラムや技術という原理だけに基づいているのではなく、教師の経験と認識に培われた「実践的見識」が重要であることを示している。それは、「見える実践」と「見えない実践」との相互関係の中で、子どもの行動や心の動きに敏感に反応し、適格に対応する教師の力量が求められることを示している。

## おわりに

「見える実践」と「見えない実践」との視点からモンテッソーリ教育法を彼女の実践事例に則して検討してきたが、こうした実践が可能になるには、実践という事実全体の背景にある出来事の意味と諸関係の複雑さとを読み取らねばならない。「見える実践」が真に効果を持つためには、「見えない実践」によって支えられることが必要であり、本論文ではこうした「見えない実践」の重要性について考察した。

現在、中国と日本では、現場における理論と実践の関係は、「理論から実践へ (theory into practice)」という「技術的实践」あるいは「見える実践」を重視したものとなっている。この立場における実践は、教育関係における複雑な事実を見落とし、単純化する傾向につながっている。それに対して、モンテッソーリにおける理論と実践の関係は、「実践を通した理論へ (theory through practice)」という「反省的实践」あるいは「見えない実践」における実践的認識論の特徴を示している。この立場における実践は、一見単純そうに見える事実には隠された出来事の意味と関係の複雑さを、明らかにすることに求められるのである。

本論文では「見えない実践」の重要性について、モンテッソーリ自身の実践事例に則して分析・考察してきたが、それはいずれも女史の「即興

的思考」「状況的思考」「多元的思考」「文脈化された思考」などと密接に関連していると同時に、「事例研究」のいっそうの重要性を示唆している。こうした関連におけるモンテッソーリ教育法のいっそう深められた解明は今後の課題である。

## 注

- ① 「素質教育」とは、もともと受験準備のための教育を意味する「応試教育」のアンチテーゼとして提唱された概念であるが、その後、より幅広く個人の資質、個性、特性を活かし、全面的・調和的な発達を図る教育を意味するようになった。
- ② この協会は無認可の組織である。

## 引用文献

- (1) 顧明遠著（大塚豊監訳）『中国教育の文化的基盤』東信堂、2009年、272頁。中国語版《中国教育的文化基礎》山西教育出版社、2003年。
- (2) 同上、273頁。
- (3) 霍力岩・齐晓恬「当前我国借鉴蒙台梭利教育法的误区、关键问题与思路」『幼儿教育（教育科学）』2008年、第2期、1頁。
- (4) 同上、2頁。
- (5) 周兢「印度蒙台梭利幼教机构考察叙事与反思」『幼儿教育（教育科学）』2008年、第3期。
- (6) 中国の幼稚園で園長にインタビューから得られた情報に基づき、筆者が、まとめたものである。
- (7) 霍力岩・齐晓恬、前掲論文、2～3頁。
- (8) 藤原元一「モンテッソーリ園の実施状況の実態分析Ⅰ—Montessori 教育の効果の問題から—」『モンテッソーリ教育』第36号、日本モンテッソーリ協会、2003年、77頁。
- (9) 福原史子ほか「日本におけるモンテッソーリ教育の動向—第39回全国大会アンケート調査を通して—」『モンテッソーリ教育』第40号、日本モンテッソーリ協会、2007年、76～77頁。
- (10) 同上、78頁。

- 
- (11) 霍力岩・齐晓恬、前掲論文、3 頁。
- (12) 中国モンテッソーリ協会 (CMS) のホームページに掲載されているカリキュラム内容をまとめたものである。  
<http://www.montessori-china.org/pxnew>. 2009 年 9 月 19 日。
- (13) 北京師範大学のホームページに掲載されているカリキュラム内容をまとめたものである。<http://www.bnuedu.com/Item/206>. 2009 年 9 月 19 日。
- (14) 日本モンテッソーリ協会 (JAM) のホームページに掲載されているカリキュラム内容をまとめたものである。  
<http://www.info.sophia.ac.jp/smtc/>. 2009 年 9 月 19 日。
- (15) 前之園幸一郎「イタリア・モンテッソーリ協会の活動内容およびローマ大学の教育実習受けいれについて」『モンテッソーリ教育』第 33 号、日本モンテッソーリ協会、2000 年、120 頁。
- (16) 周兢、前掲論文。
- (17) 同上。
- (18) 霍力岩・齐晓恬、前掲論文、2 頁。
- (19) 藤原元一、前掲論文、73～74 頁。
- (20) 稲垣忠彦・佐藤学『授業研究入門』岩波書店、1996 年、90～97 頁。
- (21) 同上、101 頁。
- (22) 同上、112 頁。
- (23) モンテッソーリ著、阿部真美子・白川蓉子訳『モンテッソーリ・メソッド』明治図書、1996 年、72 頁。中国語版、詹道玉訳《蒙台梭利教学法》崇文书局、1995 年。英語版、Maria Montessori, “*The Montessori Method*”. (New York : Dover, 2002)
- (24) 同上、75 頁。
- (25) 同上、75～76 頁。
- (26) 同上、76～77 頁。
- (27) 同上、183 頁。
- (28) 同上、183 頁。
- (29) 同上、184 頁。

## DVD「深草こどもの家の一年」 —いちばん良いものを子どもたちに—

赤羽 恵子

(京都モンテッソーリ教師養成コース 付属「深草こどもの家」園長)

「深草こどもの家」は1979年に京都市深草の地に誕生しました。東山36峰の尾のあたり、竹林と雑木林の丘の上にあります。

以前から住んでいる藪鶯や訪れる野鳥の数々。ここにいるだけで豊かな自然の生気を感じ取ることができます。

教育方針：あらゆる可能性を内に秘めて成長している子どもたちのために

- ①家庭の生活と補いあって
- ②子どもの永い人生に備えて
- ③個人の充実した毎日と子どもたちの共同体による創造的な社会生活を通して。——より人間らしい人格を育成することをモットーとしています。

教育方法：環境による教育、援助する教師

すべての生物は自分に最も適した環境でこそ十分に力強く生きることができるよう、幼児教育の環境はその人の全生涯に深い影響を及ぼします。

モンテッソーリの「子どもの家」は

- ①3歳から6歳までの子どもに必要な物的、人的環境がよく考えぬかれて用意されている。
- ②子どもが選んだ作業に手助けして、その身体的、精神的能力が発達するように援助する。
- ③作業の楽しみを呼び起こし、子どもの内面の興味を満足させる。
- ④精神的成長を妨げる障害を克服する機会を与える。
- ⑤3歳から6歳児が一緒に生活することにより、共同生活に必要な道徳的規範を悟らせる。
- ⑥子どもに自分の自由を正しく使うことを覚えさせ、その倫理的教養の

---

基礎をつくる。

### 教育内容

- ①生活教育：水の体験（水遊びから掃除、料理に至るまで）、動植物の世話と観察、食卓の準備・マナー・後片づけ、対人関係の諸問題、指先の器用性、全身運動の調整など。
- ②感覚教育：幼児期は特に、感覚器官を通して、世界を吸収し、知的発達の基礎をつくっている時期でもあり、モンテッソーリの感覚教具を用いて、子どもの精神的自我を育成する。
- ③言語教育：「話しことば」をより完成させ、内容的にも量的にも言葉が豊かになるように指導する。さらに「話しことば」から「書きことば」の世界へ導入し、言語による表現力を広げる。
- ④数教育：感覚で体験した印象を秩序立て、抽象する能力を育成する。数量意識の経験を段階を追って積み重ね、数概念獲得へ導く。
- ⑤芸術教育：子どもをとりまく環境は、自然な美しさと本物の魅力をもつものとし、子どもの美的感受性を大切にして養い、創造的活動を助成する。
- ⑥コスミック（宇宙）教育：地理学、生物学、物理学、歴史、科学など、KOSMOS（偉大な秩序と調和）へのあこがれの芽ばえを養い、人生とこの世界を愛することができる人間になるよう援助する。

園外保育：年長児と年中児は多様な経験をするために、年に数回、園外へ出かけます。例えば

- ①近くの文化遺産（醍醐寺と五重塔）を見学する。
- ②鴨川で水遊び（教師によって川の水量、水質、気温など検証の上）
- ③大文字山に登る。（8月16日夜に眺めた）燃えた大の字の真ん中に立ち、京都の街を見下ろす。

その他：危険と思われがちな道具について

- ①包丁。正しく使えば鉋より操作は簡単です。年少児が最も興味を持ちますが、最初は細いキュウリを縦4つに切つてあるものを小さく切つ

てモルモットに与える等、切りやすいものだけ。年長・年中児は年に数回、教師が選んだ献立により、多種多様な材料を切って料理し、昼食を楽しむ。

- ②マッチでロウソクに点火。3歳児は見て学び、4～5歳児は繰り返し練習し、6歳児は完璧。
- ③アイロン。3歳児がやりたがるので、正しい使い方を提示し、傍らに居ます。コンセントの取り扱いは教師がします。

卒園式：卒園するという意味が良く理解できるようになった卒園児とその保護者、教職員たちにより、盛大な卒園式が挙行されます。

DVD 「深草こどもの家の一年」 いちばん良いものをこどもたちに (2007)

映像	タイム	解説
M. モンテッソーリの写真		マリア・モンテッソーリによる最初の「子供の家」誕生100年祭にちなみ、過去に敬意を表し現在を祝い、未来の教育に希望をつなぐためにこの映画を作りました。 赤羽恵子 (2006年4月～2007年3月京都にて)
ロウソクの点火		3歳児は興味津々、遠くから見て学び、4～5歳児は先生と繰り返し練習し、6歳児は必要に応じて使います。
1 線上歩行	2' 03	手より発達が遅い足に注意を向け、毎週の初めに平衡感覚の訓練になる線上歩行をします。足が子どもの独立を助けます。多種多様な物を持って歩き、全身運動のコントロールを通して自律心を獲得します。
小鳥小屋・桜の花 2 花の水切り	1' 59	パンジーやデージー等、子どもが切り花として、切りやすい花をたくさん植えます。毎朝、室内の花の水切りをします。
3 出席カード	15	月日を記した出席カードに毎朝一つ、今日のところにシールを貼ります。一日一日が歴史を刻みます。そこは4人がかけ。満席ならば椅子に腰掛けて、ゆっくり順番を待ちます。
4 縫いさし	2' 24	一人用の裁縫箱の中には、針山に針1本だけがさしてあります。糸切り鋏、糸くず入れ、目打ち等が入っています。最初は紙に穴をあけて縫いさしますが、やがて布に刺繍したり、小物を縫うようになります。
5 人参切り	1' 17	包丁を使って野菜を切る活動(母の真似)は3歳児が最もやりたがる作業の一つです。まな板はどっしりして動きにくいものが良い。材料は最初は細いキュウリを縦4等分にしてあるものを細かく切ってモルモット等に与えます。人参は堅いので、もう少し細くしておきます。
6 豆のあけ移し	18	やさしい豆のあけ移しから次第に難しい米や液体のあけ移し、さらにスプーンやお箸を使って物のあけ移しをします。
7 水のあけ移し	35	多様な物のあけ移しを繰り返すことによって、手がより自由に動くようになり、やがて本物の料理活動の準備にもなります。
8 お茶飲み	1' 28	朝、教師が沸かしたお茶をポットに入れておけば、子どもが飲みたい時に1人用の急須に移し入れ、茶碗に注ぎ、お盆に載せて、お茶飲みコーナーで座って飲みます。

9 お茶碗洗い	44	園児が使った茶碗は、専用の流しで自分で洗い、広げ てあるタオルの上で丁寧に拭き、食器棚の所定の場所 に片付けます。
10 洗濯	40	男女を問わず、洗濯は入園の初期から興味をもって近 づいてきて見えています。石鹸を使う、泡をすすぐ、絞る、 乾かす、片付ける等、かなり複雑な工程をやり遂げ、ほっ と笑顔を見せ「もう一回やる!」ということも多いです。
11 外遊び 竹やぐら	2' 19	竹やぐらは子どもたちの要求から生まれ、次第に高くなっ てきました。鉄パイプのジャングルジムより子どもに優しい 遊具のようです。
砂場		一年中、子どもは砂場でたくさんのことを学びます。子ど もの声「工事中ですから邪魔しないでください」。砂場 で使った道具を洗い、分類して片付けます。
12 たけのご掘り	1' 33	毎年春を待ってたけのご掘りに出かけます。子どもが選 んだ筍をある程度掘ってから、大人がひと鍬入れて根 を切ってやると、すぐ掘り出せます。旬の筍は高級食 材です。園で料理して食べたり、お母さんへの素敵な お土産になります。
13 川遊び	2' 15	ここは山の環境に恵まれています、川の体験を求め て、園外へ出かけます。子どもを引きつけて止まないも のは水、土、火、それに小さな生き物たちです。子ど もがこんなに楽しんでいる時、大人のお節介は要りませ ん。大人たちは川下の方で「見ないふりして」注意し ています。時々子どものゴム草履が片方流れてきたこ とがありましたので。
14 アートハウス	58	砂場の近くにあるアートハウスで年長児（5～6歳児） は木工作業に熱中します。週に1回、教師から道具（の こぎり、錐、ハンマー等）の使い方は教わりますが、皆 自分の好きなものを作ります。
15 感覚教具	3' 24	日々雑然と入ってくる多様な印象を、モンテッソーリの感 覚教具を使うことによって、精神を秩序づけ、やがて言 語化してゆきます。以前に個々の教具を楽しんできました が、今日は二種類の教具を組み合わせると多様な構 築物を発見していきます。
16 銀行遊び	56	ビーズ玉を数えながら1、10、100、1,000の名称を学 んでから、それに対応するカードを並べ、十進法の機能 を理解します。「銀行遊び」をしながら、やがて4桁の 加減乗除も興味をもって楽しみながら体験していきます。
17 風車	38	3歳児が6歳児に風車を作ってくれるよう頼みました。 小さい子に教えることで自身もさらに成長します。

18 当番活動	1' 47	外遊びから室内に戻ってきた子どもは丁寧に手を洗います。食事の準備はその日のお当番が机を拭き（料理をした日はテーブルクロスも掛けます）、子どもは少しも急ぐことなく、正確な動作を好みます。
19 料理	3' 27	サンドイッチを作っています。子どもの声「キュウリを斜めに切るのは簡単じゃない」。ゆで卵の黄身をフォークでつぶし、自身は細かく切りマヨネーズで和える。食パンにバターを薄くのばし、卵ペーストとキュウリまたはレタスをはさんで出来上がり。
20 動物小屋	58	昼食後、動物小屋へ急ぐ子どもたち。ここはモルモットの家だから、人間は少し遠慮して3人だけ座らせてもらいます。他の子も入りたいたいのになかなか交代してくれません。
21 落ち葉集め	2' 12	秋です。11月末頃になると、樫やクヌギ、モミジの葉が綿雪のように降ってきます。大人が落ち葉集めをしていると必ず子どもが「やらせて」と言うので、子ども用の熊手や掃除用具を揃えています。天気の良い日、一斉に落ち葉集めが始まります。何も教えることはありません。この落ち葉は焼き芋の時使われ、畑の肥料にもなります。
22 暖炉	14	12月初め頃から2月頃まで、寒い朝暖炉に火が入ります。嗅覚の鋭い幼児は煙突から流れてくる、かすかな臭いを嗅いでいるようです。
23 機織り（はたおり）	1' 01	寒い時期は外遊びより室内での手仕事が流行ります。簡単な縞模様の織物2枚でポシェットを作ったり、やがて図案織りができるようになります。
24 くさり編み	19	畳の上に座り、座卓を囲んでおしゃべりしながら、手は働きます。
25 刺繍	52	刺繍をしているのは5～6歳児です。
26 絵本	24	一人で絵本を読む子どもが増えてきます。同時に先生が読んで聞かせる長い話にも興味をもつていきます。「クリスマスものがたり」は何回も読んでもらいます。
27 歴史	1' 02	待降節の頃、キリストの降誕を中心とした歴史の教え方を学びます。例えばキリストが生まれる前100年、キリストが生まれてから100年、何世紀など。

28 聖劇	1' 23	「クリスマスものがたり」のストーリー、登場人物やせりふまでほとんど覚えてしまった頃、配役を決める日がやってきます。第3希望まで書いて先生に出しておきますが、主役（マリアやヨセフ）になることよりも天使や星になりたい子が多いのです。年長児（5～6歳児）が少ない時は4～6歳児で聖劇をします。
29 地球儀と 世界地図	1' 10	白と青の地球儀を静かに回したり、陸の部分と海の一部を触ります。地球はあらゆる疑問に答えてくれます。こうして「球体」から「平面」の世界地図へと導かれます。
30 七大陸の写真	1' 10	大陸別に色分けされた地球儀と世界地図パズルおよび写真ホルダー（自然、人々の服装、建造物等の特徴）を見ます。
31 対照地形	1' 41	島、湖、湾、半島、海峡、地峡等の基本的な地形を（紙粘土で）自分で作り青い水を注ぎます。各地形の特徴を言葉で整理し、意味を読み取る練習をします。
32 誕生会	33	「今日は〇〇君の6歳の誕生日です」。6本のロウソクに火を灯し、母からの手紙を読み上げ、6年間を回顧します。
33 飾りろうそく	43	卒園製作として粘土で燭台を作り焼き上げます。ロウソクに多色の蜜蝋で飾りを付けます。（ドイツで入手した蜜蝋を使います）
34 一年の出席カード	30	毎朝一つシールを貼った出席カードを、学年末に12ヵ月つなげると、一年という時の流れが感じられます。（誕生日を探したり、夏休みやお正月に思いを馳せたり）
35 卒園式	2' 39	「こどもの家」を卒園する日が来ました。思い出の時間をたっぷり取り、「こどもの家」で過ごした3年間を振り返ります。複数の先生にお礼の印（チューリップ1本）を差し上げます。
式場へ 卒園証書授与		一人ずつ入場して卒園式が始まります。園長「保育証書〇〇君、あなたは『こどもの家』で良い生活をしました」園長の話「良い生活とは、やりたいことがたくさんあってそれができること。自立すること。自由と規律を知ることです」「良い生活が出来ない子どももいます。大人たちが戦争をしていると、家も畑も壊れてしまうからです」。
M. モンテッソーリの写真		幼児期の環境は、その人の全生涯に深い影響を及ぼします。環境が子どもを育て、教師がそれを支えます。教育の総ての問題は「よく考え抜かれて用意された環境」の中で、子どもが自分で発達するのに必要な援助をすることです。 マリア・モンテッソーリ（1870-1952）

36 エンディング	4' 18	<p>卒園生達は今までの仲良しと別れてそれぞれの小学校へ行きます。そして小学校が代休の日（日曜日が授業参観日で月曜が休みになる日等）仲良しと誘い合って「こどもの家」へやってきます。自分が大きくなったことは自覚しているながら全く違和感はないようです。また部屋の隅々まで勝手がわかっているので、好きなものを選び、せっせと仕事に没頭しています。お弁当の時「ここが学校だったら良いのにねー」と私に微笑んだので「どうして?」と聞くと「だって自由なんだからねー」と仲間たちとうなずき合っていました。日本でのモンテッソーリ運動はまだまだ前途遼遠です。</p> <p style="text-align: right;">赤羽恵子</p>
-----------	-------	---

DVD 「深草こどもの家の一年」 いちばん良いものをこどもたちに (2007)

制 作： 赤羽 恵子

撮 影： S O N E

制 作 補： 根岸 美奈子

作 曲： 篠原 眞 「線上歩行のために I, II, III -心と体のコントロール-」

写真提供： エンデルレ書店

キャスト： 深草こどもの家園児たち

企画・制作： 京都モンテッソーリ教師養成コース／深草こどもの家

〒 612-0817 京都市伏見区深草向ヶ原町 17 番地 TEL.075-641-8280 / FAX.075-642-8588

Email: mc.kyoto@theia.ocn.ne.jp URL : <http://www7.ocn.ne.jp/~mc.kyoto/index.html>

「深草こどもの家」は今年（2009年）1月に創立30周年を迎えました。30周年記念行事としては、まず最初の行事として2月10日に片山忠次先生（兵庫教育大学名誉教授）による記念講演や映画「深草こどもの家の一年」を2回上映し、これから同窓会なども計画されていますが、「卒園生アンケート」の中から一つだけ紹介したいと思います。

——深草こどもの家30周年記念「卒園生の今」より——

その答えは「深草こどもの家」の中に

小川 育子（27歳）家業の事務手伝い

人間は皆、素晴らしい個性、才能を持って生まれてきていると思います。

それは千差万別であり、どの木を見ても一つとして同じ形のものが無いのと同様だと思います。そして、それらは皆、生き生きと自身の個性を表現しています。

教育によって、その個性や才能が押しつぶされてしまうことはとても悲しいです。

「自由」と「責任」を教えてくださいました。

私は深草こどもの家で「自由」と「責任」を教えてくださいました。自分でやりたいことを選び、納得するまで取り組むこと。そして問題が生じれば検証し、解決すること。

勝手きままとも思える行動の裏側には、最大の自由と最大の責任が存在していると思います。

この過程があつてこそ、初めて本当の成長を得る事ができると思いますし、本人にとっても取り組む過程がとてつもなく楽しくもあります。そして、この自主性によって生じる「自由と責任」は、そのまま、生きることへの意欲となり、醍醐味となり、実感へとつながります。

この感覚は、幼稚園児であった時の私と、現在の私とで何ら変わりのない部分です。そして決して無視することのできない部分。今なお、私自身の軸になっているように思えます。

---

### 大人になり独り立ちした時にこそ必要になる力

社会を眺めていると、現在の教育に足りないものがよく見えてきます。

ストレスからくる心の病。たばこ、お酒への依存等々。これらは皆、現在の教育が生んだ事実なのかもしれません。全ては正直で素直な反応だと思います。

現代社会では、あまりにもたくさんの情報が混在しすぎて、本当は自分しか持っていない、しかも実は自分の一番近くにある、そして一番シンプルなものが見えにくくなっているのかもしれません。

その答えは、例えば深草こどもの家の教育に存在すると思います。

先生方に信頼されながら、自身の興味が向くものに自身の意志で取り組める幸せ。

好奇心満々の子どもたちにとっては、実際に体験し、成長を実感できる最高の場所です。

こどもの家で教わった自主性は、大人になり独り立ちした時にこそ必要になる力だと思います。

自身の自発的な発想、決断、継続、努力…全ては大人の社会でそのまま必要となる要素だと思います。

## 「三つ編み」の習得過程における幼児の心の育ち

福原史子

(ノートルダム清心女子大学)

蜂谷里香

(ノートルダム清心女子大学附属幼稚園)

岡本純子

(ノートルダム清心女子大学附属幼稚園)

### はじめに

マリア・モンテッソーリは「子供の知能は手を使わなくてもある水準迄は達するのですが、手を使う活動によって更に高い水準に達し、自分の手を使う子供は更に強い性格を有する、と言えます」<sup>(1)</sup>と述べ、幼児の精神発達に手を使った活動に基づいてなされることを強調している。この運動発達のためにもっとも重要とされたのが日常生活におけるいろいろな活動や作業であり、日常生活の練習である。日常生活の練習の目的は、第1にその生活において随意筋の運動をさせて、それを発達させること。第2に日常生活の諸活動が独りでできるようになって、自分にもやれるという自信と自立心と、自分もやってみいたいという自発性を養うことである。<sup>(2)</sup>日常生活の練習はモンテッソーリ教育における感覚・数・言語・文化の領域の基礎となる重要な活動と位置づけられ、内容は、「基本の運動」「環境への配慮」「自己自身への配慮」「社会への適応」「運動調整のための練習」に分けられる。<sup>(3)(4)</sup>

さて、ノートルダム清心女子大学附属幼稚園では日常生活の練習における「基本の運動」の教具・教材の一つとして「三つ編み」を取り入れている(資料)。25 cmの並太毛糸3本の先を結んでループ状にしたものを、固定棒にかけて編む仕事で、直接的に「三つ編みができるようになること、目と手の協応力、手及び指先のコントロール力、集中力、秩序感を養う」を目的とし、間接的には「書くための手の準備」を目的としている。適応年齢は3歳半で、繰り返しのための興味の中心は、編み目の美しさ、三色の組み合わせの美しさ、編む毛糸がだんだん短くなっていくことと考える。また、三つ編みの長さを提示用の25 cmの他に30 cmと40 cmの3段階に分けて準

---

備し、長さも色も幼児が自ら選んで取り組めるよう整えている。日々の実践においては、数あるモンテッソーリ教具・教材の中でも三つ編みに興味をもち、一人でできるよう一生懸命に取り組んでいる幼児を多く観察する。しかし、中には身の周りのことは一人でできる上、数や文字に興味があり読み書きまでもスムーズにできるのにもかかわらず、三つ編みは難しそうだからと挑戦さえしようとしないうちにもいる。そこで、本研究では幼児が三つ編みに惹きつけられる時期および理由を明らかにし、三つ編みの習得を通じた幼児の心の育ちに迫りたい。

## I 研究の目的

日常生活の練習領域の基本的運動における教具・教材として三つ編みに焦点を当て、幼児がどの時期に三つ編みを選択し取り組むことが多いのか、その理由は何か、また習得過程における幼児の手の巧緻性の発達と心の育ちについて考察する。

## II 研究の対象及び方法

ノートルダム清心女子大学附属幼稚園は、岡山市の中心部に位置し、創立44年になる（2009年現在）。「明るく、仲良く、神の前に正しく」をモットーに、宗教教育とモンテッソーリ教育を二つの大きな柱として日々の教育にあたっている。公立幼稚園が90%を占める岡山県にあり、<sup>(5)</sup> 大学附属幼稚園であり、幼稚園教諭一種免許取得の実習園であるという性格から、異年齢のクラス編成が難しい。そこで、「モンテッソーリ子どもの部屋」（以下子どもの部屋と略す）をラーニングセンターとし、各保育室にモンテッソーリコーナーを設けて、モンテッソーリ教育の精神、底を流れる考え方、すなわち「小さいながらも、一人格として子ども一人ひとりを大切にする教育・保育」に臨んでいる。<sup>(6)</sup> 年長児71名、年中児61名、年少児66名、計198名が在籍（2009年7月1日現在）している。

朝8時半から10時半までの間は自由選択活動の時間で、幼児は学級や学年の枠を超えて園全体を自由に動き、各保育室、子どもの部屋、戸外、リズム室や絵本の部屋等で自ら活動を選び、自由に取り組んでいる。10時半から12時までではクラス活動の時間である。この時間子どもの部屋には、年間計画にそってクラスごとに入室する。

自由選択活動の時間には、幼児は自由意志によって子どもの部屋に入室するため、日ごとに入室する幼児も人数も変わる。そこで、日時、幼児名、取り組んだ教具・教材名、反省を日々の入室記録として残している。また幼児一人ひとりに関しては、活動記録を作成し、教具・教材名とその提示日、習得した時期、取り組んだ回数等をつけている。

本研究では、2006年4月から2009年3月までの自由選択活動の時間の子どもの部屋への入室記録をもとに、入室した幼児における三つ編みを選択した幼児の割合を集計し、月ごとの傾向を調べる。2009年度に関しては、個人の活動記録をもとに、三つ編みに取り組んだ回数の、男女、学年および新・転入園児の特徴について考察する。加えて、2009年5月から7月にかけて幼児の中で初めて三つ編みの提示を受ける様子と、その後の取り組みの様子をVTRで記録するとともに、習得過程と編み上げた本数について記録する。

### Ⅲ 結果および考察

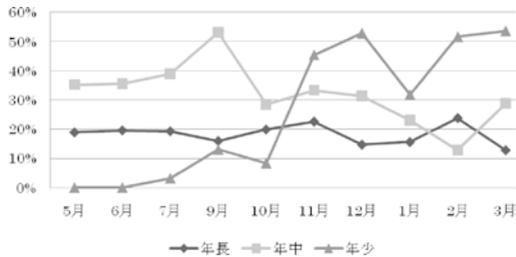
#### 1. 記録データの分析から

図1は2008年度、自由活動の時間に子どもの部屋へ入室した幼児、延べ2540名（年長児921名、年中児1017名、年少児602名）の中で、三つ編みに取り組んだ幼児の割合を学年別に集計し、月ごとの変化を表したものである。年長児は1年を通して20%前後で推移していることが分かる。年中児は1学期が多く40%が三つ編みに取り組んでいるが、2学期になると30%へと減少する。年少児はさらに明らかな傾向を示している。5月6月はまだまだ環境に慣れるのがやっとで、三つ編みには取り組んでいないが、7月から9月にかけて、少しずつ取り組み始め、11月には45.4%、12月には52.8%と三つ編みをする割合が急に上昇している。1学期に取り組む割合の高い年中児の傾向と対照的である。

図2は2007年度、同じく延べ2694名（年長児904名、年中児877名、年少児913名）の、月ごとの変化を表したものである。2008年度と同様に年間を通して、年長児が取り組む割合の変化は少ないが、年中児は1学期に割合が高く、年少児は10月以後、割合が46.4%（1月）まで上昇している。全体的には、年中児・年長児の三つ編みに取り組む割合が低くなっている。特に他の年度の傾向と異なり、朝の自由活動の時間に子どもの



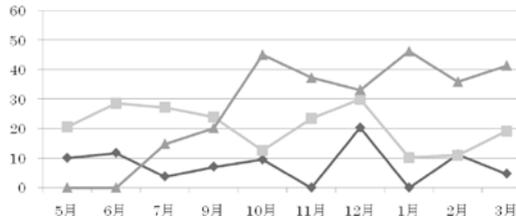
写真1 「三つ編み」をしている様子



(人)

2008年度	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
入室した年長児の延べ人数	127	107	109	106	156	31	75	32	84	94	921
入室した年中児の延べ人数	162	149	72	64	190	54	115	74	78	59	1017
入室した年少児の延べ人数	8	74	62	54	107	33	89	44	62	69	602
三つ編みをした年長児の延べ人数	24 (18.9%)	21 (19.6%)	21 (19.3%)	17 (16.0%)	31 (19.9%)	7 (22.6%)	11 (14.7%)	5 (15.6%)	20 (23.8%)	12 (12.8%)	169 (18.3%)
三つ編みをした年中児の延べ人数	57 (35.2%)	53 (35.6%)	28 (38.9%)	34 (53.1%)	54 (28.4%)	18 (33.3%)	36 (31.3%)	17 (2.3%)	10 (12.8%)	17 (28.8%)	324 (31.9%)
三つ編みをした年少児の延べ人数	0	0	2 (3.2%)	7 (13.0%)	9 (8.4%)	15 (45.4%)	47 (52.8%)	14 (31.8%)	32 (51.6%)	37 (53.6%)	163 (27.1%)

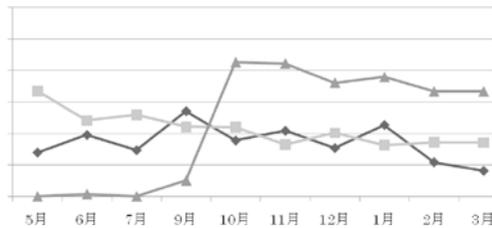
図1 三つ編みに取り組んだ幼児の割合の月別変化：2008年度



(人)

2007年度	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
入室した年長児の延べ人数	158	118	105	98	115	57	83	15	71	84	904
入室した年中児の延べ人数	150	119	92	71	126	64	70	39	73	73	877
入室した年少児の延べ人数	60	141	47	148	157	99	54	56	86	65	913
三つ編みをした年長児の延べ人数	16 (10.1%)	14 (11.9%)	4 (3.8%)	7 (7.1%)	11 (9.6%)	0	17 (20.5%)	0	8 (11.3%)	4 (4.8%)	81 (9.0%)
三つ編みをした年中児の延べ人数	31 (20.7%)	34 (28.6%)	25 (27.2%)	17 (23.9%)	16 (12.7%)	15 (23.4%)	21 (30.0%)	4 (10.3%)	8 (11.0%)	14 (19.2%)	185 (21.1%)
三つ編みをした年少児の延べ人数	0	0	7 (14.9%)	30 (20.3%)	71 (45.2%)	37 (37.4%)	18 (33.3%)	26 (46.4%)	31 (36.0%)	27 (41.5%)	247 (27.1%)

図2 三つ編みに取り組んだ幼児の割合の月別変化：2007年度



(人)

2006年度	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
入室した年長児の延べ人数	136	133	68	96	90	91	91	22	55	98	880
入室した年中児の延べ人数	158	124	50	122	145	78	79	55	81	99	991
入室した年少児の延べ人数	73	135	39	118	129	64	72	58	48	90	826
三つ編みをした年長児の延べ人数	19 (14.0%)	26 (19.5%)	10 (14.7%)	26 (27.0%)	16 (17.8%)	19 (20.9%)	14 (15.4%)	5 (22.7%)	6 (8.2%)	8 (8.2%)	149 (16.9%)
三つ編みをした年中児の延べ人数	53 (33.5%)	30 (24.2%)	13 (26.0%)	27 (22.1%)	32 (22.1%)	13 (16.7%)	16 (20.3%)	9 (16.4%)	14 (17.3%)	17 (17.2%)	224 (22.6%)
三つ編みをした年少児の延べ人数	0	1 (0.7%)	0	6 (5.1%)	55 (42.6%)	27 (42.2%)	26 (36.1%)	22 (37.9%)	16 (33.3%)	30 (33.3%)	183 (22.2%)

図3 三つ編みに取り組んだ幼児の割合の月別変化：2006年度

---

部屋に入室した延べ人数も年少児が最も多く、その中で、三つ編みに取り組んだ延べ人数も、年長児の81名、年中児の185名に比べて、年少児は247名と多い。このように年度によって違いが見られる。

図3は、2006年度、同じく延べ2697名（年長児880名、年中児991名、年少児826名）の、月ごとの変化を表したものである。傾向として2008年度に近いが、年少で三つ編みを始める時期が少し遅く、7月となっている。しかし9月の5.1%から10月の42.6%へと急に上昇していることが読み取れる。年中・年長児の三つ編みに取り組む割合が20%前後で推移しており、月別の変化が少ないのもこの年の特徴である。

以上の点から、年毎に始める時期や割合の多少は認められるものの、全体的な傾向としては、年長児は1年を通して入室者の約2割が三つ編みに取り組んでいること、年中児は1学期、年少児は2・3学期に取り組む割合が高く、入室幼児の半数が三つ編みを選択する時期があることがわかる。

次に現在（2009年度）在籍している幼児の中で年少児66名（男児24名、女児42名）の三つ編みに取り組んだ回数別の人数を割合で示す。図4から、1学期ではまだ三つ編みに取り組めていない幼児が半分以上を占めていることがわかる。特に男児の中で三つ編みをしたことがあるのは1名のみである。女児の中には5回以上すでに取り組んでいる幼児が2名見られる。

図5は現在の年長児が年少時50名（男児13名、女児37名）の1年間の記録を分析したものである。年間を通してみると、一度も経験していない幼児は男児4名、女児7名と少なくなる。男女別では、5回以上三つ編みに取り組んでいる幼児は男児1名のみに対し、女児は5回以上10名、10回以上4名、15回以上5名と、多いことがわかる。

図6は、本年度年中児61名（男児14名、女児35名、年中からの新・転入園児12名）の1学期のデータである。年中からの新・転入園児は12名と限られているので、ここでは男女別には分けないこととする。図からは男児3名、女児4名、新・転入園児2名がまだ一度も三つ編みをしていないことがわかる。1～4回及び5回以上三つ編みをしている幼児の割合は特に差がないが、1学期に10回以上三つ編みを経験している幼児は、新・転入園児に1名、女児に2名いるものの、男児には見られない。

図7は、現在の年長児が年中時の65名（男児13名、女児37名、年中からの新・転入園児15名）のデータである。同じく新・転入園児数が限

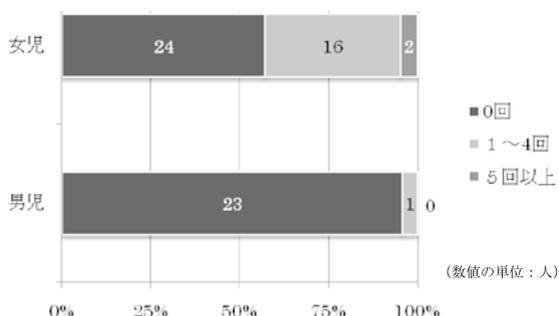


図4 三つ編みに取り組んだ回数：年少1学期（2009年度）

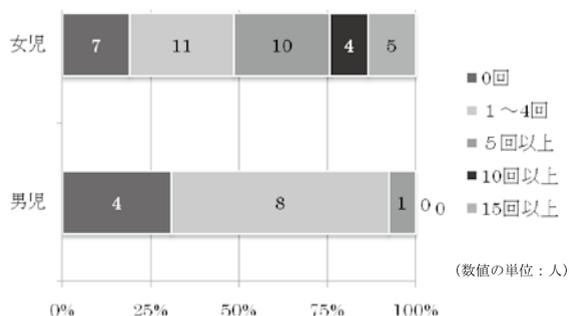


図5 三つ編みに取り組んだ回数別の人数：年少一年間を通して（2007年度）

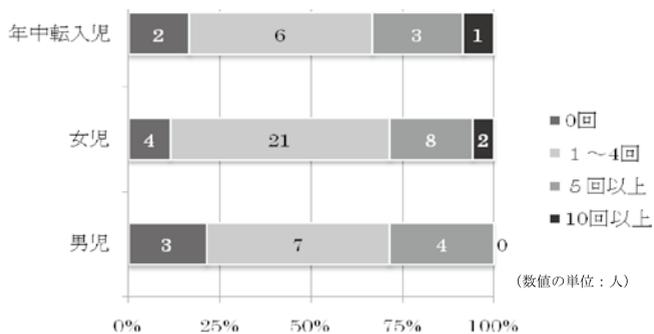


図6 三つ編みに取り組んだ回数別の人数：年中1学期（2009年度）

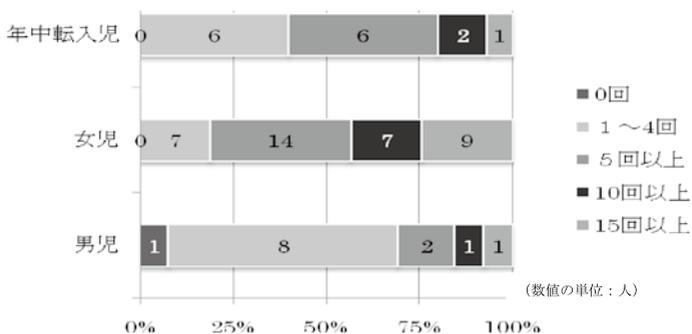


図7 三つ編みに取り組んだ回数別の人数：年中一年間を通して（2008年度）

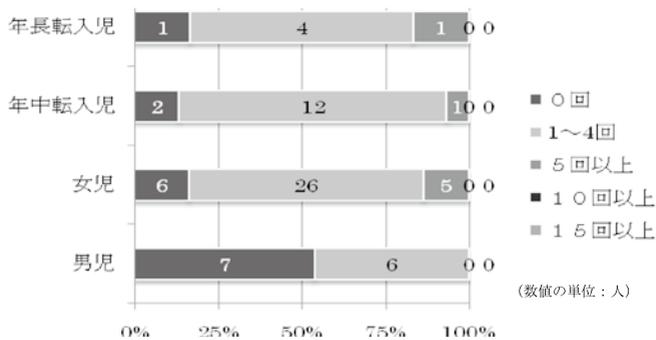


図8 三つ編みに取り組んだ回数別の人数：年長1学期（2009年度）

られているので、新・転入園児は男女別には分けないこととする。図から、男児1名が三つ編みを全く経験できていないことがわかる。また、女児の回数が多く、10回以上が7名、15回以上が9名見られる。続いて年中からの新・転入園児が多く、10回以上2名、15回以上1名が三つ編みに取り組んでいる。

図8は、本年度年長児71名（男児13名、女児37名、年中児からの新・転入園児15名、年長児からの転入園児6名）の1学期のデータである。新・転入園児の数が限られていることから、男女別には分けないこととする。図からは、男児の半数に当たる7名が三つ編みに触っていないことがわかる。また、女児に6名、年中からの新・転入園児に2名、年長からの転入園児に1名、三つ編みをしていない幼児が見られる。また、5回以上三つ編みをしている幼児は、男児の中には見られない。女児に5名、年長からの転入園児、年中からの新・転入園児にそれぞれ1名ずついるのみである。15回以上三つ編みに取り組んだ幼児は見られない。図1～3および8の結果から、年長では情熱的なブームの時期は去り、それでも何名かは、心の落ち着きを得るために三つ編みをしているのではないかと考えられる。

## 2. 幼児の観察から

2009年5月から7月にかけて、子どもの部屋において、幼児の中で初めて三つ編みの提示を受ける様子と、その後の取り組みの様子をVTRで記録した15事例の中から、三つ編みに取り組む心の動きが特徴的だった3例を挙げたい。

### 事例1 年中新入園男児A

自分から三つ編みをしたいと教師に話し、最初の提示では教師の手元を食い入るように見つめ、ゆっくりであるが順番をよく考えて手を動かした。その日は時間いっぱい粘って2本を編み上げた。それ以来、子どもの部屋に入室の際はいつも三つ編みに取り組み、2回目には2本、3回目には4本、以下7本、6本、4本、6本と繰り返し練習し、回数を重ねるごとに徐々に思うように手が動くようになり、編み上げる本数も増えていった。36本目の挑戦では、視線が手元から離れても自然に指が動いていた。表情も真剣な表情から、達成感に満ちた表情、自信と余裕の表情へと回数を重ね

---

るごとに変化していった。

### 事例2 年少女児B

三つ編みの提示を受けてから2日目、最初は覚えていてよく手が動いたが、途中からわからなくなったので、教師が再び提示をした。教師の手元に集中し、自分から手を動かしていた。玉結びが難しかったので、教師が途中までゆっくりとやり方を見せ、仕上げに結びを引っ張るようB児に勧めると、嬉しそうに左右に引っ張り完成させた。でき上がった時の表情は達成感に溢れており、作った三つ編みは汗で湿っていた。3日目には、手をスムーズに動かし一人で編めるようになった。

### 事例3 年少女児C

教師の提示は観るが、まだ指がうまく動かせず順序もわからなかった。自分で編み始めるものの、集中して続けることが難しく、教師が近づくと続ける意欲を見せるが、離れると続かず、あくびをしたり、机の上につつ伏せになったりして、ついにあきらめた。

幼児の観察を通して、三つ編みを習得する過程は一人ひとりさまざまであることがわかった。提示したその日にすっかりマスターし何本も何本も編み続けたり、提示しても1本だけで終わったり、数カ月たって突然できるようになったり、挑戦さえしようとしなかったりといった姿を観察することができた。中でも、まだまだ集中が難しく手もうまく動かせないので三つ編みは無理だろうと思っていた幼児が、諦めないでくる日もくる日も粘り強く取り組み、数週間、数カ月たってついにできるようになったりする姿を見ると、このエネルギーはどこから湧いてくるのだろうかと驚かされた。そして一人でできるようになった幼児の多くに、何本も何本も編む、いわゆる「三つ編みの山」を作る時期が訪れた。

これらの事実は、「敏感期」と結び付けて考えざるを得ない。マリア・モンテッソーリはオランダの生物学者ド・フリースの発見をもとに、「全ての生物はその幼少期に、その生物固有の能力を身につけるため、環境中の特定の要素に特別に敏感な感受性が、ある一定の期間に現れて、その時期が過ぎると消えてしまう」と述べている。<sup>7)</sup> 敏感期には秩序感、感覚、

小さな物、動き、言語、社会的行動などがあり、この敏感期を三つ編みに当てはめると一致する。まず秩序感の敏感期、このピークは2歳であるが、3歳でもまだ続いている。三つ編みはどの糸をどの順番で取るか決まっています、そのパターンの繰り返しで、どんどん編めていく。さらに、どの指でどの糸を取り、次にどの指でどの糸を取るかもはっきりと決まっている。まさに秩序である。これが幼児に情熱をもたらす理由の一つだと考えられる。

さらに、しっかりと毛糸を見て、次はどの糸かを判断しなければならず、感覚（視覚）の敏感期につながる。視覚でとらえた情報を頭の中で処理し、今度は考えたように指を動かさなければならず、次はどの糸を取るのかわかるということと、そのとおりに指が動くということは別の問題である。これらは運動の敏感期とつながると考えられる。3歳から4歳にかけては感覚の敏感期と運動の敏感期が重なっているのである。

さて、秩序感とは周囲の環境に関するだけでなく体内の秩序もある。自分の体をどのように動かせばよいか見当をつける感覚、つまり筋肉感覚から、繰り返しによっていつでも再生できる動き方のメカニズム、筋肉記憶へと動きが定着していく。<sup>6)</sup>これが、まさに三つ編みの習得過程と一致すると考えられる。最初は、汗だくになりながら一生懸命に考えて、思いどおりにならない指を何とか動かそうとし、何度も何度も繰り返し練習し、やがて手元を見なくても、友達と話をしているも自然に手が動くようになる。そうなるまで幼児は喜々として三つ編みを繰り返すのである。この時期は秩序感と感覚と動きの敏感期がまさに重なっている。加えて言語や社会性の敏感期とも重なっている。幼児は、時に友達と並んで楽しそうに編んでいることもある（写真1）。友達のため、家族のためにと編んでいることもある。また、先述の年少児が2学期になって急に三つ編みに取り組む割合が高くなるのも、友達が一生懸命に編んでいる姿を見たり、できあがった1本を幸せそうに大事にしている姿を見たりして、自分もしてみたいと強く望むようになることが一因である。まさに社会性の敏感期である。そして、それぞれの幼児の中で何本も何本も繰り返して編むブームの時期が過ぎ、三つ編みへの情熱はやがて冷めていくのである。

VTRを考察すると、1本編み終えた時の表情は、みな達成感に満ちていた。年少児は特に三つ編みの習得が自信となり、身の回りの自分のことが

---

それまで以上にスムーズにできたり、弁当箱のリボン結びができるようになったりする等、生活や他の教具・教材に取り組む関心・意欲・態度へとつながっていくと言える。

#### IV まとめと今後の課題

まず、なぜ幼児が三つ編みに惹かれるかという点については、秩序感・感覚・運動・社会性などの敏感な時期に合致した教材であるので、幼児のやりたいという内なる情熱を巻き起こすと考えられる。三つ編みの習得過程については、一人ひとり異なるので、普段の観察からちょうどよいタイミングを見つけることや、やりたいという気持ちとそれぞれに合ったペースを尊重することが大切になってくる。三つ編みの習得と心の育ちの関係については、三つ編みの習得が、新たな課題を見つけ意欲的に取り組んだり、人の話を素直に聞いたり、表情が明るくなったり、物事を前向きに捉えたりする態度につながると言える。逆に、普段の生活の中で、一人でできることが増えて自信を持つことで三つ編みに挑戦しようとする意欲が育つこともある。これらはどちらが先と言うことは言い難く、相乗効果があると考えられる。

しかしながら、三つ編みの山を作る幼児については、よく観てよく考えてそのとおりに手を動かしたいという内発的な動機から何度も繰り返すのか、それとも他の仕事が見つからず三つ編みでもしようかという気持ちや、単に目に見える数を増やすのを目的に編んでいるのかを見極めなければならない。

人のために作ってあげたいという気持ちから編んでいる幼児の中で、実際に集中が難しかった幼児でも、父親にあげたいという強い思いから頑張ることができた幼児がいた。弟や妹に、祖父母にプレゼントしたいと言って幸せそうに編む幼児もいる。反対に「みんな三つ編みができているのに、なんであなたは作らないの」と母親からせかされて、仕方なく作っている幼児もいる。人から言われてすべき仕事ではないことは明らかだが、始めなければわからない興味深さもあるので、「三つ編みは難しい」という心のバリアを取り除き、「やってみよう」という気持ちにさせること、幼児の心を汲みとって援助する必要性を強く感じているところである。

年少後半から年中前半の時期に三つ編みに取り組む子どもが多いと述べ

てきたが、年中後半から年長になっても、入室一番、まず三つ編みをしたり、大きな仕事の後、ふっと三つ編みに取り組んでから次の仕事を始めたりする様子を観察することもある。一生懸命に夢中で指を動かすわけではなく、まるであるべきものがそこにあると落ち着く秩序感のように、順番に指を動かすことで心の安定を得ているのではないかと考える。こうした心の動きについては今後引き続いて研究していきたい。

### おわりに

本研究では適応年齢を3歳半とした三つ編みの教材を用いたが、素材や太さ、長さについて、3歳児やそれ未満の幼児が取り組めるような教材としての三つ編みについて考えていきたい。また、三つ編みを習得できた幼児に向けては、四つ編みを準備している。毛糸が四本になり、より複雑な手指の巧緻性が要求され、幼児らにとっては新たな大きな壁である。三つ編みから四つ編みへ、子どもの心がどのように育ち変化していくかについて研究を続けたい。

最後に、本研究では観察の手段としてVTRを使用した。それにより教師が普段気付かない発見がたくさんあった。例えば、提示をしている際の幼児の様子はよくわかるが、提示を終えてその場から去った後の様子は、他の幼児への関わりの中で、ちらちらと目を配って得る情報だけだった。ところが、VTRには困ったり、悩んだり、自分で考えてやり始めたり、諦めかけたり、ひたすら教師の助けを待っていたり、教師が側を通るだけでやる気になったり、友達にさりげなく助けられて、ほっとしたりといった、まさに一人ひとりの細かい心の動きが記録されていた。情報機器を日々の保育の振り返りとして利用する方法を探るとともに、これまでの教師のあり方、幼児との関わり方を反省し、目が届かなかった幼児の実態があることを謙虚に受けとめ、視野を広げる努力が求められる。

### 注

- (1) M. モンテッソーリ 菊野正隆監修 武田正実訳『創造する子供』エンデルレ書店、1974年。
- (2) 市丸成人『モンテッソーリ教育学入門』学習研究社、1976年、106

- 
- ～ 116 頁。
- (3) クラウス・ルーメル監修『モンテッソーリ教育用語事典』 学苑社、2006 年、26～28 頁。
  - (4) 市丸成人 松本静子編著『モンテッソーリ教育の理論と実践 [上巻]』 エンデルレ書店、1987 年、163～167 頁。
  - (5) 岡山県教育庁総務課『岡山県の教育』2009 年。
  - (6) 福原史子 奥山清子『ノートルダム清心女子大学のモンテッソーリ教育に関する研究—附属幼稚園における実践を中心に—』 「ノートルダム清心女子大学紀要人間生活学・児童学・食品栄養学編」 第 33 巻、第 1 号 2009 年、76～87 頁。
  - (7) M. モンテッソーリ 鼓常良訳『幼児の秘密』 国土社、1990 年、50～61 頁。
  - (8) 相良敦子『ママ、ひとりですのを手伝ってね!』 講談社、1987 年、28～37 頁。

## 謝辞

末筆ながら、2009 年 8 月 1 日～3 日、福井市で開かれた日本モンテッソーリ協会（学会）第 42 回全国大会において研究発表を熱心に聴いてくださった皆様と、司会をしてくださった甲斐仁子先生、お忙しい中、時間をとって多くのアドバイスをくださった奥山清子先生、相良敦子先生、乾盛夫先生、田中昌子先生、そしてすばらしい大会を運営してくださった実行委員長前川さちえ先生をはじめスタッフの皆様にご心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(資料)

### 三つ編み

【用具】 長さ 25 cmの並太毛糸 3 本を結んで先にループを作ったもの 固定棒

【直接目的】 三つ編みができるようになる

目と手の協応力、手及び指先のコントロール力、集中力、秩序感を養う

【間接目的】 書くための準備

#### 【提示】

- ① 子どもを誘い教具名を知らせる。
- ② 固定棒を持って机に運び、静かに置くよう声をかける。
- ③ 棚の三つ編み用毛糸の入った皿から 1 本選び机に運ぶよう促す。
- ④ 子どもは左、教師は右に座る。
- ⑤ 固定棒の手前を体に固定する。
- ⑥ 右手で 1 本の毛糸を握り、左手でもう 1 本の毛糸を握る。
- ⑦ 右手の小指を伸ばし、残った 1 本の毛糸を取る。
- ⑧ 右手の掌を下に返す。
- ⑨ 左手の小指を伸ばし、右手親指と人さし指の間の毛糸を取る。
- ⑩ 左手の掌を下に返す。
- ⑪ 右手小指にかかっている毛糸を握りなおす。
- ⑫ 右手の小指を伸ばし、左手親指と人さし指の間の毛糸を取る。
- ⑬ 右手の掌を下に返し、左手小指の毛糸を左手で握りなおす。
- ⑭ ⑨～⑬を繰り返して編んでいく。
- ⑮ 編み終わりは玉結びをする。まず、左手の人さし指と中指の 2 本に編み終わり部分を載せ親指で押さえる。
- ⑯ 右手で毛糸の端をつかみ左手 2 本指に巻きつけ、その端が編み目の上にくるようにする。
- ⑰ 左手 2 本指に巻かれた輪に、毛糸の端を後ろから手前に向かって通す。その際、毛糸の端が 3 本とも輪の中をくぐるよう意識づける。
- ⑱ 左手で通した糸の端を 3 本ともしっかり持ち、右手で編み目を持って左右に引く。
- ⑲ 出来上がった三つ編みを見て、編み目の美しさを感じる。
- ⑳ 子どもに棚からもう 1 本の三つ編み用毛糸を持ってくるよう促し、自分で試してみるよう勧める。

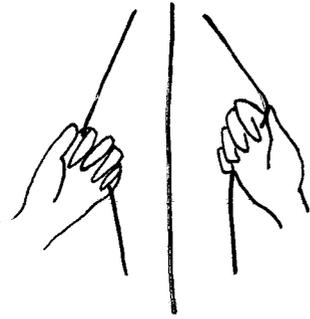
【興味の中心】 色の組み合わせの美しさ 編み目の美しさ  
編む毛糸がだんだん短くなっていくこと

【誤りの調整】 編めない 見た目による

【言語】 みつあみ たまむすび けいと こていぼう (色の名称)

【適応年齢】 3 歳半

【備考】 子どもの興味に応じて三つ編み用毛糸を長くしていくとよい。  
(短：25cm 中：30cm 長：40 cm)



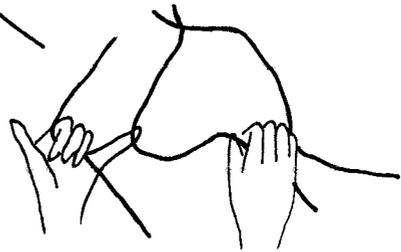
提示⑥



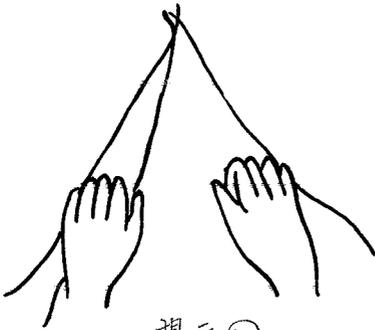
提示⑦



提示⑧



提示⑨



提示⑩

## モンテッソーリ教育 40 年を顧みて(2)

クラウス・ルーメル, S.J.  
(日本モンテッソーリ協会名誉会長)

### 1. モンテッソーリ教育法の「教員（教師）養成」コース

日本モンテッソーリ協会（Japan Association Montessori; JAM）の最初の会則で定められた重要な活動はモンテッソーリの「教員（教師）の養成」でした。だが、組織されたモンテッソーリ「教員養成コース」の設置は1970年4月まで待たなければなりませんでした。それ以前は2日間、3日間、もしくは5日間の連休などを利用してモンテッソーリ教育に関する理論と実践の講習会や研修会、研究会などが各地でよく開催されており、筆者も東京や新潟などで参加し、参加証や出席証明書をもらったことを思い出します。

これらの講習会、研究会、研修会における理論の分野については、日本モンテッソーリ協会ができた当時、その発起人になっていた大学教員たちが担当していたが、実践の分野を引き受けたのはドイツでモンテッソーリのディプロマを取得した赤羽（篠原）恵子氏や、イタリアでモンテッソーリのディプロマを取得した松本尚子氏や松本静子氏であり、また後にインドでモンテッソーリのディプロマを取得した岩田（高橋）陽子氏でした。

しかし講習会、研究会、研修会でモンテッソーリ教育に関する十分に豊かな内容の理論と実践を身につけられないのは明白であって、それで1960年代、70年代では真に幼児期の教育の重要性に目覚めた人はドイツ、イタリア、インド、アメリカへ留学しなければならず、それは誰でもが可能ではなくモンテッソーリ教育の講習会とか、研究会とか、研修会とかは、まあ「ないよりはましだ」ということを意味していたのでしょう。

モンテッソーリ教員養成の組織化への動きは、わが国内において最初上智大学のペトロ・ハイドリッヒ師（Rev. Fr. Petro Heidrich, S.J.）によって始まりました。ハイドリッヒ師はオランダのアムステルダム国際モンテッソーリ協会（Association Montessori Internationale ; AMI）と交渉し始めたのです。国際モンテッソーリ協会の書記長（General Secretary）は

---

その頃、マリア・モンテッソーリの実の息子マリオ・モンテッソーリ (Mario Montessori, sen.) でした。それでマリオ氏とハイドリッヒ師との間には何回にもわたる書簡が行き来します。教員養成コースの設置に関する内容などが決まる時に、筆者は残念ながら安保による大学紛争のため、その前線に立ってなければなりませんでした。それで養成コース設置のための準備委員会に出席できず、それであまり関わっていません。周知のとおり、1968年に上智大学がわが国の最初の大学として過激派の学生を追い払いました。数カ月間続いた大学の「ロックアウト」等、その他にも大学紛争当時の大学の存続に関する諸難問は「業務担当副学長ルーメル」の主な仕事でした。しかし、モンテッソーリのコース設立に関する業務に携わることはほとんど不可能であっても、教員養成コース設置へ向けた試行錯誤については、ハイドリッヒ師の残した数多くの遺資料に頼って知ることができます。そのうち数点は東京の「四谷モンテッソーリ研究所」で保存されています。まず、1969年12月1日の「モンテッソーリ教員養成コース設置趣意書」を紹介しましょう。

## 2. コース設置「趣意書」

「モンテッソーリ教員養成コース設置趣意書」によると、1968年3月に日本モンテッソーリ協会が全国的組織として結成され、日本モンテッソーリ協会の講習会が1968年7月と1969年7月に開催されました。会員も600名に達しました。教員養成コースを設置する動機は、1969年の第2回日本モンテッソーリ協会総会の決議に基づくもので、モンテッソーリ教育法を十分に研究実習するモンテッソーリ資格者の公認の養成コースの設置を「上智モンテッソーリ教育研究会」が委託されたとあります。また、モンテッソーリ教育法の公認の資格についてはマリオ・モンテッソーリ氏が統括しているので、日本モンテッソーリ協会は国際モンテッソーリ協会と連絡を取って、国際モンテッソーリ協会のやり方で養成コースを開講していくことを望むと述べています<sup>(1)</sup>。(書類1 [1969年12月1日] 参照)

Untersuchung an Kijikikai: 1. Dez. 1969

モンテッソーリ教員養成コース設置趣意書

幼児教育の研究が非学と盛んであるのは現代の世界的傾向であるが、その中において、モンテッソーリ教育法の新意義があらためて検討強調実施されつゝあるは先進諸国における現状である。

この趨勢に鑑み、わが大学の有志は、すでに昭和42年12月、モンテッソーリ教育研究会(資料1)を発足させ、文献の収集や翻訳に着手していったが、昭和43年3月、日本モンテッソーリ協会が全国的組織として結成されたことと、その推進的役割を果たした。本会主導のもとに、日本モンテッソーリ協会の講習会を昭和43年7月と44年7月と2回、本学を会場として開催したが、何れも盛況であつて、協会の会員は現在600名に達している。

本会がこの養成コースを設置する動機は、本年の第2回日本モンテッソーリ協会総会の決議によつて、モンテッソーリ教育法を十分に研究実習した公認の資格者の養成を急務とされたことによるものである。

モンテッソーリ教員の公認資格については、現在、マリオ・モンテッソーリ氏を代表とする「国際モンテッソーリ協会(AMI)」の統轄のもとにあるところから、本会としては同協会と連絡をとり、同協会要請の方式に則つてカリキュラム(資料2)及びコースの組織(資料3)を作成して、これにこの講座を実施しようとする。

昭和49年12月1日

上智大学モンテッソーリ教育研究会代表

神 藤 克 孝  
利 野 正 隆  
霜 山 徳 爾

附記 課程担当者

学内	クラスルメル 神 藤 克 孝 平 野 智 美	霜山徳爾 尾形利雄 山下 裕一	菊野正隆 坂本 堯 赤羽 幸子 <small>(国際AMI-山保)</small>
学外	松本 尚子 <small>(国際AMI-山保)</small>	松本 静子 <small>(国際AMI-山保)</small>	

Sendmich: 17. Dez. 1969

---

この「趣意書」には「モンテッソーリ教員養成コース設置趣意書」が学校法人上智学院の理事会に1969年12月17日に提出されて、そこで承認されたというハイドリッヒ師の「手書きのメモ」が書いてあります。上智大学の中でモンテッソーリ教員養成コースを設置することは発起人の数回の会議に出され審議されて、そのカリキュラムと設置の規定は1969年12月17日に学校法人上智学院の理事会において承認されたのです。

学校法人上智学院が「モンテッソーリ教員養成コース設置」を承認したことは、上智大学にモンテッソーリの教員養成コースができるため、第一歩を大きく進んだことを意味します。なお、その後わが国においてその他のモンテッソーリ教員養成コースができる時、上智大学の中に設置されるコースは見本、または、お手本になっていきました。

「モンテッソーリ教員養成コース設置趣意書」を学校法人上智学院理事会が承認したことについては下記の1970年1月3日のハイドリッヒ師がマリオ氏にあてた英語の書簡<sup>(2)</sup>（書類2〔1970年1月3日〕参照）に詳細が記されています。これらの1969年12月1日と、さらに1970年1月3日の書簡は貴重な書類なので、読者が読める程度の大きさにスキャンしました。ぜひ、お読みください。

Tôkyô, January 3, 1970.

Mr. Mario M. Montessori  
General Director  
ASSOCIATION MONTESSORI INTERNATIONALE  
161, Koninginneweg  
A m s t e r d a m, HOLLAND

Dear Mr. Director,

Many thanks for your kind letter of November 11th, 1969, for the copy of your letter to Prof. Tsuzumi and the copy of the draft statutes for International Montessori Training Courses which you had the kindness to enclose.

Meanwhile, we have had various meetings here. First there was the meeting in Kyôto at Prof. Tsuzumi's place of the organizing committee of the 1970 Annual Convention of the Montessori Association of Japan (JAM). Mr. Miyashita is the chairman of this committee. Two representatives from Tôkyô, Miss Akabane and myself, were present. Plans were worked out in detail for the Convention which is to take place at Kyôto August 4th and 5th. It will be a festive Convention commemorating the Centenary of Dr. Maria Montessori's Birth. - The Committee Session was a welcome opportunity to discuss our plans for a Montessori Training Course with the President, Prof. Tsuzumi. There was full agreement on all points, and he asked us to go ahead by all means.

Further in Tôkyô we had various sessions of the organizing committee of the Training Course. A detailed Curriculum and statutes were worked out and agreed upon unanimously. These were approved December 17th by the Board of Trustees of Sophia Gakuin, the legal corporation for Sophia University, and December 24th the organizing committee held a formal session at which (1) its transformation into the "EXECUTIVE COMMITTEE" of the TRAINING COURSE, and (2) the first set of Officers was decided. All appointments were by unanimous consent.

The EXECUTIVE COMMITTEE has 12 members whose names are as follows.  
Prof. Dr. Masataka KIKUNO, Director

Univ. Lect. Miss Keiko AKABANE, Director of Studies.

Prof. Katsuhiko SHINDOH	Assist. Prof. Eiji YAMASITA
Prof. Dr. Tokuji SHIMOYAMA	Assist. Prof. Takashi SAKAMOTO S.
Prof. Dr. Toshio OGATA	Prof. P. Heidrich S.J.
Prof. Klaus LUHMER S.J.	Miss Hisako MATSUMOTO
Prof. Tomomi HIRANO	Miss Shizuko MATSUMOTO

Fr. Sakamoto was appointed General Secretary and Fr. Heidrich was asked to take over Information and P.R.

(書類2)

---

ハイドリッヒ師とマリオ氏の数回の文通からはっきりすることは「食い違い」です。一方でマリオ氏の国際モンテッソーリ協会側と、他方でハイドリッヒ師の日本モンテッソーリ協会の上智大学の中で開講を望む教員養成コース設置発起人側との間で、大きな「食い違い」が生じたのです。

しかしながら初期のすべり出しは順調でした。実は、ハイドリッヒ師は1969年12月1日よりも前に、つまり1969年10月27日（書類3）マリオ氏に書簡を送っています。ハイドリッヒ師はこの1969年10月27日の書簡では不思議なほど「寛大」です。その寛大さはそこに同封されてモンテッソーリ・コース設置に関する「仮契約案」（Vertragsentwurf）<sup>③</sup>に見ることができます。これも直接に読めるような大きさにスキャンして「書類3」として掲載しましょう。

「仮契約案」の重要な点は以下のことです。つまり、

- ・上智大学の中に設置される予定のモンテッソーリ・コースは教科課程を国際モンテッソーリ協会（マリオ氏）と協議し作成して、国際モンテッソーリ協会の許可を求める（仮契約案第3条）。
- ・モンテッソーリのコースで教える講師についても毎年国際モンテッソーリ協会の許可（承認）を必要とし、講義レジメを国際モンテッソーリ協会に送る（仮契約案第5条）。

なお、このような「モンテッソーリアン」としての資格所有者の講師陣をそろえることは不可能でした。

- ・理論も実践も、その授業内容をマリア・モンテッソーリの残した著書に従わなければならない（仮契約案第5条）。
- ・コース主催側からコースの活動状況について詳細にわたる報告書を国際モンテッソーリ協会に送らなければならない（仮契約案第5条）。
- ・コースの卒業試験内容を試験日の3カ月前に国際モンテッソーリ協会に送り、試験官をマリオ氏、または彼の定める代理人が行う（仮契約案第6条）。

1回目の卒業試験に関しては、そういう訳でドイツからパウロ・オスワルト（Prof. Dr. Paul Oswald）氏が立ち合いました。しかし2年目以降は上智のコース・スタッフだけで行っており、国際モンテッソーリ協会からコースに派遣された試験官の旅費、滞在費を負担することはありませんでした。

- ・卒業試験官の一人ひとは国際モンテッソーリ協会の（書面による）承認を必要とする。また、マリオ氏は試験官の資格を取り消すことができる（仮契約案 第7条）。
- ・卒業証明書（ディプロマ）の文言を国際モンテッソーリ協会が決定し、マリオ氏とコース責任者がサインする。それには国際モンテッソーリ協会の正式なロゴ（三つの輪）を載せる（仮契約案 第8条）。
- ・受講生が支払う学費の10%を学年末にその総額を国際モンテッソーリ協会に送る（仮契約案 第9条）。
- ・受講生一人の登録料を\$3（または、\$6）を国際モンテッソーリ協会に納める（仮契約案 第9条）。

上智大学の財政という中にあるモンテッソーリ・コースなので、具体的に、この点をどういように実行できるかどうかわかりませんが、とてつもなく困難と思われます。仮に、上智のコースが財政資金の管理がまったく「別当会計」ならば解決しやすいのでしょうか。どのように、一体全体、ハイドリッヒ師は上智のコースと大学「当局」との関係を考えていたのでしょうか。ヨゼフ・ピタウ（Josef Pittau）大司教と日本モンテッソーリ協会との関係については前号で述べたが、ピタウ大司教のようにモンテッソーリ教育に理解があり、やさしい人が上智理事長をしている間はうまくいくでしょうが、最高責任者が変われば事情が変わる可能性はいくらでもあったからです。

to establish and conduct a "Montessori Training Centre" on the following conditions, the acceptance whereof and faithful adherence whereof is attested by the signature of -----

1. The center will train teachers for the application of the Montessori Method of Education to children (two-and-a-half to . . . . .)
2. The period of training in the Theory, Psychology and the use and function of the Montessori Method and its practical applications, practice in schools and other desirable subjects, will be . . . . . years.
3. The detailed curriculum and time table of the training to be given will be drawn up in consultation with, and with the approval of, Mr. Maria Montessori.
4. The persons employed to give the Montessori training as specified in No. 3 will have to be indicated or approved by Mr. Maria Montessori every year.
5. The Director of the Centre will require each member of the staff, entrusted with the teaching of Montessori Theory and/or practice, to base her teaching on the books of Dr. Maria Montessori, on the two lecture books of the last course of Dr. Montessori (1946) and on the Apparatus book, which will be put by Mr. Maria Montessori at the disposal of the Centre on payment of . . . . . for the duration of the agreement. The Director of the course will also require each member of the staff to submit, during the first two years of its appointment, a short summary of each lecture it will deliver, a copy of which will be sent to Mr. Maria Montessori. Subsequent to this period of two years the said member will be required to submit a report of her activities at the end of each term and will send each year a copy of these reports, as directed by him, to Mr. Maria Montessori together with an Annual Report drawn up by the Director.
6. The examinations to be held at the end of each year will be conducted according to the instructions given each time by Mr. Maria Montessori who will preside over these examinations personally or in the person(s) of one or more representatives appointed for the purpose. Proposals for these examinations and their dates will be submitted by the Centre to Mr. Maria Montessori at least three months before these are to take place. The travelling, boarding and lodging expenses of the President over these examinations incurred in connection with them will be borne by the Centre.
7. If there be appointed a Board of Examiners, the names of each of its proposed members will be submitted to Mr. Maria Montessori for his approval and only after his approval has been given in writing, shall such appointments become effective and be communicated to the appointees. The Board of Examiners will be bound by the instructions given by Mr. Maria Montessori regarding the examinations as mentioned in Clause 6. Mr. Maria Montessori may at any time withdraw his approval to the continued membership on the Board of Examiners by any of its members.
8. The text of the Diplomas and/or Certificates to be awarded to the student will be approved by Mr. Maria Montessori and be signed by him and an authorized member of the Centre. They will bear also the seal of the Association Montessori Internationale and the signature of the President.
9. To Mr. Maria Montessori (or to the A.M.I.) according to his direction, the centre will pay 10% of the fee charged to each student. The cumulative sum will be remitted at the end of each course. And each student on registration will pay \$ 3.-- or \$ 2.--, which will be transferred by the Centre to the A.M.I.

Mr. Marie Montessori may delegate any or all of his rights specified in the Clauses of the agreement to one or more persons of his choice. If the Centre acts contrary to any of the clauses of this agreement without previously obtaining written dispensation from Mr. Marie Montessori, all the rights, authorisations and appointments received from him will be forfeited and cancelled and the Centre will remove the name "Association Montessori Internationale" as well as the name "Marie M. Montessori" if it has been used in any way and any of their derivations in any form from any and all its activities, nameplates, letter-heads, prospectus, diplomas, certificates, advertisements, literature, publications and any other written or printed and stereotyped or multiplied communications to its students and the public and will pay the expenses of any advertisements and communications by means of which Mr. Marie Montessori may deem fit to bring to the notice of the authorities, the public and any private persons that he and the Association Montessori Internationale no longer have any connection with the Centre.

- ii) In case of irreconcilable dispute regarding any such breach of agreement having been committed, the laws of . . . . . will decide the issue under dispute.

(書類 3)

さて、この「仮契約案」に関して言えることは、ハイドリッヒ師は国際モンテッソーリ協会のモンテッソーリ・ディプロマ取得可能なコースに関して、1969年10月当初、すでにたいへん正確な情報を集めていたことが分かります。なぜなら、ハイドリッヒ師が1969年10月の「契約案」で提案したことこそは、国際モンテッソーリ協会のマリオ氏が要求してくるはずの内容だったからです。

このハイドリッヒ師側の「仮契約案」は1969年10月なのに、たった半年も経たないうちに、「絵に描いた餅」になります。この「食い違い」のうち、最も大きい「食い違い」を以下2つ指摘します。

その第1は、「主催者」についてです。上智大学内にモンテッソーリ教員養成コースが設置された時、現実に来上がった「教員養成コース」の「主催者」は、すなわちカリキュラムの決定、講師の選定・任命などを決めたのは「上智大学モンテッソーリ教育研究会」(Institute) だったのです。

国際モンテッソーリ協会ではありませんでした。国際モンテッソーリ協会はなにも関与することなく、すべてが「上智大学モンテッソーリ教育研

---

究会」で決められていったのです。すなわち、「上智大学モンテッソーリ教育研究会」がすべてを独断的に決定し、すべてを牛耳っていました。国際モンテッソーリ協会は、ただ報告を受けたただけでした。

その時、マリオ氏は、もしも上智のコースが国際モンテッソーリ協会の同意があっても、それらの権限はあくまでも国際モンテッソーリ協会にあることを断固として主張し続けました。

第2は、モンテッソーリ・コースの講師としての「資格」についてです。モンテッソーリのコース講師（教員・教師）の選定・任命は、講師としての資格と深い関係があります。ハイドリッヒ師は上智のコースでモンテッソーリの理論を教える予定の講師は全員が大学教授の資格があることを強調しました。そして、マリオ氏は彼らに「モンテッソーリアン」としての資格があるかどうかを問いました。具体的には、彼らがみんな3歳から6歳児のためのモンテッソーリ・ディプロマの取得者であるかどうかというようなことでした。まず、彼らはモンテッソーリ教員コースに入って、モンテッソーリ・ディプロマを所有しているかどうかです。もちろん、モンテッソーリ理論を教える予定の上智のコースでその条件を満たせる教授陣は誰一人としておらず、筆者もそのうちの一人でした。

だけれども、最初に述べたように海外へ出て留学しなければモンテッソーリ教育法についてちゃんと学ぶことができないということから、一日でも早くわが国でモンテッソーリ教員養成コースを設置し、国内でもモンテッソーリ教育法について学べる機会を作らなければならないという「必要性」があり、そしてハイドリッヒ師を中心とするモンテッソーリのコース設置を推進する人たちの間には「あせり」があったようです。

この「あせり」を敏感に感じとったのはマリオ氏自身ではなかったのではないのでしょうか。それでマリオ氏は1970年2月23日にハイドリッヒ師に5頁の書簡（書類4）を送り、そこでマリオ氏の気持を率直に述べています。

ハイドリッヒ師あてのこのように長い書簡の第1頁<sup>(4)</sup>は“captatio benevolentiae”（ご機嫌とり）の文章で始まっています。それはマリア・モンテッソーリ自身生前そうであったように、国際モンテッソーリ協会は常に子どもに奉仕することを最大な目的としてきたし、また上智大学の中にモンテッソーリ教員養成コースができるために、国際モンテッソーリ協

会はどんな犠牲でも捧げる覚悟である、と記しているのだから。

しかし、マリオ氏は国際モンテッソーリ協会の最高責任者の立場にあるので、国際モンテッソーリ協会の基本の方針を守らなければならない。そういう気持ちでハイドリッヒ師の仮契約案を読むと問題点を若干感じ、「戸惑って (perplexity)<sup>(5)</sup> いる」と言うのです。すなわち以下のような個所について戸惑っていると言うのです。

- (1) 上智モンテッソーリ教育研究所 (Institute) とは何か。マリオ氏は上智大学のこの「研究所」がどのような「研究所」なのかを質問しています。これに対してハイドリッヒ師は、「この研究所はモンテッソーリ教育の基本的理念や教育方針を大切にしながら、周り (日本) の文化の伝統を十分に網羅するという近代的心理学に基づく研究所」と答えていたのですが…。
- (2) マリオ氏はその必要性を認めて賛同しながらも、地元の文化やそこでの風習を尊重するあまり、本来のモンテッソーリ教育法が歪曲されることをたいへん心配します。中央アメリカのインカ文明における宗教的事例を挙げ、インカ文明のアステカの宗教の儀式で、生きている若者の心臓をえぐり取り、祭壇に犠牲として捧げるという考えられない残忍な事例を引き合いに出します。当然のことながら、いくら地元の文化を尊重するにしても、そこまでモンテッソーリ教育はついていけない。つまり「土着化」と言っても、限界がある。至極当たり前のことと思われます。土着の文化を使うようなことはいいけれども、しかし「土着」についての考え方では、モンテッソーリ教育の根本思想と矛盾した場合、警戒しなければならないとマリオ氏が深く懸念しています。国際モンテッソーリ協会はどれだけの土地の風習を取り入れることができるかについては、具体的にインドを例にしてフォーク、ナイフを使わず手で食べる。ヨーロッパの堅苦しいスーツの代わりにサリーを着る。握手する代わりにお辞儀をする等を挙げています。
- (3) もっと現実的なこととしては、1960年頃のアメリカにおけるモンテッソーリ運動を引き合いに出します。当時、モンテッソーリ運動はアメリカで、理論も実践も「死んでも同然でした」が、ヘインストック (Elizabeth G. Hainstock)<sup>(6)</sup> 夫人たちの活躍を通してアメリ



# ASSOCIATION MONTESSORI INTERNATIONALE

Dr. MARIA MONTESSORI - Founder President 1929-1952

President: J. Ewart Smart, O.B.E., M.C., M.A., B.Sc., Ph.D.  
General Director: Mario M. Montessori

HEADQUARTERS Amsterdam-Z., Holland, 161 Koninginneweg  
COURSE ADDRESS London N.W. 3, 20 Lyndhurst Gardens

Amsterdam, 23 February 1970.

Rev. Father P. Heidrich S.J.,  
Sophia University,  
7 Kioicho, Chiyoda-Ku,  
TOKYO.  
Japan.

Dear Father Heidrich,

I thank you for your letter of January 3 and enclosures, as well as for the information therein. You ask for my whole-hearted consent to the decisions taken and the plans made as well as to make, as Dr. Montessori would, whatever sacrifice would be necessary to serve child education.

With regard to sacrifice, there was or is any hesitation. Both she and I have considered <sup>not</sup> a privilege to be able to serve childhood not only in Far Eastern countries but everywhere and not only in the field of education. Any genuine effort promoting better conditions for the children continues to have whom or what movement it is made. Froebel, Pestalozzi, Mental Health, Unicef, Y.M.C.A. etc. We hesitate when the name Montessori is involved because to the name Montessori are attached the great vision gained through Dr. Montessori's intuition of the needs and the sufferings of the children which led her to those experiments which determined her approach.

Once she had become famous she had tremendous offers: the church itself, masonry, Facism, Communism, Theosophism, big industrial concerns etc. offered their power, their world-wide organization to expand not her vision. <sup>not</sup> "The Montessori method ~~was~~ this would have promoted the method, the name Montessori and her own personal grandure and wealth, but she refused. Because her mission was to help the child."

When you now ask me as General Director of the A.M.I. and as a person bearing her name, to understand the intentions of what is proposed in your letter and enclosures, my instinct would say "yes". The responsibility of bearing the name Montessori and therefore representing Dr. Montessori, makes me hesitate. However, I shall attempt to illustrate some of my perplexity.

(書類 4)

カでモンテッソーリ教育運動が再発見（リバイバル）されました。詳細は省きますが、ヘINSTOCK夫人も国際モンテッソーリ協会のディプロマ取得者であったようですが、アメリカでモンテッソーリ運動再発見の波が起こりつつあることから、国際モンテッソーリ協会からイギリス人のマーガレット・スティーブソン（Margaret Stevenson）夫人がアメリカの首府ワシントン D.C. へ送られ、国際モンテッソーリ協会公認コースを設置しました。そしてモンテッ

ソリー教育運動は大きく2つに分裂しました。ヘインストック夫人たちの“the American way.”を主張したアメリカ・モンテッソリー協会（American Montessori Society; AMS）とステーブンソン夫人の国際モンテッソリー協会との対峙です。この流れは現在もあるようですが、グローバルな領域では協力し合っています。しかしマリオ氏は、日本におけるモンテッソリー教育運動では、このような分裂を避けなければならないと思って、日本ではモンテッソリー教育運動は一つでなければならないと常に強く主張しました。筆者も日本モンテッソリー協会の会長であったとき一番心がけたことはそれでした。

- (4) さらにマリオ氏は、近代的な教育学と心理学を国際モンテッソリー協会が十分に認めていないのではないかとされていることにも触れています。マリオ氏は実験室で得られた方法は必ずしも本来の子どもの発達を把握しないと言うのです。例えば、「集中現象」などを事例にして。実験科学によると、幼児は長く集中することができないと言われていました。しかし、モンテッソリーは2,3歳の子どもでも数時間、楽しく集中することができる新事実を発見しました。文化的な内容を幼児に教えることができないと当時の科学者が主張していましたが、モンテッソリーは適切な方法で提供すれば、幼児にも美術、音楽、歴史…の精神的糧を身につけられることを発見しました。IQが変わるといのように考えられる風潮があったが、モンテッソリーは子どもが異なった環境に置かれるとIQは変化することをはっきりさせたとして、近代的な教育学や心理学をモンテッソリー教育は乗り越えたと記述しています。

このようなハイドリッヒ師との文通のなかで戸惑ったマリオ氏は、ハイドリッヒ師の構想中の教員養成コースで国際モンテッソリー協会の公認が得られたと発表しないでくださいと述べていることもここで記さなければなりません。さて、このマリオ氏からの書簡に対して、ハイドリッヒ師は1カ月後の1970年3月23日に返事を書きました。（書類5）

### 3. コース・スタート

この1970年3月23日の書簡で重要な点は次のとおりです。すなわち、

上智大学  
東京都千代田区紀尾井町七  
電話 (265) 9211大代表

SOPHIA



UNIVERSITY

7 KIOICHO, CHIYODA-KU  
TOKYO, JAPAN  
TEL. (265) 9211

T6ky6, March 23, 1970.

Mr. Mario M. Montessori  
Director  
ASSOCIATION MONTESSORI INTERNATIONALE  
Koninginneweg 161  
Amsterdam. H O L L A N D

Dear Mr. Director,

Thank you ever so much for your understanding and cooperative letter of February 23. We have discussed the contents of it in a special Professors Meeting of the Montessori Training Course.

We are grateful for your counsel and help, and understand well your various apprehensions. Please be assured that we are determined to work for mutual understanding and cooperation, avoiding by all means the danger to betray the true spirit of Dr. Maria Montessori or to drift into a split as the one which occurred in America.

Our Montessori Research Group is taking up genuine Montessori Research, and the Professors teaching the theoretical subjects of our training course are all of them professionals in the educational field who by intense study of their respective subject will be able to give a true understanding of the Montessori spirit and theory; Miss AKABANE is one of them. In addition no less than 60 hours of practical class training and three weeks of supervised practical work in a Kinderhaus will be given by our three teachers with international Montessori Teaching Diplomas.

With regard to financial contributions to headquarters in Holland, we first of all will try to persuade more people to become regular members of AMI paying their membership fees, and, after some time, hope to pay a yearly amount as contribution of the training center - at present, alas, we have only debts. - However, as far as expenses for journeys of inspectors, examiners etc. from outside of Japan are concerned there seems to be little hope that anything can be promised even for a more distant future. Of course anybody from abroad is welcome who is able to pay his way. - Our aim is to make educational standards as high as possible at a cost as little as possible in order to make participation possible even of the poor.

Yesterday we held entrance examinations (written and oral from 10.00 a.m. - 8.00 p.m.) for 58 applicants, admitting 44 to the first training course which is to begin April 20th. - As time goes on, we hope that every professor will write a short synopsis of his lectures to be mimeographed for his students.

Asking again your blessing for our little course and promising you continued information,

I am, with all good wishes,

Gratefully yours

(P. Heidrich S.J.)

(書類 5)

ハイドリッヒ師のマリオ氏あての書簡によれば、「上智モンテッソリー教員養成コース」は1970年3月22日、朝10時～夜8時まで、入講（入学）試験（筆記試験・口頭試験）を行って、受験者は58名で、そのうち44名が合格したと報告しています。そしてハイドリッヒ師は、コースの各講師

が講義レジメを作成し学生に配布し、また国際モンテッソーリ協会にも送れることを期待していますと書いています。これは1969年10月27日のハイドリッヒ師がマリオ氏へ郵送した仮契約書を考えると、一体、どうなっているのでしょうか？

また、1970年の最初のコース・入学案内（書類6）は下記のとおりです。

上智  
モンテッソーリ  
教員養成コース  
案内



1970



モンテッソーリ教育法による園児の作業

上智モンテッソーリ教員養成コース  
上智大学内 東京都千代田区知恩1-7 平102  
電話 (03) 265-9211 内線 712  
国鉄・地下鉄 四ツ谷駅下車徒歩3分



入学案内によれば、ハイドリッヒ師とマリオ氏の間で大きな「食い違い」になった講師やカリキュラムについては次の担当者になっています。理論科目：K・ルーメル（上智大学教授）・神藤克彦（上智大学教授）「モンテッソーリ教育法の意義と研究法入門」；菊野正隆（上智大学教授）「モンテッソーリ教育法の医学的基礎」；山下栄一（上智大学助教授）「モンテッソーリによる幼児期の意義」；平野智美（上智大学助教授）「モンテッソーリ教育法における教育的環境」；霜山徳爾（上智大学教授）「モンテッソーリ教育法の心理学的基礎」；神藤克彦（上智大学教授）・松本静子（国際ディプロマ所有者）「モンテッソーリ教育法における教師の役割」；坂本堯（上智大学講師）「モンテッソーリの全人教育」；赤羽恵子（上智大学講師）「モンテッソーリ教育法の原理（Ⅰ）」；赤羽恵子（上智大学講師）・松本尚子（国際ディプロマ所有者）・松本静子（国際ディプロマ所有者）「モンテッソーリ教育法の原理（Ⅱ）」；K・ルーメル（上智大学教授）・尾形利雄（上智大学教授）「伝統的幼児教育とモンテッソーリ教育」。実践科目A：赤羽恵子（上智大学講師）・松本尚子（国際ディプロマ所有者）・松本静子（国際ディプロマ所有者）「日常生活の訓練・感覚教具による訓練・数学的教具による訓練・言語的教具による訓練・その他（音楽、地理、生物）の教具による訓練」。実践科目B：「指定のモンテッソーリ子どもの家における実習」「図と解説による教材アルバムの作成」となっています。

このような上智大学内での上智大学の教員が中心となったコースの開講をハイドリッヒ師は彼の性格によってか、不思議なことに、表舞台にはまったく登場していません。しかし上智のコースの設置にはハイドリッヒ師とマリオ氏の間にくつもの書簡が交換されているのです。

さて余談になりますが、1970年コース開講では入講志願者数が多すぎて、数十人に入試で落第してもらわなければなりません。いまでも昔からモンテッソーリ教育に関わっている人と会う折、自分は40年前上智のコースの入学試験に落第したんですよ、と言われたりすることがあります。上智コースの初代委員長菊野正隆教授のお断りの手紙の下書きが残っているのを見つけましたのでスキャンしました。（書類7）たいへん興味ある、そしてある意味でユーモアを含んだ「手書きのメモ」ですので、ここでは筆者の説明はしないで、直接にお読みになられたらよいと思います。こういう試験の「落第」のお知らせの仕方もあるのですね。



## テレビドラマ 『マリア・モンテッソーリ—子どものための生涯—』

オムリ 慶子

(大阪キリスト教短期大学)

ドラマ『マリア・モンテッソーリ—子どものための生涯—』(Maria Montessori - una vita per i bambini) は、ローマにある「全国モンテッソーリ協会」(Opera Nazionale Montessori) の協力の下で史実に沿ったフィクションとして制作され、イタリアのテレビチャンネル Canale5 で2007年5月28日(月)と30日(水)の二日にわたって放映された。

ドラマは、モンテサーノ教授との恋愛と裏切り、マリオの誕生と離別など、プライベートでの苦悩を織り交ぜながら、モンテッソーリがいかにして医学から教育学の道に進み、子どもたちの教育に生涯を捧げたかが描かれている。これが放映されたとき、モンテッソーリを1000リラ札に印刷されている人物としてしか知らなかった女性たちも、モンテッソーリの女性としての生き方に共感し感動し、涙したようである。モンテッソーリを演じるのは喜劇俳優のパオラ・コルテッレージ(Paola Cortellesi)で、彼女はこのようなシリアスな役柄は初めてだったようであるが、彼女の美しさや感情描写のすばらしさは、モンテッソーリその人と錯覚するような見事な出来ばえであったように思う。

ドラマは、モンテッソーリが初めてローマ大学医学部に入学するところから始まる。教師(maestra)になれという父親と、マリアを励まして送り出す母親レニルデ。母親は、その後もマリアの授業ノートの整理を手伝ったり、最初の解剖学の実習でショックを受けるマリアを励ますなど、マリアを物心両面で支えている。

マリアは、解剖中に死体の匂いを消すため、タバコをふかしてもらうよう偶然頼んだ男性が、若き精神科医モンテサーノであった。マリアは夫から梅毒をうつされ死亡した女性の解剖をしながら、モンテサーノに「世間では、女性の生命より男性の気まぐれのほうが重いよ」と言うが、この言葉はその後の二人の運命を暗示しているかのようである。

---

その後マリアは、モンテサーノを中心とする精神病院で発達遅滞児の療育プロジェクトに参加するようになり、二人は次第に惹かれるようになっていく。ある時マリアは、子どもたちを測定するモンテサーノに、子どもたちには医学だけでは不十分で、教育が必要だと訴え、その言葉に動かされたモンテサーノは、子どもたちの教育をマリアに任せるようになった。マリアは、雨の日に子どもを中庭に出して雨を感じさせたり、さまざまな日用品を持ち込み、子どもたちに触れさせるなど、感覚を通して子どもたちを教育し、モンテッソーリ・メソッドの始まりにつながる生き生きした場面を垣間見ることができる。

医学部を卒業したマリアは、卒業式後モンテサーノの下宿に行き、二人は結ばれる。まもなくマリアは妊娠に気づくが、モンテサーノからは、今のプロジェクトをつぶさないためにも二人の関係は秘密にしておこうと言われる。

ある時ローマ大学学長は、マリアが作った移動アルファベットで Maria と綴った知的障がい児を見て、マリアにトリーノの教育学会で講演するように勧める。このトリーノの講演こそが、モンテッソーリが医学と教育学の融合を訴えた有名な講演である。

やがてマリアの妊娠がモンテサーノの母親やマリアの母親にも知られるところとなるが、モンテサーノの母親は、マリアは妻にふさわしい女性ではないと結婚に断固として反対。一方マリアの母親は、狼狽しながらもマリアを支える決心をする。マリアは、モンテサーノに言われるがままにローマを離れて出産するが、モンテサーノの気持ちはマリアから離れつつあった。

その後、マリアが教育した知的障がい児たちは、小学校の試験で健常児の成績を上回る結果をあげることができ、自分たちのプロジェクトに一区切りついたと考えるマリアは、モンテサーノに結婚をしてくれるように頼む。しかしモンテサーノは、他の女性との結婚が決まっていること、もう自分たちの関係は終わったことを告げる。

二日間泣き明かしたマリアは心を決め、ローマ大学学長とモンテサーノに、精神病院での仕事をやめ、教師になることを宣言する。学長に促されマリアを引きとめようとするモンテサーノに、マリアは「あなたに初めて精神病院に連れて行ってもらったとき、幼児期に愛されていた子どもは落

ち着いているということを教えてくれたことを覚えていますか？私は、母のいない子ども、勇気の持てない大人を見てきました。新しい世界を作るには子どもから始めないといけません。子どもは未来の大人ですから」と告げる。

1906年、マリアは、タラモからサン・ロレンツォの子どもの学校を作るための協力を依頼されるが、子どもの家の準備が思うように進まないマリアに、母レニルデはラファエロの「椅子の聖母子」の絵をプレゼントする。最初子どもたちはじっとしていず、無秩序が部屋を支配している状態だったが、あるとき小さな女の子を連れて入り、これが静かしのレッスンの始まりとなった。次第に子どもたちが落ち着き始め、子どもたちのサイズに合った棚や机、いす、陶器の食器など、今日私たちが知っている保育室の環境を整えていった。やがて親たちにせがまれて読み書きを教えるようになった子どもの家は成功するが、マリアの成功をねたむタラモによって、マリアは子どもの家をやめさせられた。

1914年、マリアが自分の母親だということを知ったマリオを、里親のもとから連れ帰り、甥として一緒に暮らすことになった。マリオの食事のマナーの悪さにマリアは驚くが、一緒に暮らせることになった喜びと、長い間離れて暮らして子どもの日常を知らなかった現実のギャップがここで描かれている。

モンテッソーリは、教育省の役人からイタリアの幼児教育に適用するメソッドはモンテッソーリ・メソッドではないことを告げられる。モンテッソーリは、自分のメソッドこそイタリア中に普及していると反論するが、役人はモンテッソーリに、「あなたの教育は、イタリアの子どもの現状に即していない。イタリアの子どもには母性的な養育が必要だ。あなたは母親でないから、あなたの教育の中に母性が感じられないのだ」と言われる。この役人の言葉は、この時期アガッツィ・メソッドによる母親学校がイタリアの幼児教育メソッドとして教育省に受け入れられていった史実を裏付けている。イタリアの教育省に絶望したマリアは、マリオとアンナ・フェデーリを伴い、すでにモンテッソーリ・メソッドを導入しているアメリカに出発する。新天地での成功と裏腹に、マリオは、自分のことを親しい友人にさえも息子だと紹介してくれないマリアに反発し、「僕には母親がない」という言葉を残してマリアの元を離れて行った。

---

場面は、ファシスト政権下の1927年イタリアに移る。モンテッソーリは、公教育省から、ムッソリーニがモンテッソーリ・メソッドへの支援を申し出ていることを聞かされる。医者になったマリオがマリアの元にもどり、以降マリアの片腕となって働くようになる。イタリア国家の肝いりでモンテッソーリ・メソッドによる師範学校が開校されるが、公教育省とモンテッソーリとの思惑の違いが目立つようになってきた。

社会党員になり、ファシスト政権に批判的な立場をとっていたマリオは、マリアにイタリアを出ることを勧める。しかしイタリアでのモンテッソーリ・メソッドの定着を望むマリアは、マリオの意見に耳を傾けず口論となり、そのことがきっかけでマリオは身元を明かさずにモンテサーノに会いに行く。身元不明の男が訪ねてきたことを不思議に思ったモンテサーノはマリアを訪ね、その男がマリオであったことを知る。モンテサーノはマリアに過去の許しを請う。ここでマリアは過去を吹っ切ったかのように、ムッソリーニの肝いりで作った師範学校の開会式をボイコットし、マリオとイタリアを出る決心をする。マリアとマリオが乗った汽車が、警官によって止められ、マリオがファシズム国家への反逆罪で捕らえられようとしたそのとき、マリアは警官にマリオが自分の息子であることを告げる。それを聞いた警官は二人を見逃すが、この警官は、かつてのマリアの教え子であった。

ドラマの最後ではマリオの声で、「子どもたちは、可能性を秘めた未来の人類だということを今は誰もが知っています。これはマリア・モンテッソーリ、私の母の言葉です」と流れ、幕となる。

はじめにも述べたように、このドラマはモンテッソーリの私生活を織り交ぜながら、モンテッソーリの半生を扱ったものであるが、もうひとつのテーマは母と子の絆であると考えられる。それは、レニルデとマリア、そしてマリアとマリオという2世代にわたる母と子。自分が生きることでできなかった道を、娘マリアに託し、娘に期待し、臨終のときまで娘を支え続ける母レニルデ。母の期待を感じつつも、未婚の母という道を選んだマリア。現在でも、結婚前の男女交際について北ヨーロッパほど寛容ではないイタリアにおいて、19世紀末のイタリアでは、マリアのこの行動は母に非常なショックを与えたと思われる。近年まで「名誉の殺人」（家族の名誉を守るために、合法的婚姻以外の男女関係を持った女性や、その結果生ま

れた子どもを殺すというもの)が存在したイタリアで、母レニルデの苦悩は、現在の私たちの視点からすると計り知れないものがあっただろう。その中で、出産を選び、子どもを里親に託すという苦渋の選択をしたマリアは、母として自分の手で育てることができなかった息子へのまっすぐな愛情と、一緒に過ごしていない期間の長さから心が通わないもどかしさの中で、マリオの反発に苦しめられる。ドラマの中では、モンテッソーリをとりまく母子関係の他、モンテサーノとその母、教え子とその母、というように母親が子どもの人生に深くかかわる様子が描かれている。そしてモンテッソーリが登場人物との間に交わした数々の言葉が、子どもの家の象徴であるラファエロの「椅子の聖母子」と絡み合い、母と子の絆とは何なのかということを私たちに問いかけている。

『100年あとの、家と学校での子供の食生活について  
のマリア・モンテッソーリのレシピ』  
“Le Ricette di Maria Montessori-cent’anni dopo”  
alimentazione infantile a casa e a scuola Fefe Editore, 2008

ドメニコ・ヴィタリ, S. J.  
(日本モンテッソーリ協会副会長 イグナチオ教会)

『100年あとの、家と学校での子供の食生活についてのマリア・モンテッソーリのレシピ』“Le Ricette di Maria Montessori-cent’anni dopo” alimentazione infantile a casa e a scuola (Fefe Editore, 2008) というこの本は、1909年最初に出版された『モンテッソーリ・メソッド』の中の「日常生活での訓練」“Esercizi Della Vita Pratica”という食生活についての部分と、何人かのモンテッソーリの研究者や、食生活の専門家、さらにマリア・モンテッソーリの孫のマリレーナのコメントから構成されています。

まず、これを読んで感じたいいくつかのことを、皆さんと分かち合いたいと思います。

- (1) 数年前から教育界では、子どもの単なる食生活と言わないで、「食育」という言葉が使われるようになってきました。言い換えれば、食事は単に体を養って必要な栄養を与えるだけではなく、教育の場であって、子どもの精神性を育てるのに大切な場であることを意味するものとして、少しずつ考えられるようになったのです。モンテッソーリは100年前にそれを理解し、教育の大事な部分として考えていました。
- (2) モンテッソーリがサン・ロレンツォ地区に送られた時に、悲惨な状態が彼女の目の前にありました。アラトリ氏 (Alatri) がよく説明しているように、衛生や栄養や教育など、あらゆる子どもに必要なことが欠けていました。どちらかといったら、まず食べさせるだけが精いっぱいの状態であったはずですが、モンテッソーリは給食のすべての側面を、教育のために生かそうとしました。  
まず子どもたちが、「子供の家」に来たときは、手や服などをお母

さんの前で検査してもらい、何か足りないものがあれば、あとでお母さんたちに丁寧に指摘しました。給食をいただく所は少しずつきれいにして、単なる教室ではなく、サラ・ダ・プランツォ (Sala da Pranzo) という食事のために特別に整った部屋を用意しました。そして、食事を作るときは、食卓の準備と片付けなどに子どもたちを関わらせることにしました。「子供の家」(Casa dei Bambini) だけではなく、各家庭でもそのようにすることを求めています。早く急いで飲み込む食事ではなく、日常生活の流れの中できちんと据えられた、毎日の大切な習慣としてとらえています。

- (3) マリア・モンテッソーリは「子供の家」で、ちょっとした庭を野菜や果物などを育てるために設けるように奨めています。子どもたちが種を植えたりして、忍耐強くその芽生えを待つ、また自然の不思議なところに驚きをおぼえるように、またそれと同時に食事をいただくのには、多くの働きがあることも体験するためでした。
- (4) 1989年にイタリアでカルロ・ペトリーニ (Carlo Petrini “自然においての教育”) によって、スローフードの運動が始まります (『スローフード・バイブル』NHK 出版 2003年)。それはもう今では世界中に広がっている運動です。このカルロ・ペトリーニが執筆している (p.57) 文章の中で、彼はマリア・モンテッソーリの教育とスローフード運動との接点を指摘しています。

野菜・果物などを育てる庭を、このスローフード運動もよく奨めています。さらに、その地域とその時期の産物、どこかで作られたものではなく、自分のやり方・作り方を重んじて、作物を楽しくいただくことが大切にされている運動です。このようにして、食事をいただくだけでなく、それが実った自然、またそのために働いた人々、またその伝統を伝えた方々とのつながりが自覚されていきます。言い換えれば、食生活がそれぞれの文化に根を下ろしているものとして考えていくことが大切なのです。

- (5) エレーナ・ドンペ (Elene Dompé イタリア・モンテッソーリ協会) (pp.17-23) は、食生活がモンテッソーリの教育の特徴を生かすものとして、次のように説明しています。

①子どもの自立を育てる機会の多い場です。いろいろな道具の使い

---

方を見せることによって、子どもたちが選び、自分たちで自由に使うことができる。

②環境作りについても同じようなことが言えます。食卓の準備・片付けも子どもにとって、大切な習慣になり、自分が関わったものとして食事をいただくのです。さらに、どこの机で食べるか、どのような友達と一緒に座るか、自分で決めることができるようにすれば、子どもにとって選択する訓練にもなります。

③食べる物についても、食べる野菜・果物を自分の働きによって、また育て、実らせることによって、作る料理とさらに関わって、その体験が広がっていくことも指摘されております。

(6) モンテッソーリの『モンテッソーリ・メソッド』の中「レシピ」そのものについて、ピエートロ・ミヤチョ氏 (Pietro A. Migtiaccio) はいろいろ指摘を行っております (pp.49-54)。モンテッソーリの食物についての誤解や子どもの栄養にならない物も見られます。根拠のないレシピもあります。しかし全体として評価するなら、モンテッソーリの食事は生活の中での取り組みも今なお現代的であり、素晴らしい教育の場であることは間違いのないとも指摘しております。それなのに、『メソッド』の「レシピ」についての部分「日常生活などでの訓練」は、1909年と1913年の版にはちゃんとでておりますが、1950年の版『子どもの発見』には完全に省かれております。スペインのバルセロナの時期に大切にされた宗教教育の訓練の部分も、似たような省略をされております。これは本当に残念なことです。というのは、食事を伴う教育、庭での野菜・果物などを育てる仕事、また宗教的な体験も、教育のためにはとても豊かな場になるはずだからです。その特徴を目立たせるのに有意義ではないかと思われまます。

(7) マリア・モンテッソーリの孫で、大マリオの娘であったマリレーナ・ヘンニ・モンテッソーリ (Marilena Henny-Montessori) は、「もう一人のマリア」(pp.63-70)の中で、私が今まで考えもしなかったマリア・モンテッソーリを紹介してくれています。彼女がゴージャスな服や、食べ物、生活様式を好んで楽しんでいる姿です。タバコもついつい吸ってしまって、イタリア人風に本を書きながら、口の

わきにくわえて吸い続ける姿。きれいに飾りがついたボッキーノを使ってタバコを吸い、イタリアのトランプを昼食の後に孫たちと一緒に楽しんでいました。孫がわざわざ勝たせてくれて、彼女を喜ばせてくれるのです。それなのに、マリレーナは、祖母モンテッソーリのような才能と理解力などに恵まれた人はいないし、自分は89歳になっても、生き生きとした形で祖母の魅力は薄れないで保たれていると語っています。

これは、小さな本ですが、料理を通してマリア・モンテッソーリを違う側面から理解させてくれます。同時に私たちの、モンテッソーリ教育に欠けているところも、示しているのではないのでしょうか。

---

クラウス・ルーメル著 フランツ・J・モール編

## *Von Koeln nach Tokyo Lebenserinnerungen* 1916-2009. Bachem, Koeln (Germany), 2009.

江島正子  
(明和学園短期大学)

### 1. 著者について

*Von Koeln nach Tokyo Lebenserinnerungen 1916-2009* (ケルンから東京へ 回想記 1916-2009) の著者は日本モンテッソーリ協会の会長・理事長を1977年から2007年まで30年間も務められ、そして現在もなお、日本モンテッソーリ協会の名誉会長であられて、日本のモンテッソーリ教育の権化のような方である。わが国でモンテッソーリ教育に関心がある人ならば、本書の著者を知らない人は誰もいない。

著者は、約半世紀ほど前、「日本モンテッソーリ協会」(JAM) が設立される準備委員会段階でモンテッソーリ教育と関わりをすでに持たれ、わが国でのモンテッソーリ教育の推進のために大きな努力を重ね、貢献された。そう、上智大学の教育学科の教授で、日本において最初にキリスト教を布教したフランシスコ・ザベリオを同志とする、そしてドイツ・イエズス会から派遣された宣教師である。

本書を読むと、93年に及ぶ人生において出会った出来事の中で、1945年8月6日の広島原爆の被爆と同様、もしかしてそれ以上に、モンテッソーリ教育との出会いは著者にとって大きな意味を持つと言っても過言ではないようだ。なぜならば、本書の本文中の随所に、さらに索引にモンテッソーリ教育関係者の名前が記されているから。

現在も、NPO(特定非営利活動法人)東京モンテッソーリ教育研究所モンテッソーリ教員養成コースのコース長や講師、東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター(AMI国際モンテッソーリ協会)の講師、その他にも広島・山口モンテッソーリ教師トレーニングコースや長崎純心大学のモンテッソーリコース等にも著者の名前が講師として掲載されているように私たちモンテッソーリアンはいろいろとお世話になっている。

5年前の88歳の米寿のお祝いのときに、赤羽孝編による『来日68年の

回想』が学苑社から刊行されているが、本書はそのドイツ語の訳本ではない。フランツ・ヨーゼフ・モール (Fr. Franz Josef Mohr) 編の最初からドイツ語で書かれた、全くの書き下ろし新書である。本書の最初にドイツのケルンの枢機卿ヨアヒム・マイスナー (Kardinal Joachim Meisner) による「緒言」や著者の「序文」の中で本書の由来について述べられているが、ここでもまず、それについて紹介しなければならないだろう。

## 2. 本書の由来について

著者がドイツ管区からのイエズス会士で、出生地がケルンであることから、米寿の祝賀会に祝辞を送られたケルン教区枢機卿マイスナーは日本の『来日 68 年の回想』の出版を耳にして、ドイツ語による出版を申し出た。それで最初そのドイツ語訳をと考えたが、日本人が編者だったので日本人に関心があることが記述されている。しかし日本人に関心があることが必ずしもドイツ人に関心があるとは限らない。それで白紙に戻し、ドイツ人の読者を対象にした、もう一つの『回想記』の構想が試みられ、本書が刊行されたのである。

ケルン教区からドイツ語の回想記を出版するように計画されたその頃、筆者は 2007 年 11 月 19 日に約半世紀にわたる居住地であった上智大学構内 SJ ハウスを離れ、聖なる従順の名のもとに 24 時間介護付きのロヨラハウスに移った。これは不幸中の幸いであった。SJ ハウスではなにかと多忙であったのだが、良かれ悪しかれ暇ができて、執筆のための時間が取れた。しかしそれまでちゃんと保存していた手帳や、数百に及ぶ辞令の記録無しに 93 年を超えた人生を振り返って文字化するのは至難の業であったという。しかし、毎日、夕食後の夜 8 時から 10 時までパソコンに向かって思い出を入力した。プリントアウトして読み返すと、70 年以上も祖国ドイツを離れている著者にとって、現代のドイツ人に読んでもらうのには自信がない。

ひとまわり若い親友のモール師が用事で来られた折、そのことをもらすと、モール師はチェックしたり等、つまり編集の仕事を引き受けてくださるとおっしゃった。こうして入力し、プリントアウトした思い出話を読んでもらった。彼は原稿の思い出話を生かし、ドイツ語を現代風に訂正し、公に出版できるように練り直してくれた。その際、変更した内容で良いか

---

と了解を求め、思い出話では年代が不明確なので、そのつど大学やSJハウスの資料室から明確な年月日を探し出してくれた。ロヨラハウスの老人ホームに持って来て、これで良いかといつも確認を求めた。また、より正確な記録を捜すため、ボン近郊に住んでいる公務員の甥や、ベルリンにいる姪、その他の親戚や知人にメールを出して多種多様な形で情報収集をし、大勢の人に協力を求めてくれた。

写真についても幼少期や、少年期のものはあまり見つからなかったが、やっと見つけたのもドイツ一流出版社から出版するにはボヤけていたり、キズがついて破れていたり、折れていてはダメということで、バックム (Bachem) 出版社とモール師が関係するケルン教区図書館のシュミット (Schmidt) 専門家によって、そんなにきれいでない70年、80年も昔の写真までも印刷できるようにみんなが努力してくれたのである。さらに校正ゲラはノルベルト・トリペン教授 (Prof. Dr. Nobert Trippen) やハインツ・フィンガー教授 (Prof. Dr. Heinz Finger) にも査読のようにして読んでもらった。したがって本書は「お墨付き」の著作である。

### 3. モンテッソーリ教育におけるコスミック理念の受肉化

モンテッソーリ教育の理論について学ぶと、マリア・モンテッソーリが子どもの成長を「発達の4段階」の図で表すことを私たちモンテッソーリアンは知っている。この発達の4段階はイタリアの子どもにも、日本の子どもにも、ドイツの子どもにも、世界中のどこの子どもにも該当する、ユニバーサルな子どもの「発達の法則」である。

モンテッソーリのコスミック理論によれば、神さまがコスモスを創造した。人間はコスミックな宇宙に創られた、神さまから愛された創造物である。子どもが発育、発達するのは、神さまが創造された「生命」の自然の法則に従っているのである。私たち親や教師、大人はこの子どもの生命に内在する法則を科学的に研究しなければならない。モンテッソーリ教師は子どもの生命を援助する、という大きな使命を果たしているのだが、本書を読むと、著者の乳幼児期から成人期への人間形成は、モンテッソーリの「発達の4段階」の良い事例になっているように思われる。

### (1) 幼年期

著者が誕生した1916年（大正5年）当時、ドイツ VS フランスのベルダン合戦があった。35万人のドイツ人が35万人のフランス人を殺した。地方銀行支店長であった父親セバスチャンは健康上の理由によってだが、この第1次世界大戦の戦場へ送られていない。

2008年、2009年のいま、世界中で猛威をふるう新型インフルエンザ（豚インフルエンザ）だが、著者の幼児期は世界中にスペイン風邪が大流行し、弟マックス（Max）が生後3カ月でその犠牲者になって神さまのもとに召されている。母親から「マックスは神さまの天使になった」と言われ、家の近くにある墓地に行き、花を活けて祈ったことを思い出している。

そのころ保育園へ行ったが、ずっと泣きっぱなしで、周りの人はあきらめ、またビタミンD不足で少し曲ってしまった脚を治療する意味をかねて医者のお勧めの下に、保育園の代わりにライン河畔によく連れて行かれ、母親が手仕事をしている横で太陽を浴びながら岸辺の砂と遊んだという。このような幼年期の原体験は、ムネメとして著者のその後の人生を方向づけているようである。

### (2) 児童期

5歳のときにもう、著者は住んでいた地区のカトリックの小学校に通う。全教科を担当したのは、小学校教師に成りたてのほやほやのクリザンテン・ステーク先生（Herr Chryanteen Steeg）であった。すばらしい先生で、彼から大きな感化を受け、彼の亡くなった後にご家族の方と連絡し合っていた。

また、ある日の午後、サッカーボールで遊んでいたら、見知らぬ人から道を聞かれた。そこはかなり遠かったが、知っていたので連れて行ってあげた。お礼にチョコレートをもらった。自宅に戻ると、もう夕方6時になっていた。家族全員は心配していた。そして、おしりをぶたれた。

### (3) 思春期

ドイツの学校制度は「3本立ての複線型」である。子どもは10歳で、大学教育を受けるかどうかを決めなければならない。両親は子どもの教育に対して野心家であって、兄や弟と同じく著者も、大学進学を準備するギ

---

ムナジウムを選択することになった。ポンの国立バートベン・ギムナジウムに市電で、9年間、通学した。特に当時、ギムナジウムは学年末試験の結果に厳しく、落第する生徒は稀でなかった。しかし、著者は一度も落第していない。ただ、このギムナジウム時代に人生最大の悩みに遭遇する。話し言葉の問題である。

小さなバリと称される都市ボンと、両親と生活していたオーバーカッセル（ラインランド）は距離的には市電で20分位しか離れていなかったが、そこは「白雪姫」の童話や「ニーベルンゲン物語」とライン河畔で深い森々の木々に囲まれた古代ゲルマン神話発生地であった。しかし、日常生活で話す「会話」はまったく異なった。ギムナジウムで毎日、9年間、ラテン語を学んだ。毎日、6年間、古代ギリシア語を学んだ。週に3回、7年間、フランス語を学んだ。そこで問題は無かった。しかしオーバーカッセルの人たち（両親も含めて）の日常会話は、すごい「訛のある方言」だった。著者も方言を喋る。友だちから「田舎っぺ」に見られるのが嫌で、方言から標準語に改めようといへんな努力をしたにもかかわらず、方言は結局消えない。93歳になっても。今も初対面の人からは、「あなたはラインランド出身者ですね」と言われるという。これはモンテッソーリ教育の、言語での、いわゆるネブラエの良い事例になろう。

その他に数学や歴史等の科目もどんどん教育課程に加わり、1935年にアビツゥア（ドイツの高校卒業証と大学入学許可証）を取得した。アビツゥア取得は、それまで自分を慈しみ育ててくださった温かい両親のいる家庭生活との離別を意味した。なぜなら、思春期はモンテッソーリ教育によれば子どもは崇高な理想を持ち、憧れに向かって出発する時期だから。

16歳になった夏の昼下がり、自宅の庭のリンゴの木の下でブランコに揺られながら、愛読していた伝記『聖イグナチオ』への憧れで、胸が熱い思いに溢れた。ヒットラーの時代的背景の中で家族にもなかなか言えなかったが、少しずつ密かに準備を始めた。ギムナジウム通学途中、イエズス会へ入会面接も受けた。ドイツ管区の管区長から入会許可を得た。

それから自分の将来の決心を両親に話すと、母親は黙って泣いた。父親は怒った。ダメだと言った。しかし、どうせイエズス会の厳しい生活が耐えられるはずがないから、2週間だけ許すと、許可してくれた。2週間がもう74年間になって、今もイエズス会が受け入れてくださっていること

に感謝していると著者は書いている。イエズス会士として召命への旅立ちの日、ボンの駅に父親が見送ってくれ、大人になった「巣立ち」のお祝いに、父親愛用の葉巻2本を手握らせた。汽車は出発し、目的地到着。新生活の開始。この葉巻は修道院の庭で涙を流しながら吸ったという。

その後、小学生の頃にステーク先生から聞いた「ふじやま」「げいしゃ」の国ヘキリスト教宣教希望者の募集があった時すぐ名乗り出て、20歳の学生が、日本の土になる覚悟でシベリア経由鉄道と満鉄に乗り、船で下関に到着したのが、1937年2月17日。モンテッソーリは思春期の事例として、『子ども—社会—世界』（モンテッソーリ著 K・ルーメル他訳 ドン・ボスコ社 1982年 1996年 69頁）で聖テレジアのことを書いているが、著者にもそれが受肉化（インカーネーション）されているのが見てとれる。

#### (4) 成人期

神学や哲学を日本で学び、広島被爆直前に司祭の叙階の秘跡を受ける。その後アメリカのデトロイト大学や故郷のボン大学でも大学生時代を過ごしたのち、上智大学の教授になった。教育学を学生に教えた。

1960年代、理事長やカトリック幼児教育団体の理事長の職にあって、それまで自身がモンテッソーリ教育の良い事例であったのが、今度は直接モンテッソーリ教育との出会いがあって、いつの間にか日本におけるモンテッソーリ教育運動の中心人物に押されてしまう。

なぜだろう。モンテッソーリ教育の、思春期の理想や憧れ以外、もう一つの特徴、コスミック理念と関わりがあるようだ。モンテッソーリのコスミック理念は、特にインド滞在中(1939～1946)に展開された考え方で、「全人類は一つ、一つの社会で、人類は一つ」（『子ども—社会—世界』前掲書 153頁）という考え方である。英語で“Universal Brotherhood”と言う。

著者は一方的に宣教師、または教授として、キリスト教を伝えたり、大学で講義をしたりした訳ではなかった。モンテッソーリ教育の“Universal Brotherhood”の理念が常に著者の生活行動の指針であったのだ。人類は、同じ一つの家族として、お互いに、いろいろな分かち合いがある。国際モンテッソーリ協会の世界会議では、最近、茶道や、折り紙や、華道など多文化を紹介するコーナーがある。西洋のイタリア生まれの教育メソッドは東洋の日本の「道」を積極的に受け入れる努力をしている。

---

それと同じく著者は、大学教師ではあるが積極的に学生の中に入っていった。上智新聞のクラブ活動の中へ。日本のモンテッソーリ教育の運動の中へ。本誌第 41 号、第 42 号にも著者は「モンテッソーリ教育 40 年を顧みて」を執筆されているが、そこにはモンテッソーリの“Universal Brotherhood”の考え方が基底になっているのが伺える。

このように本書はモンテッソーリ教育との関連性から見ても、とても興味ある、ドイツ人宣教師の回想記である。ドイツ語なので、日本人モンテッソーリアンは読めないから、と言われてしまうかもしれない。しかし、珍しい、質の良い、昔の写真を見るだけでも楽しさを与えてくれる。読者がドイツ語を習って直接読むことができるようになるか、または本書の邦訳版が出版されるか、どちらが早くなるか楽しみである。

相良敦子 著

# 『モンテッソーリ教育を受けた子どもたち — 幼児の経験と脳』

野原 由利子  
(名古屋芸術大学)

この書は次のような構成になっている。

はじめに

第一章 モンテッソーリ教育を受けた子どもたちの例

第二章 「生涯にわたる人格形成の基礎」とは何か

第三章 モンテッソーリ教育のどの経験が脳に効いたのか

第四章 誰もが取り入れられるモンテッソーリ教育のエッセンス

あとがき

以下に各章の概要を示し、後に若干の考察をしてみたい。

はじめに

ここでは、この著書をまとめるに至った動機が示されている。

著者は、モンテッソーリ教育を受けた人たちについて語られる事実の中に人間としての美しい側面が次々出てくるので、「人間が本来持っている美質」、「人格が育つ」とはこういうことなのかと感動し、モンテッソーリ教育の成果は「できる、できない」という基準や社会的成功を評価する教育観とは異なる次元で語られるべきと考えていた。

1999年12月「幼児期には2度チャンスがある」、2000年4月「お母さんの発見」を発表、最終章にモンテッソーリ教育を受けた子どもの小学生となった姿を紹介したところ、各地から自分の経験と一致しているとの感想が寄せられた。

2001年から約700人、2008年末から2009年初めにかけて約300人の調査を行った結果、自分の夢を実現する過程で遭遇する困難を乗り越える時、ほとんどの人が幼児期のモンテッソーリ教育の経験を何らかの方法で

---

役立てていたことがわかった。

そしてその頃、アメリカではビル・ゲイツをはじめ多くの有名人がモンテッソーリ教育を受けているとの情報も得た。それまでは「人間の美質」の現れにだけ注目していたが、その美質は「世間的成功」と無縁ではないという事実にも気づかされはじめたという。

社会的成功やそれを可能にする能力を重視するのではなく、根底にある人間としての良い在り方、生き方を支える力を見極めたい。そして、幼児期に受けたモンテッソーリ教育のどんな経験が良かったのか、子どもの脳の中で何が起っていたのか、などについて脳科学者にたずねたいという思いから、サブタイトルを「幼児の経験と脳」としたという。

## 第一章 モンテッソーリ教育を受けた子どもたちの例

1985年の『ママ、ひとりですのを手伝ってね!』で、モンテッソーリ教育を受けた子どもたちに共通する特徴（母親や教師からの聞き取り）を次のようにまとめた。

- ① 順序立ててものを考えることができる。
- ② 何をするにも、計画を立て、順序を踏んで、着実に実行する。
- ③ 段どりが良い。
- ④ 先を見通すことができる。
- ⑤ 一から出発する。
- ⑥ 省略しない。
- ⑦ 状況の読みとりが速く、臨機応変に対処することができる。
- ⑧ わずかな差異に気づき、道徳性が高い。
- ⑨ ひとりでたじろがない。責任ある行動ができる。
- ⑩ 礼儀正しい。

2001年「日本モンテッソーリ協会（学会）全国大会シンポジウム」で、脳科学者が、脳の前頭連合野（前頭葉の前半部）は「自己意識、自己抑制」をつかさどる座であり、また目的に向かって現在の自分をコントロールする「目的志向性」という重要な機能も持っているから、前頭連合野を使うということは、自分の行動をコントロールし、周りの人に気を配り、集中して考え、未来を見通し、好奇心を発揮することである。前頭連合野こそがヒトを人間たらしめる脳領域であることは間違いなし、逆に、前頭連

合野の働きが「人間らしさ」をつくるとも言えるとした。

そして上記の10項目のように育てている子どもは前頭葉が育っていると言える、との見解を示した。

日本にモンテッソーリ教育がリバイバルした1960年代から脈々と実践を重ね、小・中・高・大学生、そして社会人になって現している姿を知ることによって、幼児期の教育の何が良いのか、なぜなのかを明らかにしたい。そのためには、今は、現場における教育実践からのエビデンス（証拠）を脳科学者に提示していくことが大事であるとし、2001年～2007年、700名のアンケートより得た共通の特徴を、人格面、生活面、人間関係面、学習・能力面、その他の面にわたって整理した事項を示している。

## 第二章 「生涯にわたる人格形成の基礎」とは何か

2000年前後、小学校入学時の子どもたちの「先生の話を受けない。じっと座っていない」など規律に従えない落ち着きのない状態が問題視されるようになり、小学校以前の段階にどんな経験をしなければならなかったか、どのように経験すべきだったかが問われるようになった。

2009年施行された「幼稚園教育要領」および「保育所保育指針」の冒頭に「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う」と掲げられたが、その方法や根拠については明らかではない。

モンテッソーリ教育は、幼児期にしなければならない経験についての知識、どのように経験すべきかという方法、それを経験した結果についてのデータを持っている。

0～3歳の「幼児前期」は各部分が別々に発達するが、3～6歳の「幼児後期」はすべての部分が共に働いて、組織化され統合されていく。この時期に全人格を傾注する活動に出合うたびに、内面のエネルギーは統合される。集中して行う活動を幾重にも経験していくうちに、子どもは正常化されていく。

幼児前期の正常化への歩みの方法は自分でできるよう工夫することである。

- (1) 接し方：助けすぎない、待つこと
- (2) 環境：自分でできるように工夫すること
- (3) 提示：ゆっくり見せること
- (4) 適切な言葉がけ：人格や気持ちを無視した物言いはさけること。

---

幼児後期（3～6歳）の正常化への方法は次のようである。

- (1) 「動き」に目をとめる。
- (2) 作業に誘い、応じたら、その「動き」をゆっくり、はっきり、してみせる。
- (3) 提示を見ていた子に「やってみる？」と誘いかけると、取り組み始める。
- (4) 何度も挑戦する。
- (5) 繰り返しながら、深く集中していく。
- (6) とことんやり抜いたら、突然パッタリとやめる。
- (7) 満足感、充実感を味わう。

反対に「0～3歳にできあがった欠陥が、3～6歳の期で無視されるか処理を誤るかして矯正されないと、その欠陥はそのまま残るばかりでなく、さらに悪化する。6歳以降はその欠陥は、精神生活と知性に影響を与え、6～12歳で現れる善悪の道德感の未発達や知能の遅滞をもたらしてしまうのである。」（「創造する子供」より要約）

第三章では、「モンテッソーリ教育のどの経験が脳に効いたのか」を考察している。

著者は、モンテッソーリ教育を受けた子どもたちに共通する特性として、

- ① 順序立てて、ものごとを考えることができる。
- ② 何をするにも、計画を立て、順序を踏んで、着実に実行する。
- ③ 段取りが良い。
- ④ 先を見通すことができる。
- ⑤ 状況の読みとりが速く、臨機応変に対処することができる。
- ⑥ ひとりでたじろがない。責任ある行動ができる。

などを挙げ、これは前頭連合野がよく育っている状況であるとしている。前頭連合野の働きとは「時間的・空間的関係の記憶に基づいて、言語的・空間的プランを生成し、プランの実行に際しては、状況に応じて反応を切り替えていく働き」としている。

そしてモンテッソーリ教育においては「提示」をよく見ることと、それを記憶にとどめて実行することの中で育つとしている。

つまり、あらゆる日常生活の行動を目的に沿ってきちんとできるように、

教師が「提示」という教え方で丁寧にして見せ、子どもがそれをよく見て、自分で実行するよう努めているとき、脳の運動前野の腹外側部にある「ミラー・ニューロン」が生き生きと活性化される。

また、ある目的のある行為をするとき、一連のプロセスを「記憶にとどめる」ことが必要であるが、前頭連合野の46野の「ワーキングメモリ」は、必要な情報をいったん集め、その情報をもとに前頭連合野が行動を決定し高次運動野に指令を伝える。

「提示」をよく見ていたとき「ミラー・ニューロン」が働き、ワーキングメモリを働かせながら「お仕事」をする日々を積み重ねるうちに、前頭連合野の神経回路が豊かになるとしている。

そして、「正常化」にとって特別重要なものは、作業であって、他のものでは代用できない。人間は、手を働かす作業によって、自分を形成するとしている。

また、集中してものごとを達成できた際の「快感」はドーパミンの分泌によるものであるが、脳はドーパミンが出た時の行動を記憶し、繰り返し快感を再現しようとする。同じ行動を繰り返し続けていくことで、新しい神経回路網ができる。そしてこの「変わる」経験をした子どもは、それを契機にどんどん世界を広げていくとしている。

#### 第四章 では、これまでみてきたモンテッソーリ教育のエッセンスは、誰もが取り入れられるもの

としている。0～3歳の「日常生活行動」を教育の場として教材化し、意識して実践することは「初めての本格的学習体験」であり、「日常生活行動を身につけることを通して覚えることの喜びを体験した脳は、効果的な学習（情報処理）回路がしっかり形成され、高い学習能力をもつ脳につながる。日常生活行動は、脳の旧皮質や古皮質という本能や生命維持機能が主導権を握っている部位と関連し、ここをつかさどる本能を足がかりとして、成長とともに知的機能を発揮していく。」（仙台白百合女子大教授 中村裕子）

3～6歳は、日常生活の一つひとつの行為を自分でできるように援助することであり、「新皮質と旧・古皮質の関係の強化・発達を促す」ことであり、学習機構を構築する課題に取り組みさせることである。

---

そのためには、「自分の自由意志で選ぶ」ことができるような機会を提供する、「自分のリズムで繰り返し行う」ことを認める、「集中を妨げない」、「自分で決めた目標に向かう生き方を支持する」、「その子なりの充実感を祝福する」などの大人の意識変革こそが必要であるとしている。

## 考 察

以上、この書の目的は、「モンテッソーリ教具」、「モンテッソーリ教師」、「モンテッソーリ・クラス」がそろい、「モンテッソーリ教具」の全体系を忠実に実践する「モンテッソーリ・メソッド」の有効性について分析することにあるのではなく、教具が無くても、教師養成を受けていなくても、誰でも利用することのできるモンテッソーリ教育の「子どもの見方・たすけ方」をあきらかにし、それが1990年代以降急速に発展してきた脳科学の知見で検証され得るものであることを証すことにある。そのため、日常生活練習、感覚教育、算数教育、言語教育、文化教育のすべての分野におけるモンテッソーリ教育の成果について、脳科学の研究成果との照合を行っているものではない。

そのためには、ガードナーの提案した、①言語的知能、②論理数学的知能、③音楽的知能、④身体運動的知能、⑤空間的知能、⑥対人的知能、⑦内省的知能、⑧博物的知能などの多重知能理論の成果も参考にしなければならない。

また幼児期だけでなく、児童期、青年期、成人期にいたる教育の質と脳の発達の関係も研究されていかなければならない。

とりわけピアジェの知能の発達段階説、すなわち0～2歳は感覚運動的水準、2～7、8歳は象徴思考段階、7、8～11、12歳は具体的操作思考段階、11、12歳～成人は形式的操作思考段階を特徴とするとして、それぞれの段階の発達研究を深めた成果からも学ぶ必要がある。

象徴的思考段階におけるモンテッソーリ教育の在り方への研究がさらに進展する中で、科学の分野だけでなく、音楽・絵画・身体表現など芸術の分野におけるモンテッソーリ教育の理論と実践もさらに充実し、モンテッソーリ教育を受けた子どもたちが、①共通した「生きる力」をもっていること、その力を土台として、②一人ひとりが自分なりの目標をもって、個性豊かに力いっぱい生きている、という共通性と個性の関係についての報

告もさらに多彩に展開されていくものと考える。

相良先生は、モンテッソーリ教育の成果を、今般の脳科学研究の成果に照らして検証してみるという、難しい、勇気ある一步を踏み出され、今後のモンテッソーリ教育の研究と実践の進展に大きく寄与されたが、これらの貴重な記録と考察が脳科学の研究分野にも活かされていくことを期待したい。

河出書房新社（〒 151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2）

2009 年 12 月、210 頁、定価 1,400 円

---

ビアンカ・マッテルン著  
『高齢者のためのモンテッソーリ教育』

江島正子  
(明和学園短期大学)

本書の著者のビアンカ・マッテルンさんはドイツのモンテッソーリアンである。

彼女のモンテッソーリ教育のディプロマはわが国で普通考えられる3～6歳児や、0～3歳児や、0～6歳児のためのモンテッソーリ・ディプロマではなく、障害児のためのモンテッソーリ教育のディプロマである。ドイツのミュンヘン在住のProf. Dr. テオドール・ヘルブルック (Theodor Hellbruegge) の教員養成コースで取得した。その後、彼女はやはり南ドイツにあるパッサオ市で、介護福祉士として、老人介護の仕事をする。

## 1. モンテッソーリ教育と高齢者

老人介護の施設は「ボニファティウス老人ホーム」という。本書はこの「ボニファティウス老人ホーム」で彼女自身が実践した記録である。現在、邦訳中である。

筆者は2009年5月1日の午後、大阪のホテル・ニューオータニの喫茶室でビアンカさんとお会いし、老人が脳梗塞や脳卒中やパーキンソン病で、あるいは老衰などで障害を受けたり、または失われてしまった身体的・精神的な機能を回復させるリハビリが、どのようにモンテッソーリ教育法によって実践可能かについて時間を忘れて話し合った思い出がある。

本書の中でビアンカさんはマリア・モンテッソーリの人物像について、「マリア・モンテッソーリは第一に優秀な医者で、なおかつ問題点をよく理解し、分析し、自分自身から問題の解決に努力した女性科学者でした」(p.11)と述べているが、ビアンカさん自身はモンテッソーリ教育による障害児教育を老人のリハビリに体系的・組織的に適応して、その記録を本の形にまとめた最初のモンテッソーリアンである。

ビアンカさんは、老人介護に関する刊行物は多く出版され、介護についての情報、状況の記録は数多くあるが、その内容はあまりにも非人間的

で、粗雑で、人工的であるように感じられると言う。彼女は、老人がいろいろなことができなくなっても人間の尊厳は重視されなければならないと基本的人権遵守の立場に立ち、モンテッソーリ教育の教育原理による老人介護がいかにも有効で、役立つかを訴える (p.9)。具体的には、老人ホームの施設で「老人がもうすでに克服したこと、新しい環境でどのような困難が起こるかということが大抵無視されている。そうした老人の新しい環境における状況の中で、老人は幼児のような扱いを受けています。—理由は、老人ゆえに、いくつかの活動ができないと見られ、そしてまた、そのような活動がまったく不可能と考えられているからです。それで老人こそは、精神面でも、そして一日の生活の過ごし方でも、援助をとっても必要としている」(p.7) と老人のために弁護する。

## 2. モンテッソーリ教育の「縦割り保育」と「統合教育」

老人ホームには、同じ年齢の人たちばかりがいる。すなわち、だいたい70歳～90歳の老人が入居し、共同生活をしている。幼児教育に当てはめて言えば、「横割り保育」である。

モンテッソーリは「横割り保育」を批判し、「縦割り保育」を擁護する。なぜならば、人間は社会的生物なのだから。私たちの社会にはいろいろな人がいて、そこに調和がある。ちょうどお花畑には白百合、バラ、コスモス、菊、ひまわり等…と多種多様なお花が咲き、それが美しいのではないか。モンテッソーリ教育を行っている保育所や幼稚園はすべて「縦割り保育」である。

3歳から就学前の幼児たちが同じクラスで、年長さんは年少さんを助け、年少さんは年長さんを見る。モンテッソーリ教育では「縦割り保育」は重要な教育原理である。

ピアンカさんも、老人のためのモンテッソーリ教育において、モンテッソーリのいう「縦割り保育」の立場を擁護する。「横割り保育」の老人ホームの弊害は、入居者たちは同じ年齢の人たちばかりなので、まず「会話」が難しくなってくることを指摘する。なぜならば、彼らの話題は「病気」のテーマにだんだんと限られてくるのだから。

老人ホームという、そこは今まで生活してきた環境とは違う、「新しい環境」である。

---

新しい環境で新しい生活を営まなければならない。それはなんと困難なことか。今まで当たり前前にできたことができなくなり、不本意な病気の進行状況による、イライラした不満や、深い厭世主義が、心の奥底でうずく。そこで、「社会的な関わり方、寛容さ、他者への責任感が育つには非常に長い時間が必要なのである」(p.7)。その際、モンテッソーリ教育の環境構成は老人間のお互いのコミュニケーションのために大変役に立つ。そのような活動の教具とその提供法が本書の実践部門に掲載されている。

縦割りクラス編成の他に、ミュンヘンのヘルブルukkeの障害児教育の特徴、すなわちモンテッソーリ教育による「統合教育」は老人のために重要である。モンテッソーリ教育による障害児教育の統合教育とは、障害を持っている子どもを健常な子どもから切り離さないで、一緒に、共に教育することである。なお、わが国ではこれと同じ教育法を実践している「子どもの家」がある。それは足立区梅田にある「うめだあけぼの学園」であって、社会福祉法人(理事長 故白柳誠一枢機卿(2009年12月現在))「からしだね」が運営している。わが国だけでなく、世界の傾向であるが、老人を社会から切り離して、どちらかと言えば、役に立たない人材と考える傾向がある。これはモンテッソーリ教育の精神に鑑みて、考え直すべきである。年をとっても、役に立たなくても、人間の尊厳は何一つ変わらない。ビアンカさんはこのモンテッソーリ教育の原理を老人の生活に重ねる。そして彼女は、モンテッソーリ教育の精神に基づき、高齢者を社会から切り離してとか、どこか違う所へ、というのは好ましくなくて、できるだけ、そして絶えず、社会との接触がある生活が好ましいことを強調する。

ビアンカさんによれば、老人は病気とか、イライラした不満で、体力的・知的の面でも自信がなくなったりすると、だんだんと無口になる。それで会話が無くなる。こうして社会との関わりも少なくなる。それで老人は布団やベッドの中でずっと寝ているのが普通だ、という周りの人たちの偏見が生じるが、しかしながら本当はそうではない。「縦割り保育」や「統合教育」のモンテッソーリの教育原理を老人の日常生活に適応し、周りの人たちの協力があれば、いろいろと社会との関わり合いを持って、老人が生き生きと生活することはそんなに難しくないのである。

### 3. 「ひとりでできるように手伝ってね！」

ピアンカさんの働いた「ボニファティウス老人ホーム」は、常時50人前後の老人が入居しておられ、彼らは日常生活での身の回りのことがひとりでできて、多少とも自立した生活ができる。そこで彼女は、モンテッソーリアンとして、モンテッソーリのもう一つの教育原理、「ひとりでできるように手伝ってね！」というモットーを思い出したのである。

「ひとりでできるように手伝ってね！」は、英語で“Help me do it by myself!”、ドイツ語では“Helf mir selbst zu tun!”と言う。「ひとりでできるように手伝ってね！」が意味していることは、わが国では3～6歳、0～2歳半の幼い子どもたちの教育の分野で広く流布するモンテッソーリ教育の本質、「生命への援助」(Aid to Life)である。これは老人のためのモンテッソーリ教育では、脳梗塞、脳卒中、パーキンソン病、老衰などで、障害を受けた、または失われてしまった体力・知力の機能をリハビリし、「再びできるようにお手伝いする」ことへ適用される。

高齢者が本当は「ひとりでやりたい」という願いへの援助である。自分のことは自分でするという自立への援助である。ピアンカさんは、老人ホームに入所した人が持つ印象、つまり自分が他の人と同じように取り扱われるというのは、みんなが共通したように持ち、そしてそれは幼児のように扱われ、幼児のようにされてしまうというように彼らの感情を分析する。つまり、

- (a) 本当はできることが、できないとされたり、
- (b) 老人だからということで、いくつかの活動ができないと、まったく不可能とされてしまって、会話においても、日常の生活面においても、あたかも幼児のように取り扱われているというのである。

しかし、「できないから、やってあげる」というのは、本当は親切みただけけれど、それは周りの人の都合なのではないかとピアンカさんは自問する。なぜなら、周りの人は次のように考えるからだ。障害のある人は、また、老人はやることが非常に遅いから、周りの人がやった方が早いし、彼らにとっては待つ時間はもったいなく、多忙で、仕事がいっぱいあるのだからと。

イタリアのローマ在住、国際モンテッソーリ協会公認トレーナー（0～3歳児AMIディプロマ）で精神科医 Dr. シルバーナ・Q・モンタナーロは、

---

乳幼児の例えば「おしゃぶり」を乳幼児にとって本来不必要なものと批判する。0歳児の赤ちゃんはよく泣くし、1歳から2歳になると幼児は言葉の爆発期でとめどもなくしゃべりまくる。大人はちゃんと応えるのが煩わしいので、口の中に「おしゃぶり」を入れると、その批判の理由を説明する。ピアンカさんはこれを老人におきかえて、入院中の高齢者が「車いす」で移動するのは、その方が早いからとその状況を分析する。要するに、効率的に仕事をこなしていくのが、近代以降の一般人の価値観なのだからである。

しかしモンテッソーリは幼児教育分野で、親や幼児の教育にあたる人に、幼児教育ではそのように考えてはならないと反省を促した。保育者や教育者の大人は子どもの目線とペースに合わせなければならない。同様に老人の介護をしている人は、どんなに急いでいて、どんなに忙しくても、老人の目線とペースに合わせることは最大の課題なのである。

既述のとおり、本書は理論と実践の両部門から構成されている。実践の部門では、カラー写真付きで、モンテッソーリ教育のアルバムのように教具と提供法が示されている。ある教具はモンテッソーリの幼児教育分野の教具を、幼児の小さい手から老人の大きい手に使いやすいように大きくしただけである。また、加齢とともに現れる、認知症やただの物忘れが進む老人の特性を考慮し、記憶力トレーニングというグループ活動等がある。記憶力トレーニングのグループ活動は、前出の老人の社会性を育むために役立つ老人のための教具の見本と言えよう。

## 今後の期待

本書は健常児や障害児の教育に関心を持つ方ばかりでなく、今まで教育とは関わりのなかった方、例えば家族を介護している方や老人ホームなどの施設で働いておられる方にもぜひ読んでいただきたい。

老人はただ介護や食事などで良い世話を受けなければならないばかりでなく、もう自分は役に立たない人間だという意識を生じさせないため、いろいろな課題や責任や活動を必要としていることを知らなければならない。

著者のピアンカさんと同様、筆者もまた、この老人のためのモンテッソーリ教育が多くの方々によって研究され、そして老人のリハビリに幅広く適応できること、さらに家庭介護や、高齢者介護施設などで日常的に実践で

きることを広く知ってもらいたい。そして、実践する施設とか、デイケア等が一つでも多くなって老人の方々に一日一日の生活で自信を持っていただき、自立への手助けがなされ、より幸せに生活されることを期待したい。

Bianca Mattern, *Montessori fuer Senioren*,  
Verlag moderns Lernen- Dortmund, 2001, 2004.

\* 「高齢者のためのモンテッソーリ教育」については「家庭の友」2009年12月号とアグネス・チャンのHP「アグネスチャン Diary 2009年9月16日」を参照。

---

マリア・モンテッソーリ著 クラウス・ルーメル 江島正子共訳

## 『カリフォルニア・レクチュア モンテッソーリ教育の実践理論』

鈴木弘美  
(HYS 教育研究所)

### 1. はじめに

本書『カリフォルニア・レクチュア モンテッソーリ教育の実践理論』が、ルーメル、江島両先生の約7年にわたる翻訳の末、この度出版の運びとなったことを、まずは心からお祝い申し上げたい。そして、「お疲れさまでございました」と申し上げ、このご労作の完成を感謝したい。

かつて、『モンテッソーリ教育第40号(2007)』でその一部を拝読したことはあるが、実際に本書を読み進めると、モンテッソーリ教育をもっと学びたいという気持ちが鼓舞される。本書が多くの人々に読まれ、心に届くことを願ってやまない。

本書のテキストは、*The California Lectures of Maria Montessori, 1915* (1997) である。シルバーナ・Q・モンタナーロ博士は訳者の「序文」のあとに「日本の読者のみなさまに」と題して文章を寄せている。そこで、テキストの編集者であるバッケンマイヤー博士の努力があったからこそ本書の出版が可能になったこと、そして、本書でモンテッソーリが述べている理論と実践は、人類にとって最も貴重な財産であると語っている。

### 2. テキストの発見

本書に収められているモンテッソーリの講義は、「日本の読者のみなさまに」と題するモンタナーロ女史の文章で言及されているように、1915年にカリフォルニアで開催された太平洋万国博覧会を機会に行われたものである。

リタ・クレーマーの『マリア・モンテッソーリ』(平井久監訳、新曜社、1981年)においても、「13 アメリカ再訪」として、この時のことが詳述されている。それによれば、モンテッソーリは、1915年4月末から父親の訃報が届く11月までアメリカに滞在した。モンテッソーリは博覧会会場でモデル・スクールを実施し、カリフォルニアの各地で教員養成コース

の授業を行った。また、講演を行い、記者の取材に答えた。しかし、クレマーの興味は「再訪裏話」のようなものにあるようで、ヘレン・パークースとの確執の兆しが主に語られている。

この時行われた講義や講演は、モンテッソーリがイタリア語で語ったことがすぐに英語に翻訳され、速記され、タイプで打たれて保存された。

テキストの編集者であるバッケンマイヤー博士がこれに出会ったのは、それから約 50 年後のことであった。moteaco.com で、テキストにバッケンマイヤー博士が書いた「序文」を読むことができる。それによれば博士は、1969 年の秋に、初めてマリオ・モンテッソーリに会い、彼に許されて件のタイプで打たれた原稿を受け取ったという。それは、端が擦り切れ、ぼろぼろになっていたそうである。それらは、出版されなかったばかりでなく、ほとんど忘れられていた原稿であったようだ。バッケンマイヤー博士をマリオに紹介したのは、アンドリアーノ母娘ら、かつてのマリア・モンテッソーリのいわば側近たちであるが、彼女らによれば、講義を速記し、タイプを打ったのはアデレ・パイレであったという。この側近たちに、バッケンマイヤー博士はその後、この原稿についてのたくさんの質問をした。テープに録音されたインタビューが、後で非常に役立ったそうである。このあたりのことについては、本書 76 頁と 98 頁の注において、言及が見られる。

こうして「カリフォルニア・レクチュア」のテキストは発見されたのだが、この「序文」は興味深いし、この度の翻訳書においてもバッケンマイヤー博士による編者注は、大きな役割を果たしている。

### 3. 困難な作業

編者注は、私たちがモンテッソーリ教育についての知見を得るうえで有益であるが、ところどころ「加筆をした」「具体的な話を挿入した」などと記載され、それらは編集上の苦勞を物語っている。

また、訳者のルーメル、江島両先生も、難しい翻訳であったと「おわりに」に記されている。モンテッソーリ関連の研究書や英語の文献を読まれることには、この上ないご経験やお力をお持ちの両先生をしてこのように言わしめる理由は、「講義者はイタリア人で、イタリア語で講義し、通訳は英語で、それでアメリカ人の受講生は英語で筆記した」（本書 465 頁）から

---

だと考えられるが、それがそもそも話し言葉であって、書き言葉ではなかったということも一因ではないだろうか。古人は「在原業平は、その心余りて詞足りず」と言ったが、モンテッソーリにあっては「心余りて、言葉横溢す」というところではないだろうか。前もって準備した原稿を読み上げるという方法をとらなければ、受講者に考えを分かってもらいたくて、思わずいろいろな例を挙げたり、補足説明が多くなってしまったりすることもあるのではないだろうか。また、会場の雰囲気によって、話す内容や話し方に微妙な違いが生じる場合もあるだろう。

話は後先になるが、訳者の両先生は「序文」において、本書の特徴として以下の4点を挙げている。

- ①テキストはモンテッソーリの死後約20年後に発見されたものなので、最終原稿を女史が見ることができなかった。よって、女史が内容を確認していない。これは、それ以前のモンテッソーリの著作との大きな違いである。
- ②しかしながら、女史が45歳という最も成熟した時期のものであり、当時すでに起こっていたモンテッソーリ教育法についての批判に対して、意識的に回答している言葉がある。
- ③この本は、女史のアメリカでの講義を記録した唯一の著作である。この講義が行われる1年前に、キルパトリックがモンテッソーリを批判する本を書いた。それはアメリカでのモンテッソーリ教育への熱狂を冷ましていた。
- ④1960年代以降、現在に至るまで、アメリカではモンテッソーリ教育法が再発見・再評価をされている。そのような状況の中で、この講義内容は重要な役割を果たしている。モンテッソーリ教育法の実践理論と純粋理論、技術としての実践を徹底的に知るために、本書を無視できないだろう。

#### 4. 全体を統べる考え

さて、本書は、1915年5月7日から9月22日までの29回の講義を掲載し、「序文」「おわりに」などを含めると、470頁にも上る翻訳書である。対象となる子どもたちの年齢は0歳から8歳で、3歳から6歳までの「子どもの家」における環境や、その教具の実践理論が語られている。また、モン

テッソーリ・メソッドの歴史、教師論、想像力についても、独立した項目として存在している。

そもそも原語での編集も困難であった原稿なので、本書がわかりやすいかそうでないかは、翻訳上の問題ばかりとは言いがたいと思う。また、翻訳を云々する資格も私にはない。しかし、よくわかる部分もあれば、なんとも理解できない部分もある。私の理解できた部分に、繰り返して用いられている表現を使った文を拾ってみた。

- ① 「モンテッソーリ教具は、子どもに直接働きかけ、子どもは内的な活動に従って、教具に反応するのです」。(26 頁)
- ② 「子どもの邪魔をしても誰も気にしません。しかし、子どもは自分を創造するという内的な仕事をしているのです」。(57 頁)
- ③ 「自由に子どもに活動させることで、教師たちの法則に従うのではなく、子ども自身の内的生命の法則に従うのです」。(61 ~ 62 頁)
- ④ 「なんとと言っても他者を指導する人の才能は、指導される人を自由に活動させるかどうかにかかっています。教師がそうするとき、子どもの内的な創造力は増大し、そしてスクールの中で育っていきます」。(64 頁)
- ⑤ 「理解する能力を子どもに与えるのは、私たちではありません。偉大な進歩が発明によってなされるのなら、これは人間の内に発明する才能が内在していることを意味し、その才能を誰も与えることはできません」。(69 頁)
- ⑥ 「私たちが信じなければならぬことは、すべての存在がみずからによって発達し、みずからを発達させることです」。(71 頁)
- ⑦ 「内発的に成長したものを、私たちが成長させた、というふうを考えやすいです」。(73 頁)
- ⑧ 「すべては神様からの賜物だ、という宗教教育の基礎は教育的に重要で、私たちの考えを明確にしてくれます」。(73 頁)
- ⑨ 「必要なのは、感情を呼び起こすものを観察し、内的な成熟に至るまで十分に長い間観察したり自由を与えることです」。(116 頁)
- ⑩ 「教師の学ぶ点は、心を学ぶことのようにです」。(144 頁)
- ⑪ 「教師は教育目的の達成だけを見るのではなく、子ども全体の観察者でなければなりません。このような観察で、教師は子どもが自発的に発達するというはっきりとした確信と信念を身に付けなければなりません」

---

ん」。(167 頁)

- ⑫「子どもが成長している間、私たちは子どもを型に入れて造れません。子どもはみずから成長し、変化はみずから起こります」。(172 頁)
- ⑬「本当は人間を導くのは、常に、人間に内在する内的生命です」。(384 頁)
- ⑭「人間の外部を直せるのは、人間ではありません。人間を直すのは、人間の内面です」。(393 頁)
- ⑮「私たちの前に立っている人は、ただ目、鼻、その他の感覚を持つだけでなく、内的能力、そして選択する神秘的ですばらしい能力を持っているのです」。(445 頁)
- ⑯「モンテッソーリ教育法は他の教育法と同じ原理ですが、別の教育法は外的で、モンテッソーリ教育法は内的です。モンテッソーリ教育法は興味が教師側からただ人工的に伝達されるのではなく、子どもの内部に何かが起こっているのです」。(462～463 頁)

以上のように、「内的生命」「内的創造力」「自発的成長」などの表現がしばしば見受けられる。つまり、子どもの成長を導くものは子どもの内面にあつて、それ以外の者が成長に手出しをすることができない、ということが、モンテッソーリ教育の根本だということがよく理解できる。そして、本書の全体にこの考えが貫かれている。ここから教具や教材が工夫され、環境を整えることの重要性が引き出されてくる。またこれらのことは、モンテッソーリ教育における自由の問題や教師論の前提ともなる。

⑧の引用は、やや趣を異にしているが、これこそ、子どもの成長に他者は手出しをできないということの土台となる児童観である。これについて、編集者のつけた注は、次のとおりである。

「ここで、再びモンテッソーリの子ども観の根本的指針とモンテッソーリ教育がカトリックの信仰に根ざしていることが分かります。すなわち、生命それ自体および個々の子どもの生命は神の恵みそのもので、さらに自然に関する私たちの研究によって私たちが子どもの生命の養育者として仕えなければならぬことが分かります」。(79 頁)

また、⑮の引用の部分にも、編集者は同様な注をつけている。

「モンテッソーリが絶えず主張している彼女のこの見解では、教師の使命は『環境を絶えず整えること』です。モンテッソーリは子どもが選択する能力を高く評価していました。それで、子どもの選択は限り

ない、内的なニーズと一致する、ということを彼女は尊重していたのです。再び、彼女のカトリック的見解は教育哲学の基礎になっており、すなわち子どもは神様の被造物であり、親と教師にただ貸し付けられているにすぎなく、そして彼らの仕事は一人ひとりの子どもの神秘的な能力とその多彩なニーズを尊重することです」。(449頁)

本書を読み進むうちに、モンテッソーリ教育思想の根本に存在するものが非常に明らかになる。それは、モンテッソーリの言葉と同様に、見識ある編集者の注に助けられるからでもある。

また、「子どもが自発的に発達をする」とは言っても、それは、周囲の大人が子どもに何もしないことではない、ということも述べられている。必要なときは的確な援助をして、さっと引き下がることの大切さもよく理解できる。子どもとかかわる大人にとって大事なことは、子どもの活動や様子を観察する場合に、子どもの内面にある心を見通せるようになることだ、と改めて考えさせられる。

## 5. おわりに

本書は、モンテッソーリ教育の根本に存在するもの、その土台となるものを明らかにし、そこから生じる環境論、教材・教具・教師論、自由の問題などについて、それぞれを関連させながら、読者が自分で組み立てることを可能にしてくれる。子どもにとって大人はどうあるべきか、という問題にも答えてくれる。またモンテッソーリは、胎児に学習能力と人間性のあることを、聖書とみずからの観察によって承知していた。このことは、後に科学的に明らかになるが、当時はユニークなものであった。

正直のところ、今まで出版されたモンテッソーリの著作は理解しがたい部分が多く、読んでいる途中で疲れてしまう。翻訳が悪い、などとは言えない。そうではない。しかし本書は、たとえ分かりにくい部分が残っていると看做しても、かなり読みやすい。みなが最後までたどりつけるだろう。さすがに、ルーメル、江島両先生のご労作である。

私がかつて、モンテッソーリの著作はなぜ読みにくいのかを考えたことがある。あまり本質的なことではないが、まずは、掲載されている人物の名前の表記が統一されたらどうかと思った。一冊の本でも、ページによって表記が違っているものもあるからだ。しかし、そうしているうちに、掲

---

載されている人物に、知らない人が多いことに気がついた。当時のイタリアの名優の名前も出てくれば、ニーチェやワーズワースも、モンテッソーリと同時代の哲学者や科学者の名前も出てくる。それらの人たちがだれであるかを知らないと、時に、そこで立ち止まらなくてはならないのである。あるいは、そんなに気に留めなくても、全体を理解する上で障りのない場合もある。モンテッソーリにとっては当たり前の人物でも、私たちには未知であることが多い。やがては、モンテッソーリの著作に掲載されている人物をすべて調べ上げたいものである。

本書にも少数の人物名が挙げられているが、何人か（パパン、ゼーグレンド）については編者が注をつけている。コッホやパーカースト先生はみなが知っている。

サンパウロ（〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-21-9）

2010年5月、472頁、定価 本体 2700円＋税

## 全国大会を終えて

前 川 さちえ

(日本モンテッソーリ協会(学会) 第 42 回全国大会実行委員長)

第 42 回モンテッソーリ協会(学会) 全国大会が福井の地で開催できましたこと、心から感謝しています。多くの方々のご協力と励ましのお言葉にどんなに勇気づけられたことか。689 人の参加者の方々“ようこそ福井に!” “ようこそ AOSSA (アオッサ) に” おいでくださいました。こんなにたくさん参加してくださるとは思ってもいませんでした。夢のようです。ありがとうございました。

振り返ってみますと、今から 2 年前 (2007 年) の春、突然北陸支部の支部長に推薦されました。そして 2 年後には全国大会開催の当番だと聞かされ、二重の驚きを受けました。以前に何度か全国大会に参加したことはありましたが、まさか福井県にその役がこようとは思ってもみなかったことでとても不安でした。福井県は京都コースの方が多く交流もありましたので、すぐ赤羽先生に相談いたしました。そして少し早い時期でしたが強力な実行委員会が結成されました。新潟県からは坂東光子先生、富山県からは岡部康子先生、石川県からは岩田陽子先生とそうそうたるメンバーに、開催地福井県からは 9 人が加わりました。

福井県には京都コースを卒業した人たちで作っている福井若葉会という勉強会があります。保育園 13 カ園が加盟しており、今回の全国大会に関しては全面的な協力を得ることになりました。また保育園には夏休みがありませんので大会の期日を 8 月 1 日 (土) 2 日 (日) 3 日 (月) で承認して下さったことは本当にありがたいことでした。「私たちにできることは精いっぱいさせていただこう」と決めた次第です。

幼稚園教育要領や保育所保育指針が改訂されました。その内容にはモンテッソーリ教育から学ぶものがたくさんあるように思います。モンテッソーリ教育があまり浸透していない福井の地では本大会のテーマ『教育に希望をつなぐために』—モンテッソーリ教育の真髄をさぐる—は大変意義深いものがありました。そして、講演をして下さった先生方の内容はもちろん講義Ⅰ・講義Ⅱ・研究発表なども心を打つものばかりだったように

---

思いました。実践紹介は動画を取り入れた発表もあり、毎日の生活や保育・教育に結びついて感動された方が多かったようです。

大会に参加されて、のアンケートにはたくさんの方が答えてくださいました。一番心配していましたプログラムの内容については満足度が高くホッといたしました。モンテッソーリ教育を実践されている方にとっても分かりやすく共感することが大きかったようです。また、「もう一度自分の保育を振り返って、モンテッソーリ教育に取り組んでいきたい」という感想もありました。特に、赤羽先生の「深草子どもの家の一年」の映像は印象深かったようです。水色のTシャツを着たスタッフの対応も好評でした。私たちの精いっぱいのおもてなしが評価されたのかなと思っています。全体会場が狭かったことでは皆様にたいへんご迷惑をおかけいたしました。今後の希望では、脳科学関係の講演をこれからも取り入れてほしいとか、研究発表・講義・実践紹介が重ならないように配慮してほしいなど、多くの意見が出ていました。また、日本で唯一のAMIトレーナーである松本静子先生のお話をぜひプログラムの中に入れてほしいという希望のあったことをお知らせしておきます。今後に生かしていただけたらと思います。

終わりに今大会が北陸の地にモンテッソーリ教育が普及する良い機会になったなら、こんなにうれしいことはありません。皆様の絶大なるご協力に感謝いたします。

## 日本モンテッソーリ全国大会に参加して

塩谷庸子

(草の実保育園 副園長)

私が保育園に勤め始めた昭和30年は、保育園は託児所、仕事は子守りぐらいの評価でした。保育指針などの指導者もない中、児童福祉司として、情熱を燃やしておられた園長に背中を押され、保育論と保育者論を穴が開くほど、読み返しました。その中で、モンテッソーリ女史をはじめ何人か

の児童心理学者の原理および教育法を学びながら、試行錯誤しつつ、わが園独自の保育を形にして実践してきました。常々モンテッソーリ教育法や実践の真髄を知りたいと思っておりましてところ、幸いに日ごろから福井県の保育の牽引的先駆的役割を担っておられ、また懇意にいただいている、つぼみ保育園の前川先生を中心に、全国大会が福井で開催されるとのご案内をいただき、絶好の機会と参加させていただきました。

基調講演では 20 年間福井にいらした小西先生から、福井県のすばらしさを十二分にご披露の上、子育て環境が整っていると誉められ、歓迎演奏のマリンバとハーブの演奏は、福井で製作されている楽器で、植樹祭の折、天皇后両陛下にもお聴きいただいた曲が演奏され、胸が熱くなる感動を覚えました。締めくくりは「鳴り響け、心の風景」と題し世界的に活躍されている和太鼓表現者である車屋正昭氏の講演で、イタリアでの地中海音楽祭で黒沢監督の「影武者&乱」と太鼓のコラボレーションの様子を映像にあわせて話されるなどなど、改めて福井県を誇らしく感じると同時に前川先生の福井に対する熱い思いが伝わる内容でした。どんなに準備に苦労された 2 年だったかと推察しております。ちょうど、「福井よさこい祭り」が開催中で、市内も賑わっており、県外の先生方を福井県民挙げての歓迎ができて良かったと思います。

3 日間にわたるモンテッソーリ教育の講義や多くの研究発表、実践紹介、さらにワークショップなどは、それぞれに充実した内容の中で、私自身の長年にわたる保育感を検証する良い機会だったとありがたく思っております。保育園に勤め始めて以来、様々な大会に参加してまいりましたが、モンテッソーリ教育に焦点をしばった大会だけに参加された方々全員が自信に満ちておられ、従来の大会とは一味異なった雰囲気、私にとっては本当に有意義で充実した 3 日間でした。とても真髄には及びませんが、有益な刺激をたくさん頂きましたので今後とも、マンネリに陥ることなく、子どもを取り巻く環境の変化の中、子どもの最善の利益と幸福のための保育のあり方を追求し続け、最後まで保育者として燃え尽きたいと願っております。ありがとうございました。お疲れさまでございました。

---

## 大会に参加して

大 西 小 夜  
(富山市 東山保育所)

今回、モンテッソーリ協会の全国大会に初めて参加しました。講演などを聞く前は、自分はモンテッソーリ教育のことを中途半端にしか知らない状態で話を聞いても意味がわからないのではないかと感じていましたが、どの先生方の講演も、子どもたちがより良く生活するにはどうすればよいのか、実際にされていることや保育士が工夫している環境などを、具体的に、かつ様々な目線から話をされていて、自分にできることは何かを考えながら聞くことができました。

その中でも特に小西氏の講演が印象に残りました。母親のお腹にいる胎児や生まれたばかりの新生児・乳児は、大人が何もかも手を出したり、スキンシップをとっているつもりでいつでも触ってしまうけど、赤ちゃんにとっては、大人からされるのではなく自分で動いたり触ったりすることが、自分の体や周りの環境を知っていくためにとっても大切である、という話をされ、いかに大人がむやみに触りすぎているかを考えさせられました。大人が、赤ちゃんは何もできない・知らないと思い込んで触りすぎることで、赤ちゃんが自分でできるはずの「触る・見る・聞く」ことをさせないようにしてしまっていることを知り、手をかけるのではなく赤ちゃんを「知る」ことがとても大切であり、赤ちゃんの自発行動を阻害しないようにしなければならぬと思いました。

また、赤羽先生や坂東先生、岡部先生の講演では、実際に園で子どもたちが生活している様子を映像で見て、分かりやすい話を聞くことができました。子どもたちの姿や季節に応じた環境への配慮が、家庭のような雰囲気を持ちながら様々な年齢の子どもたちのいる園で過ごすために必要なことだと感じました。物的環境が揃っていないなくても、子どもたちが自分で考え、自分でできるようになるために保育士は答えを出してしまわずに選択肢を与えながら関わること、でも初めての事に対してはそのやり方や使い方をしっかり教えること、保育士という人的環境の大切さを改めて考えることができました。

最後に、すべての講演を通し、子どもたちがより良い生活ができるように、自分ができる事を少しでも見つけ、子どもたちの目線や思いを大切にしていきたいと思いました。

## Development of the Children and the Assistance: Parenting Support

Koichiro Maenosono

(President of Japan Association Montessori)

In Japan, where less and less children are being born, raising a child is recognized to be a social matter. There are various public childcare services provided by local public institutes and the Ministry of Health, Labor and Welfare. This is a prominent trend happening in Japan and there is no objection about the social and collective effort to raise children. However, more than a hundred years ago, Maria Montessori, raised the points that “for what” and “for whom” the support should be provided are of vital importance. Montessori said that each child has his/her own intellectual and internal development programmed by nature and the fundamental idea of education should NOT be how we raise our children but how we should support each child to unfold hi/her own potential.

Maria Montessori discovered through her observation as a doctor and scientist, as well as through her educational work at Casa dei Bambini, that children have the inner ability to construct themselves. In this paper, I would like to discuss: 1) Montessori’s speech, “Children are Miracles,” given in Rome a year before she passed away; 2) Montessori’s lecture on Children’s Creative Ability, delivered in Sanremo, Italy in 1949; and 3) the significance of teaching practice; the fundamental base of Montessori education.

The purpose of my paper is to clarify the significance in Montessori education in which Montessori educators actively practice supporting children to do their own work to develop, instead of the overprotection seen in recent social trends in Japan.

## What is *Dolmetsch*? Instrumental Music Education of Montessori

Ai Fuji

(Sayuri Kindergarten)

Just because there are a limited amount of Japanese translations of Montessori's writing on musical instruments, it does not mean that Montessori did not consider music education important. *The Advanced Montessori Method (The Montessori Elementary Material)* gives us insights into her ideas on music. In this book, she wrote about musical instruments, including what kinds of musical instruments are preferable for children. In *The Discovery of the Child*, she also wrote about music, using key words, such as *Dolmetsch*, and easy instrument for children. What is *Dolmetsch*? What are easy instruments for children?

I would like to explore these questions in this paper.

---

## The Effect of “Silence Game” for Children with Asperger Syndrome from a Doctor’s Perspective

Tadashi Aoki

(Aoki Clinic)

The patient was six years old when he came to see me for the first time. He had already been diagnosed with Asperger’s Syndrome at another clinic. I had detailed interviews with the child’s mother, spent more than one hour at every session with the patient, and kept records every week. I asked the child’s mother to keep a “behavioral observation journal,” and asked her to write an assessment each time she observed him. Since one of the fundamental problems of Asperger’s syndrome is a communication quality gap, I guided the patient’s family on their response to the child’s needs. The child worked on worksheets and practiced the “silence game,” at my clinic to help him to focus and nurture self-control, and asked the parents to do the same at home as well.

Based on the results from the “behavioral observation journal,” I guided the patient to “make promises,” and in the end, the child promised and practiced keeping the promises at home. When the child visited us, I asked him to work on worksheets and practiced the silence game. I witnessed dramatic improvement over two and half months.

As a pediatrician, I would like to report that the silence game was effective for an Asperger’s patient and discuss my observation and thoughts on this matter.

<Visible Practice> and <Invisible Practice> in the  
Montessori Method.  
A Critical Study on Montessori Education in China

Xiuping Sun

(Tokyo Metropolitan University)

The purpose of this paper is to examine the Montessori method from the new viewpoint of <visible practice> and <invisible practice>. Through this work once again we examine the essence of Montessori education and reaffirm its validity.

In concretes, we discuss the practice of Montessori education in China and compare it to Montessori education as it is taught in training courses in Japan and in Italy thus clarifying the problems of Montessori education in China.

To make Montessori practice function effectively, one must understand the complex relationship of various events surrounding it and their relationship to the context of practice. For <visible practice> to be effective, it should be supported by <invisible practice>. In this paper we investigate why <invisible practice> is important.

Key words: visible practice; invisible practice, quality education, formalism, case studies.

---

## Only the Best for the Children

Keiko Akabane

(Kyoto Montessori Training Course)

The “Fukatsu Children’s House” is located on a hill surrounded by bamboo and mixed bush. You feel the changing of nature by the four seasons, listen to the songs of wild birds – the beauty of nature. Children are in touch with the wonders of nature (air, light, water, earth, green bush, insects, birds, small wild life, last but not least human beings) thus being able to experience with their body these wonders.

Thus they absorb the wonder of the universe by contact to nature using their own fine senses walking on their own feet, touching with their own hands.

I believe that what they thus absorb nourishes their future thinking and expands their power of expression.

## Children's Mental Development through Learning Process of Making *Mitsuami*

Fumiko Fukuhara

Rika Hachiya

Junko Okamoto

The purpose of this study is to reveal when and why children are eager to make *mitsuami*, braiding three colors of yarn, at Notre Dame Seishin Kindergarten. Moreover, we have focused on the relation between the process of mastering the work and the child's mental development.

Through the analysis of the data from 2006 to 2008, we found that thirty to fifty percent of three-year-old children who entered the children's room chose the *mitsuami* work during the second and third terms of the year. Twenty to forty percent of four-year-old children who entered the room chose the work during the first term of the year. Twenty percent of five-year-old children who entered the room chose the work and this remained unchanged through the year. We can therefore affirm that children aged between 3 1/2 and 4 1/2 are eager to make *mitsuami*. During this time, as children are in the sensitive periods for order, sense, movement, and social relationship, they choose the work and continue practicing by using inner compulsion to master it. Through the cases recorded with VTR, we found that each child had mastered making *mitsuami* at his or her own pace. In addition, most children developed their concentration abilities and displayed a sense of fulfillment by mastering making *mitsuami*.

---

## 40 Years Montessori in Japan (2)

Klaus Luhmer, S.J.

(Hon. President of Japan Association Montessori)

In my first contribution I reported on the revival of Montessori education in postwar Japan which resulted 1968, July 21st in the foundation of the JAPAN ASSOCIATION MONTESSORI and the persons like Prof. Tsutsumi and Prof. Peter Heidrich who had been most instrumental to start the ball of Montessori in Japan rolling. The <Founding Fathers> of Montessori in Japan were fighting in vain for a full-fledged recognition (affiliation) for JAM by AMI (Association Montessori Internationale), though they succeeded in maintaining friendly contact to AMI.

In my second contribution, I concentrated chiefly on the most important activity of JAM, i.e. the process of starting Montessori Training Courses. Again, it was not possible for such courses to receive permission from AMI to use their Logon because the first courses, like the one started 1970 at Sophia University in Tokyo could not provide Montessori trained lecturers for the course. Hence the First Montessori Training Course at Sophia University was in constant contact with similar Centers abroad and as such morally supported by AMI, though without official recognition by AMI.

In future contributions I plan to report on further Courses in Japan and the attempts to produce Montessori Teaching Material in Japan – which was also controlled by AMI. Quite another task concerns the translation of Montessori's books and original research on the theory and practice of Montessori education in Japan and abroad.

## NPO 法人 東京モンテッソーリ教育研究所・ 附属教員養成コース

コース長 クラウス・ルーメル, S. J.

本コースは、2007年3月末日をもって閉鎖された上智モンテッソーリ教員養成コース（以下、上智コース）を引き継ぎ、特定非営利団体（NPO法人）東京モンテッソーリ教育研究所附属教員養成コースとして、日本モンテッソーリ協会よりモンテッソーリ教員養成コースとしての許可証をいただき、平成18年度より開設致しました。

今年平成21年度は、四年目となり、四期生を迎え入れています。

今年、3月8日には、第二期27名の修了生を送り出しました。

修了式には、モンテッソーリ協会会長はじめ、関係各位のご出席を賜り、祝福のお言葉をしっかりと胸に刻み、それぞれの現場へと巣立って参りました。

モンテッソーリ協会ならびに、関係各位、富坂キリスト教センターのご協力に、心より感謝申し上げます。

今までの歴史を引き継ぎ、さらに、この大切な教育の使命を担っていく努力を重ねて参りたいと思っております。

今後とも、ご指導、ご鞭撻をよろしくお願い致します。

当コースについての概要を、お知らせ致します。

事務局、およびコース会場

〒112-0002 東京都文京区小石川2丁目17番41号  
富坂キリスト教センター 2号館

Tel. (03) 5805-6786 / Fax. (03) 5805-6787

ホームページ <http://www.ti-montessori-e.main.jp/>

学生数 平成21年度 一年次生 24名

二年次生 20名（4月7日現在）

---

## 講義項目および講師

当コースのコース長は、上智コース同様、クラウス・ルーメル（上智大学名誉教授、日本モンテッソーリ協会名誉会長）、教務主任には、堀田和子（モンテッソーリ原宿子供の家、すみれが丘子供の家園長）が就任し、上智コースの授業内容と同等の講義を行うこととし、実践、および理論のほとんどの講師は、引き続き当コースで講義を行っております。各領域ともコース実践講師の次世代育成も大切な時期ですので、上智コース修了の中堅の方々各領域の副担当として活躍しています。

各講師による講義項目は、当コース案内をご参照ください。

平成 21 年 8 月 29 日には、当教育研究所の研修会を愛珠幼稚園にて開催致しました。

当コース言語担当の天野珠子講師はじめ、研究所理事が講師となり、当コース準拠の言語の教材の提供と教材作りを致しました。

総勢 70 名以上の参加者となり、会場狭しという盛況で、和気あいあいのうちに終了致しました。

今後も当コース準拠の言語教材の充実をはかってゆきます。

平成 21 年 9 月 2 日には、「子どもの生活と環境」というテーマで、モンテッソーリ協会副理事長副会長の町田明先生による特別講義を開催致しました。

町田先生は、恵泉幼稚園の園長として、当コースの実習園をお引き受けくださっていらっしゃいますが、現場における子どもの自然な生活を援助するために環境をどのように準備し、子どもの姿をどのように理解して援助してゆくのか、実践をもとに講義をお聞きし、教具の扱いなどに終始してしまいがちな学生にとって、子どもの姿を原点から見て考える良い機会となりました。

今後とも、当コースでは、学生たちが、深く、豊かな気持ちでモンテッソーリ教育を学び、継承と改革を進めていけるよう、講師一同努力して参りますので、関係各位のご理解、ご指導、ご協力をお願い申し上げ、ご報告とさせていただきます。

## 東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター

所長 松 本 静 子

マリア・モンテッソーリが教師養成を始めてからちょうど 100 年目にあたるこの 2009 年は日本のモンテッソーリ教師養成にとっても歴史的な年となりました。

第 20 期卒業生、小川直子が 7 年間の研鑽を経て、AMI トレーナーの資格を取得致しました。今後の活躍が大いに期待されます。また、7 月末より、長年開催が待たれていた日本初の AMI エレメンタリーコースが開講されました。

さて、当センターでは 2009 年 3 月に国際試験官リタ・シェイファー・ゼナー先生をお迎えし、昼間部 34 期生 19 名、夜間部 26 期生 20 名が新たなモンテッソーリアンとして出発致しました。2009 年度の在学者は昼間部 35 期生 23 名、夜間部 1 年 28 期生 27 名、夜間部 2 年 27 期生 18 名、合計 68 名です。今年はお母様方の在籍者が多く、子育てが一段落して新たな挑戦をする意欲が感じられます。

### 研修会報告および今後の日程

2008 年 11 月 東北大会（仙台）2 日間

2009 年 3 月 国際試験官 R.S. ゼナー先生講演会

「子どもがもっと感覚教具にふれるために  
—5 つの感覚を理解する」（同窓会主催）

5 月 関西大会（和歌山）2 日間

7 月 夏期短期実践研修会（相模原）3 日間

11 月 東北大会（福島）2 日間

2010 年 3 月 21 日 国際試験官 李延圭先生（第 9 期卒業）講演会（同窓会主催）

8 月 3 日（木）～ 5 日（土）第 27 回短期実践研修会

（相模原 グリーンホール相模大野）

---

# 九州幼児教育センター・ モンテッソーリ教員養成コース報告

委員長 藤原 江理子

平成 21 年度の当コースは、2 年次生 20 名、1 年次生 18 名で始まりました。今まで幼稚園教諭の受講が主流でしたが、近年保育士の参加が徐々に増え、今年度初めて教諭と保育士の割合が半々になりました。

また、今年度猛威をふるった H1N1 型インフルエンザに対し、当コースでは何より私たち自身が媒介者にならないための観点から徹底した取り組みを行いました。モンテッソーリ教育法では一つの教具を多数で共有しますし、コースの実習で学生は他の園の子どもたちと関わる機会も多くあります。子どもを守る立場の視点で、教具を常に清潔に保つ工夫を考え、教具に触れる際の手洗い・消毒を行う姿勢を見直しました。子どもに注意を喚起する際に、大人が率先して実践することの大切さを再認識する良い機会となりました。

関係各位の変わらないご支援に感謝申し上げ、21 年度の主な活動を報告致します。

## 1. コース主催講習会

当コース主催の各種講習会の、今年度の実施概要は次のとおりでした。

- ・春期実践講習会（入門編・日常生活課程）

平成 21 年 5 月 2 日～5 月 4 日

- ・夏期実践講習会（数課程）

平成 21 年 7 月 23 日～7 月 25 日

- ・同上（文化課程）

平成 21 年 8 月 21 日～8 月 23 日

- ・教具製作のための講習会

平成 21 年 11 月 22 日～23 日

子どもの作業で用いられる教具・教材を手作りすることは、モンテッソーリ教具への理解を深めるために良い手段だと、私たちは考えています。製作の実体験を通じて、教具の意味や狙いを再認識し、教具・教材を維持管理することの大切さを考えました。

## 信望愛学園モンテッソーリ教師養成コース

委員長 佐々木 良晴, S. J.

2008年8月に開催した卒業生研修会の最後にコース20周年祝賀会が行われ、2009年3月23日(月)には、来賓85名、ディプロマ授与者48名、計133名参加のコース20周年祝賀会が広島ガーデンパレスで行われた。多くの方々からいただいたお祝いの言葉は、それぞれの立場からの内容のあるものであった。当日はビデオ参加されたルーメル先生の20年間の振り返りと励ましは、貴重な道標となった。詳しい内容については、「20周年記念誌」があるのでご覧ください。20周年という節目に当たり、コース全体を見直す良い機会になればと願っている。

2008年度の活動は次のとおりである。

- ・園長主任会 : 1回… 6月24, 25日 38園、56名参加  
前之園幸一郎先生を講師にお招きした。
- ・実習指導者研修会 : 1回… 6月16, 17日 12園、16名参加
- ・卒業生研修会 : 1回… 8月26, 27, 28日 221名参加  
創立20周年祝賀会を行い、記念講演に松本静子先生をお招きした。
- ・講習会 : 4回… 4月3, 4日 日常 44名参加  
7月23, 24日 感覚 39名参加  
7月25, 26日 数 41名参加  
11月28, 29日 言語 25名参加
- ・スタッフ研修会 : 1回… 4月29, 30日 13名参加
- ・本科生 : 2009年度 1年生33名、2年生50名
- ・卒業生 : 48名 (2009年3月23日卒業)

---

## 京都モンテッソーリ教師養成コース

委員長 赤羽 恵子

「京都コースからのてがみ」という名の機関紙を年二回、京都コースの卒業生（わかば会会員）に配付していますが、6月10日発行のそれには「第42回日本モンテッソーリ協会全国大会（福井）」のプログラム案内を裏面全部に掲載し、「今夏は慣例の京都コースの夏期講習会はありません。皆さまと福井で『アオッサ！』（会いましょう!）」と、呼びかけました。

なお、ワークショップは京都コースが担当することになりましたので、このような機会を絶好のチャンスととらえて、本コースの実践科目を担当している17名全員に呼びかけ、自分の担当している教科だけでなく、他の教科の提示方法や、その深い意味を研修する必要があると考え、下記の日程と内容をFAXで送信しました。

### 日程と担当者

5月4日（月・祝）

10：00～10：30 集合 委員長の話

10：30～12：30 生活教育（岡山真理子）

昼休み

13：45～15：45 感覚教育（坂東光子）

16：00～18：00 数教育（渡辺政美）

5月5日（火・祝）

9：00～11：00 言語教育（赤羽恵子）

11：00～12：30 討論

昼休み

14：00～17：00 教員養成の諸問題について

17名全員参加 話し合い後、解散

### 教員養成状況

2009年3月 57名 JAMディプロマ取得

4月 64名 新入生  
40名 2年生（編入生を含む）

☆問い合わせ先：京都モンテッソーリ教師養成コース  
〒612-0817 京都市伏見区深草向ヶ原町17  
電話 075-641-8410 FAX 075-642-8588  
E-mail : mc.kyoto@theia.ocn.ne.jp

北海道支部

支部長 前 鼻 百合江  
(宮の沢さくら保育園)

1. 活動報告

- (1) 2008年7月5日(土) 午後1時30分～午後16時30分  
藤女子大学において「一人ひとり違う子どもたち」一真の自己選択に至るまで—と題して深津高子先生をお招きしての講演会を開催した。(参加者53人)
- (2) 2009年1月22日(木) 午後3時～午後6時 札幌藤幼稚園  
支部有志による研修計画等の打ち合わせ会を開いた。
- (3) 2009年6月13日(土) 午前10時～午後3時 札幌藤幼稚園  
「子どもの自立を援助する教師とは」講師・岡山真理子先生  
札幌M教育を考える会主催の一モンテッソーリ教育から学ぶ教師—と題したモンテッソーリ教育研修会を後援した。

2. 会計報告

2008年度 会計報告(2008・8・1～2009・7・31) 単位 円

	区分	予算額	決算額	適要
収入の部	前年度からの繰越金		766,897	
	研修会参加費		102,000	
	雑収入		623	預金利息
	計		869,520	
支出の部	講師謝礼		50,000	
	交通費		40,000	
	宿泊費		7,115	
	通信費		4,320	
	会場費		6,000	3,000円×2
	計		107,435	
次年度繰越金 (869,520—107,435 = 762,085)				

会計担当 城 由利子

**東北支部**

支部長 佐々木 信一郎  
(こじか「子どもの家」)

I. 第41回日本モンテッソーリ協会(学会)全国大会

平成20年8月1日と2日の両日、日本モンテッソーリ協会(学会)全国大会が開催されました。平成20年は、東北支部担当ということで仙台白百合学園をお借りし、盛大に行われました。

大会テーマは、「よりよいモンテッソーリ教育を！」—日本文化への適応を検証する—でした。モンテッソーリ協会の大会が41年目を迎え、今後もますます日本文化の中に位置づけられ、子どもたち一人ひとりの命が守られることを確認した大会だったと思います。

また、シルバーナ・Q・モンタナーロ先生にイタリアからお越しいただき、たいへんすばらしいお話を聞くことができました。

この大会のためには、東北支部のたくさんの先生方にお手伝いをいただきました。仙台白百合学園の小・中学校の先生方は、ボランティアでお手伝いをしてくださいました。ここに感謝申し上げます。

II. 支部について

支部規程を整備しました。今後、各県の連絡委員をお願いし、各県が連携をとりながら進めていけるように体制を整えていく予定です。

III. 第34回支部研修会開催予定

2008年度は、第41回JAM全国大会のための支部研修会はありませんでしたが、2009年は例年どおり、研修会を行う予定です。

IV. 平成20年度支部会計報告(平成20年4月1日～平成21年3月31日)

適要	収入	支出
前年度からの繰越金(郵貯)	153,764	
第41回大会支援金	323,779	
郵貯利息	700	
合計	478,243	0

---

平成 20 年度末残高 478,243 円 (次年度への繰越金)  
内訳 現金……0 円 郵普貯……478,243 円

平成 21 年 7 月 13 日 上記のとおり相違ありません。

会計担当 田川悦子

**関東支部**

支部長 町田 明  
(恵泉幼稚園)

I. 活動報告

今年度も、上智・東京コース同窓会と共催の研修会を行いました。  
上智・東京コースの同窓生はみな協会の会員でもあり、すなわち関東支部  
会員です。このような実情に照しますと、今回は残念ながら上記コース  
修了生以外の支部会員の出席はありませんでした。

しかし当日はあいにくの冷たい雨でしたが、参加者 30 名（そのうちの  
約半数は関東支部会員でもある人たち）の感想は、「図書館内の見学、荒  
井先生のご講演から分かった創立者故石井桃子先生が残された《子どもた  
ちよ、子ども時代をしっかりと楽しんでください。あなたを支えてくれる  
のは、子ども時代のあなたです》のお言葉、また荒井先生自ら語られた本  
当に美しい日本語、それを聞く心地よさ、そして何よりモンテッソーリ精  
神との共通性の発見等々を感じ、楽しくも豊かだった一日に感謝の心が溢  
れた」とのことでした。

当日は下記のように行われました。

記

日時・会場：平成 21 年 1 月 31 日（土）9：00～16：00

学校法人亀ヶ谷学園宮前幼稚園

講 師：荒井督子先生—財団法人東京子ども図書館常任理事—  
テ — マ：「日々の保育をふかめるために—絵本の楽しみ—」

参加費：会員 2,000 円、非会員 3,000 円

Ⅱ. 会計報告（平成 20 年 8 月 1 日～平成 21 年 7 月 10 日）

<収入の部>

単位＝円 <支出の部>

単位＝円

月/日	摘 要	金 額
8/1	前年度よりの繰越金	598,154
平成 20 年 10/1	利子	628
平成 21 年 4/1	利子	304
7/10	合 計	599,086

月/日	摘 要	金 額
平成 20 年 10/1	利息への税金	125
平成 21 年 1/23	研修会通知はがき代	4,250
1/27	ネームラベル・祝儀袋代	1,323
1/31	研修会会場費	10,000
4/1	利子への税金	60
7/10	合 計	15,758
7/10	次年度への繰越金	583,328

<繰越金内訳>

郵便貯金 583,328 円  
手持ち現金 0 円

平成 21 年 7 月 10 日 上記のとおり相違ありません。

会計担当 松本良子

---

**東京支部**支部長 天 野 珠 子  
(愛珠幼稚園)

## I. 活動報告

平成 19 年 8 月に開催した第 40 回日本モンテッソーリ協会（学会）全国大会の担当支部として精力を使い果たし、平成 20 年度は支部活動を行うことができませんでした。いろいろと企画はあったのですが、実現できず誠に申し訳ありませんでした。

## II. 会計報告（平成 20 年 8 月 1 日～平成 21 年 7 月 7 日）

年月日	適 要	収 入	支 出
H20.8.1	前年度繰越金 (内訳：郵貯…426,322 現金…35,594)	461,916	
H21.4.1	郵貯利子（税 132 差し引き額）	540	
H21.7.13	合 計	462,456	0

次年度繰越金 462,456（内訳：郵貯…426,862 現金…35,594）

平成 21 年 7 月 13 日 上記のとおり相違ありません。

会計担当 佐藤加寿子

**北陸支部**

支部長 前川 さちえ  
(つぼみ保育園)

第42回日本モンテッソーリ協会(学会)全国大会が福井県で開催することもあってこの1年間準備に明け暮れています。実行委員会そのものが活動になりました。ささやかですが前年度から始めた言語指導の研究も進めてきました。簡単に報告いたします。

(1) 実行委員会開催日および内容

- \* 第4回実行委員会 2008年9月1日 仙台の大会に参加した報告と今後の課題について
- \* 第5回実行委員会 2008年11月21日 大会開催までの準備および内容の検討と役割分担について
- \* 第6回実行委員会 2009年2月17日 研究発表の内容検討と数の調整  
司会者の依頼について
- \* 第7回実行委員会 2009年3月16日 大会案内要綱について  
案内発送に関して
- \* 第8回実行委員会 2009年6月15日 大会に向けての最終打ち合わせ  
役割分担の確認と協力スタッフの人数
- \* 第9回実行委員会 2009年7月9日 大会発表要旨録の最終校正

(2) 言語指導の研究会

- \* 4歳児言語研修 つぼみ保育園 14人参加
- \* 3歳児言語研修 伊井保育所 3回実施 延べ40人参加
- \* 3・4・5歳児の保育 しろき保育園 13人参加
- \* 0・1・2歳児の保育 清水台保育園 13人参加

2. 会計報告(平成20年8月1日～平成21年7月31日)

収入 72,850円

(内訳)

研修会参加費（1人500円）	40,000円
平成20年度活動費	30,000円
前年度繰越金	2,850円
合計	72,850円

支出 69,920円

(内訳)

9/1 実行委員会弁当代 12人	14,360円
10/21 アオッサ 601A 使用料	4,200円
協会会員外への案内状発送 142通	11,360円
研修会場へのお礼	40,000円
合計	69,920円

次期繰越金 2,930円

平成21年7月7日 以上のとおり相違ありません。

会計担当 海道洋子

### 中部支部

支部長 野原由利子  
(名古屋芸術大学)

中部支部は以下のような内容で、原則として毎月第二土曜日1:30～4:30、研究会を実施してきました。

- 7/12、8/30 近藤 宏先生 「自然体験と遊び」
- 9/13 全国大会参加者 「全国大会の報告」
- 10/11 DVD 視聴 「深草子どもの家 一番良いものを子どもたちへ」  
「福岡エミール保育園の実践」
- 11/3 岐阜県春日村へのバスの旅 自然観察・自然食（栃の実も

ち、甘茶)

草木染めのマフラーづくりなど

- 1/10、2/14 森下京子先生 文化教育(羊毛の太陽系の惑星づくりなど)  
 3/28 水谷暎子先生、糸原孝子先生 「0～3歳の育ちと遊び」  
 5/9 森下京子先生 文化教育・日常生活練習  
 6/13、14 森下、江口、前鼻先生 「TUDOIの会」[0～3歳のモンテッ  
 ソーリ教育]に参加。

毎回20～30名の参加者ですが、今日の保育において、モンテッソーリ教育から学ぶべきものが多いことに確信を持ってこられたのか、ますます主体的・意欲的な参加状況になっていると思います。公立保育園を定年退職され、「これまでの保育でこれが足りなかった」と気付かれ、2名の先生が研究会に参加される中、協会の会員にもなってくださいました。

課題は、愛知・三重以外の会員にはお便りするだけで、お役に立てないでいることです。

#### 2008年度 中部支部会計報告

＜収入＞参加費	7/21	1,500円×21人＝	31,500円
	8/30	1,500円×22人＝	33,000円
	9/13	1,500円×22人＝	33,000円
	10/11	1,500円×22人＝	33,000円
	11・12月		なし
	1/10	1,500円×24人＝	36,000円
	2/14	1,500円×19人＝	28,500円
	3/28	1,500円×21人＝	31,500円
	5/9	1,500円×27人＝	40,500円
利子			84円
2007年度繰越金			172,054円
		収入小計	267,084円
		収入合計	439,138円

＜支出＞講師謝礼	267,084円
会場費	24,000円

通信費	8,260 円
アルバイト代	7,200 円
渉外費（陣中見舞いなど）	6,909 円
材料費	19,700 円
2008 年度 繰越金	168,609 円
支出小計	270,529 円

支出合計	439,138 円
------	-----------

以上の会計報告に相違ありません。

中部支部会計担当 村田尚子

## 近畿支部

支部長 相良 敦子  
(エリザベト音楽大学)

### I、活動報告

今年も近畿支部の皆さまにお詫びせねばなりません。昨年度、広島市にあるエリザベト音楽大学に勤務している支部長の相良が、和歌山県の御坊市におられるシスター小池副支部長と日本各地での教員養成に奔走なさっている赤羽理事に集まっていたいて何かを企画するゆとりがなかったという言い訳をこの誌上で致しました。

この反省に立って、「今年度こそは」と、JAM 全国大会前日の全国理事会の後に、理事の 3 人が集まり、今年度の研修会の企画を致しました。

企画内容は次のとおりでした。

開催日 2009 年 2 月 7 日（土）

内 容 午前 シンポジウム「新しい園長たち」

（提案者） 江崎 祀枝（聖マリアの園幼稚園園長）  
大森久美子（草津カトリック幼稚園園長）  
寒川 素子（神戸海星女子学院マリア幼稚園）  
友井 桂子（高田カトリック幼稚園園長）

午後 講演 1・2 〈講師〉 赤羽 恵子・相良 敦子

この企画で提案者方にご承諾をいただき、11月に入ると、シスター小池理事から近畿支部会員に手紙を送っていただく段取りを組んでいました。ところが、10月終わりに私がひどい咳の風邪で体力を消耗し、「電話やパソコンを見るのもイヤ」という状態になり、やっと何とか連絡を取れるようになったのが11月下旬。その時点では2月7日開催を会員にお知らせするのは遅すぎると判断し、すでに提案を引き受けてくださっていた上記の4人に開催停止を知らせ、無理に了解していただいた次第でした。

私個人の理由で2年間続けて近畿支部では、会員の皆さまにお役に立つような企画を実現できなかったことを心からお詫び申し上げます。

## Ⅱ、会計報告（平成20年4月1日～平成21年4月1日）

収入	前年度繰越	822,790円
	利子	1,286円
	税金	256円
支出		0円
残高金額		823,820円

### 中国支部

支部長 奥山清子  
(ノートルダム清心女子大学)

## I. 活動報告

### 1) 中国支部研修会

日時：2008年11月9日（日）13：00～16：00

場所：ノートルダム清心女子大学520ND教室

講師：北海道教育大学旭川校 特別支援教育分野教授 安達 潤先生

演題：発達障害のある子どもの子育て—将来に向けて幼児期から大切なこと—

発達障害のある子どもの育ち、その子どもを育てる親御さんの気持ちを考えて、周りの人々ができることを考える療育の在り方について豊富な資

---

料を用いて丁寧な説明があり、障害をかかえた子どもとその保育・教育の在り方について、モンテッソーリ教育の出発点を見つめ、最新の療育情報を基に子どもの幸せを将来に向けて考えなおす良い機会となった。

## 2) 信望愛学園モンテッソーリ教師養成コース創立 20 周年祝賀会

山口・広島で蒔かれた種が育ち、中国支部の会員のみならず、全国に 800 人を超えるコースの卒業生を送り出してきた実り多き 20 年目の祝賀会が 3 月 23 日、広島ガーデンパレスにおいて盛大に祝福のうちに行われた。

## II. 会計報告（平成 20 年 8 月 1 日～平成 21 年 7 月 31 日）

収入	前年度繰越	349,068 円
	利息	439 円
	収入合計	349,507 円
支出	消耗品費	897 円
	通信費	4,080 円
	支出合計	4,977 円
差引残高		344,530 円

中国支部の平成 21 年度への繰越金は 344,530 円となります。

平成 21 年 6 月 26 日 上記のとおり相違ありません。

会計担当 高月教恵  
以上

## 四国支部

支部長 乾 盛 夫  
(鳴門聖母幼稚園)

### 1. 活動報告

2008 年度は、2010 年度の四国大会のために組織の実力を培いたいと念じてスタートし、会員の積極的な協力姿勢もたびたび聞こえていたにもかかわらず、支部長の個人の活動だけの 1 年になった感じがしている。とは言っても私立幼稚園の地域での関係園の研究発表では、良い内容で参加者

に強く印象づけられた、と評価されている。これは、日ごろからの実践原理に沿った誠実な保育の実証に他ならない。また、歴史の浅い地域でも、地域の小学校での評価が人々に伝わってきていることが、入園児の面接などで聞かれて力づけられている。また、未満児への子育て支援コースや延長保育での評価も良いと聞かえている。運営上の苦労もあるが、喜ばしい流れである。また、以前にも記したが、堅実な私学の充実には欠かせない学園内研修が積み重ねられている。これは、教師の隠れた誇りであり、日々の権威として子どもに写ることであるから、刷新し続けてほしいと祈っている。

大切なこと、第43回大会の準備には、会場確保に思わぬ曲折に出会ったが、これから有志の力を結集して応えてゆきたい。真実な歩みの上に、子どもたちと築く平和への良い実りが増していくことを信じているし、子どもたちが自分で掴んだ真実を知恵と自由を発揮して次世代に貢献してくれる未来があることを信じて働く環境でありたいものである。ここに一言、改めて皆さまのご協力をお願いしておきたい。

## 2. 会計報告

収入	前年度繰越金	14,934 円
	利子	19 円
支出		0 円
	次年度繰越金	14,953 円

### 第43回大会準備会計

収入	本部より前借金	21年6月18日	500,000 円
		21年6月19日	300,000 円
	収入合計		800,000 円
支出	会場借用費		489,720 円 (7月1日前払)
	郵便料		8,008 円
	郵貯残高		260,280 円
	手持ち現金		41,992 円 (7月17日現在)

会計担当 上田 宏次

## 九州支部

支部長 中尾昌子  
(八幡カトリック幼稚園)

### I. 活動報告

平成 21 年 1 月 25 日に九州支部主催の「モンテッソーリ教育を受けた子どもたち」一卒園後の育ちを追って一の研修会が開催されました。この研修は、北九州地区のモンテッソーリ園、聖ヨゼフ幼稚園・若松天使園・八幡カトリック幼稚園の職員の助けを借りて行うことができました。

3園の卒園児の保護者・卒園生・教師とそれぞれの立場から見た成長を発表し、相良先生に解説をしていただきました。この研修会ができましたのも、相良先生はじめ末永先生、中尾は九州でも最も早くからモンテッソーリ教育を手がけており、3園のモンテッソーリ実施園からは多くの卒園児を送りだしているという恵まれた状況の中で、スムーズに研修が行われたことを感謝しています。

アンケートによると、発表者の生の声は、私たち教師にとっては大きな励みとなり、保護者にとっては“成長を信じて待つこと”の大切さを学んだことが分かりました。

また、幼児教育の大切さを、改めて自覚した研修会となりました。

### II. 会計報告 (平成 20 年 8 月 1 日～平成 21 年 7 月 10 日)

<収入の部>

単位＝円

<支出の部>

単位＝円

月/日	摘要	金額
8/1	前年度の繰越金	703,523
1/25	九州支部研修費	30,000
	研修会参加費	178,500
7/10	合計	912,023

月/日	摘要	金額
研修会準備	郵送費	
	用紙代 など	42,087
1/25	会場費	16,510
研修会当日	会場使用料	22,700
	花代	20,000
	車代	75,000
	その他	17,570
	合計	193,867
7/10	次年度への繰越金	718,156

<繰越金内容>

郵便貯金 708,156 円

手持ち現金 10,000 円

平成 21 年 7 月 10 日 上記のとおり相違ありません。

会計担当 下條 富子

## 年間事業(事務局)報告並びに次年度計画書

平成20年(2008年)度事業報告	平成21年(2009年)度計画・予定
<b>平成20年</b>	<b>平成21年</b>
8月2日 『モンテッソーリ教育』第41号作成＝編集委員会	8月4日 『モンテッソーリ教育』第42号作成＝編集委員会
第42回全国大会準備開始＝実行委員会	第43回全国大会準備開始＝実行委員会
8月5日 大会礼状発送	8月6日 大会礼状発送
8月上旬 会長とルーメル名誉会長へ 大会報告のためロヨラハウス訪問	大会期間中納入会費・入退会者等の整理
8月6日 大会期間中納入会費・入退会者等の整理	8月上旬 ルーメル名誉会長へ大会報告のため会長・事務局長 ロヨラハウス訪問
「第5回支部長会議事録」 「第9回責任者会議事録」作成	「第6回支部長会議事録」 「第10回責任者会議事録」作成
8月中旬 会長名大会礼状発送	8月中旬 会長名大会礼状発送
入会者へ会員証等発送	入会者へ会員証等発送
9月10日 「事務局だより」作成開始	9月10日 「事務局だより」№.4作成開始
9月中旬 「支部長会議事録」「コース責任者議事録」 「全国理事会議事録」「総会議事録」発送	9月中旬 「支部長会議事録」「コース責任者会議事録」 「全国理事会議事録」「総会議事録」全理事・監事宛て発送
10月25日 「事務局だより」№.3発行並びに全会員宛て発送	10月中旬 「事務局だより」№.4・会費請求書発行、全会員宛て発送
12月18日 平成20年(2008年)度中間決算報告書並びに 会計監査資料を総務監事と山本監事宛に送付	” 理事選挙の準備開始・有権者・団体会員氏名調査等
12月下旬 第1回常任理事会開催通知を 常任理事、監事宛発送	12月17日 平成21年(2009年)度中間決算報告書並びに 会計監査資料を総務監事と山本監事宛に送付
<b>平成21年</b>	<b>平成22年</b>
1月24日 第1回常任理事会開催 於：岐部ホール	1月中旬 選挙関係書類作成・印刷・団体会員調査発送
2月中旬 上記議事録を全理事・監事宛発送	1月23日 第1回常任理事会開催 於：岐部ホール 選挙管理委員委員、選挙管理委員会委員 第44回全国大会提案＝担当北海道支部
3月25日 第Ⅱ回常任理事会開催通知発送	” 理事選挙関係文書・投票用紙等有権者宛発送
4月25日 第Ⅱ回常任理事会開催	<b>3月1日 選挙選挙投票開始</b>
7月31日 第5回支部長会議 第10回コース責任者会議、全国理事会議開催	3月25日 第Ⅱ回常任理事会開催通知発送
8月1日～3日 第42回全国大会開催 於：福井市「AOSSA」	<b>3月30日 選挙選挙投票締め切り</b>
8月1日 定期総会開催	4月10日 理事選挙開票作業・結果を会長に報告 当選理事宛、承諾書発送
8月3日 編集委員会開催	4月24日 第Ⅱ回常任理事会開催 於：岐部ホール 新理事承認
	5月下旬 『モンテッソーリ教育』第42号発行・発送
	7月27日 第6回支部長会議 第11回コース責任者会議、全国理事会議開催
	7月28日～30日 第43回全国大会開催 於：徳島あわむぎんホール徳島郷土文化会館
	7月29日 定期総会開催
	7月30日 編集委員会開催

平成20年度決算書・平成21年度予算案

自：平成20年8月1日 自：平成20年8月1日 自：平成21年 8月1日  
 至：平成21年7月31日 至：平成21年7月31日 至：平成22年 7月31日  
 (単位＝円)

科 目	平成20年度予算案	平成20年度決算	摘 要	平成21年度予算
取 入 の 部	個人	2,750,000	2,570,000	2,800,000
	団体	800,000	1,041,800	900,000
	維持	500,000	620,000	500,000
	入会	80,000	95,000	100,000
	会費計	4,130,000	4,327,800	4,300,000
	寄付金	0	0	0
	デイトロマ代	350,000	495,000	350,000
	書籍代金	50,000	170,664	50,000
	学会広告料	500,000	255,000	500,000
	大会準備金の返金	500,000	500,000	500,000
	利子・利息	0	20,671	0
	雑収入	0	26,544	0
	大会からのJAM支援金	700,000	800,000	800,000
寄付金から支援金までの小計	2,100,000	2,267,879	2,200,000	
前年度繰越金	13,746,004	13,746,004	12,975,558	
合 計	19,976,004	20,341,683	19,475,558	

科 目	平成20年度予算案	平成20年度決算	摘 要	平成21年度予算
支 出 の 部	消耗品	100,000	47,300	100,000
	通信費	750,000	312,365	700,000
	NTT支払い	84,000	87,752	95,000
	ホームページ費	100,000	22,118	100,000
	交通・宿泊費	2,000,000	1,257,024	1,800,000
	印刷費	1,600,000	1,166,389	1,300,000
	人件費	2,050,000	2,076,000	2,200,000
	賃貸料(含む管理費)	300,000	318,000	540,000
	光熱水費	48,000	16,661	0
	会議費	40,000	42,730	20,000
	支部活動費	300,000	60,000	300,000
	委員会活動費	600,000	600,000	600,000
	渉外費	80,000	64,539	80,000
	会費	150,000	150,001	150,000
	書籍支払金	50,000	119,851	50,000
	手数料	15,000	6,990	20,000
	税金	0	1,855	0
	引越し	0	216,550	0
	雑支出	0	0	0
	大会準備金	0	800,000	0
	支出小計	8,267,000	7,366,125	8,055,000
	次年度への繰越金	11,709,004	12,975,558	11,420,558
	合 計	19,926,004	20,341,683	19,475,558

基金＝20,000,000円(三井住友銀行)利息＝278,498円(但し、平成21年7月7日現在税引後)

基金＝10,000,000円(三菱東京UFJ銀行)利息＝70,633円(但し、平成21年7月7日現在税引後)

平成21年7月7日 上記のとおり、報告いたします。

事務局長 松本 良子 ㊟

平成21年7月14日 監査の結果、上記報告通り相違ありません。

監事 鈴木 成一 ㊟

監事 山本 雅子 ㊟

1. 第 43 回全国大会について

- ①開催期日 平成 22 年 7 月 28 日（水）、29 日（木）、30 日（金）
- ②会 場 徳島県郷土文化会館「あわぎんホール」  
〒770-0835 徳島市藍場町 2-14 TEL088-622-8121
- ③大会テーマ 「子どもが探しているものを求めよう」
- ④基調講演 「(仮) 創られた世界と子ども」 上智大学神学部教授 光延一郎
- ⑤ワークショップ 九州幼児教育センター
- ⑥連絡先 TEL088-686-2774 （鳴門聖母幼稚園内第 43 回全国大会事務局）  
§ 多くの方々のご参加をお待ちしています！

2. 第 44 回全国大会について

担当の北海道支部長より、現時点で決まっている事項として以下のことが報告されました。乞う！ご期待！

- ①開催期日 平成 23 年 8 月 6 日～8 日
- ②会 場 藤女子大学 札幌市

3. 第 45 回全国大会について

担当中部支部長が、目下例年どおりの開催を目指して準備を開始された由、こちらも乞う！ご期待！

支部関係				
支部	支部長氏名 所属	郵便番号	住所	上段 電話番号 下段 FAX番号
□北海道	前鼻 百合江 (宮の沢さくら保育園)	063-0034	札幌市西区西野4条6丁目11-12	011-663-8118 011-663-8146
□東北	佐々木 信一郎 (こじか子どもの家)	960-8068	福島市太田町14-38-905	024-544-7135 024-544-7136
□関東	町田 明 (惠泉幼稚園)	339-0054	さいたま市岩槻区仲町1-12-10	048-756-0427(☎&F)
□東京	天野 珠子 (愛珠幼稚園)	156-0052	世田谷区経堂1-1-5	03-3429-7575 03-3425-3030
□北陸	前川さちえ (つぼみ保育園)	910-0208	坂井市丸岡町坪江18-6	0776-66-2564(保) 0776-66-5715(自宅)
□中部	野原由利子 (名古屋芸術大学)	456-0062	名古屋市熱田区大宝2-4 白鳥パークハイツ公園通り6-604	052-671-0279(☎&F)
□近畿	相良 敦子 (エリザベト音楽大学)	606-8174	京都市左京区一乗寺染殿町3-709	082-221-0918
□中国	奥山 清子	701-1154	岡山市田益1624	0862-294-2883(☎&F)
□四国	乾 盛夫 (鳴門聖母幼稚園)	772-0001	鳴門市撫養町黒崎字松島208	088-685-2774 088-684-1530
□九州	中尾 昌子 (八幡カトリック幼稚園)	805-0013	北九州市八幡東区昭和3-5-1	093-652-1006 093-652-1008

## 日本モンテッソーリ協会役員

	役職	会員 番号	常任 理事	氏名	勤務先
1	名誉理事長 名誉会長	9	○	クラウス・ルーメル	日本モンテッソーリ協会 東京 M 教育研究所附属教員養成コース
2	理事長・会長	2878	○	前之園 幸一郎	日本モンテッソーリ協会
3	副理事長・副会長	2594	○	ヴィタリ・ドメニコ	カトリック麹町聖イグナチオ教会
4	副理事長・副会長	2512	○	町田 明	恵泉幼稚園
5	事務局長	1132	○	松本 良子	日本モンテッソーリ協会
6	理事	2570	○	赤羽 恵子	京都モンテッソーリ教師養成コース
7	理事	1438	○	天野 珠子	愛珠幼稚園
8	理事	364	○	乾 盛夫	鳴門聖母幼稚園
9	理事	1921	○	江島 正子	明和学園短期大学(学)小百合幼稚園
10	理事	946		奥山 清子	前ノートルダム清心女子大学
11	理事	1994		甲斐 仁子	藤女子大学
12	理事	1293		小池 良枝子	愛徳姉妹会
13	理事	179		相良 敦子	エリザベト音楽大学
15	理事	2131		佐々木 信一郎	(社福)聖母愛真会こじか子どもの家
14	理事	3339	○	佐々木 良晴	(学)信望愛学園
16	理事	176		下條 裕紀媛	小百合幼稚園
17	理事	2892		関 聡	久留米信愛女学院短期大学
21	理事	249		中尾 昌子	八幡カトリック幼稚園
22	理事	2222		野原 由利子	名古屋芸術大学
19	理事	2353	○	林 信二郎	川口短期大学
18	理事	2346		板東 光子	亀田平和の園保育園
20	理事	2579		藤原 江理子	九州幼児教育センター・ トレーニングコース
23	理事	3326		前川 さちえ	つぼみ保育園
24	理事	3324		前鼻 百合江	宮の沢さくら保育園
25	理事	97		松川 暢男	長崎純心大学
26	理事	1060	○	松本 静子	東京国際モンテッソーリ 教師トレーニングセンター
27	監事	3089		鈴木 成一	(学)カリタス学園
28	監事	3083		山本 雅子	元上智大学

○印は常任理事（上記役員の内任期は平成 19 年 8 月 1 日～平成 22 年 7 月 31 日）

## 20 年度入会者支部別一覧表

関東支部			北陸支部		
関	3408	磯崎 直樹	陸	3406	滝川 絵理
関	3385	青木 沙耶子	陸	3407	谷川 弥生
関	3386	岩室 亜沙美	中部支部		
関	3387	鬼塚 夕貴	中	3415	榊原 千香子
関	3388	垣本 ゆき恵	中国支部		
関	3389	梶山 夏子	国	3411	岡本 純子
関	3390	櫻井 幸	国	3414	宮原 奈々
関	3391	鈴木 沙織	四国支部		
関	3392	橘 史恵	四	3381	木曾 真理絵
関	3393	富田 史恵	九州支部		
関	3394	中津川 由里	九	3409	金村 由紀実
関	3412	花岡 隆行	九	3410	津曲 祐次
関	3395	橋渡 彩乃	九	3413	力丸 敏光
東京支部					
東	3396	赤坂 栄美子			
東	3397	飯島 由美			
東	3404	五十嵐 抄苗			
東	3398	魁生 真見			
東	3399	菊池 智子			
東	3400	小山 久実			
東	3401	鈴木 まなみ			
東	3416	東屋敷 尚子			
東	3402	藤岡 麻理子			
東	3403	森田 詩織			
東	3405	米津 美香			

団体会員		
団体	235	あけの星幼稚園
団体	236	第二コスモス幼稚園 (学)戸村学園
団体	237	(学)石川カトリック学園 聖ヨゼフ幼稚園
団体	238	(社福)開成保育園
団体	239	ひさやま保育園杜の郷
団体	240	つくし野天使幼稚園
団体	241	広島文教女子大学附属幼稚園

## 20年度退会会員者支部別一覧表

会員番号	支部	氏名	会員番号	支部	氏名
北	2240	星 貞子	九	1714	橋本 融宣
北	3222	吳 敏玲	九	3130	山本 栄子
関	3284	井草 三佳	団体	149	(社福)愛徳保育園
関	3287	小川 寛子	団体	205	(学)ザビエル学園 聖母幼稚園
関	3163	角谷 由佳	維持	83	(学)聖母学園栃尾天使幼稚園
関	3288	北冨 菜穂			
関	3059	篠田 珠弥子			
関	3393	冨田 良枝			
関	3202	内藤 由紀子			
関	3073	山村 佳乃			
関	3175	山下 みどり			
関	2397	金子 由美			
関	3227	柏俣 寛恵			
関	3228	久野 愛海			
関	3234	西風 亜希			
東	3245	田代 恵理子			
東	2397	保坂 久代			
東	3054	藤平 咲子			
東	2756	宮地 京子			
東	3013	宮本 摩那			
東	3187	野口 文子			
畿	1405	岡 智江			
畿	3220	三輪 朋子			
四	2983	田井 貞良			
国	3081	最上 学			
九	2279	七田 哲子			

## 第43回全国大会　－予告－

開催期間　：　平成22年7月28日（水）・29（木）・30（金）

会　　場　：　あわぎんホール（徳島県郷土文化会館）

〒770-0835 徳島市藍場町2丁目14番地

Tel 088-622-8121 Fax 088-622-8123

（JR徳島駅及びバスセンターより徒歩10分）

大会テーマ　：　「子どもが探しているものを求めよう」

－子どもと共に平和に向かって－

－子どもと共に創造の実りを尊ぶ－

－子どもと共に創造を偲ぶ－

大会事務局　：　鳴門聖母幼稚園内

Tel 088-685-0079 Fax 088-684-1530

E-mail : narutos@rose.ocn.ne.jp

## モンテッソーリ教員養成コース

### I. 日本モンテッソーリ協会公認モンテッソーリ教員養成コース

- ・ NPO 法人東京モンテッソーリ教育研究所・付属教員養成コース  
コース長 クラウス・ルーメル

〒 112-0002 東京都文京区小石川 2 丁目 17 番 41 号

富坂キリスト教センター 2 号館

☎ 03-5805-6786 / fax 03-5805-6787

<http://www.ti-montessori-e.main.jp/>

- ・九州幼児教育センター・トレーニングコース  
(モンテッソーリ教員養成コース)

所長 藤原 江理子

〒 811-3425 福岡県宗像市日の里 7-21-4

☎ 0940-36-7008 E-mail: [ktcourse@nifty.ne.jp](mailto:ktcourse@nifty.ne.jp)

<http://homepage4.nifty.com/ktcourse/>

<http://hpm3.nifty.com/ktcourse/> (携帯サイト)

- ・信望愛学園モンテッソーリ教師養成コース

委員長 佐々木 良晴

〒 735-0014 広島県安芸郡府中町柳ヶ丘 36-7

☎ 082-581-1337

- ・京都モンテッソーリ教師養成コース

委員長 赤羽 恵子

〒 612-0817 京都府京都市伏見区深草向ヶ原町 17

☎ 075-641-8410 (8280) E-mail: [mc.Kyoto@theia.ocn.ne.jp](mailto:mc.Kyoto@theia.ocn.ne.jp)

- ・純心モンテッソーリ教員養成コース

長崎純心大学人文学部 児童保育学科 学科長 松川 暢男

〒 852-8558 長崎県長崎市三ツ山町 235

☎ 095-846-0084 (代)

## II. 国際モンテッソーリ協会公認モンテッソーリ教員養成コース

東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター

所長 松本 静子

〒 252-0301 神奈川県相模原市南区鶴野森 2-20-2

☎ 042-746-7933 E-mail: ami\_tokyojp@ybb.ne.jp

[http://www.geocities.jp/ami\\_tokyojp/](http://www.geocities.jp/ami_tokyojp/)

## III. 日本モンテッソーリ教育総合研究所教師養成コース

〒 145-0063 東京都大田区南千束 2-3-1

☎ 03-3727-9864 E-mail: montessori@gakken.co.jp

<http://www.sainou.or.jp@monte-new/>

## IV. うめだ・あけぼの治療教育職員養成所

〒 123-0851 東京都足立区梅田 7-19-23

☎ 03-3889-1700

# 日本モンテッソーリ協会会則

## 第1条 (名 称)

本会は、日本モンテッソーリ協会という。

## 第2条 (事務局)

本会は事務局を〒112-0002 東京都文京区小石川2-17-41  
富坂キリスト教センター2号館に置く。

## 第3条 (目 的)

本会は、日本におけるモンテッソーリ教育研究者間の連携協同により、モンテッソーリ教育原理と実践を研究し、その普及を図ることを目的とする。

## 第4条 (事 業)

本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) モンテッソーリ教育法の実践及び普及。
- (2) モンテッソーリ教育法の指導者の養成及びモンテッソーリ教育養成コースの認定。
- (3) モンテッソーリ教育教材の研究作成及び普及。
- (4) 講演会、研修会及び研究発表会の開催。
- (5) モンテッソーリ教育に関する印刷物の発行。
- (6) 海外諸国のモンテッソーリ協会との交流及び情報の交換。
- (7) その他、必要な事項。

## 第5条 (会 員)

1. 本会の会員は、本会の目的に賛同して所定の入会手続きを経た個人及び団体とする。
2. 会員は本会則第19条に定める会費を納入しなければならない。
3. 会員には本会発行の印刷物を配布する。
4. 第1項に定める会員以外に、本会の運営水準を保つ賛助金出資者を、維持会員という。  
ただし、維持会員は、理事選挙の選挙権、被選挙権を持たない。
5. 会員が次の各号の一に該当する場合には、その資格を失う。
  - (1) 会員である個人が死亡、又は一身上の事由によるとき。
  - (2) 会員である団体が消滅したとき。
  - (3) 1年以上会費を納めないとき。

## 第6条（支 部）

1. 本会は、会員の希望により、一定地域の中で、支部を設置することができる。
2. 支部の設置及び運営に関しては、理事会に申請し、理事会及び総会の承認を得るものとする。
3. 支部は、本会の理事選挙規定に則って理事及び支部長の選出を行う。

## 第7条（役 員）

本会に次の役員を置く。

名誉会長	1名
会長（理事長）	1名
副会長（副理事長）	2名
常任理事	若干名
理 事	若干名
監 事	2名
顧 問	若干名

## 第8条（役員の仕事）

役員の仕事は次のとおりとする。

- (1) 名誉会長は、本会の活動理念に基づき、会長（理事長）に対して意見を述べ、若しくはその諮問に答え、又は報告に徴することができる。
- (2) 会長は、本会を代表し理事長となり、本会を総督する。
- (3) 副会長（副理事長）は、会長（理事長）を補佐し、会長（理事長）に事故ある時にその仕事を代行する。
- (4) 常任理事は常任理事会を構成し、本会の常務を審議し、仕事をを行う。
- (5) 理事は、理事会を構成し、本会の重要な事項を審議し、仕事をを行う。
- (6) 監事は本会の会計及び業務の執行状況を監査し、その結果を総会に報告する。
- (7) 顧問は、会長（理事長）が委嘱し本会の諮問に応ずる。

## 第9条（役員を選出）

1. 理事の選任は次のとおりとする。
  - (1) 本会の定める選挙規定に従って各支部ごとに選出された者14名。
  - (2) 各モンテッソーリ教員養成コースの代表者又はこれに代る者、並びに事務局長。

(3) 上記1、2号の理事によって推薦され、会長（理事長）の任命による者、若干名。

2. 会長（理事長）、副会長（副理事長）、常任理事は、理事の互選とする。
3. 監事は、理事又は本会の職員以外の会員から会長（理事長）が推薦し、委嘱する。理事又は本会職員をかねてはならない。

#### 第10条（役員任期）

役員任期は3年とし再任を妨げない。

#### 第11条（機関）

1. 本会は次の機関を置く。
  - (1) 総会
  - (2) 理事会
  - (3) 常任理事会
2. 必要に応じて、各種委員会をおくことができる。

#### 第12条（総会）

1. 総会は、本会の最高の議決機関であって全会員をもって構成する。
2. 総会は、年一回以上会長（理事長）が招集する。
3. 総会に議長を置き次の事項を議決する。
  - (1) 事業計画及び予算
  - (2) 事業報告及び決算
  - (3) 会則の改正
  - (4) その他、本会が必要と認めた事項

#### 第13条（理事会）

1. 理事会は、理事をもって構成する。監事は、理事会に出席するものとする。
2. 理事会は、総会に属する議事決定事項以外でこの会が必要とする重要な事項を議決する。  
ただし総会を開くいとまがない時は、総会に代わって議決することができる。
3. 理事会は会長（理事長）が招集する。

#### 第14条（常任理事会）

1. 常任理事会は理事の互選によって選ばれた者で構成する。監事は、常任理事会に出席するものとする。
2. 総会又は理事会を開くいとまがない時は、総会又は理事会に代わって議決することができる。
3. 常任理事会は会長（理事長）が招集する。

第15条 (各種委員会)

1. 本会は必要に応じて委員会を設置することができる。
2. 委員会は理事2名以上が委員となり、当委員会の課題によって委員の協力を求めて委員会を組織する。
3. 委員会は経過、結論を理事会に報告するとともに、その目的を達成したときは、これをすみやかに解散する。

第16条 (表 決)

総会及び理事会と常任理事会の決議は出席者過半数の同意をもって決し、可否同数のときは議長又は会長（理事長）の決するところによる。

第17条 (事務局)

1. 本会の事務を処理するために事務局を置く。
2. 事務局には次の職員を置く
  - (1) 事務局長 1名
  - (2) 書 記 若干名
  - (3) 会 計 1名
3. 前項第2号及び3号の事務局職員は常任理事会が委嘱する。

第18条 (会計年度)

本会の会計年度は、毎年8月1日に始まり、翌年7月31日に終る。

第19条 (経 費)

- (1) 本会の経費は、入会金2000円、個人・団体年額5000円。入会金不要の維持会費年額一口10,000円、寄付金、その他の収入による。
- (2) 維持会費は、個人・施設とも一口以上、上限は定めない。

第20条 (規 定)

- (1) この会則に定めない事項で、本会の運営のために必要と考えられる規定（別表参照）は、理事会の議を経て総会で定めることができる。

この会則に定めない事項で本会の運営のために必要と考えられる規定（別表参考）は以下のとおり。

[別 表]

- (1) 選挙管理委員会規定
- (2) 理事選挙規定（投票要領は別にあり）
- (3) 編集委員会規定（投稿・査読に関する規定・要領は別にあり）
- (4) 支部規定
- (5) モンテッソーリ教員免許取得証明書規定
- (6) 役員費用弁償内規

[創 立] 日本モンテッソーリ協会の創立月日  
昭和 43 年 (1968 年) 7 月 21 日

附 則

1. この会則は、昭和 43 年 4 月 1 日から施行する。
1. この会則は、平成 7 年 8 月 1 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 10 年 1 月 10 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 16 年 7 月 30 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 17 年 8 月 1 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 19 年 1 月 27 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 20 年 8 月 1 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 21 年 8 月 1 日から一部改正し、施行する。

## 『モンテッソーリ教育』 第 43 号原稿募集

<論文、実践報告・事例報告>

内容……自由、分量……原稿用紙（400 字詰）25 枚以内（ヨコ書き）

<書評・海外情報>

分量……原稿用紙（400 字詰）10 枚程度（ヨコ書き）

<執筆要領>（論文、実践報告・事例報告）

『モンテッソーリ教育』への投稿は、次の規定に従うものとする。

1. 論文のテーマは、モンテッソーリ教育に関する理論と実践についての研究、およびモンテッソーリ研究に関連したものであること（未刊行のものに限る）。
2. 論文原稿は、ヨコ書きとし、次の点を厳守すること。
  - ①本文は、図、表、注を合わせ、400 字詰原稿用紙 25 枚以内とすること。（ただし、注および引用文献は、1 字 1 ますとすること。算用数字と欧文は 2 字 1 ますとすること）。パソコン使用の場合は 32 字 33 行の書式で 10,000 字以内。
  - ②図、表は文中に挿入せず、別の用紙に貼付し、論文原稿には挿入すべき箇所を指定しておくこと。
  - ③制限枚数をこえた場合は、書き直しを求められることがある。
3. 原則として常用漢字、新かなづかいを使う。
4. 注および引用文献は、原則として文中の該当箇所の右肩に（1）（2）として表記しておいて、論文原稿の末尾にまとめる。
5. 引用文献の記述の形式は、次のとおりである。
  - （1）紀尾一郎『モンテッソーリ教育学』エンデルレ書店、1995 年、30～35 頁。
  - （2）藤井 勝『モンテッソーリ教育学の性格』、東京太郎編『モンテッソーリ教育の理論』新教育学全集第 3 巻、西風社、1994 年、230～236 頁。
  - （3）太田さゆり「モンテッソーリと新教育」『ペスタロッチ学会紀要』第 5 巻、1995 年、50 頁。
  - （4）Montessori, M., *Das Spannungsfeld* (Wien:Herder. 1979) pp. 33-40.
  - （5）Moller, A., “Models in a New Education”, In Merton R. K, (ed, ), *Sociology Today* (New York: Paulist Press, 1959), p.145.
  - （6）Newman S., “On the Montessori Tomorrow”. *German Review* 24 (1959), p.750.
  - （7）Ibid., p. 779.
6. 欧文摘要（200 語程度）およびその邦訳（400 字程度）を添付すること。

7. 原稿は3部（コピーでよい）提出すること。パソコン使用の場合は完成原稿のほかにそのファイルを入れたCD-ROM（MS-DOSテキスト変換したもの）を添付し、ディスクの表に使用機種名および氏名、ファイル名を記入すること。なお、和文の句読点はテン（、）およびマル（。）を使用のこと。

<原稿締切>

2010年9月末日（期日厳守）

<原稿提出先>

〒162-0845

東京都新宿区市谷本村町2-15-308

四谷モンテッソーリ研究所

日本モンテッソーリ協会

『モンテッソーリ教育』編集委員会

編集委員長 江島正子

- \* 原稿には勤務先、氏名（フリガナ付記）を記入してください。
- \* 函版等で多額の出費を要する場合、執筆者に負担を求めることがあります。
- \* 連続投稿はご遠慮ください。
- \* ディスクと一緒にハードコピー（出力紙）を添えてご提出ください。文字化けが生じてても、復元することができます。
- \* ソフトは、Word（ウインドウズ、マッキントッシュ）やExcelをご使用ください。その他のソフトをご使用の場合には、テキストファイルで保存したデータをご用意ください。
- \* ディスクはケースに入れる等、破損を防ぐ工夫をお願いします。

## 『モンテッソーリ教育』論文投稿規定

『モンテッソーリ教育』における「論文・実践研究」については、以下の投稿規定に従うものとする。

- 投稿資格**
- 1) 本学会会員
  - 2) 本学会会員と共同研究を行う者
  - 3) 特に編集委員会が認めた者
- 投稿原稿**
- 1) 投稿原稿は未発表のものに限る。また、他の学術雑誌に投稿予定の論文は投稿することができない。
  - 2) 分量および書き方は、別に定める執筆要領による。
- 採否**
- 1) 投稿原稿は編集委員会で査読する。
  - 2) 査読結果により、所定期間内に旧原稿と修正箇所を明記した文書を添えて再提出する。旧原稿の返却後、期限内に再提出されない場合は、期限切れにより原稿の撤回と見なされる。著者の都合により撤回する場合は、その旨を編集委員会に書面で連絡する。撤回された原稿が再度提出された場合は、新投稿論文として扱う。
  - 3) 投稿者は査読結果に異議があるとき、編集委員会に書面により反論を申し述べることができる。それに対して編集委員会は書面により回答する。
- 著作権**
- 本誌の掲載文に関する著作権は原則として日本モンテッソーリ協会に帰属する。したがって、本学会が必要とする場合は転載し、第三者から本学会著作物等の複製あるいは転載に関する承諾の要請があり、本学会において必要と認めた場合は、著作者に代わって承諾することができるものとする。また、編集委員会が本業務を代行する。

## 日本モンテッソーリ協会編集委員会規定

(目的・定義)

第1条 日本モンテッソーリ協会編集委員会（以下「委員会」という）は、会則第4条第5号に則り設置され、学会誌『モンテッソーリ教育』の刊行を目的とし、年1回発行する。

(使命)

第2条 本誌はモンテッソーリ教育の理論と実践に関する研究、論文、実践、書評、学会通信等、会員のモンテッソーリ教育研究活動に関連する記事を記載する。

(構成)

第3条 本誌の編集には、理事会の委嘱を受けた委員から構成される委員会があたるものとする。

(任期)

第4条 編集委員の任期は3年とする。但し、再任を妨げない。

(委員長)

第5条 委員会には委員長1名をおく。委員長は委員の互選によって選出するものとする。

(幹事)

第6条 委員会の事務を円滑に行うため幹事若干名をおく。

(業務)

第7条 本誌各号の内容および投稿論文の掲載採否については、委員会の合議によって決定する。

第8条 掲載を予定される原稿内容およびその他について、委員会が再考を求めることができる。

第9条 図版等で多額の出費を要する場合、執筆者の負担を求めることがある。

第10条 執筆者による校正時の大幅な修正は、原則としてこれを認めないものとする。

附則 2006年8月9日 施行

## JAPAN ASSOCIATION MONTESSORI

### **Board**

Klaus Luhmer\*(Hon. President)  
Koichiro Maenosono Ph. D.\*(President)  
Domenico Vitali\*(Vice President)  
Akira Machida\*(Vice President)  
Ryoko Matumoto\*(General Secretary)  
Keiko Akabane\*  
Tamako Amano\*  
Mitsuko Bando  
Masako Ejima Ph.D.\*  
Eriko Fujiwara  
Shinjiro Hayashi\*  
Morio Inui\*  
Kimiko Kai  
Yoshieko Koike  
Yurie Maehana  
Sachie Maegawa  
Nobuo Matsukawa  
Shizuko Matsumoto\*

Masako Nakao  
Yuriko Nohara  
Kiyoko Okuyama  
Atsuko Sagara  
Shinichiro Sasaki  
Yoshiharu Sasaki\*  
Yukie Shimojo  
Satoshi Seki

### **Inspector**

Seiichi Suzuki  
Masako Yamamoto

*\*member of the Executive Board*

## MONTESSORI EDUCATION

### **Editors**

Masako Ejima Ph.D.\* (Chief Editor)  
Klaus Luhmer\*  
Tamako Amano\*  
Shinjiro Hayashi\*  
Kimiko Kai  
Koichiro Maenosono Ph. D.\*  
Shizuko Matsumoto\*  
Yuriko Nohara  
Kiyoko Okuyama  
Atsuko Sagara  
Satoshi Seki  
Hiromi Suzuki\*  
Domenico Vitali\*

### **Secretaries**

Yoshie Honda  
Kaori Hirotsu  
Hiroko Tanaka

*\*Executive Editors*

## 編集後記

『モンテッソーリ教育』第42号をお届けできることを喜ばしく思います。

本号は2009年福井で開催された第42回大会の講演、シンポジウムの収録、貴重な実践報告・事例報告などを通してモンテッソーリ教育との出会いが子どもの見方、対応の仕方のみならず、自己自身の生き方にもかかわりを持つ様相が見られます。前之園幸一郎先生の論文『子どもの発達と援助』では、まさに育ちつつある子どもに対する大人の援助のあり方を振り返らせてくださいます。導入から約半世紀、モンテッソーリ教育は近隣諸国に比べ、日本には堅実に根付いてきていると思います。それは日本モンテッソーリ協会、上智モンテッソーリ研究会が中心となった教員養成の諸問題に、ハイドリッヒ神父様、ドイツ在住のオスワルト教授、当時AMI会長マリオ・モンテッソーリ氏の幾度に亘る細やかな文書のやり取りの結果に他ならないことを、前号からの連載、『モンテッソーリ教育40年を顧みて』に詳しくルーメル先生が述べられています。当時を知る一人として、深い感動を憶えます。海外情報のイタリアのテレビドラマも興味深く、また、図書紹介では高齢者のモンテッソーリ教育が取り上げられ、モンテッソーリ教育の普及の幅広さを感じます。また、注目に値するのが、彼女がアメリカ滞在中に講義した『モンテッソーリ教育実践理論—カリフォルニア・レクチュア』です。ぜひご一読をお薦めしたいと思います。

末筆ながら本号にご執筆くださいました諸先生方、ご協力いただきました皆様に心から感謝を申し上げます。

(松本静子)

## 『モンテッソーリ教育』編集委員会

委員長 江島正子（明和学園短期大学）  
委員 クラウス・ルーメル（上智大学） 前之園幸一郎（青山学院女子短期大学） ドメニコ・ヴィタリ（聖イグナチオ教会） 松本静子（東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター） 天野珠子（愛珠幼稚園） 奥山清子（ノートルダム清心女子大学） 甲斐仁子（藤女子大学） 相良敦子（エリザベト音楽大学） 鈴木弘美（HYS教育研究所） 関聡（久留米信愛女学院短期大学） 野原由利子（名古屋芸術大学） 林信二郎（川口短期大学）  
欧文校閲 クラウス・ルーメル  
幹事 本多ヨシユ 廣津香織 田中浩子

---

2010年3月31日 発行

発行所 日本モンテッソーリ協会編集委員会  
〒162-0845 東京都新宿区市谷本村町 2-15-308  
四谷モンテッソーリ研究所  
『モンテッソーリ教育』編集委員会  
Tel・Fax (03) 3260-3079

URL: <http://www.dcn.ne.jp/~montessori/>  
<http://pweb.cc.sophia.ac.jp/~luhmer/>

日本モンテッソーリ協会事務局  
〒112-0002 東京都文京区小石川 2-17-41  
富坂キリスト教センター 2号館 B棟事務室  
Tel・Fax (03) 3814-8308  
郵便振替口座 00110-7-71777

代表 会長 前之園幸一郎  
編集 『モンテッソーリ教育』編集委員会 江島正子

---

©日本モンテッソーリ協会

印刷 (株) プリントボーイ

---

日本モンテッソーリ協会公認  
東京モンテッソーリ教育研究所

付属 教員養成コース

日本における初めてのモンテッソーリ  
教員養成コースとして昭和45年より活  
動してまいりました「上智モンテッソー  
リ教員養成コース」を引き継ぎ、教師一  
同は平成18年より「特定非営利活動法人  
東京モンテッソーリ教育研究所」を立ち  
上げ、付属教員養成コース（コース長ク  
ラウス・ルーメル）開設いたしました。  
平成23年度第6期生を11月より募集い  
たします。



平成23年度第6期生募集

募集定員：30名

選考日程：平成23年1月16日（日）

場 所：富坂キリスト教センター

内 容：小論文・面接

※ 詳細・入講案内は下記事務局までお問  
い合わせください。

夏期実技研修会

テーマ：数教育

日 時：平成22年8月28日（土）

会 場：世田谷聖母幼稚園（予定）

講 師：当コース 数担当講師

※ 受講をご希望の方は下記事務局まで  
お問い合わせください。

特定非営利活動法人 東京モンテッソーリ教育研究所 事務局

〒112-0002 東京都文京区小石川2-17-41 富坂キリスト教センター2号館

TEL : 03-5805-6786 FAX : 03-5805-6787

URL : <http://montessori.or.jp/>

E-mail : [info@montessori.or.jp](mailto:info@montessori.or.jp)



## 東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター

国際モンテッソーリ協会公認 3～6歳コース(国際資格)  
昼間部(1年コース) 夜間部(2年コース)



東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンターは、国際モンテッソーリ協会(AMI)から認可された日本で最初の国際トレーニングセンターです。1975年開所以来、これまで1700人以上の国際モンテッソーリ教師の養成にあたっています。コースでは、子どもの発達を心身両面から援助する方法を、マリア・モンテッソーリ博士の児童心理学、教育理論と実践を通して探求していきます。

### ●応募資格

幼稚園教諭、保育士、各種教員資格、及び、これに準ずる資格を持つ方。  
大卒、短大卒、専門学校卒の資格を持つ方。

AMI(国際モンテッソーリ協会)が認めた方。

(上記いずれかの資格、または平成23年3月取得見込の方)

### ●願書受付

平成22年11月1日～

### ●選考に関して

日 時 平成23年1月16日(日)

内 容 面接・小論文(選考日前に郵送提出)

### 学生募集



学生の練習風景



### 研修生募集

卒業生の補習として、また、モンテッソーリ教育実施園の職員、研究者の方を対象に分野毎に聴講できる研修生制度です。

### ●募集人数 昼間部 若干名

(受講受付中)

### ●講義期間、曜日、及び時間

1分野 3～4週間

月・金…13:00～16:00

火～木…9:30～12:00

### ●授業内容 各分野の理論と実践

(実習、アルバム製作、レポートはありません。)

❖ 感覚教育(平成22年6月開講)

❖ 言語教育(平成22年9月開講)

❖ 数教育(平成22年10月開講)

本コースへのスライド編入、及び、国際資格取得は認められません。

## 東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター

所長 松本 静子

〒252-0301 神奈川県相模原市南区鶴野森2-20-2 TEL 042-746-7933 FAX 042-741-9495

E-mail:ami\_tokyojp@ybb.ne.jp URL:http://www.geocities.jp/ami\_tokyojp/

### 第27回 夏期短期実践研修会

平成22年8月5日(木)、6日(金)、7日(土)

各分野の理論と実践

グリーンホール相模大野

どなたでも参加できます。

## 日本モンテッソーリ協会公認

# 学校法人信望愛学園 モンテッソーリ教師養成コース

【目的】 子どもは自分自身を創造しながら明日の世界をつくっていく偉大な力をもっています。この使命を確信する当コースは、“モンテッソーリ教育”の実践による子どもの人格形成の援助に奉仕する教師の養成コースです。

### 本科生

#### 【入学資格】

- ・ 幼稚園教諭、保育士資格取得者
- ・ 上記資格取得見込みの者
- ・ 小、中、高及び養護学校の教員資格取得者
- ・ 上記以外の者で当コース委員会で認めた者

#### 【取得資格】

日本モンテッソーリ協会(JAM)認定ディプロマ授与

#### 【履修期間と内容】

##### ●第一年次

理論科目・実践科目の履修

日程：1ヵ月の中の1週間、1年で計10週

##### ●第二年次

教本提出、集中講義、教育実習、  
モンテッソーリ教師資格試験の受験



### 卒業生研修会

年1回、当コース卒業生が更に研鑽を積みます。

### 講習会

各領域別に2日間ずつ。どなたでも参加できます。

### 園長主任会

年1回、関係各園の園長先生と主任の先生と一緒に職員養成等について考えます。

〒735-0014 広島県安芸郡府中町柳ヶ丘 36-7

信望愛学園モンテッソーリ教師養成コース事務局

TEL.FAX 082-581-1337

日本モンテッソーリ協会公認



# 九州幼児教育センター モンテッソーリ教員養成コース

## Montessori Training Course Kyushu Institute

Since 1974

### 各種研修

- ・実践のための実践講習会
- ・教具・教材製作
- ・専科研修
- ・オープンクラス
- ・理論研修  
『モンテッソーリ・フィールド・チャレンジ』

### モンテッソーリ教員養成コース(3-6歳)

- ・募集要項配布中  
本科/アシスタントコース
- ・コース生募集期間  
1次 11月～1月  
2次 3月
- ・本科修了時には  
ディプロマが取得  
できます

### 教材・書籍 販売

- ・モンテッソーリ教育  
各種教材  
関連書籍 各種
- ・お問合わせは  
センター事務局  
まで

【理論と実践の本：重版しました  
やさしい解説・モンテッソーリ教育】

モンテッソーリ教育の理論研修



**MF2010 モンテッソーリ・  
フィールドチャレンジ**

～モンテッソーリのコスミックヴィジョン

開催日 2010年11月6・7日

招待講師：日本モンテッソーリ協会

発行 学苑社

会長 前之園幸一郎(敬称略) 他

〒811-3425 福岡県宗像市日の里7丁目21-4

Tel (0940) 36-7008 Fax (0940) 36-7078

e-mail: [ktcourse@nifty.ne.jp](mailto:ktcourse@nifty.ne.jp)

URL <http://homepage3.nifty.com/ktcourse/>

JAM (日本モンテッソーリ協会) 公認

## 京都モンテッソーリ教師養成コース

充実した理論と実践を求めて 1973 年に「京都モンテッソーリ教師養成コース」が開設され、以来着実な歩みで、実力ある指導者を世に送り出しています。

**対象：** 幼稚園教諭、保育士資格を有する者、およびこれに準ずる者

**趣旨：** 本コースの目的は、子どもの精神発達を正しく援助できる教師を養成することにあります。そのために、

1. 子どもの要求について幅広い理解ができるように
2. 人格の創造者としての子どもに対して敬意を持てるように
3. 子どもの魂の中の、小さなデリケートな、開きかかった生命の表現をよみとり、理解できるように、

教育内容を通して、子どもと新しい関係をつくりあげ、新しいタイプの教師になれるように、担当講師ならびにスタッフ一同が援助いたします。

**講師：** 赤羽 恵子 (京都モンテッソーリコース委員長／深草こどもの家園長)  
片山 忠次 (兵庫教育大学名誉教授／大阪樟蔭女子大学名誉教授)  
林 信二郎 (川口短期大学教授／埼玉大学名誉教授)  
山下 栄一 (関西大学名誉教授)  
井隼直子、岡山真理子、海道洋子、板東光子、吉田晃子、渡辺政美 他

— 働きながら学べます — 土曜 15 時～19 時、日曜 9 時～17 時

講義は月に一回の週末と長期休暇利用。(見学・参加実習は平日)

**モンテッソーリ教師養成専門コース** 養成期間 2 年

取得資格—JAM 認定モンテッソーリ教師ディプロム (免許)

会場：京都モンテッソーリ教師養成コース附属「深草こどもの家」

その他に札幌、東京、京都、福岡で、**基礎コース** (養成期間 1 年、のちに専門コース 2 年次への編入試験を受けることが出来る) も行っています。

**【お問い合わせ】** 京都モンテッソーリ教師養成コース 事務局

〒612-0817 京都市伏見区深草向ヶ原町 17 番地

TEL.075-641-8280 / FAX.075-642-8588

Email: [mc.kyoto@theia.ocn.ne.jp](mailto:mc.kyoto@theia.ocn.ne.jp) URL: <http://www7.ocn.ne.jp/~mc.kyoto/index.html>

# 世界のモンテッソーリ教育 江島 正子 著



わが国のモンテッソーリ教育の第一人者である著書の幼児教育への愛と熱い思いが伝わってくる本書は、先に出版された「たのしく育て子どもたち」(サンパウロ刊)の姉妹編である。専門の先生がたはもちろん、小さなお子さまをおもちのお父さま、お母さまにも、ぜひお推めしたい本です。

B6判上製 288頁 定価1575円

# たのしく育て子どもたち 江島 正子 著



お母さん必見！ 世界におけるモンテッソーリ教育の最新レポート。子どもの個性を重視して、その秘めた才能を引き出す教育。その根底に流れているものは何かを探ります。

B6判 248頁 定価1470円

# おかあさんのモンテッソーリ 野村 緑 著



東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター実習園「聖アンナ子どもの家」の副園長の著者が、モンテッソーリ教育の実践を、在宅保育のお母さんをはじめ、保育の現場で活躍中の先生方に分かりやすく解説する。

A5判 250頁 定価1575円

## モンテッソーリ教育実践理論

—カリフォルニア・レクチャー—

マリア・モンテッソーリ 著 クラウス・ルーメル 共訳 江島 正子

B6判 472頁 定価：本体2700円(税別)

◎ 新刊



サンパウロ

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-21-9  
TEL.03-3359-0451 FAX 03-3351-9534

www.sanpaolo.or.jp  
suishin@sanpaolo.or.jp

講談社

# 相良敦子の本

「学級崩壊」に対し、幼児教育が初めて打ち出した提言



定價：本体1,600円(税別)  
ISBN4-06-207969-0

## 幼児期には 2度 チャンスがある

復活する子どもたち

「子育てに失敗した」とあきらめないで！3、6歳の子どもは「逸脱」から正常化される力をもっている。モンテッソリの教育方法は総合学習時代に対応し、「学級崩壊」を防止する。

子どもについての基本的な知識や事実に基づいた解説書



定價：本体1,400円(税別)  
ISBN4-06-201608-7

## ママ、 モンテッソリの幼児教育 ひとりでするのを 手伝ってね！

子どもがもつ大きな可能性をひき出し、自主性や他人への思いやりをはぐくむために、親はどうすればよいか。長年モンテッソリ教育に携わってきた著者が、3歳から6歳に焦点をあてて解説。

一人ひとりをたいせつにする教育環境のつくり方

## 子どもは動きながら学ぶ

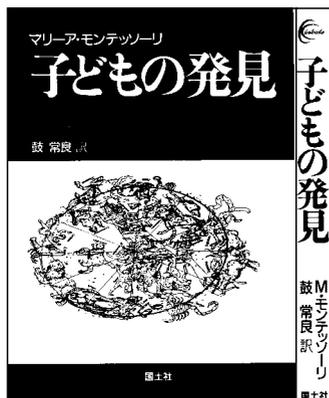
環境による  
教育のポイント

相良敦子・池田政純・則子 共著

定價：本体1,500円(税別) ISBN4-06-203922-2

# モンテッソーリ教育の神髄

理論より実践の人モンテッソーリの代表的著作3冊を、  
日本におけるモンテッソーリ教育の先達者である  
鼓 常良氏が完全翻訳。



マリア・モンテッソーリ著  
鼓 常良訳

## 幼児の秘密

世界各国に熱心な運動を誘発したモンテッソーリ教育の神髄を伝える。  
幼児教育に携わる者にとって必読の書。

● A5判 264頁 定価本体 2,700円＋税

## 子どもの心 吸収する心

人間としてのあらゆる性格・特徴を形成するのは幼児期である。  
この時期の特別な精神力と発育を詳細に論述。

● A5判 324頁 定価本体 3,200円＋税

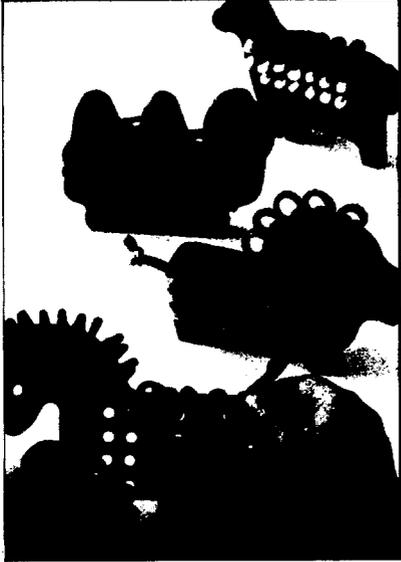
## 子どもの発見

幼児教育・心理学・教育学の分野で世界中に大きな影響を与えてきた  
世紀の名著を、はじめての日本語訳で世におくる。

● A5判 388頁 定価本体 2,800円＋税

**国土社**

〒161-8510 東京都新宿区上落合1-16-7  
TEL 03 (5348) 3710 FAX 03 (5348) 3765



心を育てる

ヨーロッパの

木のおもちゃ

各保育大会にて展示していますので  
「手で触れて」「色」「形」「機能」を確か  
めてお買求め下さい。

〒343 0031 越谷市大甲213-12  
ホソカワ シュビール パーレン

細川直正

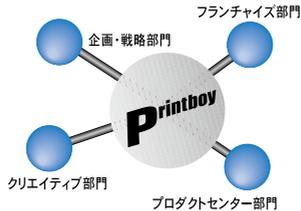
T E L (0489) 74-5832

**プリントボーイは、印刷や印刷周辺で発生する、  
さまざまなビジネスシーンをサポートする貴社の社内印刷室です。**

当社独自の商品、技術、サービスをご活用いただき、  
さまざまなビジネスシーンにお役立てください。

**PRINTBOY GROUP NETWORK**

- 紀要・論集・テキスト  
など大学印刷物全般
- 社内報、マニュアルなど  
各種ビジネス印刷物
- カタログ、パンフレット  
など広告・宣伝印刷物
- デジタルカラー印刷機  
によるカラー印刷物



- データ作成、出力処理  
などデジタル処理サー  
ビス
- 在庫管理や保管サービス
- 発送代行サービスやデ  
リバリーサービス

お客様の多用なご要望にお応えるため、ネットワークや専門家集団を組織しています

**株式会社プリントボーイ**

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山6丁目24番13号 TEL:03-3309-1861 FAX:03-5315-3414

## エンデルレ書店

### モンテッソーリ平和と教育

平和を実現するための教育の意義  
オスワルド／シュルツベネシュ編  
小笠原道雄／高祖敏明訳

2415円

### モンテッソーリの発見

スタンディング著 佐藤幸江訳 K・ルーメル監修  
武田正寛訳

3045円

### 創造する子供

武田正寛訳  
菊野正隆／日本モンテッソーリ協会監修

2940円

160-0004 東京都新宿区四谷 1-18  
オオノヤビル 2F  
Tel. 03-3353-2274 fax. 03-3357-4746

## 相良敦子先生の本

### モンテッソーリ教育を受けた子どもたち —— 幼児の経験と脳 ——

子どもたちがどう育ったか、豊富な事例とともに紹介。経験がどう脳に働きかけているか、検証していく。 ■定価1470円(税込)

ISBN 978-4-309-24197-6

### 親子が輝く モンテッソーリのメッセージ —— 子育て・子育てのカギ ——

「家庭で何を教えたらいいの?」と迷うパパ、ママへ。0歳から6歳まで、家庭でできる最高の子育て。 ■定価1470円(税込)

ISBN 978-4-309-24402-0

河出書房新社 〒151-0051東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2  
TEL.03-3404-1201 www.kawade.co.jp

## モンテッソーリによる初等・中等教育論の初報訳

### モンテッソーリの一貫教育

## 児童期から思春期へ

児童期から思春期にかけての子どもの各発達段階に  
適応した教育法について実例をあげて展開する  
特に化学の実験について、いかに理解させながら  
進めていくべきか詳しく述べている。

M・モンテッソーリ／K・ルーメル、江島正子訳  
四六／本体2000円

玉川大学出版部 Tel. 042-739-8935  
Fax. 042-739-8940  
〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1  
http://www.tamagawa.ac.jp/sisetu/up

保育園の先生たちが考えた  
「モンテッソーリ流」教具の作り方と活用のヒント。

## ひとりで、できた!

子どもは手を使いながら一人立ちする

大好評 3刷出来!

相良敦子 監修  
池田政純 池田則子 著  
定価=1680円(税込)



### 【主な内容】

- 子どもは幸せになるよう、創られている
- 「敏感期」は、自然がくれた成長のためのチャンス
- 子どもたちの、心の声——「くすのき保育園」の日常から
- 遊具作りのポイントと活動をサポートするコツ
- 家庭で作れるアイデア遊具
- 感性や知性を高める遊具
- 知性を働かせるお手伝いのすすめ ほか

サンマーク出版 〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-16-11  
TEL.03-5272-3166 http://www.sunmark.co.jp

皆様のお陰でこの度、世界で3番目に国際モンテッソーリ協会（AMI）本部より認可され、モンテッソーリ教育に必要な、教具・教材の製作・販売等、を許可されました事、お知らせします。

国際モンテッソーリ協会（AMI）  
設立後、初めて0～6歳教師養成コースが



**世界に先駆けて！  
日本で開校しました！**

※詳しくお知りになりたい方は、当方までお問い合わせください。

**松本科学工業有限公司  
モンテッソーリ教育環境心理学研究所**

**松本修二・愛子**

〒579-8002 東大阪市池の端町8-16

TEL 0729-81-4875

FAX 0729-86-0168

E-MAIL 123@hct.zaq.ne.jp

# 月刊 家庭の友

1部 300円(税込) 送料 68円  
年間購読料1部(〒税込) 4,000円

## 好評連載中 親子で学ぶモンテッソーリ教育 2年目!

学校法人聖フランシスコ学園 **松本 巖**  
みょうじょう幼稚園園長

フランシスコ会司祭。同会の日本管区幼稚園事業検討チーム座長  
東京モンテッソーリ教育研究所付属教員養成コース講師  
聖心女子専門学校の保育内容環境担当講師

約百年前にイタリア文化の中で生まれた「モンテッソーリ教育法」。  
その精神、方法、背景などをやさしく解説しながら、  
幼児との関わりを生きる上でのヒントを提供しています。

サンパウロ 家庭の友業務部 〒160-0004 東京都新宿区四谷1-21-9  
Tel.03-3357-6499 / Fax.03-3357-6408 郵便振替00120-0-101420

## ドン・ボスコ社

マリア・モンテッソーリ著  
クラウス・ルーメル/  
江島正子 共訳  
B 6判200頁  
定価：本体1456円

モンテッソーリ教育法  
子ども—社会—世界

モンテッソーリ宗教教育  
子どもが祈りはじめるとき

ソフィア・カヴァレッティ  
シルバーナ・モンタナーロ他著  
クラウス・ルーメル/江島正子訳  
A 5判224頁  
定価本体1500円

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-9-7  
TEL. 03-3351-7041 FAX. 03-3351-5430